兵庫県文化財調査報告書第123冊

伊丹郷町発掘調査報告書

平成5年度

兵庫県教育委員会

兵庫県文化財調査報告書第123冊

伊丹郷町発掘調査報告書

平成5年度

兵庫県教育委員会

伊万里赤絵水滴

埋壺土壙SK1008出土遺物

例　　言

1．本書は、宮の前地区市街地再開発事業に伴い、昭和62年11月から昭和63年２月までに事前調査を実施した兵庫県伊丹市宮ノ前２丁目に所在する伊丹郷町の第55次調査の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、伊丹市の委託を受け兵庫県教育委員会が主体となり、県教育委員会社会教育・文化財課、岡崎正雄・長谷川眞・村上賢治・山下史朗が担当した。

3．遺構の実測は、調査員が行った。遺構の製図および遺物の実測・製図は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所嘱託員が行った。

4．写真は、遺構を調査員が撮影し、遺物については日の出写真・サンスタジオに委託した。

5．本書の執筆・編集は、長谷川が行った。

6．遺物の番号は、本文・挿図・図版とも統一している。

7．遺物属性表に記載の数値の単位は、法量についてはcm、重量についてはgを使用した。なお、有効桁数は小数点以下２位とし、（　）は現存の法量を表す。

8．本書で使用した標高は大阪湾平均海水準を基とし、方位は国土座標第５系の座標北を指す。

9．本書のPL.１「位置図」は国土地理院発行の1/50,000「大阪西北部」を、PL.３「周辺の遺跡」は国土地理院発行1/25,000「伊丹」を使用した。また、PL.５「調査区位置図」およびPL.７「調査区設定図」は伊丹市発行1/2,500「伊丹市全図」を一部改変して使用した。

10．本書に掲載した空中写真のうち、PL.２は国土地理院昭和46年撮影のものを使用し、PL.８は大手前女子大学史学研究所から提供を受けたものを使用した。

11．本書に掲載した写真のうち、PL.４「周辺の遺跡」およびPL.６「伊丹郷町の調査」の４～７は伊丹市教育委員会から提供を受けたもので、PL.６「伊丹郷町の調査」の１～３は大手前女子大学史学研究所から提供を受けたものである。

12．調査で出土した遺物や、作成した写真・図版などは兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において保管している。

本 文 目 次

Ⅰ．はじめに …… 1
1．調査に至る経緯 …… 1
2．調査の経過 …… 1
3．調査の体制 …… 4
Ⅱ．遺跡の環境 …… 5
1．地理的環境 …… 5
2．歴史的環境 …… 8
Ⅲ．層序と遺構面 …… 12
1．基本層序 …… 12
2．地層の堆積状況 …… 12
3．遺構面の設定 …… 13
4．遺構検出面と存続年代 …… 15
(1) 第1遺構検出面 …… 15
(2) 第2遺構検出面 …… 17
(3) 第3遺構検出面 …… 18
(4) 第4遺構検出面 …… 20
(5) 第5遺構検出面 …… 21
Ⅳ．検出遺構 …… 23
1．井戸 …… 23
2．池状遺構 …… 25
3．溝 …… 26
4．礎石建物・築地基礎等 …… 26
5．通路状遺構 …… 29
6．竈 …… 29
7．焼土溜土壙 …… 30
8．伏甕土壙 …… 30
9．埋甕土壙 …… 33
10．埋桶土壙 …… 33
11．埋瓶土壙 …… 34
12．粘土溜土壙 …… 35
13．地下式貯蔵庫 …… 35
14．土壙 …… 35
Ⅴ．出土遺物 …… 37
1．土器 …… 37
(1) 土師器および土師質土器 …… 37

(2) 瓦質土器 …… 40
(3) 陶器 …… 41
(4) 磁器 …… 52
2．瓦 …… 57
(1) 屋根瓦 …… 57
(2) 道具瓦 …… 58
3．土製品 …… 58
(1) 土錘 …… 58
(2) ミニチュア製品 …… 58
(3) 人形 …… 59
(4) 泥面子 …… 60
(5) 面子 …… 60
4．石製品 …… 62
(1) 石造物 …… 62
(2) 石臼 …… 63
(3) 硯 …… 63
(4) その他 …… 64
5．金属製品 …… 64
(1) 青銅製品 …… 64
(2) 鉄製品 …… 66
6．木製品 …… 68
7．その他 …… 68
Ⅵ．おわりに …… 69

参考文献 …… 72

表　目　次

Table 1　伊丹郷町災害年表 …… 3
Table 2　遺跡地名表 …… 10
Table 3　地層断面注記 …… 12
Table 4　検出遺構一覧表 …… 15
Table 5　土師器皿属性表 …… 38
Table 6　土師器鍋属性表 …… 39
Table 7　土師質土器属性表 …… 40
Table 8　瓦質土器属性表 …… 40
Table 9　瀬戸美濃属性表 …… 41
Table 10　信楽属性表 …… 42
Table 11　京焼系陶器属性表 …… 42
Table 12　丹波甕・壺属性表 …… 43
Table 13　丹波片口・徳利・壺属性表 …… 43
Table 14　丹波擂鉢属性表 …… 44
Table 15　丹波擂鉢各類の存続期間 …… 46
Table 16　丹波植木鉢・盤・火入・建水属性表 …… 47
Table 17　備前および備前系陶器属性表 …… 48
Table 18　唐津および唐津系陶器椀属性表 …… 49
Table 19　唐津および唐津系陶器皿属性表 …… 50
Table 20　唐津および唐津系陶器鉢属性表 …… 50
Table 21　唐津および唐津系陶器壺・片口・瓶・壺属性表 …… 51
Table 22　産地不明陶器属性表 …… 51
Table 23　青花属性表 …… 52
Table 24　伊万里染付椀類属性表 …… 53
Table 25　伊万里染付皿属性表 …… 54
Table 26　伊万里染付鉢・蓋・重物・瓶属性表 …… 55
Table 27　伊万里青磁染付属性表 …… 55
Table 28　伊万里青磁属性表 …… 56
Table 29　伊万里白磁属性表 …… 56
Table 30　伊万里色絵属性表 …… 56
Table 31　産地不明磁器属性表 …… 56
Table 32　軒丸瓦属性表 …… 57
Table 33　軒平瓦・軒桟瓦属性表 …… 57
Table 34　ミニチュア製品属性表 …… 59
Table 35　人形属性表 …… 60

Table 36　泥面子属性表 …… 60
Table 37　面子属性表 …… 61
Table 38　石造物属性表 …… 62
Table 39　石臼属性表 …… 63
Table 40　硯属性表 …… 64
Table 41　銭貨属性表 …… 65
Table 42　煙管属性表 …… 65
Table 43　青銅製品属性表 …… 66
Table 44　鉄製品属性表 …… 66
Table 45　釘類属性表 …… 67

挿　図　目　次

Fig. 1　伊丹郷町町割り模式図 …… 2
Fig. 2　地形分類図（その１） …… 5
Fig. 3　地形分類図（その２） …… 7
Fig. 4　遺跡分布図 …… 9
Fig. 5　検出遺構面等模式図 …… 14
Fig. 6　丹波擂鉢の系譜関係 …… 45
Fig. 7　土師実測図 …… 58
Fig. 8　木札実測図 …… 68

図 版 目 次

巻頭図版　遺物写真：伊万里赤絵水滴・埋葬土壙SK1008出土遺物
ＰＬ．１　位置図
ＰＬ．２　空中写真
ＰＬ．３　周辺の遺跡
ＰＬ．４　周辺の遺跡
ＰＬ．５　調査区位置図
ＰＬ．６　伊月郷町の調査
ＰＬ．７　調査区設定図
ＰＬ．８　空中写真
ＰＬ．９　グリッド配置図
ＰＬ．10　調査前風景写真
ＰＬ．11　地層断面図
ＰＬ．12　地層断面写真・調査風景写真
ＰＬ．13　遺構配置図：第１遺構検出面・第２遺構検出面
ＰＬ．14　全体写真：第２遺構検出面
ＰＬ．15　遺構配置図：第３遺構検出面・第４遺構検出面
ＰＬ．16　全体写真：第３遺構検出面
ＰＬ．17　遺構配置図：第５遺構検出面
ＰＬ．18　全体写真：第５遺構検出面
ＰＬ．19　遺構実測図：第１遺構検出面
ＰＬ．20　遺構写真：第１遺構検出面
ＰＬ．21　遺構実測図：第１遺構検出面
ＰＬ．22　遺構写真：第１遺構検出面
ＰＬ．23　遺構実測図：第２遺構検出面
ＰＬ．24　遺構写真：第２遺構検出面
ＰＬ．25　遺構実測図：第２遺構検出面
ＰＬ．26　遺構写真：第２遺構検出面
ＰＬ．27　遺構実測図：第３遺構検出面
ＰＬ．28　遺構写真：第３遺構検出面
ＰＬ．29　遺構実測図：第３遺構検出面
ＰＬ．30　遺構写真：第３遺構検出面
ＰＬ．31　遺構実測図：第４遺構検出面
ＰＬ．32　遺構図・遺構写真：第４遺構検出面
ＰＬ．33　遺構実測図：第４遺構検出面
ＰＬ．34　遺構写真：第４遺構検出面

ＰＬ．35　遺構実測図：第５遺構検出面
ＰＬ．36　遺構写真：第５遺構検出面
ＰＬ．37　遺構実測図：第５遺構検出面
ＰＬ．38　遺構写真：第５遺構検出面
ＰＬ．39　遺構図：井戸
ＰＬ．40　遺構写真：井戸
ＰＬ．41　遺構図：井戸
ＰＬ．42　遺構写真：井戸
ＰＬ．43　遺構図：井戸たち割
ＰＬ．44　遺構写真：井戸たち割
ＰＬ．45　遺構図：礎石建物
ＰＬ．46　遺構写真：礎石建物・礎石積み基礎
ＰＬ．47　遺構図：地下式貯蔵庫
ＰＬ．48　遺構写真：池状遺構・地下式貯蔵庫・粘土溜土壙
ＰＬ．49　遺構図：伏甕土壙
ＰＬ．50　遺構写真：伏甕土壙
ＰＬ．51　遺構図：伏甕土壙
ＰＬ．52　遺構写真：伏甕土壙
ＰＬ．53　遺構図：竈
ＰＬ．54　遺構写真：竈
ＰＬ．55　遺物実測図：土師器皿
ＰＬ．56　遺物写真：土師器皿
ＰＬ．57　遺物実測図：土師器鍋
ＰＬ．58　遺物写真：土師器鍋
ＰＬ．59　遺物実測図：土師質土器鍋・火舎・土龍
ＰＬ．60　遺物写真：瀬戸美濃
ＰＬ．61　遺物実測図：土師質土器焙炉
ＰＬ．62　遺物写真：土師質土器焙炉
ＰＬ．63　遺物実測図：土師質土器甑
ＰＬ．64　遺物写真：土師質土器甑
ＰＬ．65　遺物実測図：土師質土器・瓦質土器
ＰＬ．66　遺物写真：土師質土器・瓦質土器
ＰＬ．67　遺物実測図：瀬戸美濃
ＰＬ．68　遺物写真：瀬戸美濃
ＰＬ．69　遺物実測図：信楽・京焼系陶器・丹波
ＰＬ．70　遺物写真：信楽・京焼系陶器・丹波
ＰＬ．71　遺物実測図：丹波甕
ＰＬ．72　遺物写真：丹波甕

ＰＬ．73　遺物実測図：丹波擂鉢
ＰＬ．74　遺物写真：丹波擂鉢
ＰＬ．75　遺物実測図：丹波擂鉢
ＰＬ．76　遺物写真：丹波擂鉢
ＰＬ．77　遺物実測図：丹波擂鉢
ＰＬ．78　遺物写真：丹波擂鉢
ＰＬ．79　遺物実測図：丹波擂鉢
ＰＬ．80　遺物写真：丹波擂鉢
ＰＬ．81　遺物実測図：丹波
ＰＬ．82　遺物写真：丹波
ＰＬ．83　遺物実測図：備前擂鉢
ＰＬ．84　遺物写真：備前擂鉢
ＰＬ．85　遺物実測図：備前擂鉢
ＰＬ．86　遺物写真：備前擂鉢
ＰＬ．87　遺物実測図：備前・産地不明陶器
ＰＬ．88　遺物写真：備前・産地不明陶器
ＰＬ．89　遺物実測図：唐津椀・片口・羹
ＰＬ．90　遺物写真：唐津椀・片口・羹
ＰＬ．91　遺物実測図：唐津皿・瓶
ＰＬ．92　遺物写真：唐津皿・瓶
ＰＬ．93　遺物実測図：唐津壺・鉢
ＰＬ．94　遺物写真：唐津椀・壺・鉢・瓶
ＰＬ．95　遺物実測図：青花椀・伊万里染付椀
ＰＬ．96　遺物写真：青花椀・伊万里染付椀
ＰＬ．97　遺物実測図：伊万里染付椀
ＰＬ．98　遺物写真：伊万里染付椀
ＰＬ．99　遺物実測図：伊万里染付・色絵・青磁
ＰＬ.100　遺物写真：伊万里染付椀
ＰＬ.101　遺物写真：伊万里染付・色絵・青磁
ＰＬ.102　遺物写真：伊万里染付壺・皿・色絵椀
ＰＬ.103　遺物実測図：伊万里染付皿
ＰＬ.104　遺物写真：伊万里染付皿
ＰＬ.105　遺物実測図：伊万里・産地不明磁器
ＰＬ.106　遺物写真：伊万里・産地不明磁器
ＰＬ.107　遺物実測図：瓦
ＰＬ.108　遺物写真：瓦
ＰＬ.109　遺物実測図：瓦
ＰＬ.110　遺物写真：瓦

ＰＬ.111　遺物写真：木製品・ミニチュア製品
ＰＬ.112　遺物写真：人形
ＰＬ.113　遺物実測図：独楽．遺物写真：独楽・人形・泥面子
ＰＬ.114　遺物写真：面子
ＰＬ.115　遺物実測図：石造物
ＰＬ.116　遺物写真：石造物
ＰＬ.117　遺物実測図：石臼
ＰＬ.118　遺物写真：石臼
ＰＬ.119　遺物実測図：硯等
ＰＬ.120　遺物写真：石造物・石臼・硯・軽石
ＰＬ.121　遺物実測図：銭貨
ＰＬ.122　遺物写真：銭貨
ＰＬ.123　遺物実測図：銭貨
ＰＬ.124　遺物写真：銭貨
ＰＬ.125　遺物実測図：青銅製品
ＰＬ.126　遺物写真：青銅製品
ＰＬ.127　遺物実測図：青銅製品・鉄製品
ＰＬ.128　遺物写真：青銅製品・鉄製品
ＰＬ.129　遺物実測図：鉄製品
ＰＬ.130　遺物写真：鉄製品
ＰＬ.131　遺物実測図：釘
ＰＬ.132　遺物写真：釘

Ⅰ．はじめに

1．調査に至る経緯

伊丹市の中心部＝市街地は、有岡城跡・伊丹郷町とほぼ重なり合い、古い歴史と町並を現在に残す数少ない地域といえる。しかしながら、建設省の国庫補助事業として市街地再開発事業が、全国各地の古い町並を残す地区で実施されている。伊丹市でも、ＪＲ伊丹駅地区および前の宮の前地区がその対象となり、事業が昭和61年度から実施されることとなった。

伊丹市では、ＪＲ伊丹駅前地区は、発掘調査を大手前女子学園有岡城跡調査委員会に委託し、昭和61年度に調査を実施した。また、宮の前地区は、昭和62年度から調査を実施することとしたが、調査対象面積が約21,000㎡に及ぶため、大手前女子学園有岡城跡調査委員会・宮ノ前地区埋蔵文化財調査団等の調査組織では対応が困難となった。このような状況下で、兵庫県教育委員会は、伊丹市から当該地区の調査依頼を受けた。そこで、兵庫県教育委員会では、伊丹市と協議の結果、特例として当該地の調査の一部を実施することとなった。

2．調査の経過

調査対象地区は、伊丹市立博物館所蔵の「文禄伊丹之図」・「寛文九年伊丹郷町絵図」・「元禄七年柳沢吉保伊丹郷町絵図」・「寛政八年伊丹絵見図」・「文化改正伊丹之図」・「天保十五年伊丹郷町分間絵図」・「明治六年伊丹郷町地引絵図」等の絵図（八木 1982）の検討から、伊丹村・大広寺村・北少路村・昆陽口村・北中少路村・南中少路村・円正寺村・外城村・高畑村・新野田村・吉野田村・植松村・下市場村・上外崎村・外崎村の15ヶ村で構成される在郷町「伊丹郷町」の１村、伊丹村の『米屋町・柳町』に当たり（Fig. 1）、文禄年間（16世紀末）から民家が建ち並んでいたことが想定されていた。また、調査対象地区一帯は、『有岡庄年代秘記』等の記載（黒田 1974）から、幾度となく火災にあっていること（Table 1）が推測できた。これらのことを前提として、16世紀末以降の当該地区における土地利用の変遷を解明することを目的として調査を実施した。

調査は、大手前女子学園有岡城跡調査委員会の実施した確認調査の結果と、平面的調査にさきだち調査区の４周に設けた幅0.3mの地層観察トレンチの所見を総合的に判断し、５面の遺構面を想定して調査を開始した。調査区全域に均質な層序関係を示すわけではないが、大まかにみると、若干の差異はあるもののすべての調査区に現表土などが堆積することが判っていたので、最上層に堆積する現表土などについてはパワージャベルによる掘削を行い、以下の層については人力による掘削を行った。

実測図の作成にあたっては、各調査区に１ｍ四方のグリッドを設定した。グリッド名については、南北方向の軸線にはAA、AB、AC、……、AZ、BA、……のアルファベット２文字の表記を西端から行い、東西方向の軸線には00、01、02、03、……、40、41、……のアラビア数字２文字の表記を北端から行い、各グリッドの北西隅の交点をもって、グリッド名を表記した。なお、各交点には、国土座標上の位置を与えた。実測図は基本的には、平面図については1/20のスケールのものを、断面図については横1/100、縦1/20スケールのものを作成した。ただし、井戸・土壙などの遺構や遺物の出土状況は、

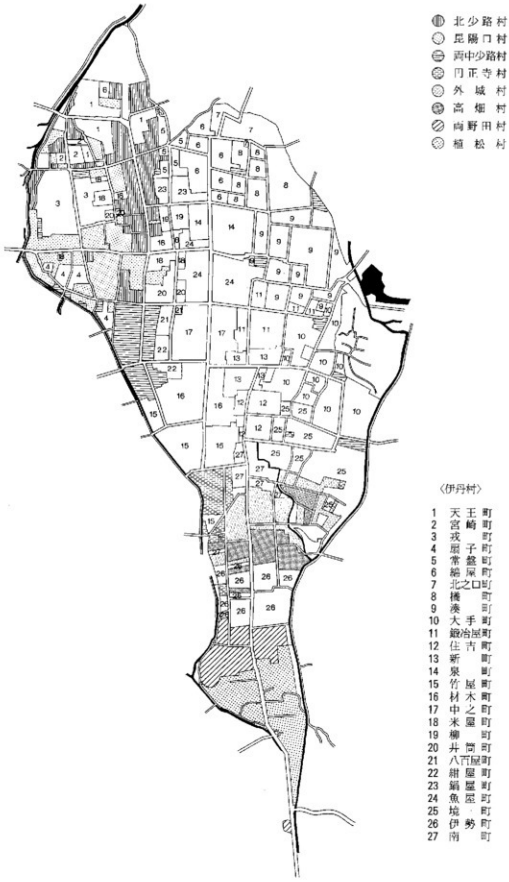


Fig. 1　伊丹郷町町割り模式図

Table 1　伊丹郷町災害年表

西　暦	年　号	事　　項
1592～95	文禄年間	この頃、綿屋町、八百屋町、泉町、魚屋町、材木町、中之町、竹屋町、鍋屋町、井筒町、柳町、米屋町、紺屋町、新町、南町、無足町の各町あり
1661～72	寛文年間	この頃までに、北ノ口町、鍛冶屋町ができる
1675	延宝　2	福円寺焼ける
1677	延宝　5	家数、昆陽村61、北少路村76、中少路村18、外崎村18、外城村19、高畑村12
1684	貞享　元	万徳寺堂宇焼ける
1688～1704	元禄年間	この頃までに、常磐町、天王町、扇子町、湊町、大手町、境町、住吉（袋）町できる
1688	元禄　元	井筒町から出火し、160軒が焼ける
1690	元禄　3	無足町を伊勢町と改名する
1699	元禄　12	天王町から札ノ辻まで酒屋16軒など焼け、飛び火して下市場村も焼ける 万徳寺堂宇再び焼ける
1702	元禄　15	中少路村から北ノ口町へかけて、439軒が焼ける⇨定火消を設置
1711～16	正徳年間	宮崎町、橘（鰻）町できる
1712	正徳　2	吹屋飛び火で橘町焼ける
1716～36	享保年間	戎町できる
1729	享保　14	北少路村西裏から出火し、80軒が焼ける
1740	元文　5	洪水で外崎村、下市場村が流失し、井手堤160間が川床となる
1746	延享　3	外崎村、高畑村、外城村などの川成、砂入地が復旧される
1748	寛延　元	大手町鍋屋宗兵衛および植松村庄右衛門の酒蔵が焼ける
1757	宝暦　7	法専寺焼ける
1759	宝暦　9	北少路村から出火し、13軒が焼ける
1765	明和　2	北少路村から出火し、6軒が焼ける
1766	明和　3	戎町から出火し、6軒が焼ける
1774	安永　元	大風で野宮の立木75株倒れる
1792	寛政　4	綿屋町鍋屋左衛門の醤油蔵2棟が焼ける
1812	文化　9	南少路村、北少路村で火災あり
1816	文化　13	野宮御供所から出火し、3人が死ぬ
1866	慶応　2	大洪水で古城下の堤が切れる

『有岡庄年代秘記』から抜粋

必要に応じて平面図・断面図とも1/10のスケールのものを作成した。

遺構名の命名にあたっては、検出された遺構面を新しい時期のものから順に、第1遺構検出面の遺構を1000番台、第2遺構検出面の遺構を2000番台、第3遺構検出面の遺構を3000番台、第4遺構検出面の遺構を4000番台、第5遺構検出面の遺構を5000番台で表し、各遺構の固有番号を1～999で表示している。たとえば、SE1001という記号は、第1遺構検出面で検出された井戸という遺構の1という意味である。今回の報告で用いた遺構種類の記号には、SA（柵地・塀）・SB（建物）・SD（溝）・SE（井戸）・SF（道路）・SG（池）・SK（土壙）・SX（その他）である。

なお、第1遺構検出面上、第2遺構検出面上、……、第5遺構検各出面上の出土遺物は、各々ZZⅠ、ZZⅡ、……、ZZⅤと表記し、第1遺構検出面～第2遺構検出面、第2遺構検出面～第3遺構検出面、……、第4遺構検出面～第5遺構検出面で検出された遺物は、各々ZZⅠ～ZZⅡ、ZZⅡ～ZZⅢ、……、ZZⅣ～ZZⅤと表示した。ただし、第2遺構検出面～第3遺構検出面の焼土層出土遺物は、ZYⅡ～ZYⅢで表す。

3．調査の体制

発掘調査・整理作業ともに、伊丹市の委託を受けて、兵庫県教育委員会が主体となり、発掘調査は昭和62年度に、整理作業は平成２年度～４年度に実施した。

ただし、平成元年度以降の整理作業は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。

（1）発掘調査

調査担当者は、岡崎正雄・長谷川眞・村上賢治・山下史朗の４名である。

（2）整理作業

作業年度および作業内容・作業参加者は以下のとおりである。

作業内容

平成２年度：水洗・ネーミング・接合復元

平成３年度：接合補強・実測拓本・復元・写真撮影・金属製品保存処理

平成４年度：接合補強・実測拓本・復元・トレース・レイアウト

嘱託員

和田早芳子・吉川由起子・宮田麻子・小川由起子・八尾美佳・植田弥生・遠藤七都子・尾崎比佐子

西原美知代・光澤鈴子・米澤礼子・伊藤ミネ子・川上啓子・衣笠雅美・長谷川洋子

Ⅱ．遺跡の環境

1．地理的環境

伊丹郷町は、東西を猪名川と武庫川に挟まれた武庫平野に位置する。

武庫平野は、広義には大阪平野の一部に当たり、猪名川と武庫川の堆積物で形成された平野で、西は六甲山塊、北は長尾山山塊、東は千里丘陵、南は大阪湾に囲まれたほぼ長方形の平野である。Fig. 2「地形分類図　その１」に1/25,000の地形図から作成した等高線図を示した。太平洋戦争後の開発により地

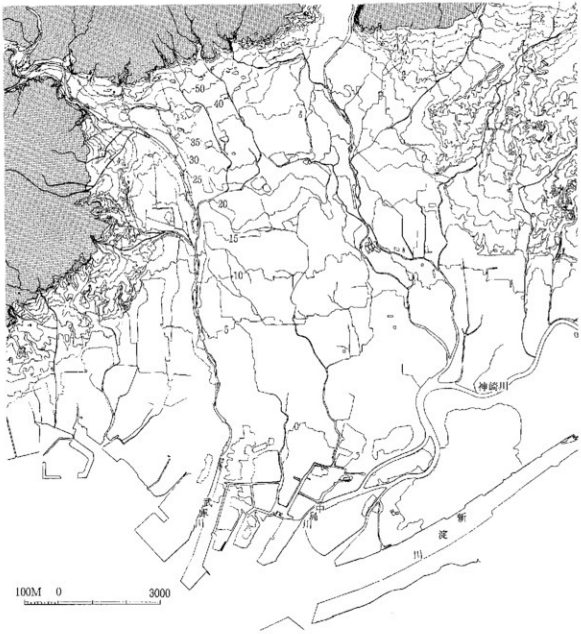


Fig. 2　地形分類図（その１）

形図から本来の地形的特徴を明確に読み取ることは困難になってきているが、地形的には台地と低地に分けることができ、台地は上ヶ原段丘・伊丹台地・豊中台地、低地は猪名川と武庫川との両河川の氾濫原と、南部の三角洲に各々細分される。

上ヶ原段丘は、現在は関西学院や神戸女学院があり、文教地区になっており、学校や住宅の密集する地域で、標高50～100mで、武庫川右岸、六甲山塊の南東麓に分布する。上ヶ原段丘は、12～13万年前に、六甲山塊から流下する仁川の扇状地として形成され、その後隆起した段丘である。大部分は下末古期の中位段丘に対比されるが、上ヶ原段丘の南西縁の西宮市高座町付近では上ヶ原面より数m高い高位段丘面の名残が認められる。また、段丘面の北西側は甲陽断層で切られている。なお、上ヶ原段丘が形成される直前の時期には、伊丹地域は内湾で、その海に注ぐ仁川が、山地から出たところで大きな扇状地を作っていたと考えられる。

伊丹台地は、武庫平野の中央に位置し、その大部分を占める。太平洋戦争後の開発により、台地上の大部分に開発の手が及んでいるが、明治18年旧陸軍陸地測量部の1/20,000の地形図を見ると、その地形的特徴がよく判る。Fig. 3「地形分類図　その２」は同図から作成した等高線図であるが、伊丹台地の東と西はそれぞれ比高10～20mの段丘崖によって猪名川と武庫川の氾濫原に臨み、その北端の加茂神社付近では標高40mを越すが、南に向かってしだいに高度を下げ、阪急電鉄神戸線付近（標高４～５m）で沖積面下に没する。伊丹台地は、いくつかの段丘面が複合したもので、東側の伊丹段丘が最も高く伊丹面と呼ばれ、西側の安倉面や中野面は一段低くなる。

従来、伊丹台地全体が近畿における低位段丘群に属するものとみられてきたが、最近、伊丹面は中位段丘に、安倉面・中野面は低位段丘に各々対比されることが判明し、伊丹面は関東の下末古段丘に対比される可能性が大きくなった。年代的には、12～13万年前の海進によってできた三角洲の面が隆起して段丘面になったと考えられる。伊丹面は、古生代の流紋岩の礫からなる伊丹礫層とその下に広く分布する海成粘土層の伊丹粘土層で構成され、後者は三角洲の底置層にあたる。伊丹郷町は、この伊丹面に立地し、東側の猪名川沖積層とは平均20mの海食崖をなす。安倉面を構成する台地には花崗岩の礫が多く、これは武庫川が火成岩よりなる六甲山から運んできたものである。また、中野面は、伊丹面・安倉面以外の台地に当たり、標高４～５m付近で沖積面下に没する。なお、安倉面・中野面の形成年代は、いずれも数万年前とみられるが、詳細は不明である。伊丹面・安倉面・中野面の複合によってできたこれらの台地面上には、南流した河川の流路跡が認められ、旧武庫川・旧猪名川などの流路の変遷を示している。また、台地上には、昆陽池陥没帯と伊丹断層と呼ばれる２本の構造線が東北東－西南西の方向に走る。とくに、昆陽池陥没帯には、その凹地を利用して昆陽池や瑠ヶ池などが作られている。

一方、台地の北の山麓部は山本面と呼ばれ、長尾山塊から流下する武庫川と猪名川の間の旧明寺川・天神川・天王寺川などの小河川による扇状地群が安倉面を覆った複合扇状地面である。

武庫平野の南部は、武庫川・猪名川・神崎川の三角洲地帯で、主として縄文海進以後に形成された部分であるが、すべてが自然による形成とは言い難く、中世以降、人為的な干拓・埋め立て工事によるものが多く、現在も盛ん埋め立てが進行しており、最も改変の著しい地域と言える。

縄文海進による最大海進時の汀線は、阪急電鉄神戸線に沿う標高４mと考えられ、それ以南は猪名川や武庫川の本支流の運ぶ土砂の堆積と海退の結果形成されたと言える。また、大阪湾内では、時計回りの方向に還流する沿岸潮流が、西方の夙川・芦屋川・住吉川などの諸河川の流出した砂礫を絶えず東方へ運搬し、その一部は海底に堆積して沿岸砂州を形成した。こうしてできた沿岸の砂州も、海退期にな

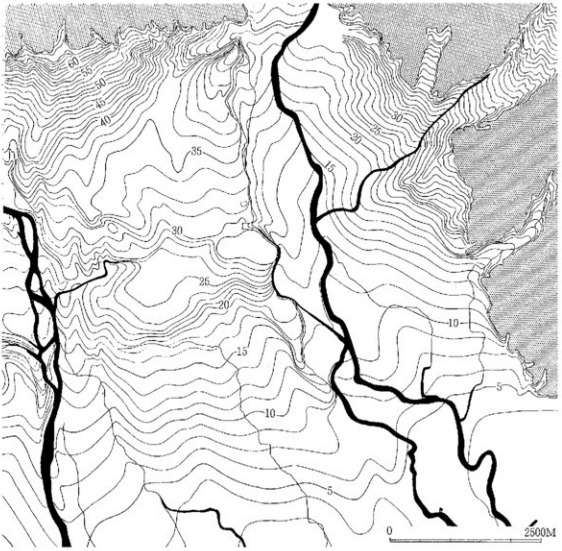


Fig. 3　地形分類（その２）

ると陸地に近いものから順次海面に姿を現し、やがて連続して陸地化し、砂帯となり、海岸線が前進する。武庫平野の南部の猪名川と武庫川の間には、３列の砂帯列が確認でき、北から長洲・難波・大島付近の第１列、杭瀬・大物・尼崎付近の第２列、松島・初島・向島の第３列となる。第１列の砂帯は中世以前に、第２列の砂帯は中世に各々陸地化したと考えられ、第３列の砂帯は近世に埋め立てられたと言える。なお、縄文時代の海岸線を標高４ｍの等高線ライン と考えると、標高２ｍの等高線ラインが弥生時代、標高１ｍの等高線ラインを奈良時代以降の海岸線とみてよかろう。

なお、猪名川の氾濫原は、現在の地形図と明治18年の地形図を比べると、猪名川右岸では沖積地形成後は大きな変化はないが、左岸の現在大阪国際空港となっている一帯は1941年（昭和16年）の空港拡張時に平らに造成されたもので、本来は猪名川支流の箕面川によって扇状地が東から西に向かって形成されていたことが判る。

以上のように、武庫平野は扇状地・中位段丘・低位段丘・氾濫原・三角洲で構成されるが、伊丹郷町は、伊丹台地の伊丹面と呼ばれる中位段丘の標高20～15ｍの位置に所在している。伊丹郷町の東側には海食崖があり、東側は猪名川の氾濫による沖積地となる。また、西側には、伊丹台地の低位段丘に当たる中野面を臨む。

2．歴史的環境

今回報告する伊丹郷町は、中世末から近世にかけての遺跡で、周辺には同時代の遺跡はほとんど知られていない。しかし、中世以前の遺跡を含めると、伊丹郷町の周辺の東西４km×南北6.25kmの範囲には、PL.３に示すように90を越える遺跡がある（尼崎市教育委員会 1989　伊丹市教育委員会 1989　大阪府教育委員会 1990・1991　川西市教育委員会 1990　兵庫県教育委員会 1973　福井英治ほか 1982　文化庁文化財保護部 1972）。時代的には、旧石器時代のものから中世のものまであり、Table ２の「遺跡地名表」では、旧石器時代をＳで、縄文時代をＪで、弥生時代をＹで、古墳時代をＫで、奈良～平安時代をＮで、中世をＴで、近世をｋで表示した。また、遺跡の分布状況を1/25,000の地形図から作成した等高線図におとした（Fig.４）が、市街化等の要因による地形の改変が激しく、正確に遺跡の立地を読み取れないので、遺跡の立地条件を遺跡地名表に、伊丹台地の伊丹面はＩで、安倉面はＡで、中野面はＮで表記し、猪名川の氾濫原の沖積地に立地するものはＴで、猪名川支流の箕面川の形成する扇状地に位置するものはＭで、武庫平野南部の三角洲に立地するものはＳで各々表示した。

ここでは、調査を実施した伊丹郷町と周辺の遺跡の所属時期がやや異なるので、伊丹郷町周辺の東西４km×南北6.25kmの範囲の遺跡の分布状況を概観するに留めておく。

旧石器時代の遺跡としては、猪名川支流の箕面川の形成する扇状地に立地する宮の前遺跡（11）が知られているのみで、その分布状況については不明であると言わざるを得ない。

縄文時代になると遺跡の数はやや増え、その分布状況をみると、猪名川右岸上流の氾濫原のやや高燥な地域および東西方向に走る構造線の北側の伊丹面に立地する第１群と、猪名川左岸の猪名川支流の箕面川の形成する扇状地に立地する第２群、猪名川の沖積地を臨む構造線より南の伊丹面に立地する第３群、猪名川左岸下流の氾濫原に立地する第４群の大きく４つに分けられる。第１・第２・第４群は、各々下加茂遺跡（１）・小坂川遺跡（13）・口酒井遺跡（40）などの中心となる遺跡が存在し、その規模も大きいが、第３群にはそのような遺跡は見当たらない。

弥生時代になると、遺跡の分布する範囲も安倉面を除く全域に拡がり、その数も32と爆発的に多くなる。遺跡の分布状況を見ると、縄文時代の４群のほかに新たに中野面の南東端およびそれに続く猪名川右岸下流の氾濫原に立地する第５群が加わる。各群の状況をやや細かくみると、猪名川上流の第１群は猪名川の氾濫原のみに限られ、第３群は伊丹面の東端に沿って南北に長く分布するようになる。また、第３・第５群は小規模な遺跡の集合体と考えられ、第１群の下加茂遺跡（１）や第２群の小坂川遺跡（13）、第４群の森本遺跡（37）・口酒井遺跡（40）・田能遺跡（40）のような大規模な中心的な遺跡は存在しない。なお、第３群の中村遺跡（25）で外縁付紐式銅鐸が出土している。

古墳時代の遺跡は、集落跡等に限ると数量的には40と弥生時代と比べてやや増加するに過ぎないが、安倉面を含む全域に分布するようになり、武庫平野のかなりの部分が生活空間として利用れさるようになる。遺跡の分布状況は、弥生時代の５群にさらに中野面南端に分布する第６群と伊丹台地南部の三角洲地帯に立地する第７群が加わり、計７群となる。第２・第４・第５群は弥生時代とほぼ同一地域を占有するが、第１・第３群に古有域の変化が認められる。第１群は、猪名川右岸上流の氾濫原の伊丹台地に接する高燥な部分に加え、伊丹面北半の大部分と伊丹面の西側に続く安倉面が分布域となる。また、第３群は、伊丹面の南端に限られてくる。第１・第２・第４群は、弥生時代同様中心的な遺跡が想定できるが、第３・第５・第６群は小規模な遺跡の集合体と考えられる。なお、古墳の分布状況を見ると、

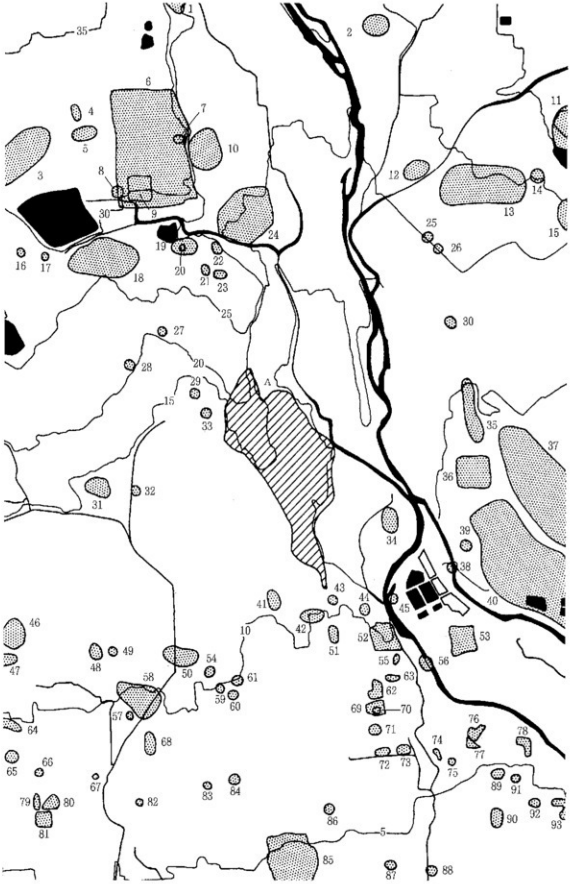


Fig. 4　遺跡分布図（1／25.000）

Table 2　遺跡地名表

No.	遺跡名	立地	時代	No.	遺跡名	立地	時代
A	伊丹郷町・有岡城跡	I	J・Y・K・N・T・k	46	堀池遺跡	N	K・N
	女郎塚古墳・鳴塚古墳		K	47	野間東ノ口遺跡	N	N
1	下加茂遺跡	T	J・Y・K・N・T	48	南野出口遺跡	N	K
2	神田遺跡	T		49	了福寺墓地	N	T
3	東野遺跡第1地点	A	K・N・T	50	御願塚遺跡第1地点	N	N
4	東野遺跡第2地点	I	N・T	51	北畑遺跡	N	Y・K
5	東野遺跡第3地点	I	J・N	52	猪名寺廃寺跡	N	N・T
6	緑ヶ丘遺跡	I	K・N	53	春日神社遺跡	T	Y・K・N・T
7	緑ヶ丘1号墳	I	K	54	御願塚遺跡第2地点	N	N
8	猿ヶ山城跡	I	T	55	真浄坊遺跡	T	Y・K
9	伊丹廃寺跡	I	N	56	上園橋遺跡	T	Y
10	北村遺跡	T	K・N	57	平塚古墳	N	K
11	宮の前遺跡	M	S・J・Y・K・N・T	58	南野遺跡	N	K・N
12	下河原遺跡	M	K	59	御願塚遺跡第3地点	N	N
13	小坂田遺跡	M	J・Y・K・N・T	60	御願塚古墳	N	K
14	住吉宮の前遺跡	M	Y・K	61	御願塚遺跡第4地点	N	N
15	宮の前西遺跡	M	Y	62	前畑遺跡	N	Y
16	墻ヶ池畔塚	N		63	寺前遺跡	T	Y・K
17	大鹿遺ノ中遺跡	N	N	64	野間森本遺跡	N	N
18	大鹿遺跡	N	N	65	四方田遺跡	N	N・K
19	高台遺跡第4地点	I	Y・K	66	座頭塚古墳	N	K
20	緑ヶ丘2号墳	I	K	67	車塚古墳	N	K
21	高台遺跡第3地点	I	Y・K・T	68	安堂寺遺跡	N	N
22	高台遺跡第1地点	I	K	69	中ノ川遺跡	N	Y・K・N
23	高台遺跡第2地点	I	T	70	園田大塚山古墳	N	K
24	北園遺跡	T	K・N	71	南清水古墳	N	K
25	中村遺跡	M	Y	72	稲荷遺跡	S	K
26	大阪空港遺跡A地点	M	J・Y・K	73	松ノ内遺跡	S	Y・K・N
27	大鹿お塚	N	T	74	食満1号墳	T	K
28	千僧遺跡	N	T	75	食満2号墳	T	K
29	桜ヶ丘遺跡	N	J	76	喜撰町遺跡	T	Y
30	大阪空港遺跡B地点	M	J・Y	77	鎌田遺跡	T	K
31	昆陽林田遺跡	N	N	78	西ノ口遺跡	T	K
32	昆陽石鹿出土地点	N	Y	79	東富松遺跡A	N	T
33	伊丹小学校遺跡	N	Y・K	80	東富松遺跡B	N	T
34	松原遺跡	T	Y・K	81	富松城跡	S	T
35	西桑津遺跡	T	Y・K・N・T	82	阪家古墳	N	K
36	森本居館跡	T	Y・K・T	83	琵琶塚古墳	N	K
37	森本遺跡	T	J・Y・K・N・T	84	柏木古墳	N	K
38	口酒井猪名川河原遺跡	T	K・N	85	塚口城跡	S	T
39	口酒井春日神社境内遺跡	T	N	86	池田山古墳	S	K
40	口酒井遺跡	T	J・Y・K・N・T	87	御園古墳	S	K
	田能遺跡		Y・K	88	岡院の石棺	S	K
41	平松町遺跡	N	N	89	南ノ口遺跡	T	Y・K
42	南本町遺跡	N	K・N	90	南浦遺跡	T	Y・K
43	蛍塚古墳	N	K	91	宮ノ前遺跡	T	K
44	黄金塚古墳	N	K	92	東口遺跡	T	K
45	口酒井藻川河原遺跡	T	K・N	93	古宮遺跡	T	Y・K

第２・第４群を除く５群に存在する。第１群には後期古墳の緑ヶ丘１号墳（７）・同２号墳（20）が存在し、第３群には中期古墳の女郎塚古墳（Ａ）と鶯塚古墳（Ａ）がある。第５群の６基の古墳のうち園山大塚古墳（70）と南清水古墳（71）は中期古墳で、第６群には中期古墳の御願塚古墳（60）や柏木古墳（84）を始めとして７基の古墳が含まれる。また、第７群は、古墳３基のみで構成されるが、池田山古墳（86）・御園古墳（87）の２基の中期古墳が存在する。このような古墳の分布状況と集落遺跡の分布状況を考え併せると、当該地域内での中心地が猪名川左岸の沖積地から猪名川右岸に徐々に移動している状態が窺える。

奈良～平安時代には、遺跡数がやや減り、その分布状況にも変化が見られる。古墳時代の第１・第２・第４群はほぼ同一地域に存在するが、その他の群で大幅な変化が認められる。古墳時代の第７群は消滅し、第３・第５・第６群が統合し、占有域がおおむね伊丹面の南半から中野面の南端までとなる。なお、第２・第４群はその占有域が縮小する。この時代になると、古墳時代から始まっていた当該地域での中心地の移動がほぼ完了したと考えられる。このことは、第１群の伊丹廃寺跡（９）の存在や第３群に猪名寺廃寺跡（52）が所在することからも妥当と言えよう。

なお、中世の遺跡の報告例が少なく、全体的な傾向はつかめないが、ほぼ奈良～平安時代と同様と推測できる。ただ、大鹿お塚（27）や千僧遺跡（28）の存在から伊丹台地の中央部まで遺跡が分布するようになると言える。

以上、遺跡の分布状況を概観してきたが、対象とした遺跡が主に集落跡や古墳などの生産域を示さない遺跡のため、当該地域での生活空間の変遷を明確に捉え得なかった。ここで、やや大胆に、弥生時代以降の生活空間の拡がりを考えてみたい。

弥生時代には、猪名川流域の氾濫原の自然堤防上の微高地や箕面川の扇状地、および伊丹台地の東端に居住域を構え、周辺の猪名川の氾濫原を耕地として利用していたと考えられる。古墳時代になると、居住域が伊丹台地の上にも拡がり、徐々にその中心も台地上に移動しているものの、生産域は弥生時代同様猪名川の氾濫原に限られ、まだ伊丹台地上は開発されていなかった。奈良時代になると、居住空間の中心は伊丹台地となり、生産域も猪名川流域の氾濫原のほかに伊丹台地上にも拡がり、その傾向は平安時代から中世にかけてさらに強まったと推測できる。このような状況下で、中世末には、伊丹台地のかなりの部分が生産域を含む生活空間として利用されるようになり、在郷町「伊丹」の誕生およびその発展へと結びつくと考えられる。

Ⅲ．層序と遺構面

1．基本層序

今回の調査において、現地で作製した地層断面図は、PL.11のとおりである。現地での地層観察の結果、6層の自然堆積層と12層の盛土したいわゆる「整地層」が確認された。また、6層の自然堆積層のうち5層は土壌化し、整地層はすべて土壌化していた。これら土壌化した地層の表面では、人間の活動した可能性がある。なお、地層注記はTable 3のとおりである。

2．地層の堆積状況

基本的な層序関係は前述のようになり、調査区全域をみわたすと、全体が均質な層位関係を示すわけではないことは明瞭である。そこで、全体の地層の堆積状況を年代を追って概観するとつぎのようになる。

まず、24b層（シルト質極細砂 7.5YR 7/8 黄橙）が堆積し、土壌化することなく23層（極細砂質シルト 7.5 YR 7/8 黄橙）が堆積する。23層は、調査区南端では完全に土壌化するものの、他の部分では上面がわずかに土壌化するにすぎないが、とりあえず、23a層（極細砂質シルト 7.5Y 5/1 褐灰）が形成される。23層上面が生活面として利用された後、洪水等の要因により、北から南に傾斜をもって22層（シルト質極細砂 7.5YR 7/8 黄橙）が堆積する。22層上面は、生活面として使用され、土壌化する。なお、22層上面で凹地となっていた部分に21層（シルト質極細砂 10YR 5/1 灰）が堆積し、22層同様上面が土壌化（21a層）する。その後、部分的にシルト質極細砂を主体とする整地層が形成され、上面が土壌化（20a層）する。

22a層・21a層・20a層の3枚の土壌層の上面が生活面として利用された後、整地層として砂礫を主体

Table 3　地層断面注記

No.		注記および備考	No.		注記および備考
1		調査前の建物取り壊し時の撹乱	12	b	焼土混じりの層
2		表土	13	b	焼土層（遺構埋土を兼ねる）
3	a	極細砂 5YR 2/2 黒褐	14	a	シルト質極細砂を主体とする整地層
4	a	極細砂質シルト主体の整地層	15	a	極細砂質シルトを主体とする整地層
	b	砂礫主体の整地層	16	a	極細砂質シルトを主体とする整地層
5	a	極細砂質シルトを主体とする整地層	17	a	極細砂質シルトを主体とする整地層
6	b	焼土混じりの層	18	a	極細砂質シルトを主体とする整地層
7	b	焼土層（遺構埋土）	19	a	砂礫を主体とする整地層
8	a	極細砂 5YR 2/2 黒褐	20	a	シルト質極細砂を主体とする整地層
9	a	極細砂質シルト主体の整地層	21	a	シルト質極細砂 10YR 5/1 灰
	b	極細砂質シルト主体の整地層	22	a	シルト質極細砂 7.5Y 5/1 褐灰
	c	砂礫主体の整地層	23	a	極細砂質シルト 7.5Y 5/1 褐灰
10	a	シルト質極細砂主体の整地層		b	極細砂質シルト 7.5YR 7/8 黄橙
11	a	砂礫主体の整地層	24	b	シルト質極細砂 7.5YR 7/8 黄橙

※a層は土壌層、b・c層は非土壌層

とする19層および極細砂質シルトを主体とする18～15層がほぼ同時期に盛土される。これら５枚の整地層の盛土順序は、19層→18層→17層→16層→15層となり、各層の上面は上壌化（19a層・18a層・17a層・16a層・15a層）していることから生活面として使用されたことが判る。また、これら５枚の整地層の盛土よりやや遅れて、19a層上面にシルト質極細砂を主体とする整地層が盛土され、上面が土壌化（14a層）し、上面は19a層・18a層・17a層・16a層・15a層の各層上面と共に生活面を形成していたとも考えられる。

19～15層上面から成る生活面では、調査区全域にわたって大規模な火災が起こったと考えられる。同遺構面上に形成される遺構の埋土に焼土が充填されること（13b層）や焼土層（13b層）が19a層上面に堆積することから火災の発生は想定できる。また、13b層がかなり厚く堆積することや、火災の後始末を行った痕跡と考えられる焼土混じりの層（12b層）が比較的厚く存在することから、火災の規模が大きかったことを窺わせる。

大規模な火災にあった19～15層上面から成る生活面の復旧の途上で、２枚の整地層（10層：シルト質極細砂主体、11層：砂礫主体）が盛土され、10a層・11a層として若干利用されたようであるが、盛土された部分は焼土の堆積のなかった部分に限られており、また、整地層の厚さも13層・12層よりも薄く、完全な復旧には程遠かったと考えられる。完全な復旧は、９層の盛土によって完成する。９層の盛土は、まず砂礫主体の整地層（９ｃ層）が盛土され、つぎに極細砂質シルト主体の整地層（９ｂ層および９ａ層の上壌化する以前の地層）が盛土される。

この整地層は、調査区全域にわたって認められ、生活面として利用され土壌化（９ａ層）している。また、９ａ層が生活面として使用されている間に、なんらかの要因によって堆積もしくは盛土された土が土壌化し８ａ層（極細砂 5YR 2/2 黒褐）が９ａ層上面に形成される。

９層上面から成る生活面では、19～15層上面から成る生活面同様、調査区全域にわたって大規模な火災が起こったと考えられる。同遺構面上に形成される遺構の埋土に焼土が充填されること（７ｂ層）や、火災の後始末を行った痕跡と考えられる焼土混じりの層（６ｂ層）が９ａ層上面にかなり厚く存在することから、大規模な火災が発生したと考えられる。

大規模な火災にあった９層上面から成る生活面の復旧の途上で、宅地１軒分に相当する部分のみ、極細砂質シルトを主体とする整地層（５層）が盛土され、５ａ層として利用されるが、調査区全域の復旧は、４層の盛土の完成まで待たねばならない。４層の盛土は、調査区の北端を除く大部分の地域で砂礫主体の整地層（４ｂ層）が盛土され、その上に極細砂質シルト主体の整地層（４ａ層の土壌化する以前の地層）が盛土される。この整地層は、９ａ層同様調査区全域にわたって認められ、生活面として利用され土壌化（４ａ層）している。また、４ａ層が生活面として使用されている間に、なんらかの要因によって堆積もしくは盛土された土が土壌化した３ａ層（極細砂 5YR 2/2 黒褐）が４ａ層上面に形成される。

この後、２層（表土）が堆積し、調査前の建物取り壊し時の撹乱（１層）が形成される。

３．遺構面の設定

調査区全体で24層に分けた基本層序をもとに理論的に設定可能な生活面を詳細に設定すると、つぎの11段階になった。

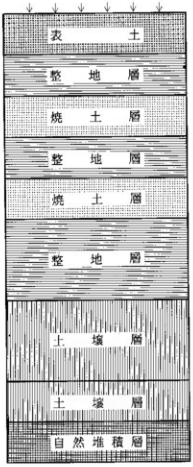


Fig. 5　検出遺構面等模式図

① 調査区のごく一部にみられる3a層上面および、調査区全域に盛土される整地層である4a層上面で構成され、調査区全域にわたって認められる生活面。

② 調査区全域に存在する整地層（4a層）上面のみで構成され、9a層の災害が完全に復旧した状態の生活面。

③ 9a層での災害が宅地1軒分に相当する部分のみで整地により復旧し、その部分に存在する5a層上面のみで構成される生活面。

④ 調査区のごく一部にのみみられる8a層上面および、調査区全域に盛土される整地層である9a層上面で構成され、調査区全域にわたって認められる生活面。

⑤ 調査区全域にわたって盛土による整地が行われ、9a層上面のみで構成され、19a層の災害が完全に復旧した状態の生活面。

⑥ 19a層上面での災害が部分的に盛土により復旧され、10a層上面および11a層上面で構成される生活面で、19a層とともに利用された可能性がある生活面。

⑦ 14a層上面および15a層上面、16a層上面、17a層上面、18a層上面、19a層上面で構成され、整地層が調査区全域にわたって認められる生活面。

⑧ 15a層上面および16a層上面、17a層上面、18a層上面、19a層上面で構成さ、均質な整地層が調査区全域にわたって存在する生活面。

⑨ 整地層である20a層上面、自然堆積層の土壌化した21a層上面および22a層上面で構成される生活面。

⑩ 21a層上面および22a層上面で構成され、調査区全域に認められる自然堆積層の土壌化した生活面。

⑪ 自然堆積層の土壌化した23a層上面で構成され、調査区全域に存在する遺構面。

そこで、確認調査結果および、サブトレンチでの地層観察結果、各層序・遺構での出土遺物の年代観等を総合的に判断し、調査区全域の層位関係をあえて単純化し、11段階の生活面のうち、②・⑤・⑧・⑩・⑪の各生活面を平面的調査の対象とし、②の段階の生活面を第1遺構面、⑤の段階の生活面を第2遺構面、⑧の段階の生活面を第3遺構面、⑩の段階の生活面を第4遺構面、⑪の段階の生活面を第5遺構面として調査を実施した。ただし、部分的に存在する整地層上面の生活面は遺構面と認定した生活面に含めて調査に臨んだ。つまり、①および③は第1遺構面に、④は第2遺構面に、⑥および⑦は第3遺構面に、⑨は第4遺構面に各々ふくめた。それ故、各遺構面を、第1遺構検出面、第2遺構検出面、……第5遺構検出面と呼称することにする。

なお、各遺構検出面と整地層との関係はFig. 5「遺構検出面等模式図」のようになる。

4．遺構検出面と存続年代

各遺構検出面で検出された遺構には、井戸、池状遺構、溝、礎石建物、築地基礎、石列、通路状遺構、竈、焼土溜土壙、伏甕土壙、埋甕土壙、埋甕土壙、埋桶土壙、粘土溜土壙、および土壙等がある。

なお、平面的調査の過程で、上層で検出できなかった遺構を下層で検出している場合があるため、遺構検出面の存続時期と遺構の時期が整合しないことがあるが、各遺構検出面毎の検出遺構はTable 4「検出遺構一覧表」のとおりである。

（1）第1遺構検出面

① 検出遺構と屋敷割

第1遺構検出面で検出された遺構には、井戸、池状遺構、溝、礎石建物、築地基礎、焼土溜土壙、伏甕土壙（水琴窟）、埋甕土壙、埋壺土壙（駝衣壺）、埋桶土壙、土壙などがあり、遺構の配置状況から調査区内には5つの宅地が想定できる。

最も北に位置する宅地Ⅰは、溝SD1001を南の屋敷境とする宅地で、宅地Ⅰの南側にSD1001を北の屋敷境とし溝SD1002を南の屋敷境とする宅地Ⅱが位置する。調査区の南側には、礎石建物SB1004の東端の礎石列が南北方向に走り、この礎石列を屋敷境として、調査区の南西部に宅地Ⅳがあり、調査区の南東部に宅地Ⅴがある。また、宅地Ⅱの南側と宅地Ⅳ・Ⅴの北側の空間に宅地Ⅲが想定できる。

② 宅地Ⅰ

宅地Ⅰは、間口7.30m以上、奥行15.00m以上の宅地である。宅地の東半には、南端が溝SD1001に沿

Table 4　検出遺構一覧表

		第1遺構検出面	第2遺構検出面	第3遺構検出面	第4遺構検出面	第5遺構検出面	合計
井戸		3	2	4	7	1	17
池状遺構		3	1	2			6
溝		2	3		2	5	12
礎石建物		4	4	1			9
築地基礎等		2		6	6		14
通路状遺構				2			2
土壙	使用済竈		7		1	1	9
	未使用竈		1	1			2
	焼土溜	1	1	16			18
	伏甕	3	4				7
	埋甕	6	3	1			10
	埋壺	2	1	1			4
	埋桶	5		13	8	3	29
	粘土溜			1			1
	その他	14	40	54	43	73	224
その他の遺構		1			2		3
合計		46	67	102	69	83	367

うように礎石建物（SB1001）が建ち、建物内に取りこまれる形で井戸（SE1001）がある。また、建物内の床下に当たると考えられる部分の道路脇に水甕に利用されたと思われる埋甕土壙（SK1006）がある。庭地は宅地Ⅰの西半にあり、庭地の西半部には、北から順に水琴窟と考えられる伏甕土壙（SK1001）、素掘りの池状遺構（SG1001）、便所と考えられる掘桶土壙（SK1004）が並び、東半部の中央に漆喰塗りの池状遺構（SG1002）がある。なお、建物内に当たる部分に焼土溜土壙（SK1005）や土壙（SK1002・1003）があるが、土壙は宅地Ⅰの機能停止後ゴミ穴として掘削されたものと考えられ、焼土溜土壙は第２次世界大戦当時の防空壕の可能性が高い。

③　宅地Ⅱ

宅地Ⅱは、間口7.95m、奥行15.15m以上の宅地で、礎石列SA1001等の存在や、SA1001の側に脇衣壷の埋納土壙と考えられる掘甕土壙（SK1008）があり、脇衣壷を床下に埋納することの多いことなどを考え併せると、礎石建物があった可能性は高いが、その構造・規模等については不明である。宅地の中央南端の溝SD1002の側に井戸（SE1002）があり、西半の北端の溝SD1001の側に便所と考えられる埋桶土壙（SK1007）がある。

④　宅地Ⅲ

宅地Ⅲは、間口17.10m、奥行15.40m以上を測り、L字形を呈する宅地である。宅地の南半部と北東端部にはかなり大規模な礎石建物（SB1002）が南北方向に長く建ち、宅地の北半部の大部分は庭地として利用される。なお、庭地はかなり広く、何らかの作業場的な空間と考えることも可能であろう。宅地のほぼ中央部の建物の脇には、埋甕土壙（SK1020）と小型の埋桶土壙２基（SK1021・1022）とがあり、共に便所と考えられる。また、庭地の東端には、池状遺構（SG1003）と埋甕土壙２基（SK1011・1015）とがあり、埋甕土壙は水甕に利用れさたと考えられるが、その詳細は不明である。

⑤　宅地Ⅳ

宅地Ⅳは、間口8.05m以上、奥行23.70m以上の宅地である。宅地の南半は後世の削平のためその状況は不明であるが、宅地の北半は３分割されて利用されていたと考えられる。宅地の最も奥に当たる北端の部分には蔵（SB1003）があり、宅地の南半の削平を受けた部分には本来建物が建っていたのであろう。蔵と本来建物が建っていたと想定される部分との間の空間は、築地塀になると考えられる築地基礎（SA1002）によって、西側の庭地と東側の部分に分けられる。築地基礎の東側の部分には、埋桶土壙（SK1024）や埋甕土壙（SK1027）の便所を内部に含む礎石建物（SB1004）があり、南半に想定される建物と一連の建物と考えられる。なお、礎石建物SB1004の漆喰塗りの土間の下から脇衣壷と考えられる施釉陶器壷・壺（SX1001）が検出されている。また、庭地の部分にも埋甕土壙（SK1025）や水琴窟と考えられる伏甕土壙（SK1026）があり、埋甕土壙は水甕であった可能性が高い。

⑥　宅地Ⅴ

宅地Ⅴは、間口7.30m以上、奥行17.95m以上の宅地で、大半は現家屋の取り壊し時に攪乱を受けているが、庭地と考えられる部分に井戸（SE1003）や水琴窟と考えられる伏甕土壙（SK1029）がある。

⑦　遺構検出面の存続年代

本遺構検出面は、基本的には、第２遺構検出面での大規模な火災による災害が整地層によって復旧されることによって成立する遺構検出面である。この過程で盛土される整地層からは、丹波甕（177）・擂鉢（237）、施釉陶器浅鉢（276）、伊万里染付椀（442）、瀬管（724）などが出土している。これらの出土遺物の中で、その所属年代が判明するもののうち、伊万里染付椀は18世紀末から19世紀前半の所産

と考えられ、丹波擂鉢は18世中葉から18世紀末の所産と考えられる。以上のことから、第２遺構検出面での大規模な火災による災害が整地層によって復旧されるのは18世紀末頃と考えられ、本遺構検出面の存続期間は18世紀末以降に比定できる。

（２）第２遺構検出面

①　検出遺構と屋敷割

第２遺構検出面で検出された遺構には、井戸、池状遺構、溝、礎石建物、竈、地下式貯蔵庫、伏甕土壙（水琴窟）、埋甕土壙、埋壺土壙（脇衣壺）、土壙などがあり、遺構の配置状況から調査区内には６つの宅地が想定できる。

最も北に位置する宅地Ⅰは、溝 SD2001を南の屋敷境とする宅地で、宅地Ⅰの南側に SD2001を北の屋敷境とし溝 SD2002を南の屋敷境とする宅地Ⅱが位置する。調査区の南側には、礎石建物 SB2004が建ち、この礎石建物の東端を屋敷境として、調査区の南西部に宅地Ⅳがあり、調査区の南東部に宅地Ⅴがある。また、宅地Ⅱの南側と宅地Ⅳ・Ⅴの北側との空間は、SD2002を北の屋敷境とし溝 SD2003を南の屋敷境とする宅地Ⅲ－北があり、その南側には、礎石建物 SB2002が建ち、SD2003を北の屋敷境、SB2002の南端を南の屋敷境、礎 SB2003の東端を西の屋敷境とする宅地Ⅲ－南がある。

②　宅地Ⅰ

宅地Ⅰは、間口7.30ｍ以上、奥行14.60ｍ以上の宅地で、礎石の存在から礎石建物が存在する可能性はあるが、その構造等については不明である。また、宅地の中央部北端に水琴窟と考えられる伏甕土壙（SK2003）がある。

③　宅地Ⅱ

宅地Ⅱは、間口7.75ｍ、奥行14.55ｍ以上の宅地である。礎石の存在から礎石建物があった可能性は高いがその構造等については不明である。ただし、建物の存在が想定できる部分に地下式貯蔵庫（SK2015）があり、上屋との関連について興味が持たれるところであるが、その詳細は不明である。また、宅地の中央部に水甕と考えられる埋甕土壙（SK2017）があり、庭地と考えられる部分に井戸（SE2001）がある。

④　宅地Ⅲ－北

宅地Ⅲ－北は、間口8.75ｍ、奥行15.30ｍの宅地である。宅地の東側に礎石建物（SB2001）が建ち、建物の西端に建物内に取りこまれる形で便所と考えられる埋甕土壙（SK2028）がある。また、埋甕土壙の南側の建物内の南端に伏甕土壙（SK2029）があり、埋甕土壙と有機的に機能していたと想定できる。庭地には、東端中央部に礎石建物と接するように素掘りの池状遺構（SG2001）があり、中央部北端に水琴窟と考えられる伏甕土壙（SK2023）がある。なお、庭地の中央部から西側はかなり広く、何らかの作業場的な空間と考えることも可能であろう。

⑤　宅地Ⅲ－南

宅地Ⅲ－南は、間口6.85ｍ、奥行9.45ｍの宅地である。この宅地は、今回の調査で検出された宅地の中では最も面積が狭いが、この宅地にほぼいっぱいに変形の「田」の字形の部屋割りの想定できる礎石建物（SB2002）が建ち、建物内に炊事用と考えられる竈（SK2031）と手工業に利用したと考えられる竈（SK2044）とがある。また、建物内の床下に当たる部分には、脇衣壺の埋納土壙と考えられる埋壺土壙（SK2047）がある。なお、礎石建物の西側の幅１ｍ位の部分が庭地と考えられるが、狭くその利

用方法等についての詳細は不明である。

⑥　宅地Ⅳ

宅地Ⅳは、間口8.05m以上、奥行25.70m以上の宅地である。宅地は大きく3分割されて利用されていたと考えられ、北から順に蔵（SB2003）、庭地、礎石建物（SB2004）となる。宅地南半の礎石建物内には竈が6基（SK2048・2049・2051～2054）あり、庭地には井戸（SE2002）がある。

⑦　宅地Ⅴ

宅地Ⅴは、間口7.30m以上、奥行19.05m以上の宅地で、大半は現家屋の取り壊し時に攪乱を受けているが、庭地と考えられる部分には便所と考えられる蓮甕土壙（SK2056）がある。

⑧　遺構検出面の存続年代

本遺構検出面は、基本的には、第3遺構検出面での大規模な火災による災害が整地層によって復旧されることによって成立し、本遺構検出面上での火災によって機能の停止が始まり、第1遺構検出面を形成する整地層の完成をもって完全にその機能が停止する遺構検出面である。

本遺構検出面の成立過程で第3遺構検出面上に盛土される整地層からは、土師質土器焜炉（114）、京焼系陶器椀（162）、丹波擂鉢（214・238）、萩焼椀（271）、唐津椀（287）、伊万里染付椀（412）・皿（487・488・492）・瓶（458）、伊万里白磁皿（522）、軒丸瓦（531）、丸瓦（542・543）、ミニチュア製品（551・552・554・556・560・572・600）、人形（579・582・596・597）、泥面子（606・612）、面子（614・618・624・630・633・644・647）、煙管（725）、釘（762・763・768）、掛金具（739）、把手（740）、火打金（752）などが出土している。これらの出土遺物の中で、その所属年代が判明するもののうち、丹波擂鉢（238）は18世紀中葉から18世紀末の所産と考えられ、伊万里染付皿（487・488）や伊万里白磁皿などは17世紀後半から18世紀前半の所産と考えられ、伊万里染付椀は18世紀前半代の所産と考えられ、伊万里染付皿（492）は17世紀末から18世紀前半の所産と考えられる。以上のことから、第3遺構検出面での大規模な火災による災害が整地層によって復旧されるのは、遅くとも18世紀の中頃と考えられ、本遺構検出面の上限は18世紀前半代でも比較的中頃に近い時期に比定できる。

なお、本遺構検出面上で発生した火災によって生じた焼土などを処分したと想定できる地下式貯蔵庫（SK2015）からは、土師器鍋（103）、土師質土器焜炉（112）、丹波甕（181）・片口（169）、唐津系青緑釉皿（339）、伊万里染付椀（439・446）・鉢（453）・重物（454）、ミニチュア製品（562・570・571）、人形（595）、硯（677）、寛永通宝（712～715）、煙管（726・728・729）、簪（735）などが出土しており、これらの出土遺物の中で、その所属年代が判明するもののうち、伊万里染付椀（446）・鉢などは18世紀末から19世紀前半の所産と考えられ、伊万里染付椀（439）は17世紀末から18世紀末の時期の所産と考えられる。以上のことから、本遺構検出面での火災の発生は18世紀末頃と考えられる。

また、第1遺構検出面を形成する整地層の成立時期は、前述のとおり18世紀末頃と考えられるので、本遺構検出面の存続時期は、18世紀の前半代でも比較的中頃に近い時期から18世紀末までの間に比定できる。

（3）第3遺構検出面

①　検出遺構と属性制

第3遺構検出面で検出された遺構には、井戸、池状遺構、礎石建物、石列、通路状遺構、竈、焼土溜土壙、埋甕土壙、埋壺土壙（胞衣壺）、埋桶土壙、粘土溜土壙、土壙などがあり、遺構の配置状況から

調査区内には５つの宅地が想定できる。

通路状遺構 AF3002を挟んで、北側に宅地Ⅰが、南側に宅地Ⅱが位置する。また、調査区の南側には、礎石列 SA3006が南北方向に走り、この礎石列を屋敷境として、調査区の南西部に宅地Ⅳがあり、調査区の南東部に宅地Ⅴがある。宅地Ⅳの北端は石列 SA3004で画され、宅地Ⅴの北端は石列 SA3005で画される。宅地Ⅱの南側と宅地Ⅳ・Ⅴの北側の空間には、南北方向に石列 SA3002・3003が走り、石列 SA3003の北端付近を境として南北に２つの宅地が想定でき、北側は宅地Ⅱに当たり、南側は宅地Ⅲに当たる。

② 宅地Ⅰ

宅地Ⅰは、間口7.05ｍ以上、奥行14.60ｍ以上の宅地で、宅地の東半には通路状遺構 SF3002にその南端を接するように、建物内に通路状遺構（SF3001）を持ち、土間の部分と床貼り部分の想定される礎石建物（SB3001）が建つ。一方、庭地は宅地Ⅰの西半にあり、庭地の中央部に大型の埋桶土壙（SK3002）があり、その側に廃衣壺（SK3003）が埋められていた。また、庭地の南西隅には、肥溜とも考えられる埋桶土壙が３基（SK3005～3007）が東西方向に並び、その北側に木杭による護岸施設を持った池状遺構（SG3001）がある。なお、建物内に当たる部分に焼土溜土壙（SK3001）があるが、第３遺構検出面での火災の後始末に利用したものと思われる。

③ 宅地Ⅱ

宅地Ⅱは、奥行14.80ｍ以上の宅地で、通路状遺構 SF3002がこの宅地に含まれると考えると間口10.75ｍを測る。礎石列（SA3001）等の存在から礎石建物 SB3001と同様の床下の構造を持った礎石建物があった可能性も捨てきれないが、詳細は不明である。また、宅地内には、第３遺構検出面での火災の後始末に使用したと考えられる焼土溜土壙が７基（SK3009～3011・3013・3014・3021・3022）ある。なお、井戸（SE3001）の位置する付近が庭地として利用されたのであろう。

④ 宅地Ⅲ

宅地Ⅲは、間口14.25ｍ、奥行15.30ｍの宅地である。宅地内には、石列（SA3002～3004）をはじめ、池状遺構（SG3002）や井戸（SE3002・3003）、第３遺構検出面での火災の後始末に使用したと考えられる焼土溜土壙（SK3033～3036）など多数の遺構があるが、宅地内の詳細は不明である。

⑤ 宅地Ⅳ

宅地Ⅳは、間口8.05ｍ以上、奥行19.25ｍ以上の宅地である。宅地の東端には礎石列（SA3006）があり、礎石建物の存在した可能性は高いが、その構造・規模等は不明である。宅地の北東端部には中型および大型の埋桶土壙（SK3058・3060・3068～3071）が集中し、その近辺が何らかの手工業の作業場であった可能性がある。なお、宅地の北東端には竈（SK3056）があり、また、宅地の南半部には第３遺構検出面での火災の後始末をしたと考えられる焼土溜土壙（SK3064～3066・3080）がある。

⑥ 宅地Ⅴ

宅地Ⅴは、間口7.30ｍ以上、奥行18.95ｍ以上の宅地で、大半は現家屋の取り壊し時に攪乱を受けているが、庭地と考えられる部分には井戸（SE3004）や埋甕土壙（SK3087）がある。

⑦ 遺構検出面の存続年代

本遺構検出面は、基本的には、第４遺構検出面の機能停止後、均質な整地層が盛土れさることによって成立し、本遺構検出面上での火災によって機能の停止が始まり、第２遺構検出面を形成する整地層の完成をもって完全にその機能が停止する遺構検出面である。

本遺構検出面の成立過程で第4遺構検出面上に均質に盛土される整地層からは、土師器皿（68・78）・鍋（87・89・91・94）、焼塩壷（126・129）、瓦質土器火舎（132）、瀬戸美濃椀（137）・鉄絵皿（152・153）・皿（148・154）、丹波擂鉢（197・220・228～230・235・236）、唐津椀（281・286）・鉄絵皿（315・316・319）・片口（309）・瓶（346）、唐津系椀（297・298）、唐津系刷毛目椀（303・306）・皿（335）、唐津系青緑釉皿（337）、伊万里染付椀（361・366・370・371・377・378・382・383・385）・皿（467・468・470・472・474・475・479・480・482）、伊万里白磁椀（513）・皿（516・517・519）、伊万里青磁皿（463）、伊万里色絵水滴（462）、軒丸瓦（530）、ミニチュア製品（564）、人形（575・583・585・588・594・598）、泥面子（605・609）、面子（622・625・629・631・634・637・639・643・645・653）、硯（679）、火型元宝（682・684）、寛永通宝（694～696・699）などが出土している。これらの出土遺物の中で、その所属年代が判明するもののうち、土師器鍋には16世紀末から17世紀後半の所産と考えられるもの（87・89）と17世紀前半から17世紀末の所産と考えられるもの（91・94）とがあり、丹波擂鉢には17世紀中葉から17世紀末の所産と考えられるもの（220）と17世紀後半から18世紀前半の所産と考えられるもの（197・228～230）と17世紀後葉から18世紀中頃の所産と考えられるもの（235・236）とがあり、唐津系刷毛目椀は17世紀末から18世紀前半の所産と考えられ、唐津系青緑釉皿は17世紀後半から18世紀前半の所産と考えられ、唐津系椀・皿は17世紀後半代の所産と考えられ、面子に転用された伊万里青磁椀（634）は17世紀前半でも中頃に近い時期の所産と考えられ、伊万里染付椀（377・378・382・383・385）や色絵水滴などは17世紀後半から17世紀末の所産と考えられる。以上のことから、第4遺構検出面の機能停止後均質な整地層が盛土されるのは、17世紀後葉のことと考えられる。

なお、本遺構検出面上で発生した火災によって生じた焼土中からは、土師器皿（11・23～31・46・47・58・59）、土師質土器火舎（109）・十能（111）、志野椀（135）・大鉢（156）、京焼系陶器椀（163）、丹波甕（183）・擂鉢（198・202・239）、備前系擂鉢（254・264）、唐津皿（333）・壷（347）、唐津系皿（334）、唐津系刷毛目椀（304・305・307）・皿（343）、伊万里染付椀（365・406・408・409・417）・皿（476）、伊万里青磁染付椀（505）・壷（509・510）、伊万里白磁皿（520）、伊万里色絵瓶（461）、軒丸瓦（528・533・535・536）、ミニチュア製品（555・563）、人形（587）、泥面子（611）、面子（620）、硯（673）、寛永通宝（693・707）、釣針状金具（737）、包丁（759）などが出土しており、これらの出土遺物の中で、その所属年代が判明するもののうち、丹波擂鉢には17世紀後半から18世紀前半の所産と考えられるもの（198）と17世紀後葉から18世紀中頃の所産と考えられるもの（202）と18世紀中葉から18世紀末の所産と考えられるもの（239）とがあり、唐津系刷毛目皿や伊万里白磁皿は17世紀後半から18世紀前半の所産と考えられ、唐津系刷毛目椀や伊万里染付椀（406）や伊万里色絵瓶などは17世紀末から18世紀前半の時期の所産と考えられ、伊万里染付椀（408・409・417）などは18世紀前半代の所産と考えられる。以上のことから、本遺構検出面での火災の発生は18世紀前半代と考えられる。

また、第2遺構検出面を形成する整地層の成立時期は、前述のとおり18世紀の前半代でも比較的中頃に近い時期と考えられるので、本遺構検出面の存続時期は、17世紀後葉から18世紀中頃までの間に比定できる。

（4）第4遺構検出面

① 検出遺構と屋敷割

第4遺構検出面で検出された遺構には、井戸、溝、築地基礎等、竈、埋桶土壙、土壙などがある。遺

構の配置状況から調査区内には３つ以上の宅地が想定できる。

最も北に位置する宅地Ⅰは、溝SD4001を南の屋敷境とする宅地で、宅地Ⅰの南側にSD4001を北の屋敷境とし礎石列SA4003を南の屋敷境とする宅地Ⅱが位置する。宅地Ⅱの南側には礎石列SA004を北の屋敷境とする宅地Ⅲがあるが、その構造・規模等は不明である。

② 宅地

宅地Ⅰは間口7.55ｍ以上、奥行14.45ｍ以上の宅地で、宅地Ⅱは間口8.25ｍ、奥行14.55ｍを測り、宅地Ⅲは奥行15.25ｍ以上の宅地である。宅地内には、宅地Ⅱおよび宅地Ⅲに礎石列SA4001～4003および礎石列SA4004・4005や礎石があることから礎石建物の建つ可能性もあるが、その構造等は不明である。また、宅地Ⅰで井戸（SE4001・4002）や埋桶土壙（SK4001・4002・4007）が検出され、宅地Ⅱで埋桶土壙（SK4016・4017）が、宅地Ⅲで井戸（SE4003）や溝（SD4002）、埋桶土壙（SK4027・4028）が検出されているが、宅地内の詳細は不明である。

なお、調査区の南半からは、井戸（SE4004～4007）や竈（SK4043）、埋桶土壙（SK4052）、土壙等が検出されている。

③ 遺構検出面の存続年代

本遺構検出面は、基本的には、第５遺構検出面の機能停止後、土砂の堆積によって成立し、第３遺構検出面を形成する均質な整地層の盛土をもってその機能が停止する遺構検出面である。

本遺構検出面の成立過程で堆積する土砂中からは、土師器鍋（81）、瀬戸美濃椀（136・138）・鉄絵皿（150）・皿（142・143・145～147・149）・鉢（155）、丹波擂鉢（185・186・188・211・212・216～218）、備前擂鉢（252）、唐津椀（289・290・294・295）・鉄絵皿（313・317）・皿（320・322・324・326～330）、伊万里染付椀（364）・皿（469）、伊万里白磁皿（518）、面子（617・628）、硯（674）、浮化元宝（682）などが出土している。これらの出土遺物の中で、その所属年代が判明するもののうち、土師器鍋は16世紀末から17世紀後半の所産と考えられ、瀬戸美濃椀は17世紀前半までの製品と考えられ、瀬戸美濃鉄絵皿は17世紀前半前葉の所産と考えられ、瀬戸美濃皿（143・145～147）は17世紀前半の所産と考えられ、丹波擂鉢には17世紀前葉までのもの（185・186・211・212）と17世紀中頃までのもの（188・217・218）と17世紀中葉から17世紀末の所産と考えられるもの（216）とがあり、備前擂鉢はⅤ期に相当し、唐津椀（289・290）・鉄絵皿・皿（320・322・324・326～328）などは16世紀末から17世紀初頭の所産と考えられ、唐津椀（294・295）・皿（329・330）は17世紀前半代の時期の所産と考えられ、伊万里染付椀・皿および伊万里白磁皿は17世紀初から17世紀前半の所産と考えられる。以上のことから、第５遺構検出面の機能停止後その上への土砂の堆積は、遅くとも17世紀前半代には完了していたと考えられる。

また、第３遺構検出面を形成する整地層の成立時期は、前述のとおり17世紀後葉と考えられるので、本遺構検出面の存続期間は、17世紀前半代から17世紀後葉に比定できる。

（５）第５遺構検出面

① 検出遺構と屋敷割

第５遺構検出面で検出された遺構には、井戸、溝、竈、埋桶土壙、土壙などがある。

本遺構検出面は調査区の北西から南東に緩やかに傾斜をもっており、調査区の南端で大きく落ち、谷状になる。調査区を南北に走る４条の溝（SD5001・5003～5005）と東西に走る溝１条（SD5002）が検

出れさているが、明瞭に屋敷割りを捉えることはできなかった。

② 遺構検出面の存続年代

本遺構検出面は、基本的には、第4遺構検出面を形成する土砂の堆積によって、その機能を停止する遺構検出面である。本遺構検出面を覆うように堆積する土砂の堆積時期は、前述のとおり、17世紀前半代と考えられるので、本遺構検出面の存続期間は、17世紀前半代以前に比定できる。

Ⅳ．検出遺構

各遺構検出面で検出された遺構には、概述のとおり井戸、池状遺構、溝、礎石建物、築地基礎、通路状遺構、竈、焼土溜土壙、伏甕土壙、埋甕土壙、埋壺土壙、埋桶土壙、粘土溜土壙、およびその他の土壙があるが、ここでは、検出された遺構のうち主要なものについて、出土遺物と併せてその概略およびその性格を述べる。

1．井　戸

井戸には、井桁が石組みのもの（SE1001・1002・2002・4002）、井桁が石組みと瓦積みで構成されるもの（SE3003）、井桁が瓦積みで造られるもの（SE4006）、井桁に井戸専用の瓦と石組みを使用したもの（SE1003）と井桁の形状が不明のものでいわゆる「素掘りの井戸」と通称されているもの（SE2001・3001・3002・3004・4001・4003～4005・4007・5001）との４種類がある。なお、SE4003は井桁が残存していなかったが、切り石を置いた痕跡が認められたので、SE1001・1002と同様の構造を持った井桁の可能性が高い。また、井戸側はすべて素掘りであるが、下半部でやや下膨れになるもの（SE3003・3004・5001）、下半部で大きく下膨れになるもの（SE1001・4003）、下半部が袋状になるもの（SE2001・4001・4002）、井戸側が直線のもの（SE1003・3001・4006・4007）の４種類がある。

（1）井戸SE1001

SE1001は、第１遺構検出面の宅地Ⅰの礎石建物SB1001内に位置し、井桁が石組みで井戸側が素掘りの井戸である。井桁の掘り方は1.95ｍ×1.75ｍの不整形を呈し、掘り方内に80～138㎝×15～18㎝×８～10㎝の切り石が井筒状に２段積まれている。井戸側は、直径1.05ｍの円形を呈し、深さは5.00ｍ以上である。井戸側は下半部で大きく下膨れとなり、最大径1.80ｍを測る。

出土遺物には、施釉陶器椀（278）・鍋（279）、伊万里染付椀（447）・皿・蓋（455・456）などがある。

（2）井戸 SE1002

SE1002は、第１遺構検出面の宅地Ⅱの庭地部分に位置し、井桁が石組みで井戸側が素掘りの井戸である。井桁の掘り方は1.45ｍ×1.55ｍの略円形を呈し、掘り方内に95～114㎝×16～20㎝×９～13㎝の切り石が井筒状に２段積まれており、上段には25～50㎝の河原石が置かれている。井戸側は、直径1.13ｍの円形を呈し、深さは4.00ｍ以上である。

出土遺物には、瓦質土器火舎、丹波擂鉢（205）、施釉陶器鍋（280）、伊万里染付椀（444・449）・蓋（457）などがある。

（3）井戸 SE1003

SE1003は、第１遺構検出面の宅地Ⅳに位置し、井桁に井戸専用の瓦と石組みを使用し、井戸側が素掘りの井戸である。井桁の掘り方は1.19ｍ×1.76ｍの隅丸方形を呈し、深さは検出面から86㎝を測る。

井桁は、掘り方内に93～132cm×17cm×17cmの切り石を方形に1段積み、その上に井戸瓦（548）を2段円形に積み、さらにその上に93～132cm×17cm×10cmの切り石を方形に組んでいる。上層の方形に組まれた切り石は、25cm前後の河原石で固定されている。なお、上層の切り石は内側に抉りがあり、内側が略円形を呈する。井戸側は、直径1.12mの円形を呈し、深さは4.65m以上である。

出土遺物には、伊万里染付椀（450）などがある。

（4）井戸SE2002

SE2002は、第2遺構検出面の宅地Ⅳの庭地部分に位置し、井桁が石組みで井戸側が素掘りの井戸である。井桁の掘り方は1.90m×1.95mの隅丸方形を呈し、深さは検出面から84cmを測る。石組みは、掘り方内に120～130cm×25cm×17cmの切り石を井筒状に2段積み、その上に15～50cmの河原石・切り石・石臼（666）などを3～4段に積んでいる。なお、井筒状に組んだ切り石は、25cm前後の河原石で固定されている。井戸側は、直径1.29mの円形を呈し、深さは5.00m以上である。

（5）井戸SE3003

SE3003は、第3遺構検出面の宅地Ⅲに位置し、井桁が石組みと瓦積みで構成され、井戸側が素掘りの井戸である。井桁の掘り方は直径1.30mの円形を呈し、深さは検出面から49cmを測る。井桁は、掘り方内に水平に平瓦を3段積み、その上に20～30cm×30～35cm×20cmの切り石を1段積み、さらに平瓦を水平に3段積んでいる。平瓦の積み方は、上下共、瓦と土が互層になるように積まれている。井戸側は、直径0.84mの円形を呈し、深さは5.44mである。井戸側は下半部でやや下膨れになり、最大径1.15mを測る。

出土遺物には、丹波擂鉢（204）・片口（172・173）、唐津二彩鉢（352）、唐津系青緑釉椀（299）・皿（341）、伊万里染付椀（392・393・402・404・407・428・435・436）、軒平瓦（539）、ミニチュア製品（553）、人形（578・584）、面子（640）、硯（678）、刀子（754）、鑿（757）などがある。

（6）井戸SE4002

SE4002は、第4遺構検出面の宅地Ⅰに位置し、井桁が石組みで井戸側が素掘りの井戸である。上層の遺構と切り合うため全容は不明であるが、井桁は15～25cmの河原石が2段以上積まれていたと考えられる。井戸側は、直径0.80mの円形を呈し、深さは5.26mである。井戸側の下半部は袋状になり、最大径1.13mを測る。

（7）井戸SE4003

SE4003は、第4遺構検出面の宅地Ⅲに位置し、井桁は検出されなかったが、井戸側は素掘りの井戸である。井戸側は、直径0.80mの円形を呈し、深さは5.12m以上である。井戸側は下半部で大きく下膨れとなり、最大径1.60mを測る。なお、井戸側上部の周辺に方形の掘り方が見られ、切り石を置いた痕跡と考えられ、SE1001・1002と同様の構造を持った井桁の可能性が高い。

（8）井戸SE4006

SE4006は、第4遺構検出面の南半に位置し、井桁が瓦積みで井戸側が素掘りの井戸である。井桁の

掘り方は直径1.33ｍの円形を呈し、深さは検出面から最大27cmを測る。井桁は、掘り方内に水平に平瓦を３段積んだもので、瓦と土が互層になるように積まれている。井戸側は、直径1.07ｍの円形を呈し、深さは2.80ｍ以上である。

出土遺物には、伊万里染付皿（494）などがある。

なお、このほかの井戸の出土遺物としては、第２遺構検出面のSE2001から、土師器皿（３～８・53・56・57・66・67）・鍋（100）、瀬戸美濃椀（139）、信楽椀（158）・合子（160）、丹波壺（249）、備前系擂鉢（258）、唐津壺（308）、伊万里染付椀（386・391・403・416・423・424・426・432・434・441）・皿（490・491）・鉢（451）、伊万里青磁瓶（464・465）、伊万里青磁染付椀（502・503・506）・壺（507・508）、伊万里白磁紅皿（515）、伊万里色絵椀（460）、伊万里瑠璃釉香炉（523）、染付磁器皿（525）、硯（680）などが出土している。

第３遺構検出面のSE3001からは、土師器鍋（82）、土師質土器鍋（116）、唐津椀（282）、伊万里染付椀（421）、ミニチュア製品（569）などが出土し、SE3002の出土遺物としては、土師器皿（10・55）・鍋（104・105）、瓦質土器鉢（130）、瀬戸美濃椀（140）、京焼系陶器椀（161）、丹波片口（167・171）、唐津刷毛目片口（311）、唐津二彩壺（348）、伊万里染付椀（387～390・395・398・410・419・420・425・427・430・431）・皿（489・493）、伊万里青磁染付壺（511）、ミニチュア製品（573）、人形（580）、面子（632）、硯（675）、釘（771～774・778・780～782）、環金具（741・742）、火打金（751）、刀子（755）などが挙げられる。また、SE3004の出土遺物には、備前系擂鉢（265）、唐津皿（325）、伊万里染付椀（394）などがある。

第４遺構検出面のSE4004の出土遺物としては、土師器皿（15・16・37・42）・鍋（79・80）、丹波擂鉢（190・192・219）、唐津椀（292）・鉄絵鉢（350）、唐津系刷毛目椀（301）・皿（336）、伊万里染付椀（363・368・400・429）・皿（486）、軒丸瓦（527）などがある。また、このほかの第４遺構検出面の井戸の出土遺物としては、SE4001の丹波壺（241）やSE4005の丹波壺（440）、SE4007の備前建水（269）、備前系擂鉢（260）、伊万里染付椀（418）、ミニチュア製品（559）などが挙げられる。

また、第５遺構検出面のSE5001の出土遺物としては、丹波擂鉢（189）、唐津皿（331・332）、伊万里染付皿（477）などがある。

２．池状遺構

池状遺構には、素掘りのもの（SG1001・1003・2001・3001・3002）と漆喰塗りのもの（SG1002）とがあり、素掘りのものには略方形をていするもの（SG1001）と瓢箪形に近い不整形になるもの（SG1003・2001・3001・3002）とがある。素掘りのものは遺構検出面からの深さが約35～50cmで、遺構検出面からの深さが15cmの漆喰塗りのものと比べて深い。SG1001のなかに宝篋印塔の傘の部分が置かれており、また、SG3001は木杭が約25cm間隔で打ち込まれ、護岸施設が施されている。SG1002の漆喰の厚さは約３cmで、池底および側面に塗られていた。

池状遺構の出土遺物としては、SG2001の伊万里青磁染付椀、SG3001の土師器皿（74）・鍋、丹波擂鉢（195・232）、唐津皿（321）、伊万里染付椀（415）、伊万里青磁染付椀（504）、面子（641）、釣針状金具（738）、SG3002の土師器皿（71）・鍋（102）、丹波壺（184）・擂鉢（196・199・234）・火入（248）、備前系擂鉢（256）、唐津系青緑釉皿（340・342）、唐津三島手鉢（356）、伊万里染付皿（501）、面子（627）、

寛永通宝（700）、刀子（756）などが挙げられる。

3．溝

溝には、石組みのもの（SD2001・2002・4001・4002）と素掘りのもの（SD1001・1002・2003・5001～5005）とがある。SD2001等の石組みの溝は、素掘りの溝の肩部に河原石を並べたもので、姫路城城下町で見られるような２～３段に石を組んだものとは異なる。

また、溝の方向は、東西方向に走るもの（SD1001・1002・2001～2003・4001・5002）と南北方向に走るもの（SD5001・5003～5005）とがあり、東西方向に走る溝はその位置から考えて屋敷境を画する施設であろう。なお、SD1001のように、井戸（SE1001）の排水溝としての機能を兼ね備えるものもある。

溝の位置は、検出遺構面によって若干の移動はあるものの、東西方向に走る溝が屋敷境を画する施設であるとすると、屋敷の間口はおおむね約９ｍ＝５間前後となる。

また、溝跡出土の遺物としては、SD1001の硯（681）・風鈴（746）、SD2001の京焼系陶器瓶（164）、SD2003の伊万里染付椀、SD4001の志野椀（134）、丹波擂鉢（221・223）・鉢（242）、唐津椀（284）、伊万里染付椀（367）、SD4002の面子（626）、SD5002の土師器皿（44・45）、土師質土器火舎（110）、唐津椀（283）・鉄絵皿（314）・瓶（345）、青花椀（359）、SD5003の土師器皿（12）・鍋（90・92）、SD5004の土師器皿などが挙げられる。

4．礎石建物・築地基礎等

建物の礎石および築地基礎は、遺構そのものからはいずれとも判断しかねるものも多々あるが、建物の礎石および築地基礎等は第１～第４遺構検出面で検出されている。

第１遺構検出面の宅地Ⅰ（SB1001）・宅地Ⅲ（SB1002）・宅地Ⅳ（SB1003・1004）、第２遺構検出面の宅地Ⅲ－北（SB2001）・宅地Ⅲ－南（SB2002）・宅地Ⅳ（SB2003・2004）、第３遺構検出面の宅地Ⅰ（SB3001）で建物礎石が検出され、第１遺構検出面の宅地Ⅱ（SA1001）、第３遺構検出面の宅地Ⅱ（SA3001）・宅地Ⅳ（SA3006）、第４遺構検出面の宅地Ⅱ（SA4001・4003）・宅地Ⅲ（SA4004・4005）で建物礎石の礎石となると考えられる礎石列が検出されている。また、築地基礎になると考えられるものが第１遺構検出面の宅地Ⅳ（SA1002）、第４遺構検出面の宅地Ⅱ（SA4002）で検出されている。

なお、第１遺構検出面の宅地Ⅱの礎石列SA1001や第３遺構検出面の宅地Ⅱの礎石列SA3001および宅地Ⅳの礎石列SA3006、第４遺構検出面の宅地Ⅱの礎石列SA4001・4003および宅地Ⅲの礎石列SA4004・4005は礎石建物の礎石の一部になると考えられるが、その詳細は不明である。また、第４遺構検出面の宅地Ⅱの礎石列SA4002は築地基礎であるが、第３遺構検出面の宅地Ⅲで検出された石列SA3002～3005は、礎石建物の礎石となるか築地基礎となるかは不明である。

（１）礎石建物SB1001

第１遺構検出面の宅地Ⅰで検出された礎石建物である。南北6.9m以上×東西8.9m以上の建物で、屋内に井戸（SE1001）を取りこむ。建物内の部屋割り等については不明である。

（2）礎石建物 SB1002

第1遺構検出面の宅地Ⅲで検出れさた礎石建物である。南北16.6m×東西8.2m以上の建物で、建物は大きく4分割される。北側に南北6.7m×東西3.0m以上の部分（①）があり、中央に南北2.6m×東西6.0m以上の部分（②）がある。南端の部分は、西側の南北5.3m×東西2.2mの部分（③）と東側の南北7.3m×東西6.0m以上の部分（④）とに分かれる。①の西側の庭地の部分には逆茂土壙が2基（SK1011・1015）と池状遺構（SG1003）とがあり、②の西側に便所と考えられる埋桶土壙2基（SK1021・1022）と埋甕土壙1基（SK1020）が建物に隣接して位置する。また、庭地がかなり広く、何らかの作業場的な空間とも考えることも可能である。

以上のことから、礎石建物内の①は庭地と共に作業場として使用され、③および④は生活空間としての居間および座敷として利用され、②が両者共有の場であったと考えられる。

（3）蔵石積み基礎 SB1003

第1遺構検出面の宅地Ⅳで検出れさた蔵の石積み基礎で、南北6.3m×東西7.3mの規模を持つ。凝灰岩製の切り石を1段積んだもので、内部に砂礫混じりの土が充填されていた。なお、上部構造については不明であるが、踏み石と考えられる切り石が蔵石積み基礎の南側に1石残存していたことから入口は南側にあったと考えられる。

出土遺物は石積み基礎の内部に充填された積み土から出土しており、丹波雑水（174）、伊万里染付椀（445・448）、人形（576）、泥面子（601）、面子（623）などがある。

（4）礎石建物 SB1004

第1遺構検出面の宅地Ⅳで検出れさた礎石建物である。南北3.0m×東西7.0m以上の建物で、残存部分の形状は逆L字形を呈する。建物の東北端の部分に南北0.8m×東西1.5mの部分（①）がある。①内の東側には便所と考えられる埋桶土壙（SK1024）があり、埋桶土壙の4周は切り石で保護されていた。また、①の西側には、踏み石と考えられる切り石が置かれていた。①の南側には、南北0.8m×東西1.5mと①と同規模の部分（②）があり、①で埋桶土壙のあった部分は漆喰が塗ってあり、同様に踏み石と考えられる切り石が置かれていた。建物の西北隅の南北1.0m×東西1.0mの部分（③）には、周りを漆喰で固めた便所と考えられる埋甕土壙（SK1027）があった。建物内の他の部分（④）は、床面がよく叩き締められており、一部に漆喰が張られていた。また、排水溝と考えられる落ち込みが南東隅で検出されている。

以上のことから、礎石建物は、①~③が便所およびそれに関連する施設と考えられ、④は土間（一部漆喰塗り）のまま炊事等に利用されたと想定できる。なお、①および②は西側に入口があり、屋外からの使用が想定できるが、③の利用は屋外からか屋内からかは不明である。また、この礎石建物は、検出した部分のみで機能したとは考え難く、現家屋の取り壊し時に攪乱を受けた宅地南半に想定できる建物と一体となって使用されていたと考えられる。

なお、②の部分の漆喰塗り土間の漆喰下から、「胞衣壺」に利用されたと考えられる施釉陶器壺・壷（SX1001）が検出された。

（5）築地基礎 SA1002

第1遺構検出面の宅地Ⅳで検出れさた築地基礎である。長さ60～100cm×幅約20cmの切り石が南北方向に礎石建物 SB1004と平行して並べられていた。第1遺構検出面の宅地Ⅳの居住空間と庭地を画する築地塀の基礎と考えられる。

（6）礎石建物 SB2001

第2遺構検出面の宅地Ⅲ－北で検出された礎石建物である。南北7.7m×東西6.1m以上の建物で、屋内に埋甕土壙（SK2028）と伏甕土壙（SK2029・2030）を持つ。屋内は逆L字形の部屋割りとなり、建物の北東部に南北3.50m×東西3.80m以上の部分（①）があり、その南側の建物の南東部に南北3.90m×東西3.80m以上の部分（②）がある。②の西側に東西2.30m以上×南北1.20mの部分（③）と東西2.10m×南北1.20mの部分（④）が南北に並ぶ。③および④には、便所と考えられる埋甕土壙（SK2028）および水琴窟と考えられる伏甕土壙（SK2029）があり、両者が一体となって機能していた可能性が高い。

以上のことから、礎石建物は、道路に面して2間の部屋があり、その部屋の奥に便所が取り付く部屋割りになっていたと考えられる。ここで、あえて居間や座敷等の居住空間と作業場的な空間を想定すると、③・④の存在から②を居住空間に、①を作業場的な空間に各々その位置関係から比定することも可能である。

（7）礎石建物 SB2002

第2遺構検出面の宅地Ⅲ－南で検出された礎石建物である。南北6.0m×東西8.0m以上の建物で、屋内に大小2基の竈を持つ。屋内は変形の「田」の字形の部屋割りとなり、建物の北西部に東西3.80m×南北2.45mの部分（①）があり、その南側の建物の南西部に東西3.50m×南北3.55mの部分（②）がある。②の東側に東西3.70m以上×南北3.55mの部分（③）が想定でき、③の北側に東西3.10m以上×南北2.45mの部分（④）がある。③および④には竈がある。④の SK2031は通常の大きさの竈で、炊事等の日常生活に使用したと考えられるが、③の SK2044は大型の竈で、手工業に利用した竈と想定できる。また、④は、竈のある北側の東西3.10m以上×南北1.45mの部分（④a）とその南側の東西3.10m以上×南北1.00mの部分（④b）とに分けられる。

以上のことから、礎石建物は、④bの東側に入口があり、④bは土間のまま通路として利用され、④bの北側部分（④a）も同様に土間のまま炊事場として使用されたのではなかろうか。また、③は、大型の竈の存在から、作業場であった可能性が高く、①・②は居間および座敷として使用されたと考えられる。なお、①および②の西側の空間は、庭地と考えてよかろう。

（8）蔵石積み布礎 SB2003

第2遺構検出面の宅地Ⅳで検出れさた蔵の石積み布礎で、南北6.3m×東西7.3mの規模を持つ。凝灰岩製の切り石と河原石を1段積んだもので、内部に砂礫混じりの土が充填されていた。なお、上部構造については不明である。

（9）礎石建物 SB2004

第2遺構検出面の宅地Ⅳで検出れさた礎石建物である。南北12.35m以上×東西7.9m以上の建物で、

建物内に6基の竈がある。建物内の部屋割り等については礎石の配置からは不明であるが、竈の位置関係から南端の竈（SK2051～2054）が何らかの手工業に使用され、北東部の竈（SK2048・2049）が炊事等に利用されたと想定すると、礎石建物は作業場を建物の南半部分に、炊事場を北東部分に持ち、その他の部分は居間や座敷としての空間であった可能性が高い。

（10）礎石建物 SB3001

第3遺構検出面の宅地Ⅰで検出された礎石建物である。南北6.60m以上×東西7.15m以上の建物で、建物の中央に東西方向に通り抜けられるように通路状遺構 SF3001がある。通路状遺構の北側に東西7.15m以上×南北1.60m以上の部分（①）があり、通路状遺構の続く範囲は少なくとも建物内であると考えると、通路状遺構の南側には東西2.10m×南北3.80mの部分（②）と東西4.70m以上×南北3.80mの部分（③）が想定できる。また、①および③の部分は周りより5～10cm程度低くなっており、建物内の床下の湿気抜きと考えられる。

以上のことから、礎石建物は、通路状遺構 SF3001の東側に入口があり、通路状遺構を挟んで北側と南側に床を張った①および③があり、③の西側に土間のまま使用したと考えられる②がある。なお、①および③がどのように分割されていたかは不明であるが、いずれにせよ居間や座敷、作業場として利用されたと考えられる。

なお、建物の礎石として、石臼の下石（667・668）が転用されていた。

また、このほかの礎石建物・築地基礎等の出土遺物としては、SA4001・4002の唐津瓶（344）、伊万里染付皿（471）や、SA4003・4004の土師器皿（22・38）、丹波壺（165）、唐津鉄絵皿（312）、唐津二彩鉢（353）、青花皿（466）、伊万里染付椀（362）・皿（485）などがある。なお、石造物が礎石などに転用されたものとしては、SA3003の石臼（669）、SA3006の五輪塔（661）・一石五輪塔（656）、SA4001の一石五輪塔（655・663）、SA4003の一石五輪塔（657・658）、SX4001の一石五輪塔（664）、SX4002の一石五輪塔（662）などがある。

5．通路状遺構

通路状遺構は、第3遺構検出面の宅地Ⅰおよび宅地Ⅱで検出された。

宅地Ⅰで検出された通路状遺構 SF3001は、幅0.90～1.05mで、現長6.70mを測り、宅地Ⅱで検出された通路状遺構SF3002は、幅0.90～1.30mで、延長6.35mにわたって検出された。通路状遺構は、ともに整地層が他の部分に比べて非常に良く叩き締められた状態が認められる。また、遺構の配置状況から、SF3001は屋敷内の通路にあたると考えられ、SF3002は屋敷の間を通り奥の屋敷に向かう道路と考えられる。

6．竈

竈には、使用した痕跡の認められるもの（SK2031・2044・2048・2049・2051・2052・2054・4043・5065）と使用した痕跡の認められないもの（SK2053・3056）とがある。

構造的には、本体と炊口部の床面がほぼ同一レベルのもの（SK2053・3056・4043）と炊口部がやや上がるもの（SK2031）とがある。また、その作り方から、土壙を掘った後内面に粘土を貼り付けて竈の形にするもの（SK4043）と当初から竈の形に土壙を掘り粘土を漑く貼り付けるもの（SK2053・3056）とがある。なお、規模は、本体の直径60～80cm位が通常であるが、SK2044のように直径1mを越す大型のものもある。

竈出土の遺物としては、SK2044の鉢（749・750）、SK2051の鉄釉陶器皿（275）、SK2052の土師器皿（65）・丹波片口（168）、SK4043の土師器皿（77）・唐津壺（349）・伊万里染付椀（381）などがある。

7．焼土溜土壙

焼土溜土壙は、第1～第3遺構検出面で検出された。第1・第2遺構検出面の焼土溜土壙は各々1基ずつであるが、第3遺構検出面では16基もの焼土溜土壙が検出されている。これらの焼土溜土壙は、火災の後の災害処理に利用されたものと考えられ、第3遺構検出面の焼土溜土壙の多さは、整地層上面の多量の焼土と共に、第3遺構検出面での火災の大きさを物語っていると言えよう。

第1遺構検出面の焼土溜土壙（SK1005）は、第2次世界大戦当時の防空壕と考えられ、土師質土器焜炉（113）・鉄釉陶器釜（277）・面子（650）などが出土している。第2遺構検出面で検出された焼土溜土壙は、地下式貯蔵庫（SK2015）がその機能停止後に焼土溜土壙に転用されたものである。

なお、調査の過程では、第3遺構検出面の焼土溜土壙は、同遺構検出面上での火災による災害処理に利用され、なおかつ、土壙の掘削が火災後の同遺構検出面の機能停止後に当たり、その後、第2遺構検出面を形成する整地層が極短時間の間に廃土されたと理解して調査を実施したため、出土遺物は各焼土溜土壙ごとに取り上げたものはごく少数で、大半は焼土層中出土遺物として取り上げた。ただし、焼土溜土壙出土遺物として取り上げたものには、SK3001の伊万里染付椀（413・414）・軒丸瓦（529・537）・鬼瓦（546）・皇宋通宝（685）、SK3021の土師器皿（13・14・51）・丹波擂鉢（203）・煙管（722）、SK3022の土師器皿（19～21）・鍋（99）・備前系擂鉢（255）・唐津系網目口椀（302・305）・唐津系青緑釉鉢（354）・伊万里染付椀（360・399・411）、SK3035の寛永通宝（711）・風鈴（747）、SK3064の土師器皿（33～36）、SK3065の寛永通宝（697）、SK3080の土師器皿（72・73）・丹波擂鉢（201・206）などがある。

8．伏甕土壙

伏甕土壙には、伏甕内に別の容器を入れるもの（SK1026）と入れないもの（SK1001・1029・2003・2022・2029・2030）とがある。また、伏甕の埋置方法からみると、甕を土壙内に直接埋置するもの（SK2002・2003・2029・2030）、土壙をある程度埋め戻してから埋土の上に甕を埋置するもの（SK1029）、土壙底部に瓦や石を置いてその上に甕を埋置するもの（SK1001・1026）がある。

今回検出された伏甕土壙は、いわゆる「水琴窟」にあたると考えられる。「水琴窟」とは、一般的には、庭に置いた石製の手水鉢付近の地下に、底部に直径3cm程度の穴を穿孔した高さ60～70cmの陶器製甕を伏せて埋置し、甕の周辺には小石などを充塡したもので、中に一定の水が溜めてある。手を洗浄した時、水が流れてしずくとなって甕の中にぽとりぽとりと落ちる水の音が、甕の中で反響音となり、その音を

風流に楽しむ施設である。発掘調査では、伏甕土壙として検出されることが多く、今回検出された7基の伏甕土壙も、その構造等から水琴窟と考えられる。

（1）伏甕土壙 SK1001

伏甕土壙 SK1001は、70cm×60cm程度の隅丸方形を呈する土壙で、遺構検出面からの深さは約40cmを測る。土壙内に埋置される甕は丹波焼（179）で、底部には直径約4cmの焼成後穿孔が認められる。土壙最上部には、2～3cm厚の漆喰が直径約50cmの範囲に、最大高低差9cmで擂鉢状に認められ、中央部には円形の凹みがある。凹みは、断面台形を呈し、上辺で7cm、下辺で5cmを測る。漆喰の下には、外形で70cm×60cm程度の隅丸方形を呈する範囲に粘土（2.5GY 6/1 オリーブ灰）が認められる。粘土は、内側の直径15cmの範囲－甕底部の範囲では確認できず、ドーナツ状を呈する。断面観察から、粘土の厚さ4～6cmを測り、甕の底部外周から最大高低差12cmで擂鉢状に土壙の壁土を密封するように貼り付けられている。基本的には、甕底部以下の土壙埋土は砂礫混じりの極細砂質シルト（5Y 4/2 灰オリーブ）であるが、上部には河原石および平瓦が甕を取り囲むように水平に認められ、下部の土壙と甕の間に河原石が確認できる。また、土壙底部には、4個の河原石がある。なお、甕は土壙の中心からやや片方によった位置に埋置されており、また、直接土壙底部とは接しておらず土壙底部の河原石の上に据えられ、河原石の内側は空洞になっている。

なお、土壙埋土からは、人形（586）が出土している。

ここで、伏甕土壙 SK1001の構築方法を復元すると、つぎのようになる。まず、遺構検出面からの深さ約40cmを測る70cm×60cmの隅丸方形の土壙を掘り、土壙底部に河原石を4個据える。つぎに、極細砂質シルトで、土壙底部に据えた河原石の外周を河原石とほぼ同じ高さまで埋め戻す。埋め戻し完了後、底部に直径約4cmの穴を焼成後穿孔した丹波焼の甕を河原石の上に伏せ置く。甕を置く位置は、土壙の中心からやや片方に寄っているため、土壙と甕の間に河原石を詰め、甕を概略固定させる。甕を固定させる際生じた土壙内の空間には、砂礫混じりの極細砂質シルトを充填させる。甕が約1/2程度埋まった状態になった時、甕の周囲に水平に平瓦を置きながら空間には砂礫混じりの極細砂質シルトを底部とほぼ同じ高さまで詰め、その上に河原石および平瓦を水平に甕を取り囲むように置く。甕が、土壙内に完全に埋置された後、厚さ4～6cmの粘土を、土壙の埋土を密封するように、甕の底部外周から擂鉢状に貼り付ける。さらにその上に、水琴窟として機能するように甕底部の穿孔部分を除いて、漆喰を2～3cmの厚さに塗る。

（2）伏甕土壙 SK1026

伏甕土壙 SK1026は、直径50cm～55cmの略円形を呈する土壙で、検出時には上部が削平されて消失していたため、遺構検出面からの深さは約10cmを測るにすぎず、また、土壙内に埋置された丹波甕（180）も上半が欠損していた。土壙埋土は、シルト質極細砂（7.5YR 4/4 褐）で、土壙と甕の間に河原石が確認できる。また、土壙底部には、1枚の平瓦が水平な状態で置かれていた。なお、甕は土壙の一方の側壁に接するように埋置されており、また、土壙底部に置かれた平瓦の上に据えられ、伏甕内部の瓦の上には伊万里染付皿（498）が入っていた。

ここで、伏甕土壙 SK1026の構築方法を復元すると、つぎのようになる。甕の復元器高から考えると、まず、深さ約30cm前後で直径50cm～55cmの略円形の土壙を掘り、土壙底部のやや片方に偏った位置に平

瓦を１枚水平に置く。つぎに、平瓦の上に染付磁器皿を置き、底部に直径約２㎝の穴を焼成後穿孔した丹波焼の甕を、土壙の一方の側壁に接するように平瓦の上に伏せ置き、土壙と甕の間に河原石を詰め、甕を概略固定させる。甕を固定させる際生じた土壙内の空間には、シルト質極細砂を充填させ埋め戻す。

（３）伏甕土壙 SK1029

伏甕土壙 SK1029は、直径40㎝－55㎝の略円形を呈する土壙で、遺構検出面からの深さは約70㎝を測る。土壙内に埋置されるいわゆる「伏甕」は丹波焼の植木鉢（250）の転用品で、底部には直径約３㎝の焼成後穿孔が認められる。土壙最上部には、２～５㎝厚のコンクリートが約60㎝×65㎝の範囲に認められ、その周辺に河原石が配置されている。また、コンクリート中央部には直径５㎝の円形の穴がある。土壙埋土は、大きく３層に分けられ、上から１層：シルト質細砂（2.5YR 6/4 にぶい黄）、２層：極細砂質シルト（10YR 6/2　灰黄褐）、３層：砂礫混じりシルト質極細砂（2.5Y 5/4 黄褐）となる。１層は、甕を取り囲むように土壙内に充填されており、１層上部に30㎝大の河原石が置かれていた。２層の上面はほぼ水平になり、２層と３層の境には、丹波焼甕の破片が層離面に沿って敷き並べてある。また、３層中には、河原石や丹波焼甕の破片が混在している。なお、甕は土壙の中心からやや片方によった位置に埋置されており、また、直接土壙埋土２層上面に据えられている。

ここで、伏甕土壙 SK1029の構築方法を復元すると、つぎのようになる。まず、遺構検出面からの深さ約70㎝を測る直径40㎝～55㎝の略円形の土壙を掘る。土壙底部から20～30㎝の高さまで、河原石や丹波焼甕の破片を混入させた砂礫混じりシルト質極細砂で埋め戻し、その上に丹波焼甕の比較的大型の破片を敷き並べる。さらに、極細砂質シルトで、土壙底部から40㎝強まで、埋め戻し面がほぼ水平になるように埋め戻す。ほぼ水平になった埋め戻し面の上に、底部に直径約３㎝の穴を焼成後穿孔した丹波焼の鉢をいわゆる「伏甕」として転用し、土壙の中心からやや片方によった位置に直接伏せ置き、土壙と甕の間にシルト質細砂を充填させて、「伏甕」を固定させながら埋め戻す。ただし、「伏甕」底部の穿孔周辺は丸く残土を充填せずに残し、また、土壙の上部の片側には30㎝大の河原石を置く。その後、約60㎝×65㎝の範囲に厚さ２～５㎝のコンクリートを、水琴窟として機能するように、中央に向かって約５㎝傾斜をもって塗り、中央部には直径５㎝の円形の穴を塗り残す。コンクリートを取り囲むように河原石を配置し、水琴窟は完成する。

（４）伏甕土壙 SK2003

伏甕土壙 SK2003は、直径45㎝程度の円形を呈する土壙で、遺構検出面からの深さは約40㎝を測る。土壙内に埋置される甕は丹波焼（182）で、底部には直径約２㎝の焼成後穿孔が認められる。なお、甕は、直接土壙底部に伏せ置かれており、土壙埋土は極細砂質シルト（10YR 4/4　褐）である。

ここで、伏甕土壙 SK2003の構築方法を復元すると、つぎのようになる。まず、遺構検出面からの深さ約40㎝で直径45㎝程度の円形の土壙を掘る。直径約２㎝の穴を焼成後穿孔した丹波焼の甕を、土壙のほぼ真ん中の位置に、土壙底部と直接接するように伏せ置き、土壙と甕の間に極細砂質シルトを充填させて、甕を固定させながら埋め戻す。

なお、このほかの水琴窟には、伏甕土壙 SK2022では丹波甕（176）が、伏甕土壙 SK2029では丹波甕が各々伏甕として使用されており、伏甕土壙 SK2030では瀬戸美濃壺（157）が伏甕として使用され、土

壙内部からは伊万里色絵壺（459）が出土している。

9．埋甕土壙

埋甕土壙には、水甕になるもの（SK1006・1011・1015・1025・2017）と便所になるもの（SK1020・1027・2028・2056・3087）とがある。いずれも土壙内に甕を正位に埋置したもので、中型の甕を埋置したものに水甕が多く、比較的大型と小型の甕を埋置したものに便所が多い。小型のものは小便用と考えられ、大型のものは大便用と考えられる。

なお、各々の土壙に埋置される「甕」をみると、SK1020では丹波甕（209）が、SK1025では丹波鉢（207）が、SK1027では土師質土器甕（210）が、SK2028では丹波甕（208）が、SK2056では丹波甕が、SK3087では丹波甕（175）が、各々埋置されている。また、SK1011では土師器皿・唐津椀・面子（642）が、SK1015では面子（648）・釘（760・761）が、SK1020では伊万里染付皿（496）・鉢（452）・ミニチュア製品（557）・泥面子（607）が、SK1025では丹波瓶が、SK1027では伊万里染付皿（452）が、SK2028では土師器皿・伊万里椀・皿・ミニチュア製品（566）・軒平瓦（538）が、各々埋甕内から出土している。

10．埋桶土壙

埋桶土壙には、直径30cm前後の桶を埋置する小型のもの（SK1004・1007・1021・1022・1024）、直径65cm前後の桶を埋置する中型のもの（SK3052・3068～3070・3081・4001・4017・4027・4028・4052）、直径90cm前後の桶を埋置する大型のもの（SK3002・3005～3007・3037・3058・3060・3071・4002・4007・4016・5029～5031）がある。小型の埋桶土壙は便所に利用されたと考えられ、中型および大型の埋桶土壙のなかには何らかの手工業生産に関連する施設と想定されるもの（SK3058・3060・3068～3071）もある。なお、大型の埋桶土壙のなかにも肥溜に使われたと思われるもの（SK3005～3007）もある。

なお、埋桶土壙の出土遺物としては、SK1007の染付磁器土瓶（524）・寛永通宝（701）・釘（767）、SK1021の土師器皿・信楽椀・丹波甕・唐津系椀（296）・鬼瓦（547）、SK1022の土師器皿・信楽椀・丹波甕・伊万里染付椀（437）、SK3002の伊万里染付皿（500）・面子（652）、SK3007の土師器皿・鍋（95）・土師質土器火消壺（118）・丹波擂鉢（231）・ミニチュア製品（558）、SK3037の土師器皿・伊万里染付椀、SK3058のミニチュア製品（549）、SK3060の土師器皿・伊万里染付椀・人形・泥面子（603）・石臼・五輪塔、SK3069のミニチュア製品（574）、SK3070の唐津椀、SK3071の土師器鍋・瓦質土器火舎・京焼系陶器椀・備前系擂鉢（259）・備前徳利・伊万里染付椀・人形、SK4001の土師器鍋・丹波火入（246）、SK4002の唐津系刷毛目椀・面子（616・619）、SK4007の土師器皿（48・49・76）・石臼（665）、SK4016の土師器鍋（88）、SK4017の土師器鍋（96・98）・面子（636）・寛永通宝（692）・煙管（721）などが挙げられる。

11. 埋壺土壙

埋壺土壙が、第1遺構検出面からは2基、第2遺構検出面および第3遺構検出面からは各々1基、計4基検出された。

今回検出された埋壺土壙は、いわゆる「胞衣壺」にあたると考えられる。いわゆる「胞衣壺」とは、人の誕生と同時に催される後産処理＝胎盤処理に伴う儀礼に使用される埋納容器のうちの焼物の民俗学での総称である。胎盤の埋納場所＝「胞衣壺」の埋納場所は、発掘調査例では明瞭な例は少ないが、民俗例では、家の戸口や戸口の敷居の下、土間の隅、台所、便所の床下などが多く、容器としては甕、壺、土瓶、徳利、ほうらくなどの焼物や桶・曲物などが転用されることが多い。また、胎盤の埋納方法は、民俗例からは詳細には判らないが、発掘調査例からは、ある程度復元できる。出土例から胞衣の埋納の手順を一般的に復元すると、胞衣壺の底に東西南北を画する形で4枚の銭貨を銭文を上に向けて配置し、その中央に1枚の銭貨を銭文を上に向けて置く。その上に布で包んだ胞衣を据え、さらにその上に墨と筆を各1点載せ、土中に埋める。しかし、このような埋納状況の判る例は稀で、大半は胞衣壺のみの発見である。また、墨と筆をミニチュアの模造品で代用する例もある。

（1）埋壺土壙 SK1008

SK1008は、直径25cm程度の円形を呈する土壙で、遺構検出面からの深さは約20cmを測る。土壙内には、土師質土器の火消壺蓋・身（121・122）が埋納されていた。壺内には、銭貨や墨、筆などは入っていなかったが、礎石建物になる可能性のある礎石列SA1001の脚から出土していることや、伊丹郷町での他の出土例からみていわゆる「胞衣壺」と考えられる。

（2）SX1001

施釉陶器蓋・壺（272・273）の単独出土である。壺内からは銭貨や墨、筆などは検出されず、また、埋納土壙なども検出されなかったが、礎石建物SB1004内の便所と考えられる部分のすぐ脇の漆喰塗りの床下から検出されていることから、いわゆる「胞衣壺」の可能性が高い。

（3）埋壺土壙 SK2047

SK2047は、直径40cm程度の円形を呈する土壙で、遺構検出面からの深さは約30cmを測る。土壙内には、土師質土器の火消壺蓋・身（119・120）が埋納されていた。壺内には、銭貨や墨、筆などは入っていなかったが、礎石建物SB2002の床下に当たる部分から出土していることや、伊丹郷町での他の出土例からみていわゆる「胞衣壺」と考えられる。

（4）埋壺土壙 SK3003

SK3003は、20cm×15cmの略円形を呈する土壙で、遺構検出面からの深さは約20cmを測る。土壙内には、備前焼の朱泥の小壺（268）が埋納されていた。壺の底部に寛永通宝5枚（702～706）が置かれ、その上に『垂感□□　福富潤□　金生水　土生金』銘の墨書のある木札（2）が文字面を下に置かれ、さらに漆喰によって密封されていた。

SK3003の検出場所は、建物の中の通路状遺構を通り裏庭へ出たところにあたり、民俗例のいわゆる「j

口」に近似する。また、銭貨の枚数および容器の底部に配置する点は、一般的な発掘調査例と一致する。なお、一般的には墨と筆を入れるが、今回の場合は、墨と筆を入れる代わりに、省略して、墨と筆を用いた産物＝墨書木札を埋納したと理解できる。これらのことから、SK3003出土の壺は、いわゆる「胞衣壺」と考えてもあながち間違いではないであろう。

ここで、埋壺土壙SK3003における後産処理＝胎盤処理の方法を復元すると、つぎのようになる。まず、備前焼の朱泥小壺の底に東西南北を画する形で４枚の寛永通宝を銭文を上に向けて配置し、その中央に１枚の寛永通宝を銭文を上に向けて置く。その上に布で包んだ胞衣を据え、さらにその上に「垂感□□福富満□　金生水　土生金」銘の墨書木札を置き、漆喰によって密封する。漆喰で完全に密封した備前焼の朱泥小壺を建物の中の通路状遺構を通り裏庭へ出たところに前もって掘ってある土壙に埋納する。

12. 粘土溜土壙

第３遺構検出面で粘土溜土壙１基が検出された。

粘土溜土壙 SK3046は、1.15ｍ×1.35ｍの隅丸方形を呈し、遺構検出面からの深さは1.65ｍを測る。土壙内部には、白色粘土のみが充填されていた。土壙に充填されていた粘土は、竈の構築に使用されている粘土と同質であり、この粘土と同質の粘土は、SE3001の廃絶後の密封にも使用されている。

13. 地下式貯蔵庫

地下式貯蔵庫 SK2015は、第２遺構検出面で検出された遺構で、機能停止後は焼土溜土壙に転用された遺構で、2.10ｍ×2.15ｍの方形の倉庫部分に階段が取り付いたものである。倉庫部分には幅30～40cmのベット状の部分があり、階段の取り付く部分は幅がやや拡がるがベット状遺構は途切れる。遺構検出面からベット状遺構までは深さ約80cmを測り、床面までは深さ約150cmを測る。階段は、倉庫部分の北東端に東西方向に取り付き、約150cmを５段で下りる。また、階段は、幅約75cmで、奥行は10～23cmを測り、地山を削り出して作っている。

出土遺物としては、土師器鍋（103）、土師質土器焜炉（112）、丹波壺（181）・片口（169）、唐津系青緑釉皿（339）、伊万里染付椀（439・446）・重物（454）・鉢（453）、ミニチュア製品（562・570・571）、人形（595）、硯（677）、寛永通宝（712～715）、煙管（726・728・729）、管（735）などがある。

14. 土壙

第１～第５遺構検出面の各遺構検出面では、焼土溜土壙や伏甕土壙、埋甕土壙、埋桶土壙、埋壺土壙、粘土溜土壙、地下式貯蔵庫以外に、多数の土壙が検出されている。これらの土壙はいわゆる「ゴミ穴」として利用されたものと考えられるが、その詳細は不明である。

土壙の主要な出土遺物としては、SK1009の伊万里染付椀（440・443）・寛永通宝（709）、SK1012の煙管（723）、SK1023の染付磁器植木鉢（526）、SK2009の信楽皿（159）・鉄釉陶器皿（274）・ミニチュア製品（550・567・613）・人形（581）・泥面子（602・604）・寛永通宝（688・689）・剃刀（753）・釘（769・770）・鎹（765）、SK2016のミニチュア製品（561）・寛永通宝（717・718）、SK2019のミニチュ

ア製品（599）・軽石（670）、SK2025の釘（775・779）、SK2032の土師器皿（43）・丹波徳利（243・244）、SK2036の丹波片口（170）、SK2040の釘（776・777・784～786）、SK2041の土師器皿（9）・伊万里染付椀（433）、SK2043の焼塩壺（123・124・127・128）・伊万里染付椀（397）・泥面子（608）・石製品（672）・寛永通宝（708）、SK3018のミニチュア製品（565）、SK3019の丹波擂鉢（225）・伊万里染付椀（374）・硯（676）、SK3023の備前甕（267）、SK3024のミニチュア製品（568）、SK3030の唐津系青緑釉皿（338）・伊万里染付椀（405）・土錘（1）、SK3031の鎌（758）、SK3032の瓦質土器火舎（131）・丹波擂鉢（233）・唐津鉄絵皿（318）、SK3042の備前系擂鉢（262）、SK3044の土師器皿（62～64）・鍋（106～108）・土師質土器竈（115・117）・丹波甕（178）・片口（166）・唐津三島手鉢（357）・片口（310）・伊万里染付椀（396・401・422）・軒桟瓦（541）、SK3050の唐津三島手鉢（358）・釘（783）、SK3067の灯籠（671）、SK3074の寛永通宝（710）、SK3076の丹波擂鉢（227）、SK3077の備前系擂鉢（263）・煙管（731）、SK3084の土師器皿（61）・備前系擂鉢（261）・巻金具（745）、SK3086の備前系擂鉢（257）・釣針状金具（736）、SK4003の土師器皿（41）・丹波擂鉢（193）・伊万里染付皿（483）、SK4005の軒丸瓦（532）、SK4010の土師器鍋（83・85・86・97）・丹波擂鉢（187・191・215）・唐津鉄絵椀（285）・唐津椀（288）・唐津鉢（351）・伊万里染付椀（369・372）・伊万里白磁椀（512）・人形（593）・面子（646・651）・紹聖元宝（687）・寛永通宝（690）、SK4011の土師器皿（69・75）・伊万里染付皿（484）、SK4014の伊万里染付皿（478）・煙管（734）、SK4024の土師器皿（17）・鍋（101）・丹波擂鉢（194）・唐津系青緑釉鉢（355）・伊万里染付椀（373・376・384）・人形（577）、SK4026の土師器皿（39・40）・鍋（93）・瀬戸美濃椀（141）・伊万里染付椀（375）・皿（473）・面子（638）・寛永通宝（691）・釘（764）、SK4033の焼塩壺（125）・人形（610）、SK4034の土師器鍋（84）・伊万里染付椀（379）・皿（481）・釘（766）、SK4042の丹波火入（247）・備前瓶水（270）、SK4044の丹波擂鉢（222）・伊万里染付椀（380）・皿（499）、SK4047の丹波擂鉢（226）・面子（654）、SK5009の面子（635）、SK5017の瀬戸美濃鉄絵皿（151）・備前擂鉢（251）、SK5023の土師器皿（60）・伊万里白磁椀（514）、SK5033の土師器皿（52）、SK5034の唐津椀（291）、SK5035の瀬戸美濃皿（144）、SK5056の土師器皿（50・70）、SK5063の瓦質土器釜（133）、SK5071の土師器皿（18）、SK5076の土師器皿（32）・唐津椀（293）・皿（323）、SK5077の備前甕（266）・擂鉢（253）などがある。

V. 出土遺物

今回の調査では、コンテナ300箱を越える遺物が出土しており、出土した遺物には、土器・瓦・土製品・石製品・金属製品・木製品などがある。

出土した遺物のなかで土器が最も多く、種類としては土師器および土師質土器・瓦質土器・陶器・磁器などがある。瓦には、軒丸瓦をはじめとする屋根瓦と、井戸瓦などの道具瓦があり、土製品には土錘・ミニチュア製品および人形・泥面子・面子などがある。また、石製品には一石五輪塔をはじめとする石造物や石臼・硯などがあり、金属製品は青銅製の銭貨・煙管と鉄製の釘とが大半を占める。木製品は木札1点のみで、このほかに、「バイ」製の独楽がある。

ここでは、出土遺物のうち主要なものの概略を述べる。

1. 土器

(1) 土師器および土師質土器

土師器および土師質土器の器種としては、皿・鍋・火舎・十能・焜炉・竈・火消壺および同蓋・焼塩壺および同蓋などがある。これらのうち、十能・焜炉・竈は陶器と考えた方がよいかもしれないが、今回は土師質土器として扱った。また、火消壺および同蓋は湊焼の可能性が高く、焼塩壺は泉州堺で焼成されたものと考えられるが、十能などと同様に今回は土師質土器として扱った。

ここでは、各器種ごとにその概略ならびに特徴を述べる。

① 皿

皿には、ロクロ使用のものとロクロ未使用のものとがある。

ロクロ使用のものは、底部切り離し技法がすべて糸切りで、底部内面に不定方向のナデが施されるもの（9～12）とそうでないもの（3～8）とがある。また、12は、内面にいわゆる「カガミ」を意識した造りになっている。

ロクロ未使用のものは、成形・調整技法からみると、内面ナデ・外面オサエの後、口縁部にヨコナデが施されるものと、ヨコナデが認められないいわゆる「手づくね」のもの（13～31）とがある。口縁部にヨコナデが施されるものは、底部の凹むいわゆる「ヘソ皿」の形態をとるもの（32～39）や16世紀末に西日本一帯で遍有に認められる形態のもの（40）、底部が丸みを持ち口縁部が外反するもの（41～43）、底部が丸みを持ち口縁部に施されるヨコナデによって口縁部内面に段のできるもの（44・45）、底部が丸みを持ち口縁部内面のヨコナデの末端が右上に引き上げられるもの（46～51）、底部が丸みを持ち体部からそのまま口縁部に至るもの（52～61）、底部が丸みを持ち体部からそのままやや尖り気味の口縁部に至るが厚手のもの（62～68）、底部が丸みをもたないもの（69～78）などがあり、バラエティーに富む。また、50は、内面にいわゆる「カガミ」を意識した造りになっている。

② 鍋

鍋には、いわゆる「叩き造り」のもの（Ⅰ類）と「型造り」のもの（Ⅱ類）とがある。

いわゆる「叩き造り」のⅠ類は、成形時に底部から口縁部まで叩き技法によって造るもので、成形時の叩き痕を残すⅠA類（79～89）と残さないⅠB類（90～98）とがある。いずれも、底部外面はケズリ

Table 5　土師器皿属性表

No.	遺構・層位	口　径	器　高	底　径	No.	遺構・層位	口　径	器　高	底　径
3	SE2001	6.60	1.50	3.60	41	SK4003	9.30	2.40	2.00
4		6.55	1.50	2.65	42	SE4004	11.40	2.55	7.30
5		6.30	1.40	2.75	43	SK2032	13.20	2.85	6.00
6		6.60	1.30	3.75	44	SD5002	9.75	2.10	4.00
7		6.60	1.65	3.00	45		11.00	2.00	3.40
8		6.70	1.55	2.55	46	ZYⅡ～ZYⅢ	10.80	2.00	7.10
9	SK2041	6.30	1.45	2.50	47		10.50	2.00	4.20
10	SE3002	6.75	1.40	3.40	48	SK4007	10.50	2.00	6.80
11	ZYⅡ～ZYⅢ	10.20	2.20	5.20	49		10.90	2.00	5.80
12	SD5003	11.10	2.40	5.90	50	SK5056	9.15	2.00	3.75
13	SK3021	7.10	1.45	3.85	51	SK3021	10.60	1.90	5.95
14		7.50	1.60	3.45	52	SK5033	9.70	1.60	3.75
15	SE4004	8.90	2.05	5.50	53	SE2001	9.50	1.90	2.40
16		6.75	1.45	4.35	54	ZZⅢ	10.00	1.70	3.65
17	SK4024	6.85	1.30	2.00	55	SE3002	9.40	1.90	3.45
18	SK5071	7.20	1.20	5.50	56	SE2001	9.35	2.10	4.50
19	SK3022	7.10	1.50	3.00	57		9.30	2.10	2.70
20		7.30	1.60	2.00	58	ZYⅡ～ZYⅢ	10.70	2.10	7.50
21		7.30	1.50	2.50	59		10.00	2.30	6.00
22	SA4003・4004	7.35	1.50	6.40	60	SK5023	10.10	2.30	4.00
23	ZYⅡ～ZYⅢ	7.00	1.60	3.20	61	SK3084	12.90	3.00	4.00
24		7.80	1.50	4.00	62	SK3044	11.80	3.30	7.50
25		7.20	1.50	3.40	63		11.90	3.10	6.00
26		8.00	1.50	3.60	64		12.40	3.30	5.00
27		7.60	1.60	2.30	65	SK2052	12.20	2.40	6.00
28		7.40	1.60	2.50	66	SE2001	14.00	(2.90)	7.00
29		8.00	1.90	3.00	67		14.00	3.00	4.00
30		7.70	1.70	4.00	68	ZZⅢ～ZZⅣ	13.00	2.90	3.50
31		8.00	1.90	5.00	69	SK4011	7.00	1.60	4.20
32	SK5076	7.00	1.50	3.30	70	SK5056	11.10	2.15	5.80
33	SK3064	7.50	1.60	4.20	71	SG3002	11.00	1.60	7.10
34		7.40	1.70	3.30	72	SK3080	10.40	1.80	6.00
35		7.30	1.45	3.00	73		7.25	1.40	3.20
36		7.50	1.50	2.60	74	SG3001	9.80	2.00	5.00
37	SE4004	7.80	1.85	4.70	75	SK4011	11.80	1.90	7.00
38	SA4003・4004	9.70	1.90	4.15	76	SK4007	10.70	1.60	6.00
39	SK4026	10.15	2.05	3.15	77	SK4043	11.40	2.30	4.80
40		5.40	2.10	5.20	78	ZZⅢ～ZZⅣ	12.20	2.30	6.00

によって薄く整形され、底部内面はナデもしくはヘラナデ調整が施され、口縁部内外面はヨコナデ調整される。なお、ⅠB類は、口縁部外面のヨコナデ調整が口縁部下端まで及んでおらず、叩き痕を消した時のナデ調整が外面の体部上端～口縁部下端付近に認められる。

いわゆる「型造り」のⅡ類は、底部の成形に凹型を使用するもので、口縁部を底部とは別個に粘土の積み上げによって造るⅡA類（99～104）と底部成形時に同時に口縁部を造り出すⅡB類とがある。いず

Table 6　土師器鍋属性表

No.	遺構・層位	口　径	器　高	底　径	No.	遺構・層位	口　径	器　高	底　径
79	SE4004	24.00	(7.65)	21.50	94	ZZⅢ～ZZⅣ	24.30	6.35	25.50
80		23.00	(6.80)	24.40	95	SK3007	25.80	(5.80)	26.40
81	ZZⅣ～ZZⅤ	24.80	(6.85)	—	96	SK4017	22.40	(5.60)	22.40
82	SE3001	22.95	8.90	23.30	97	SK4010	23.00	6.80	22.00
83	SK4010	24.00	(7.50)	24.50	98	SK4017	23.95	(6.30)	22.60
84	SK4034	24.65	5.65	23.00	99	SK3022	29.00	(6.00)	31.20
85	SK4010	21.00	(6.10)	19.70	100	SE2001	26.60	5.70	28.40
86		23.90	(6.45)	23.80	101	SK4024	25.80	5.30	27.00
87	ZZⅢ～ZZⅣ	23.00	(5.40)	—	102	SG3002	23.70	(5.00)	25.40
88	SK4016	22.60	(5.20)	—	103	SK2015	21.40	5.35	—
89	ZZⅢ～ZZⅣ	24.50	(4.30)	—	104	SE3002	30.00	(7.10)	32.20
90	SD5003	25.60	(4.45)	—	105		34.60	(6.00)	27.85
91	ZZⅢ～ZZⅣ	23.30	(6.65)	22.80	106	SK3044	42.50	(5.30)	—
92	SD5003	24.00	(6.50)	25.00	107		35.40	7.30	19.00
93	SK4026	25.00	(5.60)	25.60	108		39.00	8.50	35.00

れも、底部外面はケズリによって薄く整形され、口縁部内外面はヨコナデ調整されているが、ⅡA類には底部内面にナデ調整が認められ、ⅡB類は底部内面までヨコナデ調整されている。また、ⅡB類には、口縁部が比較的明瞭なⅡB1類（105・106）と口縁部が形骸化したⅡB2類（107・108）とがある。口縁部を底部成形時に同時に造り出すものはすべて「耳」が付くが、口縁部を粘土の積み上げによって造るものにも「耳」の付くもの（104）が一部認められ、「耳」が付くⅡA2類と付かないⅡA1類とに分けることも可能である。

これらの鍋の存続期間は、その共伴遺物から、ⅠA類は16世紀末～17世紀後半、ⅠB類は17世紀前半～17世紀末、ⅡA1類は17世紀後葉～18世紀前半、ⅡA2類は18世紀前半、ⅡB1類は18世紀前半～18世紀後半、ⅡB2類は18世紀中頃～18世紀末と考えられる。

③　火舎

火舎には、鉢状のもの（110）と、体部が楕円形を呈し、最大径を体部に持ち、口縁部のややすぼまるもの（109）とがあり、両者共３足を持つ。

④　十能

長方形の底部に板状の側板を貼り付け、円柱状の把手を付けた十能（111）がある。

⑤　焜炉

焜炉には、円筒形を呈するもの（114）と逆台形を呈するもの（112・113）とがある。前者は、比較的大きな正方形の炊き口部を持ち、口縁部下端に凸帯が付き、３足を有する。後者には、半円形の炊き口部を持つもの（112）と長方形の炊き口部を持つもの（113）とがあり、両者とも灰の掻きだし口を下部に持ち、外面には３段の陽刻の文様帯がある。

⑥　竈

竈には、体部および高台部が円筒状になるもの（115）と、やや丸味を持つ体部に高台が付くもの（116・117）とがある。前者は円筒状に粘土を積み上げる際に同時に底部を製作したものと考えられ、後者は体部に高台部を貼り付けたものと考えられる。また、両者共、炊き口部は方形を呈し、受け部は貼り付けによって作られている。なお、115・116の高台部には透彫りの文様がある。

Table 7　土師質土器属性表

No.	遺構・層位	器種	口径	器高	底径	No.	遺構・層位	器種	口径	器高	底径
109	ZYⅡ～ZYⅢ	火舎	13.40	13.85	20.40	118	SK3007	火消壺	14.10	23.45	17.60
110	SD5002		15.60	7.05	9.90	120	SK2047		15.30	23.50	15.90
111	ZYⅡ～ZYⅢ	十能	－	－	－	122	SK1008		11.90	17.45	14.50
112	SK2015	焜炉	28.20	27.40	21.10	123	SK2043	焼塩壺蓋	6.10	1.10	6.00
113	SK1005		24.60	27.60	20.40	124			6.35	1.05	6.45
114	ZZⅡ～ZZⅢ		28.50	25.60	24.30	125	SK4033		8.00	1.10	7.70
115	SK3044	竈	25.25	27.60	28.95	126	ZZⅣ～ZZⅤ		8.00	2.40	7.00
116	SE3001		26.20	25.60	25.25	127	SK2043		7.60	1.00	7.80
117	SK3044		23.80	23.20	24.20	128		塩焼壺	4.80	6.80	4.60
119	SK2047	火消壺蓋	17.80	4.00	－	129	ZZⅣ～ZZⅤ		3.10	8.00	5.90
121	SK1008		15.00	4.50	－						

⑦　火消壺および同蓋

火消壺には、ロクロ使用のもの（Ⅱ類）とロクロ未使用のもの（Ⅰ類）とがある。

Ⅰ類（118）は、粘土積み上げによって成形されており、体部内面に成形時のオサエの痕跡を残し、体部外面はナデ調整で、口縁部内外面はヨコナデ調整が施されている。

Ⅱ類は、Ⅰ類と同様に粘土の積み上げによって成形されるが、体部の粘土積み上げは２回に分けて行われている。また、１回目の粘土積み上げ部分が底部からほぼ直線的に立ち上がるⅡA類（120）と外反して立ち上がるⅡB類（122）とに分けられる。なお、119はⅡA類に伴う蓋で、121はⅡB類に伴う蓋である。

これらの火消壺および蓋の存続期間は、その共伴遺物ならびに型式学的要素などから、Ⅰ類は18世紀前半、ⅡA類は18世紀中頃～末、ⅡB類は18世紀末～19世紀前半と考えられる。

⑧　焼塩壺および同蓋

焼塩壺は、すづまりのコップ形を呈するが、口縁部に断面Ｌ字状の蓋受け部をもつもの（129）と蓋受け部のないもの（128）とがある。前者は、比較的丁寧な作りで、内外面ともナデ調整が施され、口縁部内外面はヨコナデ調整されている。また、後者は、円板状の底部に幅の広い粘土板を１枚巻きつけて作るいわゆる「板作り法」で作られており、内面に布目圧痕が見られる。

蓋は、内面に布目圧痕を残すことから型造りと考えられるものと手づくねのもの（126）とがあり、型造りのものは、形態的には、断面逆凹字形を呈するもの（123～125）と円盤状を呈するもの（127）とがある。

（２）瓦質土器

瓦質土器の器種としては、鉢・火舎・釜などがある。ここでは、各器種ごとにその特徴を述べる。

①　鉢

内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ、外面の体部～底部ミガキの鉢（130）がある。

Table 8　瓦質土器属性表

No.	遺構・層位	器種	口径	器高	底径	No.	遺構・層位	器種	口径	器高	底径
130	SE3002	鉢	16.50	5.80	11.80	132	ZZⅢ～ZZⅣ	火舎	－	6.40	－
131	SK3032	火舎	18.40	(6.80)	14.01	133	SK5063	釜	5.80	4.30	6.70

② 火舎

火舎には、鉢形を呈するもの（131）と隅丸長方形を呈するもの（132）とがある。前者には、3足が付き、体部内面に刷毛目調整が施され、外面の体部～底部にはケズリの痕跡が認められる。また、後者は、口縁部が大きく外反し、3足が付く。

③ 釜

ミニチュア土器の釜（133）がある。調整技法は、内外面共ヨコナデ調整である。

（3）陶器

陶器は、産地別にみると、瀬戸美濃・信楽・京焼系陶器・丹波・備前および備前系陶器・萩焼・唐津および唐津系陶器ならびに産地不明陶器がある。また、陶器の器種としては、壺・甕・椀・皿・鉢・片口・瓶・徳利・蓋・擂鉢・植木鉢・鍋・火入・建水・鍋・釜・合子・平瓶・薬平などがある。

ここでは、各産地ごとにその概略ならびに特徴を述べる。

① 瀬戸美濃

瀬戸美濃には、壺・椀・皿・鉢などがある。これらの瀬戸美濃の所属年代については、先学の編年研究（藤澤ほか 1990）がある。ここではそれらの研究にもとづいて概略を述べる。

壺（157）は、口縁部がやや内湾気味に立ち上がる双耳壺で、18世紀後半の所産と考えられる。椀には、16世紀後半～17世紀初の志野（134・135）、16世紀後半～17世紀前半の鉄釉天目椀（136・137）、17世紀前半代の鉄釉天目椀（138）、17世紀後半代の鉄釉天目椀（141）、18世紀前半と考えられる小椀（139）、18世紀中頃の丸椀（140）などがある。また、皿には、菊皿（142・143）と、丸皿（144・145・148・149）、鉄絵皿（150～153）などがあり、菊皿には16世紀末と考えられるもの（142）と17世紀前半の所産と考えられるもの（143）とがある。丸皿には、16世紀後半（144）、17世紀前半（145）、17世紀中頃（148）、17世紀代（149）の各々の焼造と考えられるものがあり、また、底部のみであるが、146・147は17世紀前半の焼造と考えられ、154は17世紀代の製品と考えられる。なお、鉄絵皿には、17世紀前半前葉に比定されるもの（150）と17世紀前半後葉に比定できるもの（151～153）とがある。鉢には、16世紀後半～17世紀初と考えられる志野の大鉢（156）と17世紀代の口縁部の外反する鉢（155）とがある。

Table 9 瀬戸美濃属性表

No.	遺構・層位	器種	口径	器高	底径	No.	遺構・層位	器種	口径	器高	底径
134	SD4001	椀	10.80	(4.90)	－	146	ZZⅣ～ZZⅤ	皿	－	(1.20)	5.00
135	ZYⅡ～ZYⅢ		13.70	(7.20)	－	147			－	(1.90)	5.70
136	ZZⅣ～ZZⅤ		－	(1.50)	2.90	148	ZZⅢ～ZZⅣ		14.00	3.35	9.00
137	ZZⅢ～ZZⅣ		－	(1.40)	4.40	149	ZZⅣ～ZZⅤ		11.00	(2.30)	－
138	ZZⅣ～ZZⅤ		－	(3.10)	4.30	150			11.80	3.00	7.00
139	SE2001		6.80	3.70	4.60	151	SK5017		10.65	2.15	5.95
140	SE3002		11.20	6.90	4.80	152	ZZⅢ～ZZⅣ		11.40	2.45	6.70
141	SK4026		12.20	6.00	4.00	153			12.00	2.50	7.30
142	ZZⅣ～ZZⅤ	皿	10.40	(1.70)	－	154			9.20	(2.15)	－
143			11.40	1.90	6.50	155	ZZⅣ～ZZⅤ	鉢	17.20	(3.90)	－
144	SK5035		10.00	2.50	5.80	156	ZYⅡ～ZYⅢ		27.00	6.95	?
145	ZZⅣ～ZZⅤ		9.00	1.90	4.70	157	SK2030	壺	18.20	(24.8)	－

Table 10　信楽属性表

No.	遺構・層位	器種	口　径	器　高	底　径	No.	遺構・層位	器種	口　径	器　高	底　径
158	SE2001	椀	9.00	5.25	3.00	160	SE2001	合子	6.00	4.00	4.30
159	SK2009	皿	11.00	2.40	4.30						

② 信楽

信楽には、椀（158）・皿（159）・合子（160）などがあり、いずれも18世紀代に属する。

③ 京焼系陶器

京焼系陶器には、色絵椀（161～163）および色絵瓶（164）がある。

④ 丹波

いわゆる「丹波」の生産地を考えると、広義には、旧丹波国のうち現在兵庫県に編入されている多紀・氷上の2郡、旧播磨国のうち西脇市と多可郡・加東郡、旧摂津国のうち三田市を含む地域が考えられ、狭義には、旧丹波国の2郡が考えられる。厳密には、後者で生産されたものを「丹波」と呼び、前者で生産されたものを「丹波系」陶器と呼ぶべきであろう。しかしながら、出土品そのものからは明瞭に分別しがたいので、本報告では、あえて区別せずに両者を包括的に「丹波」と呼ぶことにした。

丹波には、甕・壺・片口・徳利・蓋・擂鉢・植木鉢・燈・火入・建水などがある。

(a) 甕

体部の形態から、体部最大径が肩部にくるもの（Ⅰ類）と胴部中位にくるもの（Ⅱ類）とに分けられる。また、口縁部の形態から、口縁部が外反気味に立ち上がり端部が丸く収まるもの（A類）と、口縁部がほぼ垂直に立ち上がり端部が水平になるもの（B類）と、口縁部が内湾気味に立ち上がり端部が丸く収まるもの（C類）とに分けられる。全体のプロポーションとしては、Ⅰ類は口縁部の大きい感じとなり、Ⅱ類は口縁のすぼまった感じになる。なお、体部外面に鉄泥漿のかかる1類と沈線の入る2類とがある。

以上の分類をもとにすると、今回報告するものには、ⅠA2類（184）・ⅠB1類（175・178・181）・ⅠB2類（183）・ⅡA2類（177）・ⅡB1類（176・182）・ⅡB2類（179）・ⅡC2類（180）がある。

各類の存続期間は、出土状況・共伴遺物から、ⅠA2類およびⅠB1類は17世紀末～18世紀前半、ⅠB2類は18世紀前半～18世紀中頃、ⅡA2類は18世紀後半、ⅡB1類は18世紀中頃～18世紀末、ⅡB2類およびⅡC2類は18世紀末～19世紀前半と考えられる。全体的な傾向として、体部形態は肩の張るⅠ類が体部の膨らむⅡ類に先行し、Ⅰ類からⅡ類への変遷は18世紀の中頃を相前後する時期と考えられる。口縁部形態は、他遺跡の出土例などを参考にすると、外反する口縁部のA類、端部が水平になるB類、内湾するC類の順で出現し、A類は17世紀以前～18世紀末、B類は17世紀末～19世紀前半、C類は18世紀末以降の所産と考えられる。

(b) 壺

最大径を体部中央に持ち、口縁部が受口状になる壺（165）がある。

Table 11　京焼系陶器属性表

No.	遺構・層位	器種	口　径	器　高	底　径	No.	遺構・層位	器種	口　径	器　高	底　径
161	SE3002	椀	8.80	5.60	3.00	163	ZYⅡ～ZYⅢ	椀	9.50	5.25	3.25
162	ZZⅡ～ZZⅢ		11.40	4.70	4.20	164	SD2001	瓶	4.70	12.50	8.70

Table 12　丹波壷・壺属性表

No.	遺構・層位	器種	口　径	器　高	底　径	体部径	備　　考
175	SK3087	壺	20.80	21.50	11.00	22.00	
176	SK2022		20.60	26.05	11.80	24.60	
177	ZZⅠ～ZZⅢ		28.30	28.00	17.10	34.40	
178	SK3044		25.10	25.40	13.70	?	口縁楕円
179	SK1001		22.80	25.45	15.00	?	焼成後底部穿孔・口縁楕円
180	SK1026		22.40	24.00	12.90	29.45	焼成後底部穿孔
181	SK2015		29.20	35.45	15.20	33.80	
182	SK2003		31.10	34.20	15.20	34.60	焼成後底部穿孔・口縁楕円
183	ZYⅡ～ZYⅢ		26.00	36.10	19.40	39.80	口縁楕円
184	SG3002		42.30	33.10	21.30	?	
165	SA4003・4004	壺	12.10	15.50	12.45	?	

(c)　片口

片口には、壺形を呈するもの（166・167）と鉢形を呈するもの（168－173）とがある。鉢形を呈するものには、片口部の欠損するものもあるがすべて片口とすると、内面に施釉されるもの（168～172）と施釉されないもの（173）とがあり、口縁部形態も、体部からそのまま口縁部に至り口縁端部が丸く収まるもの（168・172・173）と体部と口縁部との接点で一度円わもの（169～171）とがある。また、窯詰技法の判るものには、胎土目のもの（169～172）がある。なお、172と173には焼成後の底部穿孔が認められ、積木鉢に転用されたと考えられる。

(d)　徳利

徳利（243・244）は、いわゆる「酒徳利」の形態をとり、体部外面に白泥で文字が書かれている。

(e)　壺

胎土・色調などから丹波と考えられるもの（249）がある。

(f)　擂鉢

口縁部の形態からみると、口縁部と体部が一体となって造りだされているⅠ類と、口縁部外面に粘土を貼り付けて口縁部を造り出すⅡ類、口縁部内面に粘土を貼り付けて口縁部を造り出すⅢ類、いわゆる「縁帯部」を口縁部の成形時から粘土の積み上げによって造り出すⅣ類とがある。

Ⅰ類は、口縁端部が丸く収まるもの（ⅠA類）と、外傾する面を持つもの（ⅠB類）、やや内傾する面を持つもの（ⅠC類）がある。また、口縁部と体部との境は、体部から口縁部が連続するもの（ⅠA1類・ⅠB1類・ⅠC1類）や沈線をもつもの（ⅠA2類・ⅠB2類・ⅠC2類）、段をもつもの（ⅠA3類・ⅠB3類）などがある。なお、Ⅰ類の擂目の施文方法は、ヘラ擂のものとクシ擂のものの両者があるが、ⅠB2類のみヘラ擂とクシ擂の両者があり、ⅠA1類およびⅠB1類はヘラ擂のみで、他はすべてクシ擂で

Table 13　丹波片口・徳利・壺属性表

No.	遺構・層位	器種	口　径	器　高	底　径	No.	遺構・層位	器種	口　径	器　高	底　径
166	SK3044	片口	7.00	9.90	6.80	172	SE3003	片口	20.20	12.05	10.80
167	SE3002		6.20	8.80	8.00	173			19.40	11.00	11.20
168	SK2052		13.30	1.45	2.50	243	SK2032	徳利	4.60	25.90	10.00
169	SK2015		21.20	9.60	10.60	244			3.75	26.75	9.40
170	SK2036		21.70	9.50	11.80	249	SE2001	壺	10.40	4.00	－
171	SE3002		22.40	9.80	12.00						

Table 14　丹波播鉢属性表

No.	遺構・層位	口　径	器　高	底　径	No.	遺構・層位	口　径	器　高	底　径
185	ZZⅣ～ZZⅤ	29.60	(9.00)	－	215	SK4010	－	(3.50)	－
186		30.00	13.40	14.20	216	ZZⅣ～ZZⅤ	－	(7.00)	－
187	SK4010	22.60	9.40	11.10	217		－	(9.65)	－
188	ZZⅣ～ZZⅤ	29.50	11.90	12.60	218		－	(11.10)	－
189	SE5001	24.30	11.10	12.70	219	SE4004	－	(6.60)	－
190	SE4004	34.50	14.05	14.20	220	ZZⅢ～ZZⅣ	－	(7.00)	－
191	SK4010	35.00	(8.70)	－	221	SD4001	－	(10.60)	－
192	SE4004	35.20	13.35	13.80	222	SK4044	－	(13.70)	－
193	SK4003	37.80	12.10	13.60	223	SD4001	－	(9.95)	－
194	SK4024	32.80	12.95	14.80	224	ZZⅣ	－	(9.40)	－
195	SG3001	35.00	14.00	15.00	225	SK3019	－	(11.00)	－
196		35.55	15.50	14.85	226	SK4047	－	(6.20)	－
197	ZZⅢ～ZZⅣ	23.30	9.80	12.20	227	SK3076	－	(8.00)	－
198	ZYⅡ～ZYⅢ	30.00	11.20	13.40	228	ZZⅢ～ZZⅣ	－	(14.80)	－
199	SG3002	22.90	8.55	10.80	229		－	(8.90)	－
200	ZZⅡ	21.20	9.60	12.00	230		－	(6.20)	－
201	SK3080	32.80	10.30	15.70	231	SK3007	－	(9.80)	－
202	ZYⅡ～ZYⅢ	34.30	(15.50)	16.20	232	SG3001	－	(8.20)	－
203	SK3021	34.20	14.10	17.00	233	SK3032	－	(6.00)	－
204	SE3003	32.60	12.60	14.10	234	SG3002	－	(8.05)	－
205	SE1002	34.90	13.55	(18.50)	235	ZZⅢ～ZZⅣ	－	(7.95)	－
206	SK3080	37.80	(12.20)	－	236		－	(9.50)	－
211	ZZⅣ～ZZⅤ	－	(15.30)	－	237	ZZⅠ～ZZⅡ	－	(5.70)	－
212	ZZⅣ～ZZⅤ	－	(4.90)	－	238	ZZⅡ～ZZⅢ	－	(7.10)	－
213	ZZⅡ	－	(9.10)	－	239	ZYⅡ～ZYⅢ	－	(5.65)	－
214	ZZⅡ～ZZⅢ	－	(11.90)	－					

ある。Ⅱ類は、口縁部の外面に貼り付けて口縁部を造り出すが、できあがった口縁部の形態が正三角形に近い形態をとるもの（ⅡA類）と二等辺三角形に近い形態になるもの（ⅡB類）がある。また、粘土を口縁部内面に貼り付けるⅢ類には、丸く収まる口縁端部を持つもの（ⅢB類）とやや内傾する端面を持つもの（ⅢA類）とがある。Ⅳ類は、いわゆる「縁帯部」の下端が外方に若干張り出すもの（ⅣA類）と張出しのないもの（ⅣB類）とがある。なお、Ⅱ～Ⅳ類の擂目は、すべてクシ描である。

以上の分類をもとにすると、今回報告するものには、ⅠA1類（185・186・211・212）、ⅠA2類（213～215）、ⅠA3類（187・216）、ⅠB1類（188・217・218）、ⅠB2類（ヘラ描：189・219、クシ描：190・220～222）、ⅠB3類（191・192・223～225）、ⅠC1類（226）、ⅠC2類（193）、ⅡA類（194・195・227～230）、ⅡB類（196・231・232）、ⅢA類（197～199）、ⅢB類（200・233）、ⅣA類（201・202・234～236）、ⅣB類（203・204・237～239）がある。

ここで、各類の存続期間を出土状況から考えると、ⅠA1類およびⅠB1類は17世紀前半代を降らないと考えられ、ⅠA2類およびⅠA3類・ⅠB2類・ⅠC1類・ⅠC2類は17世紀前半～17世紀末の遺構から出土している。ⅡA類およびⅢA類・ⅣA類は、17世紀末以前には確実に存在し、17世紀末～18世紀中頃の遺構から出土している。また、ⅡB類は17世紀末～18世紀中頃の遺構から出土し、ⅢB類は18世紀中頃～18世紀末と考えられる。ⅣB類は18世紀中頃～18世紀末の遺構から出土している。

つぎに、出土状況を参考に各類の前後関係を型式学的に考えると、全体的には、擂目がヘラ描のものがクシ描のものに先行し、擂目にヘラ描の施文されるものを含むⅠ類がⅡ～Ⅳ類に先行する。

Ⅰ類は、Ⅰ類のなかでヘラ描の擂目のもののみを見ると、出土状況からは、ⅠA1類・ⅠB1類→ⅠB2類となり、口縁端部が丸く収まるもの（A類）が口縁端面が外傾するもの（B類）に先行し、なおかつ、体部から口縁部が連続するもの（1類）が口縁部と体部との境に沈線をもつもの（2類）に先行することが判る。また、擂目がクシ描のⅠB類は、出土状況から、ⅠB2類・ⅠB3類→ⅠB3類となり、口縁部と体部との境に沈線をもつもの（2類）が段をもつもの（3類）に先行する。なお、Ⅰ類全体では、ⅠA1類・ⅠB1類→ⅠA2類・ⅠA3類・ⅠB2類・ⅠC1類・ⅠC2類の出土状況を示し、口縁端部がやや内傾する面をもつもの（C類）がもっとも後出であることが判る。これらのことから、Ⅰ類は、口縁端部の形態では、端部が丸く収まるもの（A類）→外傾する面をもつもの（B類）→やや内傾する面をもつも

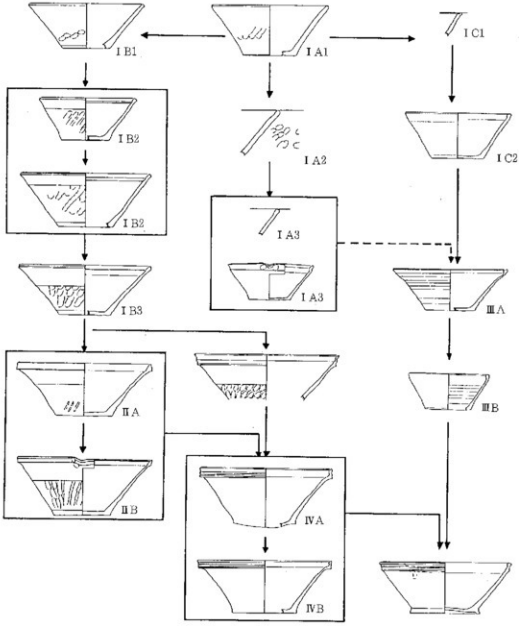
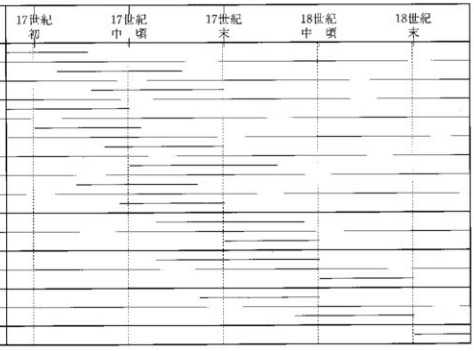


Fig. 6　丹波擂鉢の系譜関係

Table 15　丹波擂鉢各類の存続期間



の（C類）の順で出現し、口縁部の形態では、体部から口縁部が連続するもの（１類）→体部と口縁部との境に沈線をもつもの（２類）→体部と口縁部との境に段をもつもの（３類）へと変化することが判る。以上のことから、ⅠA類→ⅠB類→ⅠC類となり、なおかつ、ⅠA1類→ⅠA2類→ⅠA3類、ⅠB1類→ⅠB2類→ⅠB3類、ⅠC1類→ⅠC2類の変遷が追える。

Ⅱ類は、出土状況から、ⅡA類→ⅡA類・ⅡB類となり、口縁部形態が断面正三角形のもの（ⅡA類）が断面二等辺三角形のもの（ⅡB類）に先行することが判る。また、Ⅲ類の出土状況を見ると、ⅢA類→ⅢB類となり、やや内傾する端面をもつもの（ⅢA類）が口縁端部が丸く収まるもの（ⅢB類）に先行する。ここで、Ⅰ類とⅡ類・Ⅲ類の前後関係を考えると、ⅠA類・ⅠB類→ⅠA類・ⅠB類・ⅠC類・ⅡA類・ⅢA類→ⅡA類・ⅡB類・ⅢA類→ⅢB類の出土状況を示し、Ⅰ類→ⅡA類→ⅡB類およびⅠ類→ⅢA類→ⅢB類となり、系譜的には、口縁部外面に粘土を貼り付けて口縁部を造り出すⅡ類は、口縁端部が外傾する面を持つ点からⅠB類の系譜を引き、口縁部内面に粘土を貼り付けて口縁部を造り出すⅢ類のうちやや内傾する口縁端部を持つⅢA類は、口縁嘴部がやや内傾するⅠC類の系譜を引くと考えられる。なお、187は成形技法上はⅠA3類に分類されるが、形態的にはⅢA類に非常に類似し、ⅢA類がⅠA3類の系譜を引く可能性がある。また、Ⅳ類は、ⅣA類→ⅣB類の出土状況を示し、いわゆる「緑帯部」の下端が外方に若干張り出すもの（ⅣA類）が張出しのないもの（ⅣB類）に先行する。なお、206は、口縁部が体部と一体となって粘土積み上げにより成形され、調整時に口縁部のいわゆる「緑帯部」をロクロの回転を利用して造り出しいる。成形技法的にはⅠ類に属し、調整技法的にはⅡ類に類似し、口縁部の形態がいわゆる「緑帯」状を呈することからはⅣ類の範疇に入る。これらのことから、Ⅳ類は、成形技法上は206を介しⅠ類の系譜上に成立したと考えられ、また、口縁部の調整技法上からはⅡ類の系譜上に発生したと考えられる。以上のことから、Ⅱ類は、ⅡA類→ⅡB類の変遷が追え、ⅠB類の系譜上発生したと言え、Ⅲ類は、ⅢA類→ⅢB類と変化し、ⅠA3類の影響を受けながら、ⅠC類の系譜に連なる。一方、Ⅳ類は、ⅣA類→ⅣB類の変遷が考えられ、206を介してのⅠ類とⅡ類のなかから変

化し成立したと言えよう。

これらのことから、各類の系譜関係は概略Fig. 6「丹波擂鉢の系譜関係」のようになり、各々の存続期間は、Table 15「丹波擂鉢の各類の存続期間」に示すように、ⅠA1類が17世紀前葉まで、ⅠA2類が17世紀前半～17世紀後葉、ⅠA3類が17世紀中葉～17世紀末、ⅠB1類が17世紀中頃まで、ⅠB2類は17世紀初～17世紀末で、とくに、擂目がヘラ描のものが17世紀中葉までに、擂目がクシ描のものが17世紀中葉～17世紀末と考えられる。ⅠB3類は17世紀中頃～18世紀前半、ⅠC1類は17世紀前半～17世紀後葉、ⅠC2類は17世紀中葉～17世紀末、ⅡA類は17世紀後半～18世紀前半、ⅡB類は17世紀末～18世紀中頃、ⅢA類は17世紀後半～18世紀前半、ⅢB類は18世紀中頃～18世紀末、ⅣA類は17世紀後葉～18世紀中頃、ⅣB類は18世紀中葉～18世紀末と考えられる。なお、205（Ⅴ類）は、施釉陶器で、丹波焼擂鉢のなかでは最も時期的に遅れるものと考えられ、18世紀末～19世紀前半に比定できる。

(g) 植木鉢

植木鉢（250）は、3足を持ち、体部中央に渦巻文が押印され、口縁端部に波状文が施文されている。また、底部には、成形時の板目痕を残す。

(h) 盤

盤には、大（240）・中（241）・小（242）の3種類がある。いずれも、口縁端部は外傾する端面をもち、体部外面下端はヘラケズリされている。

(i) 火入

火入は、双耳で、体部中央で一度くびれる形態をとるが、そのくびれの度合いの大きいもの（245）と小さいもの（246～248）があり、その出土状況および共伴遺物から、前者は17世紀中頃を中心とする時期の所産と考えられ、後者は17世紀末～18世紀中頃に比定できる。

(j) 建水

口縁部径が底径よりやや小さい、筒状を呈する建水と考えられるもの（174）がある。

⑤ 備前および備前系陶器

備前には、甕・壺・擂鉢・建水などがある。ただし、近世の擂鉢については、同種のものが備前以外の産地、例えば堺や明石、で生産されている可能性の高いことが指摘されている（堺市教育委員会 1988、白神典之 1990）が、産地が特定できないので、ここでは、備前系陶器として一括して扱う。

(a) 甕

甕には、大甕（266）と水屋甕（267）とがあり、前者は備前Ⅴ期の産品と考えられ、後者は体部上半にカキ目を持ち、18世紀前半代の所産と考えられる。

(b) 壺

壺（268）は、朱泥の小壺で、18世紀前半代に属する。口縁部は受口状を呈し、体部上半にはカキ目が認め られ、底部に刻印を持つ。

Table 16 丹波植木鉢・盤・火入・建水属性表

No.	遺構・層位	器種	口径	器高	底径	No.	遺構・層位	器種	口径	器高	底径
250	SK1029	植木鉢	22.00	17.30	13.00	246	SK4001	火入	12.80	6.05	10.00
240	SE4005	盤	41.20	5.80	32.60	247	SK4042		12.20	5.80	9.20
241	SE4001		30.40	5.35	20.80	248	SG3002		12.40	6.45	10.60
242	SD4001		22.40	6.75	14.70	174	SB1003	建水	13.70	9.55	15.60
245	SK3014	火入	13.80	7.10	8.80						

Table 17　備前および備前系陶器属性表

No.	遺構・層位	器種	口径	器高	底径	No.	遺構・層位	器種	口径	器高	底径
266	SK5077	甕	—	—	—	258	SE2001	擂鉢	36.00	13.10	16.70
267	SK3023		15.55	17.15	8.70	259	SK3071		35.40	13.10	16.10
268	SK3003	壺	8.30	7.60	4.50	260	SE4007		42.00	(12.70)	—
251	SK5017	擂鉢	29.30	10.45	12.00	261	SK3084		33.95	13.85	15.90
252	ZZⅣ～ZZⅤ		—	(6.50)	—	262	SK3042		27.50	10.20	13.00
253	SK5077		—	(4.50)	10.20	263	SK3077		39.50	15.60	17.50
254	ZYⅡ～ZYⅢ		39.40	11.20	15.40	264	ZYⅡ～ZYⅢ		45.70	16.00	18.75
255	SK3022		32.90	(11.10)	—	265	SE3004		28.00	9.80	13.30
256	SG3002		31.90	12.40	14.90	269	SE4007	建水	12.20	16.60	13.80
257	SK3086		37.95	14.90	20.10	270	SK4042		13.30	7.90	13.05

(c)　擂鉢

擂鉢には、備前Ⅴ期に相当する備前の産品（251～253）といわゆる「備前系陶器」とがある。

備前系陶器と考えられるものの産地を特定することはできないが、形態的には、口縁端部の内面にわずかに凸帯を巡らすⅠ類（254～257）と、口縁部内面の凸帯が下位に移り段になるⅡ類（258～263）、口縁端部内面の段が小さくなるⅢ類（264・265）とがある。Ⅰ類の外面の成形・調整技法はナデ調整のもの（254・256）とロクロケズリのもの（255・257）とがあり、擂し目は底部内面から口縁部に向かって施されている。体部内面に施された擂し目は、口縁部付近で隣合う擂し目の間隔が広くなるもの（254・256）と接するもの（255・257）とがあり、また、口縁部付近に及んだ余分な擂し目をロクロナデによって完全に消しているもの（254～256）と擂し目を痕跡的に残すもの（257）とがある。底部は高台付（257）もしくは高台風（254・256）で、底部内面には中央で交差するように3単位の擂し目が施文されている（254・257）。Ⅱ類は、口縁部の外縁帯の下端が下方へ垂れるもの（258・260）と横方向へ拡張するもの（262・263）と斜め上方向へ肥厚するもの（259・261）とがあるが、外面の整形・調整技法はすべてロクロケズリで、擂し目は内面の底部と体部の境付近から口縁部に向かって施されている。体部内面に施された擂し目は、口縁部付近で隣合う擂し目の間隔が広くなるものはないが、口縁部付近に及んだ余分な擂し目をロクロナデによって完全に消しているもの（261～263）と擂し目を痕跡的に残すもの（258～260）とがある。底部は高台風で、底部内面には中央を囲むように3単位の擂し目を重ねたいわゆる「ウールマーク」のもの（261・262）がある。Ⅲ類の口縁部は外縁帯が低く、外面の整形・調整技法はすべてロクロケズリで、擂し目は内面の底部と体部の境付近から口縁部に向かって施されている。体部内面に施された擂し目は、口縁部付近で隣合う擂し目の間隔が広くなるものはないが、口縁部付近に及んだ余分な擂し目をロクロナデによって消しているものの擂し目は痕跡的に残っている。底部は高台風で、底部内面にはいわゆる「ウールマーク」の崩れた擂し目（265）や放射状の擂し目（264）が見られる。

なお、窯詰技法の判るものとしては、重ね焼の痕跡の判明するもの（251）と焼き台の痕跡の認められるもの（257）やいわゆる「離れ砂」の使用痕の確認できるもの（261・263・264）などがある。

(d)　建水

建水には、器高の高いもの（269）と低いもの（270）とがあり、前者には、体部上半にカキ目が施され、底部に刻印が認められる。

⑥ 萩焼

萩焼には、椀（271）・鉢などがあり、いずれも18世紀前半の所産と考えられる。

なお、271は、口径11.00cm、器高6.10cm、底径4.05cmで、ZZⅡ～ZZⅢの出土である。

⑦ 唐津および唐津系陶器

唐津には、椀・皿・鉢・壺・片口・瓶・蓋などがある。これらの唐津および唐津系陶器については、先学の研究（大橋 1984）がある。ここではそれらの研究にもとづいて概略を述べる。

(a) 椀

椀には、唐津鉄絵椀や唐津椀、唐津系椀、唐津系青緑釉椀、唐津系刷毛目椀などがある。

唐津鉄絵椀（285）は、唐津でも初期の製品と考えられ、16世紀末～17世紀初頭に属する。

唐津椀には、形態的には天目形を呈するものと通常の形態を呈するものの両者がある。天目形を呈するものには、重ね焼の痕跡の認められないもの（281・282）と、胎土目積のもの（283）、砂目積のもの（284）の３者の窯詰技法が確認でき、前２者は16世紀末～17世紀初頭に、後１者は17世紀前半に比定できる。また、通常の形態を呈するもの（286～295）には、高台施釉のもの（292～294）や砂目積みのもの（295）が含まれ、高台施釉のものや砂目積みのものは17世紀前半と考えられ、他は16世紀末～17世紀初頭に比定できる。

唐津系椀は、京焼風陶器で、高台施釉のもの（297・298）と高台無釉の薄手でシャープなケズリのもの（296）があり、ともに17世紀後半代のものである。なお、高台無釉のものは、高台内中央に円刻し、「善」・「森」などの印が押捺されている。

唐津系青緑釉椀（299）は、見込蛇ノ目釉ハギで、17世紀後半～18世紀前半に比定できる。また、唐津系刷毛目椀は、すべて高台施釉で、見込蛇ノ目釉ハギのもの（300・301）とそうでないもの（302～307）があるが、いずれも17世紀末～18世紀前半に比定できる。

(b) 皿

皿には、唐津鉄絵皿や唐津皿、唐津系皿、唐津系青緑釉皿、唐津系刷毛目皿などがある。

唐津鉄絵皿には、重ね焼の痕跡の認められないもの（317・318）と、窯詰技法が胎土目積のもの（312～316）と砂目積のもの（319）との３者があり、砂目積のものは17世紀前半に比定でき、他の２者は16

Table 18 唐津および唐津系陶器椀属性表

No.	遺構・層位	口径	器高	底径	No.	遺構・層位	口径	器高	底径
281	ZZⅢ～ZZⅣ	9.20	(6.20)	—	295	ZZⅣ～ZZⅤ	7.10	3.70	2.80
282	SE3001	11.30	6.90	4.20	296	SK1021	9.20	5.30	4.90
283	SD5002	10.30	7.45	3.65	297	ZZⅢ～ZZⅣ	10.00	7.50	4.40
284	SD4001	10.00	7.55	3.95	298		11.60	8.00	5.00
285	SK4010	9.90	7.65	4.60	299	SE3003	—	(2.40)	4.00
286	ZZⅢ～ZZⅣ	9.20	7.40	4.65	300	SK3022	10.40	5.20	3.90
287	ZZⅡ～ZZⅢ	10.40	5.40	4.40	301	SE4004	11.60	5.35	4.00
288	SK4010	9.55	7.30	4.35	302	SK3022	10.00	5.70	3.90
289	ZZⅣ～ZZⅤ	—	(3.20)	4.10	303	ZZⅢ～ZZⅣ	10.60	6.00	4.40
290		—	(3.60)	4.80	304	ZYⅡ～ZYⅢ	11.00	6.30	4.00
291	SK5034	—	(4.30)	4.80	305		10.80	5.50	4.10
292	SE4004	—	(3.20)	4.65	306	ZZⅢ～ZZⅣ	9.60	5.70	3.80
293	SK5076	10.00	6.20	3.40	307	ZYⅡ～ZYⅢ	11.40	5.50	3.90
294	ZZⅣ～ZZⅤ	—	(4.50)	4.60					

Table 19　唐津および唐津系陶器皿属性表

No.	遺構・層位	口　径	器　高	底　径	No.	遺構・層位	口　径	器　高	底　径
312	SA4003・4004	12.70	3.90	4.15	328	ZZⅣ～ZZⅤ	12.30	3.40	4.90
313	ZZⅣ～ZZⅤ	13.40	3.40	4.10	329		12.50	4.20	4.20
314	SD5002	13.00	3.90	3.80	330		13.00	4.10	4.40
315	ZZⅢ～ZZⅣ	14.00	3.50	4.00	331	SE5001	13.20	3.75	4.50
316		13.20	3.80	4.00	332		12.40	4.10	4.10
317	ZZⅣ～ZZⅤ	—	(2.40)	4.80	333	ZYⅡ～ZYⅢ	11.60	3.10	4.20
318	SK3032	—	(2.20)	4.80	334		12.80	4.90	5.00
319	ZZⅢ～ZZⅣ	—	(1.80)	3.90	335	ZZⅢ～ZZⅣ	12.50	4.70	4.70
320	ZZⅣ～ZZⅤ	10.40	3.25	2.20	336	SE4004	13.00	(3.30)	—
321	SG3001	12.20	2.90	5.00	337	ZZⅢ～ZZⅣ	12.00	4.90	4.70
322	ZZⅣ～ZZⅤ	12.40	3.65	4.65	338	SK3030	12.25	3.85	4.40
323	SK5076	10.90	2.35	4.20	339	SK2015	12.30	3.70	4.60
324	ZZⅣ～ZZⅤ	11.20	3.40	4.40	340	SG3002	—	(2.50)	4.70
325	SE3004	10.60	3.50	3.40	341	SE3003	—	(2.70)	4.50
326	ZZⅣ～ZZⅤ	11.20	3.35	4.20	342	SG3002	—	—	4.50
327		10.80	3.40	4.00	343	ZYⅡ～ZYⅢ	17.40	4.70	5.30

世紀末～17世紀初頭と考えられる。なお、砂目積の鉄絵皿は、高台施釉である。

唐津皿には、胎土目積と砂目積（331～333）の両者の窯詰技法が認められるが、胎土目積のものの中には高台施釉のもの（329・330）とそうでないもの（321～328）とがあり、砂目積のものと高台施釉のものは17世紀前半の所産と考えられ、その他のものは16世紀末～17世紀初頭に比定できる。また、唐津皿には、重ね焼の痕跡の認められないもの（320）もあり、16世紀末～17世紀初頭と考えられる。

唐津系皿には、前代の唐津皿の形態を踏襲しながら見込に蛇ノ目釉ハギの認められるもの（336）や高台無釉の薄手でシャープな削りの京焼風のもの（334・335）などがあり、前者は17世紀後半～18世紀前半に属し、後者は17世紀後半の所産と考えられる。なお、京焼風のものは、高台内中央に円刻し、「清水」・「善」（334）・「森」（335）などの印が押捺されている。

唐津系青緑釉皿（337～342）は、見込蛇ノ目釉ハギで、17世紀後半～18世紀前半に比定できる。また、唐津系刷毛目皿（343）は、見込蛇ノ目釉ハギで、窯詰技法は砂目積で、17世紀後半～18世紀前半と考えられる。

(c)　鉢

鉢には、唐津鉄絵鉢、唐津鉢、唐津三島手鉢、唐津二彩鉢、唐津系青緑釉鉢などがある。

唐津鉄絵鉢（350）と唐津鉢（351）は、胎土目積で、16世紀末～17世紀初頭と考えられる。17世紀～18世紀初に比定できる唐津三島手鉢には、砂・胎土目積のもの（356・358）と見込に輪状に砂の付着したもの（357）とがある。17世紀後半～18世紀前半の所産と考えられる唐津二彩鉢（352・353）の窯詰

Table 20　唐津および唐津系陶器鉢属性表

No.	遺構・層位	口　径	器　高	底　径	No.	遺構・層位	口　径	器　高	底　径
350	SE4004	—	(3.80)	10.30	355	SK4024	—	(6.70)	7.00
351	SK4010	21.55	5.75	7.20	356	SG3002	29.10	8.20	10.20
352	SE3003	30.60	8.40	10.30	357	SK3044	36.90	12.50	11.90
353	SA4003・4004	32.00	9.80	11.00	358	SK3050	45.50	16.90	14.70
354	SK3022	—	(3.60)	5.20					

Table 21　唐津および唐津系陶器壺・片口・瓶・蓋属性表

No.	遺構・層位	器種	口径	器高	底径	No.	遺構・層位	器種	口径	器高	底径
347	ZYⅡ～ZYⅢ	壺	11.30	11.20	7.50	311	SE3002	片口	19.20	8.40	7.40
348	SE3002		－	(17.80)	12.00	344	SA4001・4002	瓶	－	(11.40)	9.40
349	SK4043		8.80	11.25	8.70	345	SD5002		－	(8.50)	6.30
309	ZZⅢ～ZZⅣ	片口	10.20	7.30	4.20	346	ZZⅢ～ZZⅣ		7.00	(1.70)	－
310	SK3044		20.00	12.00	10.50	308	SE2001	蓋	8.60	2.00	－

技法は、砂・胎土目積である。唐津系青緑釉鉢は、見込蛇ノ目釉ハギであるが、釉ハギ部分に鉄釉を塗ったもの（355）と塗らないもの（354）とがあり、ともに17世紀後半～18世紀前半に属する。

なお、鉢の高台部断面形態は、断面が長方形を呈するもの（351～353・355）からケズリにより断面形態のやや崩れたもの（354・356・358）へと17世紀後半代に移行し始め、18世紀初には高台下半部はほぼ三角形に近い形態（357）を示すようになる。

以上のことから、唐津鉄絵鉢（350）と唐津鉢（351）は16世紀末～17世紀初頭、唐津三島手鉢のうち砂・胎土目積のもの（356・358）は17世紀後半代でも末に近い頃、唐津三島手鉢のうち見込に輪状に砂の付着したもの（357）は18世紀初、唐津二彩鉢（352・353）は17世紀後半と考えられる。また、唐津青緑釉鉢のうち釉ハギ部分に鉄釉を塗ったもの（355）は17世紀後半に、塗らないもの（354）は18世紀前半に各々比定できる。

(d)　壺

壺には、16世紀末～17世紀初頭と考えられるもの（347）や耳付きのもの（349）や18世紀代の所産と考えられる二彩の壺（348）などがある。

(e)　片口

片口には、唐津片口（309・310）と唐津櫛目目片口（311）とがあり、いずれも17世紀後半～18世紀前半の年代が与えられるが、鉢同様高台部の形状から、309は17世紀後半に、310は17世紀の後半代でも末に近い時期に、311は18世紀前半に各々比定できる。

(f)　瓶

瓶には、編詰技法が胎土目積のもの（345）や、成形技法が叩き成形のもの（344）があり、ともに16世紀末～17世紀初頭の所産と考えられる。また、これらと同時期の所産と考えられる唐津瓶の口縁部（346）が出土している。

(g)　蓋

胎土・色調などから唐津もしくは唐津系陶器と考えられるもの（308）がある。

⑧　産地不明陶器

産地の特定できない製品としては、施釉陶器椀（278）・鉄釉陶器皿（274・275）・施釉陶器壺および蓋（272・273）・施釉陶器洩瓶（276）・施釉陶器鍋（279・280）・鉄釉陶器釜（277）・施釉陶器業

Table 22　産地不明陶器属性表

No.	遺構・層位	器種	口径	器高	底径	No.	遺構・層位	器種	口径	器高	底径
272	SX1001	蓋	6.80	1.45	－	277	SK1005	釜	21.40	14.50	16.00
273		壺	7.60	7.70	6.60	278	SE1001	椀	11.60	7.65	4.90
274	SK2009	皿	8.80	1.90	3.90	279		鍋	24.50	13.50	10.40
275	SK2051		11.50	2.10	(6.70)	280	SE1002		19.00	8.90	7.40
276	ZZⅠ～ZZⅡ	洩瓶	7.70	15.60	14.00						

平および同壷などがある。

鉄釉陶器皿のうち、275は底部外面までロクロケズリが及んでいるが、274は糸切の痕跡を底部外面に残す。また、施釉陶器鍋は、3足で、把手を2つ持つ。なお、これらの製品のなかで、施釉陶器壺および壷・施釉陶器鍋・施釉陶器素平および同壷は、いわゆる「西播系陶器」と総称されるものに胎土・釉調などが類似するが、ここではあえて産地を特定せず、他の製品と共に伊丹郷町周辺の地方窯で生産された製品と考えておく。

（4）磁器

磁器には、産地別にみると、中国製・伊万里・産地不明磁器があり、種別としては、染付・青磁染付・青磁・白磁・色絵・瑠璃釉などがある。また、磁器の器種としては、椀類・皿・鉢・壷・重物・瓶・香炉・土瓶・植木鉢・水滴などがある。

ここでは、各産地ごとにその概略ならびに特徴を述べる。

① 中国製磁器

中国製磁器には、16世紀末～17世紀初頭と考えられる青花椀（359・633）と17世紀前半の青花皿（466）とがある。青花椀のうち633は面子に転用されたもので高台裏まで施釉れさており、青花皿の466は見込の釉が蛇ノ目状に剥ぎ取られている。

② 伊万里

伊万里には、染付・青磁染付・青磁・白磁・色絵・瑠璃釉などがある。これらの伊万里については、先学の研究（大橋 1984）がある。ここではそれらの研究にもとづいてその概略を述べる。

(a) 染付

染付には、椀類（椀・小椀・ぐい呑み・蕎麦猪口・小杯）・皿・鉢・壷・重物などがある。

（ア）椀類

椀類の高台部をみると、高台施釉のものと高台無釉のものとがある。高台施釉のものは一般的には高台畳付の釉を拭うが、高台畳付の釉を拭わない一群（360～366）があり、その一群のなかには高台畳付に砂が沢山熔着したいわゆる高台畳付砂熔着のもの（360～364）が含まれる。これら高台畳付砂熔着のものは確実に伊万里磁器創始期の製品と考えられ、高台畳付に砂が熔着しないが高台畳付の釉を拭わない一群も同時期の所産と考えられ、ともに17世紀初～17世紀前半に比定できる。なお、高台畳付砂熔着のもののなかに深い竪筋の彫文をもつもの（363）があり、これと同文様をもつもの（367）も同時期と考えられる。

また、高台無釉のものは、17世紀中頃に焼造されたと考えられ、染付の文様には草花文（368・369）と一重網目文（370～372）との両者がある。ただし、一重網目文をもつが、高台が無釉でない一群（373～381）は、17世紀後半～17世紀末の所産と考えられ、また、382～385も形態・釉調から同様の時期が与えられる。

なお、網目文のなかには、「割り筆」で描いた二重網目文のもの（386～389）があり、17世紀末～18

Table 23 青花属性表

No.	遺構・層位	器種	口径	器高	底径	No.	遺構・層位	器種	口径	器高	底径
359	SD5002	椀	11.00	(4.30)	－	466	SA4003・4004	皿	17.10	3.50	8.10
633	ZZⅡ～ZZⅢ		－	1.30	4.40						

Table 24 伊万里染付椀類属性表

No.	遺構・層位	口径	器高	底径	No.	遺構・層位	口径	器高	底径
360	SK3022	10.40	6.95	4.20	406	ZYⅡ～ZYⅢ	10.95	6.15	4.35
361	ZZⅢ～ZZⅣ	11.0	6.45	4.70	407	SE3003	8.00	(3.50)	—
362	SA4003・4004	11.10	6.45	4.65	408	ZYⅡ～ZYⅢ	10.80	5.90	4.60
363	SE4004	10.40	7.50	4.80	409		10.40	5.15	4.00
364	ZZⅣ～ZZⅤ	10.40	6.90	4.50	410	SE3002	10.40	4.90	3.40
365	ZYⅡ～ZYⅢ	10.95	7.05	4.65	411	SK3022	9.60	5.65	3.80
366	ZZⅢ～ZZⅣ	10.10	6.30	3.80	412	ZZⅡ～ZZⅢ	11.00	4.50	4.15
367	SD4001	9.40	(7.10)	—	413	SK3001	9.80	5.45	4.00
368	SE4004	11.80	7.40	4.50	414		9.50	5.60	4.00
369	SK4010	10.20	7.05	4.65	415	SG3001	10.00	5.65	1.80
370	ZZⅢ～ZZⅣ	9.80	7.00	4.00	416	SE2001	7.80	3.90	3.00
371		10.20	6.80	4.40	417	ZYⅡ～ZYⅢ	7.65	4.00	3.25
372	SK4010	10.70	7.30	4.60	418	SE4007	7.20	3.35	2.70
373	SK4024	10.40	7.30	4.20	419	SE3002	7.80	4.10	2.90
374	SK3019	10.10	7.20	4.10	420		6.80	5.40	3.40
375	SK4026	10.00	7.00	4.40	421	SE3001	7.10	5.20	3.60
376	SK4024	9.80	6.90	3.90	422	SK3044	7.20	5.70	3.30
377	ZZⅢ～ZZⅣ	10.00	6.30	4.00	423	SE2001	9.80	6.50	4.00
378		9.00	6.90	4.20	424		6.80	5.95	5.00
379	SK4034	9.40	6.80	3.80	425	SE3002	7.40	5.60	3.40
380	SK4044	8.85	6.00	3.80	426	SE2001	10.00	5.20	4.00
381	SK4043	9.40	6.10	4.40	427	SE3002	11.40	11.15	4.20
382	ZZⅢ～ZZⅣ	10.00	5.60	3.60	428	SE3003	9.80	5.50	4.00
383		10.40	6.60	4.40	429	SE4004	10.90	6.00	4.00
384	SK4024	11.55	6.45	4.50	430	SE3002	9.80	5.25	3.60
385	ZZⅢ～ZZⅣ	—	(3.80)	4.20	431		12.20	5.90	4.60
386	SE2001	8.40	5.50	4.50	432	SE2001	11.80	6.40	4.80
387	SE3002	10.20	5.60	4.20	433	SK2041	5.20	2.50	1.60
388		10.40	5.50	4.00	434	SE2001	5.70	2.05	2.70
389		9.90	5.15	3.70	435	SE3003	11.10	6.70	4.90
390		10.20	5.20	3.80	436		10.00	(4.00)	—
391	SE2001	11.00	5.90	4.20	437	SK1022	11.40	5.90	5.00
392	SE3003	10.00	5.60	4.20	438	ZZⅢ	10.00	5.00	3.90
393		6.10	(3.40)	—	439	SK2015	10.20	5.00	4.10
394	SE3004	7.10	5.70	4.00	440	SK1009	10.80	6.30	4.40
395	SE3002	8.60	4.50	3.20	441	SE2001	8.20	3.80	3.00
396	SK3044	7.50	4.60	2.60	442	ZZⅠ～ZZⅡ	9.25	6.40	5.35
397	SK2043	9.40	4.30	3.60	443	SK1009	6.70	5.80	3.60
398	SE3002	9.80	5.40	3.90	444	SE1002	11.60	6.30	6.60
399	SK3022	10.40	5.70	4.20	445	SB1003	11.20	6.00	6.20
400	SE4004	9.60	5.40	4.00	446	SK2015	11.20	6.45	6.50
401	SK3044	10.00	5.60	3.80	447	SE1001	11.20	6.00	4.70
402	SE3003	10.20	(4.80)	—	448	SB1003	10.80	6.15	4.50
403	SE2001	10.30	4.70	4.00	449	SE1002	10.80	6.20	4.50
404	SE3003	9.40	5.20	4.00	450	SE1003	9.60	5.00	3.80
405	SK3030	10.20	5.30	3.90					

世紀前半と考えられる。また、二重網目文と同時期と考えられる染付にいわゆる「くらわんか」手と呼ばれるものがあり、くらわんか手は18世紀末まで続く。くらわんか手には、染付で草花文などを描くものと、装飾法にいわゆるコンニャク判（390～405）や型紙摺（406・407）を用いたものとがあり、後2者のコンニャク判や型紙摺の装飾法を用いたものは17世紀末～18世紀前半に限定できる。ただし、染付で草花文を描くものは時期の特定できるものは少なく、わずかに「大明年製」銘をもつもの（413）や見込蛇ノ目釉ハギのもの（408～412）が18世紀前半代に属すると考えられ、414～417も文様・釉調から同様の時期が与えられる。なお、文様などの特徴から、440・441は18世紀後半～18世紀末の所産と考えられるが、染付で草花文を描くものの大半（418～439）は、17世紀末～18世紀末のいずれの時期に属すかは不明である。

また、以上のものの他に、18世紀末～19世紀前半の焼造と考えられるいわゆる「広東形」のもの（444～446）や高台のやや外方に踏ん張るもの（447～450）があり、これらと同様の時期の所産と考えられる筒形椀（442・443）もある。

（イ）皿

皿には、椀同様、高台施釉のものと高台無釉のものがある。高台施釉のものは一般的には高台畳付の釉を拭うが、高台畳付の釉を拭わない一群（467～484）があり、その一群のなかには高台畳付に砂が沢山熔着したいわゆる高台畳付砂熔着のもの（467～480・484）が含まれる。これら高台畳付砂熔着のものは確実に伊万里磁器創始期の製品と考えられ、高台畳付に砂が熔着しないが高台畳付の釉を拭わない一群も同時期の所産と考えられ、ともに17世紀初～17世紀前半に比定できる。なお、高台畳付砂熔着のもののなかには、中国・祥瑞の影響と考えられる口縁装飾の見られるもの（484）があり、17世紀前半でも中頃に近いものと考えられる。また、これらのものは、高台径が口径に比べて比較的小さいが、高台径を広く作ったもの（485・499）もあり、17世紀後半～17世紀末の製品と考えられる。

Table 25　伊万里染付皿属性表

No.	遺構・層位	口径	器高	底径	No.	遺構・層位	口径	器高	底径
467	ZZⅢ～ZZⅣ	－	(1.90)	4.80	485	SA4003・4004	－	(1.90)	6.20
468		13.00	3.00	4.60	486	SE4004	11.75	4.10	3.65
469	ZZⅣ～ZZⅤ	12.60	3.00	4.70	487	ZZⅡ～ZZⅢ	12.45	3.10	3.60
470	ZZⅢ～ZZⅣ	12.80	3.60	4.70	488		12.10	3.60	4.00
471	SA4001・4002	13.20	3.30	5.10	489	SE3002	12.00	3.40	4.10
472	ZZⅢ～ZZⅣ	13.40	1.70	7.00	490	SE2001	11.00	3.40	4.30
473	SK4026	13.90	2.85	7.10	491		12.40	3.90	4.65
474	ZZⅢ～ZZⅣ	12.00	3.50	3.60	492	ZZⅡ～ZZⅢ	13.50	2.95	5.80
475		－	(2.20)	8.60	493	SE3002	9.70	2.90	5.10
476	ZYⅡ～ZYⅢ	－	(2.20)	4.70	494	SE4006	14.20	4.00	7.80
477	SE5001	－	(1.10)	5.65	495	ZZⅡ	14.30	4.00	8.20
478	SK4014	－	(2.30)	4.95	496	SK1020	13.60	4.90	7.40
479	ZZⅢ～ZZⅣ	－	(2.70)	5.20	497	SK1027	13.80	3.70	8.90
480		－	(1.70)	5.30	498	SK1026	12.30	2.80	7.40
481	SK4034	13.80	3.50	5.20	499	SK4044	19.70	4.00	8.20
482	ZZⅢ～ZZⅣ	－	(1.40)	5.35	500	SK3002	21.00	5.40	8.30
483	SK4003	12.80	3.35	5.40	501	SG3002	19.80	5.80	6.00
484	SK4011	12.80	2.70	5.40					

Table 26　伊万里染付鉢・蓋・重物・瓶属性表

No.	遺構・層位	器種	口　径	器　高	底　径	No.	遺構・層位	器種	口　径	器　高	底　径
451	SE2001	鉢	14.40	5.40	9.30	456	SE1001	蓋	10.40	2.80	—
452	SK1020		15.00	7.40	7.60	457	SE1002		10.60	2.40	—
453	SK2015		20.60	7.30	10.00	454	SK2015	重物	14.10	6.70	9.80
455	SE1001	蓋	10.00	3.20	—	458	ZZⅡ～ZZⅢ	瓶	10.60	18.55	7.30

高台無釉のもの（486～489）は、雑器小皿に多く見られ、見込蛇ノ目釉ハギである。この高台無釉で見込蛇ノ目釉ハギのものは、梅の折枝文を粗放に描いた文様が多く、17世紀後半～18世紀前半と考えられる。また、同じく見込蛇ノ目釉ハギであるが、高台施釉で梅の折枝文が崩れたもの（490～492・500・501）があり、17世紀末～18世紀前半の所産と考えられ、いわゆる「くらわんか」手の一群に属する。くらわんか手の製品の存続期間内に、いわゆるコンニャク判の装飾法のもの（493）や「蛇ノ目凹形高台」のもの（496・497）が焼造され、前者は17世紀末～18世紀前半と考えられ、後者は18世紀後半～18世紀末の所産と考えられる。なお、494・495は、その文様・形態などの特徴から、18世紀中頃までのものと考えられる。

また、型紙摺の製品であるが、19世紀前半以降と考えられるもの（498）もある。

（ウ）鉢

鉢には、「富貴長春」銘をもつ蛇ノ目凹形高台のもの（451）と角福字銘をもつ蛇ノ目凹形高台のもの（452）と角鉢（453）があり、前1者は18世紀後半～18世紀末に、後2者は18世紀末～19世紀前半に各々比定できる。

（エ）蓋

蓋（455～457）は、椀の蓋と考えられ、いずれも18世紀末～19世紀前半に属する。

（オ）重物

重物（454）は、外面に草花文が描かれており、18世紀代の製品と考えられる。

（カ）瓶

瓶（458）は、貼り付け高台で、18世紀代の所産と考えられる。

(b)　青磁染付

青磁染付には、椀と蓋（507～511）があり、いずれも外面青磁釉施釉、内面染付である。椀には、渦福字銘のもの（502～504）と見込五弁花のみコンニャク判のもの（505・506）があり、前者は17世紀末～18世紀末と考えられ、後者は18世紀後半～18世紀末の所産と考えられる。また、蓋は、いずれも渦福字銘をもち、17世紀末～18世紀末の所産と考えられる。

(c)　青磁

青磁には、椀と皿、瓶がある。椀（645）は、面子に転用されているが、高台無釉で、17世紀前半でも中頃に近い時期の所産と考えられる。皿（463）は、Li錆の製品で、17世紀の前半でも中頃に近い時

Table 27　伊万里青磁染付属性表

No.	遺構・層位	器種	Li　径	器　高	底　径	No.	遺構・層位	器種	口　径	器　高	底　径
502	SE2001	椀	10.80	6.40	4.50	507	SE2001	蓋	9.50	2.70	—
503			10.80	6.80	4.20	508			10.00	3.05	—
504	SG3001		11.40	7.00	4.50	509	ZYⅡ～ZYⅢ		10.95	3.90	4.50
505	ZYⅡ～ZYⅢ		7.30	6.15	3.85	510			9.00	3.40	3.50
506	SE2001		10.20	6.40	3.90	511	SE3002		10.00	3.80	4.00

Table 28　伊万里青磁属性表

No.	遺構・層位	器種	口　径	器　高	底　径	No.	遺構・層位	器種	口　径	器　高	底　径
645	ZZⅢ～ZZⅣ	椀	－	(1.60)	4.30	464	SE2001	瓶	9.60	14.70	6.40
463		皿	24.05	(4.70)	－	465			8.70	15.10	5.10

Table 29　伊万里白磁属性表

No.	遺構・層位	器種	口　径	器　高	底　径	No.	遺構・層位	器種	口　径	器　高	底　径
512	SK4010	椀類	7.20	4.80	2.80	518	ZZⅣ～ZZⅤ	皿	－	(1.60)	5.00
513	ZZⅢ～ZZⅣ		6.20	(2.30)	－	519	ZZⅢ～ZZⅣ		13.20	3.50	5.60
514	SK5023		－	(2.40)	2.40	520	ZYⅡ～ZYⅢ		8.60	2.80	3.50
515	SE2001	紅皿	4.60	1.55	1.50	521	ZZⅡ		9.80	2.80	3.80
516	ZZⅢ～ZZⅣ	皿	－	(2.65)	5.00	522	ZZⅡ～ZZⅢ		12.60	3.40	4.30
517			－	(4.30)	7.00						

期の所産といえる。瓶には、肩の張るもの（464）とナデ肩のもの（465）とがあり、前者は18世紀代の焼造と考えられ、後者は18世紀～19世紀初に属する。

(d)　白磁

白磁には、椀類と皿がある。椀類には、高台畳付砂熔着で深い竪筋の彫文をもつもの（512）があり、17世紀初～17世紀前半の時期が与えられ、同様の深い竪筋の彫文をもつもの（513・514）も同時期と考えられる。

皿には、高台畳付砂熔着で毛彫り文様（516～518）や花紋の彫文（519）をもつものや、高台無釉で見込蛇ノ目釉ハギのもの（520・521）、高台施釉で見込蛇ノ目釉ハギのもの（522）、紅皿（515）などがあり、高台畳付砂熔着のものは17世紀初～17世紀前半に、見込蛇ノ目釉ハギのものは17世紀後半～18世紀前半に、紅皿は18世紀代に各々比定できる。

(e)　色絵

色絵には、色絵椀（460）・色絵蓋（459）・赤絵瓶（461）・赤絵水滴（462）などがあり、椀・蓋は17世紀末～18世紀末に、瓶は17世紀末～18世紀前半に、水滴は17世紀後半～17世紀末に各々比定できる。

(f)　瑠璃釉

瑠璃釉の製品には、SE2001出土の口径9.80cm、器高7.20cm、底径7.00cmの香炉（523）があり、18世紀後半～18世紀末と考えられる。

③　産地不明磁器

産地の特定できない磁器としては、染付磁器皿（525）・染付磁器土瓶（524）・染付磁器植木鉢（526）などがある。

Table 30　伊万里色絵属性表

No.	遺構・層位	器種	口　径	器　高	底　径	No.	遺構・層位	器種	口　径	器　高	底　径
459	SK2030	蓋	7.90	2.45	－	461	ZYⅡ～ZYⅢ	瓶	3.00	8.80	5.10
460	SE2001	椀	7.60	3.80	2.60	462	ZZⅢ～ZZⅣ	水滴	－	(4.90)	－

Table 31　産地不明磁器属性表

No.	遺　構	種別・器種	口　径	器　高	底　径	No.	遺　構	種別・器種	口　径	器　高	底　径
524	SK1007	染付土瓶	9.60	12.20	9.00	526	SK1023	染付植木鉢	17.00	23.70	16.80
525	SE2001	染付磁器皿	18.60	5.40	12.00						

Table 32　軒丸瓦属性表

No.	遺構・層位	瓦当部		文様	No.	遺構・層位	瓦当部		文様
		径	高さ	区径			径	厚さ	区径
527	SE4004	14.10	1.75	9.90	533	ZYⅡ～ZYⅢ	13.55	2.15	9.20
528	ZYⅡ～ⅢZY	15.10	2.45	10.30	534	不明	8.20	1.30	6.65
529	SK3001	14.60	1.95	11.20	535	ZYⅡ～ZYⅢ	8.10	1.35	6.50
530	ZZⅢ～ZZⅣ	13.65	1.90	9.55	536		8.10	1.40	6.65
531	ZZⅡ～ZZⅢ	15.30	1.70	11.40	537	SK3001	6.75	1.70	4.60
532	SK4005	16.20	2.80	12.00					

染付磁器皿は、底部糸切りで、見込に文様が描かれている。染付磁器土瓶および染付磁器植木鉢は、外面には文様が描かれているが、内面は無釉である。

2．瓦

瓦には、軒丸瓦・軒平瓦をはじめとする屋根瓦と、井戸瓦・樗瓦などの道具瓦とがある。ここでは、各種別ごとにその概略および特徴を述べる。

（1）屋根瓦

屋根瓦には、軒丸瓦・軒平瓦・軒桟瓦・丸瓦・平瓦・鬼瓦がある。

軒丸瓦は、大型のもの（527～533）と小型のもの（534～537）とがあり、瓦当部の文様は、大型のものが三ツ巴文で、小型のものは菊花文である。三ツ巴文の周辺には、いずれも珠文が配されるが、珠文数は12個のもの（527）・13個のもの（528・529）・15個のもの（531）・16個のもの（530）などがあり、また、巴の尾が長く圏線状になるもの（529～531）と尾が短く圏線状にならないもの（527・528・532・533）とがある。なお、丸瓦部分の遺存するもの（533）をみると、長さ27.30㎝、幅12.70㎝、厚さ1.70㎝、玉縁長8.10㎝を測り、丸瓦部分の中軸線上に直径1.8～2.0㎝の吊り穴が2つあり、裏面には幅3㎝前後のカキトリ痕が認められる。また、532は、瓦当が三日月状に約半分しかなく、通常の軒丸瓦とは異なる使用方法をされたものと考えられる。菊花文をもつ小型のものは、築地塀などに使用されたものと考えられ、8葉のもの（534～536）と10葉のもの（537）とがある。前者は、通常の軒丸瓦とは異なり、丸瓦部分が瓦当部分の1/8程度しかない。

軒平瓦には瓦当文様が青海波文のもの（538）と唐草文のもの（539・540）とがあり、軒桟瓦（541）の瓦当文様は唐草文である。丸瓦には、裏面に製作時の布目痕の残るもの（543）と幅約3㎝前後のカキトリ痕の認められるもの（542）とがあり、共にZYⅡ～ZYⅢの出土で、542は長さ26.10㎝、幅13.00㎝、厚さ1.65㎝、玉縁長7.45㎝を測り、543は長さ22.40㎝、幅12.90㎝、厚さ1.60㎝、玉縁長5.90㎝を測る。

Table 33　軒平瓦・軒桟瓦属性表

No.	遺構・層位	種別	瓦当部		文様	長さ	幅	厚さ
			垂れ長	厚さ	区長			
538	SK2028	軒平瓦	3.70	1.45	2.20	(9.00)	(18.80)	1.55
539	SE3003		3.75	1.60	2.40	(11.80)	23.50	1.45
540	ZZⅡ		4.00	1.20	2.70	25.80	22.90	1.75
541	SK3044	軒桟瓦	4.30	1.75	2.55	20.10	28.40	1.50

なお、全体の形状は不明であるが、鬼瓦の一部と考えられるものがSK3001（546）とSK1021（547）から出土している。現存する部分は、546が17.50cm×14.20cmで厚さ2.60cmを測り、547は12.80cm×10.50cmで厚さ3.90cmを測る。

（2）道具瓦

道具瓦には、井戸瓦・搏瓦がある。

井戸瓦（548）は、井戸SK1003で使用されたもので、31.15cm×26.45cmで厚さ5.58cmを測り、やや内側に湾曲し、外面に滑り留めの山形の刻み目を２列に持つ。

搏瓦（544・545）は、共にZZⅠから出土したもので、厚さ2.10cmを測り、「ＪＳ」の陽刻のマークがあり、組み合わせて使用するように作られている。なお、544は、14.05cm×27.80cmを測る。

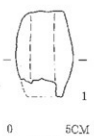


Fig. 7　土錘実則図

3．土製品

土製品には、土錘・ミニチュア製品・人形・泥面子・面子などがある。ここでは、各種別ごとにその概略および特徴を述べる。

（1）土錘

土錘（1）は、１点のみので、SK3030から出土しており、管状土錘で、長さ6.6cm、最大径4.45cmを測り、径約1.9cmの孔が穿たれている。

（2）ミニチュア製品

日常生活において一般に実用されている道具や建造物をモデルとして製作された小型の製品をミニチュア製品として扱った。

ミニチュア製品は、対象とするモデルによって、器物・道具などをモデルとしたものと建造物などをモデルとしたものとに分けられる。前者は、ままごと道具や縁道具として用いられたと考えられ、壺・椀・紅皿・滑明皿・壺・鍋・釜・角鉢・擂鉢・片口・筆洗などのままごと道具のミニチュア製品と独楽・船などの雛道具のミニチュア製品の両者がある。後者は、箱庭道具のパーツとして用いられたと思われ、道標・橋・社・灯篭などがある。

壺は、すべて型打ちで、黄色地に赤色と緑色の文様のある黄瀬戸をモチーフとしたと考えられるもの（553）や、正方形で斜めにつまみの付くもの（551・552）、円形で白色に彩色されるもの（613）、つまみが４つ付くもの（554）などがある。椀（559）は、手づくね成形で、外面型打ちである。底部には白色の彩色が認められ、その他の部分は赤色に彩色されている。紅皿（558）は、伊万里白磁紅皿をモチーフにしたもので、緑色の彩色が認められる。燈明皿（561）および壺（556）は、手づくね製品で、共に素焼きのままで彩色は認められない。鍋（557）は、素焼きの手づくね製品で、把手が付く。釜（560）は、鍋釜をモチーフにしたと考えられ、外面は緑色に彩色され、型打ちである。角鉢（562）は、型打ちで、６角形を呈し、白色の彩色が認められる。擂鉢（563）は、ロクロ成形で、内面に銀色の胡粉が見られる。片口には、型打ちのもの（564）と手付くねのもの（565）がある。筆洗（553）は、底板に

Table 34　ミニチュア製品属性表

No.	遺構・層位	種別	口径	器高	底径
551	ZZⅡ～ZZⅢ	壷	3.20	0.95	3.10
552			3.50	0.95	3.15
553	SE3003	筆洗	3.55	3.25	5.90
554	ZZⅡ～ZZⅢ	壷	3.70	1.00	－
555	ZYⅡ～ZYⅢ		4.90	0.95	－
556	ZZⅡ～ZZⅢ	壺	－	3.90	－
557	SK1020	鍋	3.40	1.10	1.60
558	SK3007	紅皿	2.70	1.35	1.00
559	SE4007	椀	－	1.55	2.30
560	ZZⅡ～ZZⅢ	釜	5.35	2.80	2.55
561	SK2016	灯明皿	3.70	1.50	2.75
562	SK2015	角鉢	6.25	2.10	2.70
563	ZYⅡ～ZYⅢ	擂鉢	6.50	3.15	3.00
564	ZZⅢ～ZZⅣ	片口	5.50	2.20	3.90
565	SK3018		4.90	2.50	2.40
613	SK2009	壷	2.30	1.10	－

No.	遺構・層位	種別	法量
549	SK3058	独楽	径：2.70　高さ：1.60
550	SK2009		径：2.80　高さ：2.10
566	SK2028	道標	幅：1.35　高さ：2.70
567	SK2009	社	最大幅：2.60　高さ：(4.20)
568	SK3024	橋	幅：3.15　長さ：(6.35)
569	SE3001		幅：3.00　長さ：(5.10)
570	SK2015		幅：3.20　長さ：(5.30)
571			幅：2.00　長さ：(4.90)
572	ZZⅡ～ZZⅢ	燈篭	最大幅：2.40　高さ：(3.10)
573	SE3002		最大幅：6.30　高さ：(3.80)
574	SK3069		最大幅：6.35　高さ：(3.40)
599	SK2019	船	長さ：(3.15)　高さ：1.70
600	ZZⅡ～ZZⅢ		長さ：8.20　高さ：1.40

側板を貼り付けて作っている。

独楽には、型打ちの製品（549）と型合わせの製品（550）との両者があり、前者には白色の彩色が認められる。船（599・600）は、型打ち製品と考えられるが、559には型合わせの「一寸法師」が乗っている。なお、船は、箱庭道具のパーツとして使用された可能性もある。

道標（566）は、型合わせで、「天市」と「なだ次」の文字が見られる。橋（568～571）には、大小あるが、いずれも型打ちで、白色の彩色が認められる。社（567）は、緑色と白色の彩色が認められ、型合わせで作られている。灯籠は、型合わせのもの（572）と型打ちのもの（573・574）とがあり、前者には白色の彩色が認められる。また、後者は中空で、「梅鉢」の家紋の見られるもの（573）と16弁の菊紋の見られるもの（574）とがある。

（3）人形

人や生物の姿を模したものを人形として扱った。ただし、必ずしも日常生活にそのモデルが存在するとは限らず、信仰的な用途を持つと思われるものも便宜上含めた。

人の姿を模したものには力士・組み相撲・女人・女官・上下姿などがあり、信仰的な用途を持つと思われるものには仏像や七福神をはじめとする神像などがある。また、動物の姿を模したものには、鳩・鶏・鼠・牛などがある。

力士（576）および組み相撲（582）、上下姿（588）は、型合わせで、底部有孔である。女人（584）は、中空で、型合わせ作りである。女官（585）は、型合わせで、赤色の彩色が認められる。

仏像には、観音をモチーフにしたもの（575・577）や、天部もしくは地蔵をモチーフにしたもの（580）、傘地蔵をモチーフにしたもの（578・579）などがあり、いずれも型合わせで製作されている。なお、575には銀色の胡粉が、577には金色の胡粉が、578－580には赤色の彩色が認められる。また、神像は、いずれも型合わせ作りで、天神をモチーフにしたものと七福神の恵比須をモチーフにしたもの（583）とがある。天神をモチーフにしたものには、大（586・587）・小（581）あり、後者には緑色の彩色が

Table 35　人形属性表

No.	遺構・層位	種　別	現存長	現存幅	No.	遺構・層位	種　別	現存長	現存幅
575	ZZⅢ～ZZⅣ	仏像	2.75	2.70	586	SK1001	天神	4.60	6.30
576	SB1003	力士	3.30	2.30	587	ZYⅡ～ZYⅢ		4.60	6.40
577	SK4024	仏像	6.90	3.90	588	ZZⅢ～ZZⅣ	上下姿	4.00	5.90
578	SE3003	傘地蔵	6.20	3.15	593	SK4010	鳩	3.50	4.00
579	ZZⅡ～ZZⅢ		5.60	3.20	594	ZZⅢ～ZZⅣ		4.00	5.20
580	SE3002	仏像	5.30	3.20	595	SK2015	鶏	2.90	4.20
581	SK2009	天神	3.40	2.55	596	ZZⅡ～ZZⅢ		4.75	6.30
582	ZZⅡ～ZZⅢ	組み相撲	4.60	3.75	597		鼠	3.00	4.35
583	ZZⅢ～ZZⅣ	恵比寿	4.10	4.20	598	ZZⅢ～ZZⅣ	牛	2.60	5.60
584	SE3003	女人	4.00	3.40	610	SK4033	風神・雷神	4.85	4.40
585	ZZⅢ～ZZⅣ	女官	5.50	3.50					

認められ、恵比須をモチーフにしたものには白色の彩色が認められる。なお、610は、風神か雷神の一部と考えられるものである。

鳩（593・594）・鶏（595・596）・鼠（597）・牛（598）は、いずれも型合わせ作りであるが、中実のもの（593・594・596・598）と中空のもの（595・597）とがある。また、594と595には赤色の彩色が認められる。

（4）泥面子

粘土を型抜きにした円盤状ないし偏平な土製品を泥面子として扱った。泥面子には、円盤状を呈し、上面に文字・文様などを型抜きした「面打」と、人面、動物面、道具などを型抜きした「面模」とがある。

面打には、「梅鉢」（611）や「三階松」（612）の家紋をモチーフにするものや文字をモチーフにするもの（607～609）がある。また、面模には、鍾馗（601）・翁（602）・大黒天（603）・人面（606）などの人面をモチーフにするものと猿（604）・蛙（605）などの動物面をモチーフにするものとがある。なお、611を除く面打には、赤色の彩色が認められる。

（5）面子

面子には、当初から面子として製作されたものと他のものの転用品とがあるが、今回の調査では後者しか出土していない。なお、転用された元の製品をみると、瓦と土器とがある。

瓦の転用品（614・615・650）は、すべて平瓦を使用している。また、土器の転用品には、弥生土器（651）・土師器（616）・陶器（617～632・647・648・654）・磁器（633～646・649・652・653）が利用されて

Table 36　泥面子属性表

No.	遺構・層位	種別	縦	横	厚さ	No.	遺構・層位	種別	縦	横	厚さ
601	SB1003	面模	3.00	2.15	0.55	607	SK1020	面打	1.60	1.75	0.40
602	SK2009		2.70	2.00	0.40	608	SK2043		1.65	1.60	0.30
603	SK3060		2.50	2.50	0.40	609	ZZⅢ～ZZⅣ		1.40	1.60	0.30
604	SK2009		3.00	2.60	1.30	611	ZYⅡ～ZYⅢ		4.60	3.75	0.70
605	ZZⅢ～ZZⅣ		3.30	2.80	0.90	612	ZZⅡ～ZZⅢ		2.70	2.70	0.55
606	ZZⅡ～ZZⅢ		1.60	1.30	0.50						

いる。

これらの元の製品をみると、弥生土器（651）は、器種不明の底部破片で、土師器（616）は、17世紀代の鍋である。陶器には、灰釉陶器・丹波・備前系陶器・唐津・唐津系陶器・瀬戸美濃と産地不明の陶器があり、磁器には、中国製磁器と伊万里の産品が見られる。灰釉陶器（654）は、糸切りの皿で、中世初頭のものと考えられる。丹波は、ヘラ描の擂鉢（617）で、少なくとも17世紀中頃までの製品である。備前系陶器は、クシ描の擂鉢（618）で、18世紀代に焼造されたものである。唐津には、椀（619～621）・皿（622）・鉢（623）がある。椀・皿は、16世紀末～17世紀初頭の製品と考えられ、621には胎土目積みの痕跡が認められる。なお、鉢（623）は、見込蛇ノ目釉ハギで、17世紀代の焼造と考えられる。唐津系陶器には、17世紀後半代の高台施釉の椀（624・625）と17世紀後半～18世紀前半の青緑釉椀（626・627）とがある。瀬戸美濃はいずれも椀で、16世紀後半のもの（628）、17世紀前半のもの（629・630）、17世紀後半のもの（631）、18世紀代のもの（632）がある。。産地不明陶器は、椀（647・648）である。中国製磁器は、青花椀（633）で、16世紀末～17世紀初頭のものと考えられる。伊万里には、染付椀（634～641）・染付皿（642・643・652・653）・染付瓶（649）・青磁染付椀（644）・青磁椀（645・646）などがあり、これらのなかには、高台畳付砂熔着で17世紀初頭～17世紀前半と考えられる染付椀（634～636）や染付瓶（649）、17世紀の前半でも中頃に近い時期と考えられる高台無釉の青磁椀（645）、17世紀中頃の高台無釉の染付椀（637・638）、高台無釉・見込蛇ノ目釉ハギの染付皿で17世紀後半～18世紀前半と考えられるもの（642）、「大明年製」銘をもつもの（653）、崩「大明年製」銘をもつもの（640）などが含まれる。

Table 37　面子属性表

No.	遺構・層位	径	備　考	No.	遺構・層位	径	備　考
614	ZZⅡ～ZZⅢ	3.65	平瓦	635	SK5009	4.25	伊万里染付椀
615	ZZⅡ	4.40		636	SK4017	4.55	
616	SK4002	2.90	土師器鍋底部	637	ZZⅢ～ZZⅣ	4.60	
617	ZZⅣ～ZZⅤ	4.60	丹波擂鉢・ヘラ描	638	SK4026	4.40	
618	ZZⅡ～ZZⅢ	4.20	備前系擂鉢・クシ描	639	ZZⅢ～ZZⅣ	4.65	
619	SK4002	4.50	唐津椀	640	SE3003	4.25	
620	ZYⅡ～ZYⅢ	3.95		641	SG3001	3.60	
621	ZZⅠ	4.25	唐津椀・胎土目	642	SK1011	4.70	伊万里染付皿
622	ZZⅢ～ZZⅣ	4.95	唐津皿・砂目	643	ZZⅢ～ZZⅣ	3.65	
623	SB1003	5.00	唐津鉢	644	ZZⅡ～ZZⅢ	4.00	伊万里青磁染付椀
624	ZZⅡ～ZZⅢ	4.55	唐津椀	645	ZZⅢ～ZZⅣ	4.30	伊万里青磁椀
625	ZZⅢ～ZZⅣ	4.95		646	SK4010	4.35	
626	SD4002	4.00	唐津系青緑釉椀	647	ZZⅡ～ZZⅢ	3.75	陶器椀
627	SG3002	4.80		648	SK1015	3.30	
628	ZZⅣ～ZZⅤ	4.75	瀬戸美濃椀	649	ZZⅡ	4.00	伊万里染付椀
629	ZZⅢ～ZZⅣ	4.40		650	SK1005	5.85	平瓦
630	ZZⅡ～ZZⅢ	4.40		651	SK4010	5.60	弥生土器？底部
631	ZZⅢ～ZZⅣ	5.00		652	SK3002	6.05	伊万里染付皿
632	SE3002	4.50		653	ZZⅢ～ZZⅣ	4.35	
633	ZZⅡ～ZZⅢ	4.40	青花椀	654	SK4047	6.25	灰釉陶器皿
634	ZZⅢ～ZZⅣ	3.10	伊万里染付椀				

4．石製品

石製品には、五輪塔をはじめとする石製品や石臼・硯などがある。ここでは、各種別ごとにその概略および特徴を述べる。

（1）石造物

石造物としては、五輪塔３点と一石五輪塔８点、燈篭１点が出土している。これらのうち、五輪塔と一石五輪塔は、供養塔など本来の用途に用いられた状態で出土したものはなく、すべて礎石建物の礎石や墓地基礎に転用された状態で出土している。また、五輪塔および一石五輪塔は、いずれも花崗岩製である。これらの石造物のうち五輪塔と一石五輪塔については、先学（藤沢 1982）の研究があるので、ここではその研究にもとづいて概略を述べる。

五輪塔３点のうち、今回図示した２点（661・662）は、火輪の部分で、上面からほぞ穴が穿たれており、その形態から15世紀代の製作と考えられる。

８点の一石五輪塔のうち、空輪・風輪・火輪・水輪・地輪のすべての揃う完形のもの（655）は１点のみで、他は一部しか残存しない。欠損するものには、空輪と風輪の残るもの（662・663）、火輪と水輪の残るもの（658・664）、水輪のみのもの（657）、水輪と地輪の残るもの（659）、地輪のみのもの（656）がある。空輪と風輪の残る662・663は、空輪と風輪の下部が丸味を持ち、15世紀代の製品と考えられる。火輪と水輪の残るもののうち、658は16世紀前半に、664は16世紀後半でも比較的早い時期に、各々その形態的特徴から比定できる。また、水輪のみの657は、全体に丸味を持ち、15世紀代の製作と考えられる。水輪と地輪の残る659の地輪下の整形は雑で、安置式から埋立式への移行開始期の製品と考えられ、16世紀後半でも比較的早い時期に比定できる。一方、地輪のみの656は、地輪下の整形が雑になっておらず、16世紀前半までの製品と言えよう。なお、空輪・風輪・火輪・水輪・地輪のすべての揃う655は、埋立式のもので、16世紀後半でも比較的遅い時期に比定できる。

燈篭（671）は、焼けた状態で、上層（SK3111）内から出土した。欠損しているが、多角形を呈し、燈篭の傘の部分に当たると推定できる。

Table 38　石造物属性表

No.	遺構・層位	種別	空輪		風輪		火輪		水輪		地輪	
			幅	高さ	幅	高さ	幅	高さ	幅	高さ	幅	高さ
655	SA4001	一石	9.5	6.2	10.2	3.0	13.6	7.0	13.8	6.6	13.8	33.1
656	SA3006	五輪塔	—	—	—	—	—	—	—	—	17.9	16.9
657	SA4003		—	—	—	—	—	—	22.3	19.0	—	—
658			—	—	—	—	17.8	12.5	16.7	11.2	—	—
659	ZZⅢ		—	—	—	—	—	—	19.0	13.7	20.0	16.5
660	ZZⅣ	五輪塔	—	—	—	—	24.1	16.0	—	—	—	—
661	SA3006		—	—	—	—	24.4	15.0	—	—	—	—
662	SX4002	一石	11.6	8.6	12.6	6.9	—	—	—	—	—	—
663	SA4001	五輪塔	14.3	12.9	15.0	7.3	—	—	—	—	—	—
664	SX4001		—	—	—	—	16.4	9.0	16.6	9.7	—	—
671	SK3067	灯篭	一辺の長さ：6.8　高さ：7.8　厚さ：5.0									

（2）石臼

石臼は、上石12点、下石11点の計23点出土しているが、いずれも、石材は花崗岩で、いわゆる「粉挽き臼」である。出土状況からは、本来の用途に使用された後土壙などに廃棄されたと考えられるものもほかに、井戸の石組や、礎石建物の礎石や鎌池基礎に転用されたものも多い。これらの石臼については、先学（三輪 1978）の研究があるので、ここではその研究にもとづいて概略を述べる。

出土した石臼は、上石12点、下石11点で、全体の形状の判るものは、上石１点（665）と下石４点（666～669）のみである。

665は、上臼で、直径31.5cm、高さ10.5cm、ふくみは1.8cmを測る。上縁は、断面方形を呈し、幅5.5cm、高さ1.9cmである。供給口は、上径は5.8cm、下径5.0cm、最小径4.6cmを測り、片面穿孔で、上面の供給口は丁寧に整形されている。また、芯棒受けは、断面逆三角形を呈し、径2.6cm、深さ1.8cmを測る。挽き木の取りつけ方法は、横打ち込み式である。臼の目は、６分割５～９溝で、一部主溝が切線を呈する部分があり、２ヶ所でこぼれ目が認められる。なお、回転方向は、反時計方向の、正常臼である。

666は、下臼で、直径38.2cm、高さ18.8cmを測り、ふくみはほとんど認められない。芯棒孔は、上径は10.8cm、下径11.6cm、最小径3.4cmを測る。芯棒孔のえぐりは小さく、1.2cmを測るにすぎない。芯棒孔は両面穿孔で、上下面共に丁寧に整形されている。臼の目は、８分割５溝である。なお、回転方向は、反時計方向の、正常臼である。

667は、下臼で、直径31.0cm、高さ8.6cm、ふくみは1.8cmを測る。芯棒孔は、上径は5.6cm、下径7.7cm、最小径2.7cmを測る。芯棒孔のえぐりは1.5cmと比較的小さく、芯棒孔は片面穿孔で、上面は丁寧に整形されている。臼の目は、８分割３～７溝である。なお、回転方向は、反時計方向の、正常臼である。

668は、下臼で、直径31.6cm、高さ14.4cm、ふくみは1.9cmを測る。芯棒孔は、上径は4.8cm、下径6.2cm、最小径2.1cmを測る。芯棒孔のえぐりは4.3cmと大きく、芯棒孔は両面穿孔で、上面は丁寧に整形されている。臼の目は、７分割３～６溝で、一部主溝が切線を呈する部分が認められる。なお、回転方向は、反時計方向の、正常臼である。

669は、下臼で、直径31.7cm、高さ9.1cm、ふくみは2.3cmを測る。芯棒孔は、上径は3.9cm、下径6.9cm、最小径2.8cmを測る。芯棒孔のえぐりは2.2cmと比較的小さく、芯棒孔は片面穿孔で、上面は丁寧に整形されている。臼の目は、７分割３～７溝である。なお、回転方向は、反時計方向の、正常臼である。

（3）硯

出土した硯には、完形のものはなく、大半は欠損しているが、小型のものから大型ものまで連続的にみられ、幅が約5.0cm＝１寸６分のもの（673）、約6.0cm＝２寸のもの（675）、約6.7cm＝２寸２分のもの（678・681）、約7.9cm～8.2cm＝２寸６分～２寸７分のもの（674・676・677・679・680）がある。

Table 39　石臼属性表

No.	遺構	種別	直径	高さ	ふくみ	芯棒受		芯棒孔				分割	溝数
						径	深さ	上径	下径	最小径	抉り		
665	SK4007	上石	31.5	10.5	1.8	2.6	1.8	－	－	－	－	６分割	５～９
666	SR2002	下石	38.2	18.8	－	－	－	10.8	11.6	3.4	1.2	８分割	5
667	SB3001	下石	31.0	8.6	1.8	－	－	5.6	7.7	2.7	1.5	８分割	３～７
668		下石	31.6	14.4	1.9	－	－	4.8	6.2	2.1	4.3	７分割	３～６
669	SA3003	下石	31.7	9.1	2.3	－	－	3.9	6.9	2.8	2.2	７分割	３～７

Table 40　硯属性表

No.	遺構・層位	長さ	幅	厚さ	No.	遺構・層位	長さ	幅	厚さ
673	ZYⅡ～ZYⅢ	6.30	4.60	0.30	678	SE3003	11.90	6.30	1.15
674	ZZⅣ～ZZⅤ	10.20	7.20	1.75	679	ZZⅢ～ZZⅣ	15.60	2.10	1.95
675	SE3002	10.30	5.40	1.35	680	SE2001	14.70	2.60	2.50
676	SK3019	4.75	5.90	1.10	681	SD1001	16.70	6.20	1.60
677	SK2015	8.20	7.10	2.05					

般に、硯には、幅1寸3分～1寸5分（3.9cm～4.6cm）で長さ2寸5分～3寸（7.6cm～9.1cm）の行商人や旅人などが携帯用に使用したいわゆる「タビ硯」といわれる小硯や、「カケ硯箱」と呼ばれる小引出しがついた箱の上段に硯・墨・筆・水滴などと一緒に納まって利用されていたといわれる幅2寸（6.1cm）程度で長さ4寸6分～5寸1分（14.0cm～15.5cm）の商家の売掛帳への記帳用に利用されたいわゆる「カケ硯」などが知られており、幅2寸前後の675はいわゆる「カケ硯」に当たる可能性がある。

また、形態的にはいわゆる短冊形の長方硯のみで、硯陰が平坦なもの（673～680）と硯陰に彫り込みのあるもの（681）とがある。

なお、硯面の丘の部分に顕著な使用の痕跡の見られるもの（679）や硯陰に「極上高嶋石」の釘彫りのあるもの（681）などがある。

（4）その他

その他の石製品としては、SK2019から出土した軽石（670）と、SK2043から出土した2辺に刻離痕の見られる石製品（672）とがある。670は縦11.70cm、横7.90cm、厚さ4.60cmを測り、672は縦3.20cm、横4.50cm、厚さ1.70cmを測るが、詳細については不明である。

5．金属製品

金属製品には、青銅製品と鉄製品がある。青銅製品には銭貨・漆管・装身具類・家具類などがあり、鉄製品には武器類・調理具・工具・農具・発火具・釘類などがある。ここでは、各種別ごとにその概略および特徴を述べる。

（1）青銅製品

①　銭貨

銭貨には、渡来銭と本邦銭がある。

渡来銭としては、「淳化元宝」（682）・「天聖元宝」（683・684）・「皇宋通宝」（685）・「熙寧元宝」（686）・「紹聖元宝」（687）などがあり、いずれも北宋銭である。初鋳年は、「淳化元宝」が990年、「天聖元宝」が1023年、「皇宋通宝」が1039年、「熙寧元宝」が1068年、「紹聖元宝」が1094年である。

本邦銭としては、「寛永通宝」（688～718）と「文久永宝」（720）と、いわゆる「ビタ銭」と総称される「銅銭」（719）がある。

寛永通宝は、宝永3年（1626）から明治2年（1869）までの約240年間、各地域で鋳造されたため、その種類は数百種、細分すると千数百種にも及んでいる。一般に、明暦2年（1656）以前に鋳造されたものを「古寛永」、寛文8年（1668）以降に鋳造されたものを「新寛永」と称しており、前者は銭文の

Table 41　銭貨属性表

No.	遺構・層位	種　別	外径	穿径	重量	No.	遺構・層位	種　別	外径	穿径	重量
682	ZZⅣ～ZZⅤ	淳化元宝	2.47	0.69	3.23	702	SK3003	寛永通宝	2.60	0.61	3.43
683	ZZⅢ～ZZⅣ	天禧元宝	2.54	0.80	3.23	703		寛永通宝	2.56	0.66	3.09
684		天聖元宝	2.50	0.71	2.92	704		寛永通宝	2.58	0.68	3.58
685	SK3001	皇宋通宝	2.47	0.77	2.33	705		寛永通宝	2.57	0.67	3.23
686	ZZⅣ	熙寧元宝	2.42	0.75	2.22	706		寛永通宝	2.58	0.63	3.80
687	SK4010	紹聖元宝	2.43	0.70	3.14	707	ZYⅡ～ZYⅢ	寛永通宝	2.55	0.64	3.82
688	SK2009	寛永通宝	2.53	0.71	3.25	708	SK2043	寛永通宝	2.56	0.68	3.54
689		寛永通宝	2.48	0.66	3.39	709	SK1009	寛永通宝	2.53	0.55	3.85
690	SK4010	寛永通宝	2.49	0.64	3.40	710	SK3074	寛永通宝	2.34	0.71	2.12
691	SK4026	寛永通宝	2.53	0.66	2.88	711	SK3035	寛永通宝	2.35	0.70	2.30
692	SK4017	寛永通宝	2.39	0.62	2.24	712	SK2015	寛永通宝	2.34	0.68	2.69
693	ZYⅡ～ZYⅢ	寛永通宝	2.40	0.65	2.80	713		寛永通宝	2.33	0.71	2.22
694	ZZⅢ～ZZⅣ	寛永通宝	2.50	0.58	2.93	714		寛永通宝	2.38	0.68	2.70
695		寛永通宝	2.53	0.63	2.95	715		寛永通宝	2.23	0.65	1.98
696		寛永通宝	2.43	0.73	2.93	716	ZZⅠ	寛永通宝	2.38	0.68	2.83
697	SK3065	寛永通宝	2.48	0.60	3.72	717	SK2016	寛永通宝	2.33	0.70	2.12
698	SG3002	寛永通宝	2.43	0.56	3.65	718		寛永通宝	2.41	0.67	2.13
699	ZZⅢ～ZZⅣ	寛永通宝	2.53	0.61	3.24	719	ZZⅡ	ビタ銭	1.61	0.30	1.10
700	SG3002	寛永通宝	2.51	0.65	1.91	720		文久永宝	2.80	0.74	3.83
701	SK1007	寛永通宝	2.52	0.70	3.32						

宝字の足がス宝、後者は銭文が細字の傾向を示し、宝字の足がハ宝であることを特徴とすると言われている。この基準によると、今回報告する寛永通宝は、すべて「新寛永」に当たると考えられるが、詳細は不明である。ただ、702～706は、背郭上に「文」字を配するいわゆる「文銭」で、寛文8年（1668）～天和3年（1683）に武蔵国亀井戸村で鋳造された寛文亀井戸銭であることが判る。

② 煙管

煙管は、「ラウ」の両端に「雁首」と「吸口」が接合されて使用されるものであるが、ラウは完全な形で出土したものはなく、雁首と吸口のみがその形態を知ることができる。

雁首には、脂返しが大きく湾曲するいわゆる「河骨形」で、火皿と首部との接合部には補強帯が巡るが、首部は火皿の下からラウ接合部まで1枚の銅板を巻いて製作される Ⅰ類（721・724）や、河骨形であるが、火皿と首部との接合部の補強帯の消失したⅡ類（722・725）、脂返しの湾曲が小さくなり、火

Table 42　煙管属性表

No.	遺構・層位	部位	全長	火皿径	径	厚さ	No.	遺構・層位	部位	全長	径	厚さ
721	SK4017	雁首	6.35	1.60	1.00	0.15	727	ZZⅠ	吸口	8.50	1.05	0.10
722	SK3021		5.60	1.70	1.00	0.15	728	SK2015		5.55	0.90	0.04
723	SK1012		4.05	1.05	1.00	0.05	729			5.65	1.25	0.10
724	ZZⅠ～ZZⅡ		(5.40)	—	1.00	0.10	730	ZZⅢ		7.35	0.90	0.10
725	ZZⅡ～ZZⅢ		(3.60)	1.70	0.90	0.08	731	SK3077		5.45	1.05	0.10
726	SK2015		5.20	1.85	1.10	0.10	732	ZZⅣ		4.00	1.20	0.05
734	SK4014		—	1.50	—	0.07	733	ZZⅠ		3.85	0.90	0.05

Table 43　青銅製品属性表

No.	遺構・層位	種　別	全長	幅	重さ	No.	遺構・層位	種　別	全長	幅	重さ
735	SK2015	簪	12.20	1.25	5.64	739	ZZⅡ～ZZⅢ	掛金具	7.60	0.45	6.26
736	SK3086	釣針状	7.40	0.35	9.22	740	ZZⅡ～ZZⅢ	把　手	10.70	0.40	12.20
737	ZYⅡ～ZYⅢ	金　具	3.65	－	3.34	744	ZZⅠ	鈴？	－	－	5.00
738	SG3001		7.70	0.50	13.26	745	SK3084	巻金具	6.40	2.10	7.15

皿も首部とともに１枚の鋼板を巻いて製作したと考えられるⅢ類（726）、火皿が小型化し、形態的には逆台形を呈し、脂返しの湾曲がほとんどなくなり、火皿の下に直角に取りつくようになるⅣ類（723）などがある。

これらの雁首の製作年代は、先学の研究（古泉 1983）によると、Ⅰ類は17世紀後半、Ⅱ類は18世紀前半、Ⅲ類は18世紀後半、Ⅳ類は19世紀を各々中心とする時期と考えられており、また、Ⅰ類の吸口としては731・732が、Ⅱ類の吸口としては730が、Ⅲ類の吸口としては728・729が、Ⅳ類の吸口としては727・733が各々あげられる。なお、734は、Ⅰ類もしくはⅡ類の火皿と考えられる。

③　装身具類

装身具類としては簪（735）が挙げられる。簪は、２本足を持ち、頭部は耳掻き状に成形され、足部の上端には臼玉状の珊瑚の装飾が付き、金銹金の痕跡が認められる。

④　家具類

家具類としては、把手・巻金具・釣針状金具・掛金具などがある。把手（740）は簞笥の把手金具と考えられ、巻金具（745）は簞笥や戸襖の引手に巻かれたもので、釘打ちの孔が見られる。釣針状金具（736～738）は、簾を巻き戻した時に引っ掛けたり、蚊帳を吊るときに使う金具と思われ、736は胴部に陰刻文が見られる。また、掛金具（739）は、釣針状金具と同様になんらかの掛け金具として使用されたものであろう。

⑤　その他

上部が欠損しているが、鈴ではないかと思われるもの（744）がある。

（２）鉄製品

①　武器類

武器類としては、刀子と剃刀とがある。刀子は、刃部のほぼ完形のもの（754）と柄の部分だけ遺存するもの（755・756）がある。755は柄部の木質が残る。剃刀（753）は、木質が一部残り、片刃である。

Table 44　鉄製品属性表

No.	遺構・層位	種　別	全長	幅	重さ	No.	遺構・層位	種　別	全長	幅	重さ
741	SE3002	巻金具	8.90	3.80	0.50	751	SE3002	火打金	6.50	2.75	0.10・0.33
742			5.30	0.80	0.20	752	ZZⅡ～ZZⅢ		9.10	2.10	0.50
743	ZZⅡ～ZZⅢ	？	7.30	－	－	753	SK2009	剃　刀	6.70	0.90	0.20
746	SD1001	鳳　鈴	6.20	6.00	0.20	754	SE3003	刀　子	8.00	2.00	0.30・0.40
747	SK3035		8.20	－	0.30・0.35	755	SE3002		6.40	1.65	0.60・0.85
748	ZZⅠ	？	12.90	4.50	0.35・0.65	756	SG3002		7.30	1.80	0.55
749	SK2044	鉈	7.30	5.30	0.85	757	SE3003	鑿	17.20	2.40	0.45・1.20
750			5.80	5.10	0.75	758	SK3031	鎌	21.60	4.80	0.10～0.50
						759	ZYⅡ～ZYⅢ	包丁	18.30	5.50	0.10～0.30

② 調理具

調理具としては、包丁が挙げられる。包丁（759）は、先端部1/3程度が欠損するが、その形態から出刃包丁と考えられ、柄の部分はほぼ完形である。

③ 工具

工具としては、鉋と鑿とがある。鉋（749・750）は、片刃で、750の頂部には使用時の叩打痕が認められる。鑿（757）は、長方形の鉄板の先端に刃部を付けたもので、刃部は本来は片刃と考えられるが、何度かの再生の痕跡が認められ、現状では両刃になっている。

④ 農具

農具としては鎌がある。鎌（758）は、片刃の鎌で、茎の外側部分には柄との装着時の打ち込みの痕跡が認められる。

⑤ 発火具

発火具としては、火打金がある。火打金には、平面二等辺三角形をなし頂部に紐穴をもつ山型火打金（751）と木質の柄に取り付けられて使用されたと考えられる鎌型火打金（752）とがある。鎌型火打金には、中央部に使用痕としての抉りが認められる。

⑥ 釘類

釘類としては、和釘と鑿とがある。

和釘は、建築用和釘で、断面方形を呈するいわゆる「角釘」である。和釘には、頭のつくり出しのないいわゆる「切釘類」と、頭が基部から曲がって作られるいわゆる「折釘類」、頭をつくり出したいわゆる「頭つくり出し類」とがある。切釘類（769・770・772・773・776・778・779・784・785）は、単純に切断されて製作されたものと頭が面とりの行われるものとがあるが、明確に分別できなかったので、ここでは切釘類と一括した。折釘類としては、レ形の両端の尖ったいわゆる「合折釘」（766）がある。また、頭つくり出し類としては、頭に逆台状の板状のつくり出しの付くいわゆる「角釘」（764・767・771・774・775・777・783・786）、角釘の頭を偏平に叩き巻いたいわゆる「頭巻」（760～763）、頭が半円球を呈するいわゆる「蟹目釘」（768）とがある。また、780～782は、頭が欠損しているため、種別は不明である。

Table 45 釘類属性表

No.	遺構・層位	全長	幅	重さ	No.	遺構・層位	全長	幅	重さ
760	SK1015	16.80	0.50×0.50	21.74	774	SE3002	5.00	0.30×0.30	1.51
761		16.55	0.55×0.60	20.78	775	SK2025	6.20	0.55×0.55	7.02
762	ZZⅡ～ZZⅢ	8.50	0.45×0.45	5.60	776	SK2040	8.25	0.30×0.30	4.95
763		4.40	0.40×0.40	2.44	777		7.50	0.50×0.50	6.61
764	SK4026	9.05	0.50×0.50	12.66	778	SE3002	2.50	0.30×0.35	0.86
765	SK2009	8.20	1.05×1.05	43.68	779	SK2025	4.50	0.50×0.50	1.93
766	SK4034	13.50	0.55×0.65	20.50	780	SE3002	5.00	0.30×0.30	2.47
767	SK1007	6.50	0.55×0.55	5.20	781		4.80	0.60×0.60	4.37
768	ZZⅡ～ZZⅢ	4.15	0.20×0.20	1.80	782		4.50	0.40×0.40	1.01
769	SK2009	4.60	0.40×0.40	1.76	783	SK3050	5.70	0.55×0.50	5.30
770		6.50	0.40×0.40	2.78	784	SK2040	4.00	0.40×0.40	1.29
771	SE3002	8.20	0.60×0.70	8.92	785		4.40	0.40×0.40	2.32
772		7.45	0.55×0.70	8.66	786		4.20	0.40×0.40	1.25
773		5.05	0.50×0.50	3.94					

なお、和釘の規格としては、5寸前後のもの（760・761）、4寸前後のもの（766）、3寸前後のもの（764）、2寸5分前後のもの(771・777)、2寸2分～2寸1分のもの(762・770)、1寸7分前後のもの(774・783)、1寸4分前後のもの(763・768・769・784～786）がある。

また、鎹の可能性があるものとしては765が挙げられるが、断定できない。

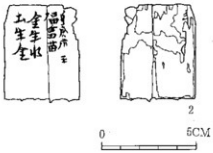


Fig. 8　木札実則図

⑦　その他

その他としては、風鈴や環金具などがある。

風鈴は、鈴状の形態を呈するもの（747）と外面に家型の文様のあるもの（746）とがあり、後者の頂部には穿孔が見られる。環金具（741・742）は、用途は不明であるが、円形の環に断面長方形の鉄板を取り付けたものである。その他、頂部が円形の環状を呈するもの(743)や頂部が二股に分かれ下端の尖ったもの（748）などがある。

6．木製品

木製品としては、胞衣壷から木札（2）が1点出土している。木札には、『垂感□□　福宮満□　金生水　土生金』と墨書されており、呪符木簡の一種と考えられる。

7．その他

その他の製品としては、出土層位・遺構は不明であるが、独楽（590）がある。この独楽は、591・592のような巻貝類の「バイ」を加工して作ったものと考えられ、同様の製品（589）は、明石城跡でも見られた。

なお、バイ：*Babylonia japonica* 以外の巻貝類としては、クロアワビ：*Notohaliotis discus*、アカニシ：*Rapana thomasiana*、サザエ：*Turbo (Batillus) cornutus*、マイマイ、テングニシ：*Pugilina (Hemifusus) Ternatanus*、トコブシ：*Sulculus supertexta* などがあり、アカガイ：*Anadara (Scapharca) broughtonii*、サルボウ：*Anadara (Scapharca) subcrenata*、ハマグリ：*Meretrix lusoria*、ヤマトシジミ：*Carbicula japonica*、アサリ：*Tapes (Amygdala) japonica*、イタヤガイ：*Pecten (Notovola) albicans* などの二枚貝類も出土している。

Ⅵ. おわりに

今回調査を行った伊丹郷町は、伊丹村・大広寺村・北少路村・昆陽口村・北中少路村・南中少路村・円正寺村・外城村・高畑村・新野田村・古野田村・植松村・下市場村・上外崎村・外崎村の15ヶ村からなる在郷町で、成立は中世末と考えられる。

なお、伊丹村は、多数の町場から構成されており、文禄年間（1592～95）には、すでに綿屋町・八百屋町・泉町・魚屋町・材木町・中之町・竹屋町・鍋屋町・井筒町・柳町・米屋町・紺屋町・新町・無足町・南町の15ヶ町があった。また、寛文年間（1684～1704）までに、常磐町・天王町・扇子町・湊町・大手町・境町・住吉町の７ヶ町が成立し、18世紀初頭には、伊丹村は24ヶ町の町場を持つ伊丹郷町の中心的な村となっていた。その後、正徳年間（1711～16）に宮崎町・橋町の２ヶ町が、享保年間（1716～36）に戎町が、各々成立し、27ヶ町で幕末を迎える。

概略、このような変遷をたどる伊丹郷町のうち、今回は伊丹村の米屋町・柳町で調査を行った。

また、文献等によると、伊丹郷町は、風水害・火災などの災害に幾度となく遇っていることが判る。おもな風水害としては、元文５年（1740）の外崎村・下市場村の流失や、安永元年（1774）の野宮の立木75株の倒木、慶応２年（1866）の古城下の堤防の決壊などが挙げられる。また、火災は、風水害に比べ多発しており、延宝２年（1675）、貞享元年（1684）、元禄元年（1688）、元禄12年（1699）、元禄15年（1702）、正徳２年（1712）、享保14年（1729）、寛延元年（1748）、宝暦７年（1757）、宝暦９年（1759）、明和２年（1765）、明和３年（1766）、寛政４年（1792）、文化９年（1812）、文化13年（1816）と140年間に15回の火事があった。これらの火災のうち、17世紀末から18世紀初頭にかけての火災は比較的大規模で、元禄元年（1688）の火事では、井筒町からの出火で160軒が焼失し、元禄15年（1702）の大火では、中少路村から北ノ口町にかけての439軒が焼失し、定火消が設置された。定火消設置後も火災は多発し、正徳２年（1712）には橋町で火事があり、享保14年（1729）の北少路村西嶽から出火した火災では80軒が焼失している。また、18世紀中頃には、寛延元年（1748）の大手町の酒蔵焼失、宝暦７年（1757）の法専寺焼失、宝暦９年（1759）・明和２年（1765）の北少路村からの出火、明和３年（1766）の戎町の火事など、火災が続発し、18世紀末から19世紀初頭にかけても、寛政４年（1792）の綿屋町の醤油蔵２棟の焼失や、文化９年（1812）の南少路村・北少路村の火災、文化13年（1816）の野之宮御供所の出火など火災が多発している。

今回の調査では、11段階の生活面が確認され、そのうち５面の遺構検出面で平面的な調査を行った。各遺構検出面の存続期間は、第１遺構検出面が18世紀末～19世紀前半以降、第２遺構検出面が18世紀前半でも比較的中頃に近い時期から18世紀末、第３遺構検出面が17世紀後葉から18世紀中頃、第４遺構検出面が17世紀前半から17世紀後葉、第５遺構検出面が17世紀前半以前と各々考えられる。また、第２遺構検出面と第３遺構検出面の２面の遺構検出面上で多量の焼土層の堆積が認められ、両遺構検出面の機能停止は両遺構検出面上での火災の発生が原因と推測された。この２回の火災の発生時期は、概ね18世紀中頃を中心とする時期と18世紀末から19世紀前半にかけての時期と考えられ、前述の18世紀中頃と18世紀末から19世紀初頭にかけてに多発する火災と関連する可能性が高い。なお、17世紀末～18世紀初頭の大規模火災の痕跡は、今回の調査地点では確認されていない。

また、平面的な調査を行った5面の遺構検出面からは、井戸17基、池状遺構6基、溝12条、礎石建物9棟、築地基礎等14基、通路状遺構2条、竈11基、火災などの災害処理に利用されたと考えられる焼土溜土壙18基、水琴窟と考えられる伏甕土壙7基、水甕もしくは便所として使用された可能性のある埋甕土壙10基、胞衣壺の埋納土壙と考えられる埋甕土壙4基、便所や手工業関連施設と考えられる埋桶土壙29基など多数の遺構が検出できた。

これらの遺構の配置状態から、時期的に若干の差異はあるものの、17世紀後葉以降は、調査区内は、溝等によって区画された間口5間程度の宅地5～6軒分に分割されていたことが判った。また、17世紀前半から17世紀後葉にかけての時期は、明確には屋敷割を捉えることはできなかったが、調査区北半の状況から考えると、それ以降とほぼ同様の屋敷割と考えられ、幕末を経て現在まで続く基本的な屋敷割の原形は17世紀前半に成立したと言えよう。なお、17世紀前半以前の屋敷割は、今回の調査では明瞭に捉えられず、不明な点が多いが、17世紀前半以降の屋敷割とは基本的に異なるものが想定でき、17世紀前半に大きな画期が求められる。

つぎに、間口5間程度の宅地内の状況をみると、宅地内の道路に面した表の部分には建物が建ち、道路から遠い奥の部分を庭地として利用している。建物は、礎石建物が一般的で、基本的には、居間や座敷として利用された居住空間と何らかの作業空間として利用された部分とに分割される。また、建物内の土間と考えられる部分に竈が設置され、炊事などに利用されたと思われる空間や、便所と考えられる埋甕土壙および埋桶土壙が建物内にあり、通路状遺構が表の道路から奥の庭地まで建物内を通じていたりし、バラエティーに富んでいる。また、建物内の床下には、倉庫と考えられる地下式貯蔵庫が作られることもある。なお、建物内の土間や床下の部分には胞衣壺の埋納土壙と考えられる埋甕土壙があることが多く、『亜惑□□　福富満□　金牛水　土生金』の墨書木札と5枚の寛永通宝が備前朱泥小壺の中に漆喰で密封されて埋納されていた例は、江戸時代の後産処理＝胎盤処理を考える上で貴重な資料と言えよう。一方、庭地の部分は、井戸や便所と考えられる埋甕土壙および埋桶土壙がある空間と、池状遺構や水琴窟と考えられる伏甕土壙、水甕に利用された可能性のある埋甕土壙などのある空間とに使い分けられていたらしく、築地塀で区画されることもある。

今回の調査での出土遺物としては、土器・瓦・土製品・石製品・金属製品・木製品などがある。

土器は、量的には数も多く、土師器および土師質土器・瓦質土器・陶器・磁器など多様な種類のものが出土している。全体的な傾向として、各時期とも、灯明皿および煮沸用の鍋は土師器が使用されており、甕・壺・擂鉢などの貯蔵・調理用具は全期間を通して丹波が主体を占めるが、時代が下るとともに備前および備前系陶器の比率が増す。一方、椀・皿などの食器類は、16世紀代は瀬戸美濃が主体を占め、16世紀末～17世紀前半には唐津に主流が移り、17世紀中頃以降は伊万里が圧倒的多数を占めるようになる。なお、磁器は、中国製のものがごく少量あるだけで、大半は伊万里の産品で、産地は限定されているが、陶器は、瀬戸美濃・信楽・京焼・丹波・備前・萩・唐津の各産地をはじめ、伊丹郷町周辺の在地窯で焼造されたと考えられる製品まであり、日本各地からの製品が伊丹郷町に移入されていたことが判る。

また、ミニチュア製品や人形、泥面子、面子、硯などが多量に出土し、少量ではあるが、装身具や、家具類、調理具、工具、農具、発火具、風鈴や「バイ」製の独楽、クロアワビやハマグリなどの貝類が出土しており、江戸時代の意外に豊かな庶民生活の一端をかいまみることができた。

なお、五輪塔や一石五輪塔・石臼などが、井戸の石組や建物の礎石に転用された状態で出土している。中世末から近世初頭にかけての時期に、五輪塔や一石五輪塔などの宗教的石造物や墓が宿るとされる石臼が、本来の機能を停止した後、土木工事や建築工事の石材として利用されることが多いが、今回の調査では江戸時代にもその傾向が続くことが判った。

青銅製品は銭貨と煙管が大半を占め、伊丹郷町の人々が貨幣経済の中で生き、また、喫煙の風習が広く人々に普及していたことが判った。また、銭貨には、渡来銭と本邦銭があり、本邦銭の寛永通宝が各時期とも大多数を占めるものの、17世紀代には渡来銭の北宋銭も流通していたと考えられる。

以上、今回の調査で判明したことを列記したが、伊丹郷町全域からすると調査範囲はごく一部にすぎず、伊丹郷町全体を考えるには資料不足と言わざるを得ない。現在までに伊丹郷町では、百数十次を越える調査が実施されており、それらの調査成果と併せて今回の調査結果を再検討し、伊丹郷町全体の中での調査地点の評価を下すことと在郷町『伊丹郷町』の歴史的位置付けを行うことが今後に残された課題と言えよう。

参考文献

尼崎市教育委員会　1989　『尼崎市埋蔵文化財遺跡分布地図』

伊丹市教育委員会　1989　『埋蔵文化財分布地図』

大阪府教育委員会　1990　『大阪府文化財地名表』

大阪府教育委員会　1991　『大阪府文化財分布図』

大橋康二　1984　「肥前陶磁の変遷と分布――発掘資料を中心として――」『国内出土の肥前陶磁』

川西市教育委員会　1990　『川西市文化財マップ』

黒田俊雄編　1974　『伊丹中世史料』（伊丹資料叢書２）

吉泉弘　1983　『江戸を掘る』

堺市教育委員会　1988　『堺環濠都市遺跡（SKT79）発掘調査報告』（堺市文化財調査報告第37集）

白神典之　1990　「堺擂鉢と明石擂鉢」『江戸遺跡研究会第３回大会　江戸の陶磁器　発表要旨』

福井英治ほか　1972　『田能遺跡発掘調査報告書』（尼崎市文化財調査報告第15集）

兵庫県教育委員会　1973　『特別地域埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表。第２分冊

藤澤和人ほか　1990　『尾呂』―愛知県瀬戸市定光寺カントリークラブ増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告―

藤沢典彦　1982　「石造遺物」『高野山発掘調査報告書』

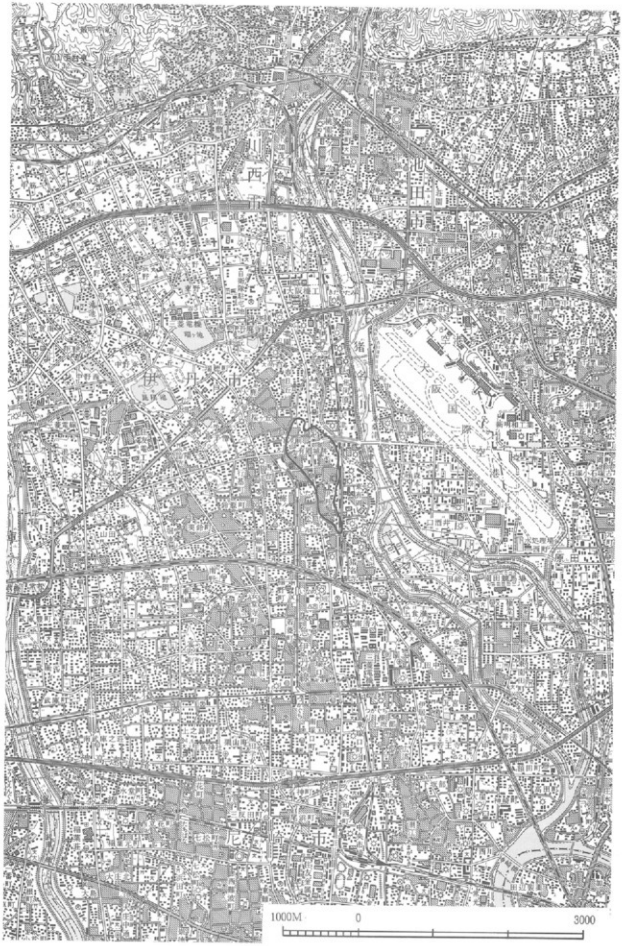
文化庁文化財保護部　1982　『全国遺跡地図　兵庫県』

三輪茂雄　1978　『臼』（ものと人間の文化史25）

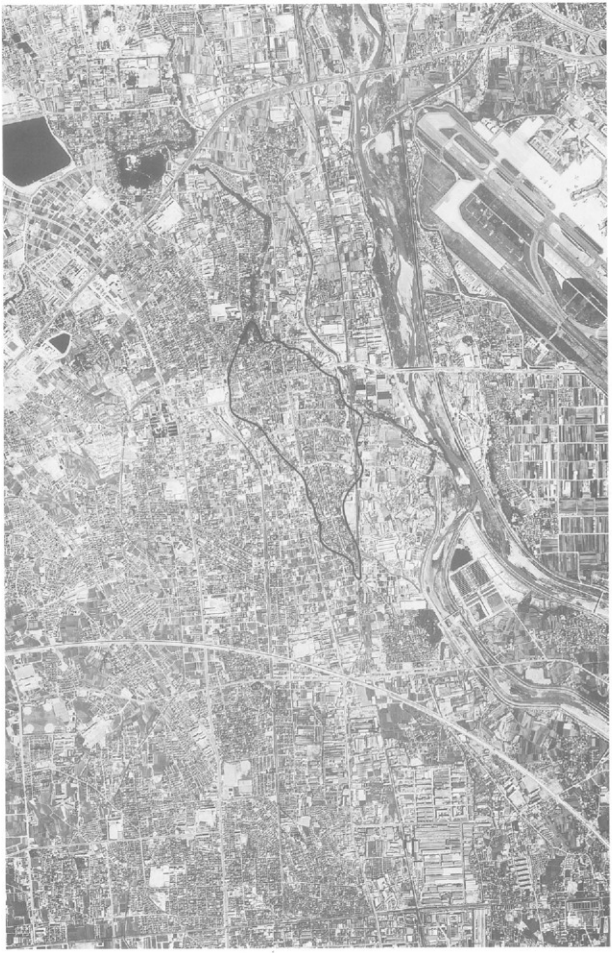
八木哲浩編　1982　『伊丹古絵図集成』（伊丹資料叢書６）

図　　版

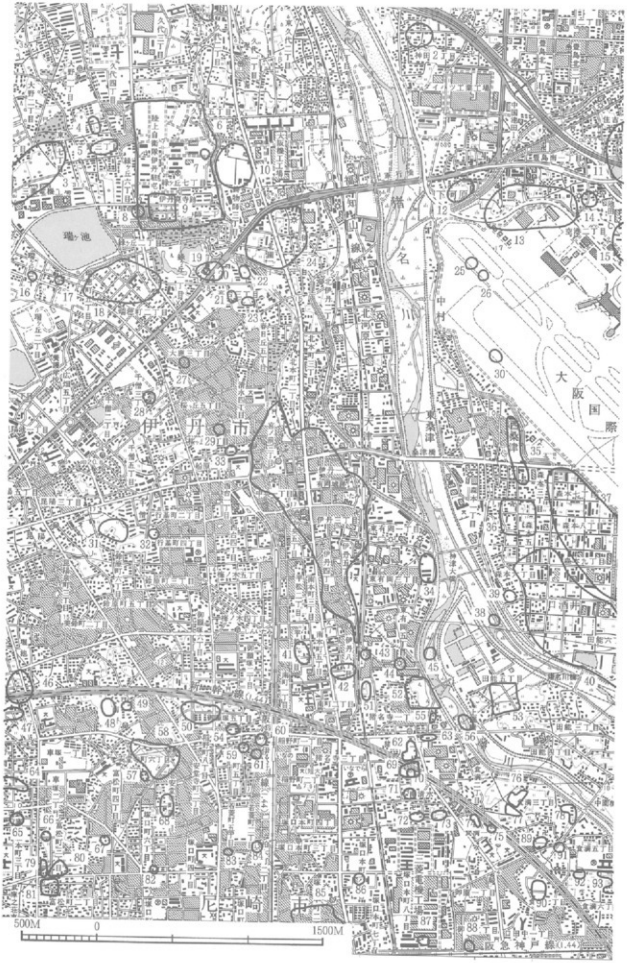
PL. 1　位置図



PL. 2　空中写真



PL. 3　周辺の遺跡



PL. 4　周辺の遺跡

1・2：口酒井遺跡

3：御願塚古墳

4：森本遺跡

5：伊丹廃寺跡

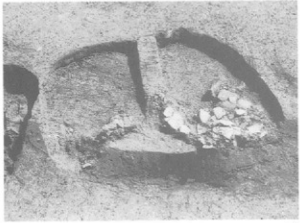
6：緑ケ丘遺跡

7：有岡城跡岸ノ砦跡

1

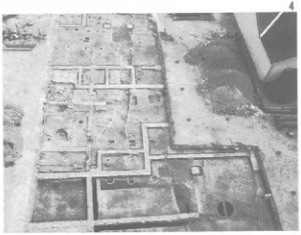
2

3



4

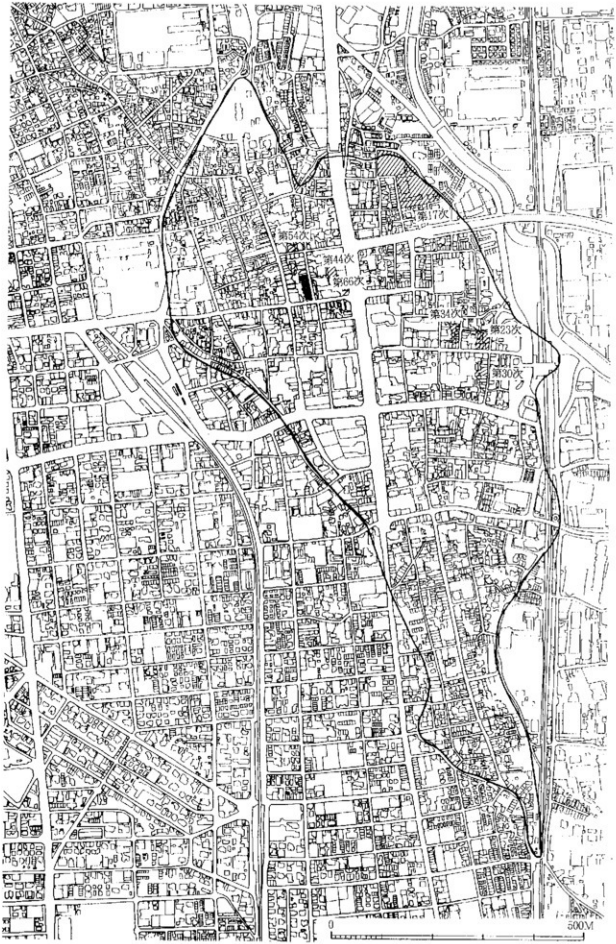
5



6

7

PL. 5　調査区の位置図



PL. 6　伊丹郷町の調査

1：第17次調査
2：第23次調査
3：第30次調査
4：第34次調査
5：第44次調査
6：第54次調査
7：第66次調査

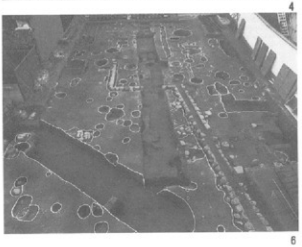
1

2

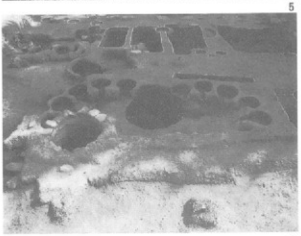
3

4

5



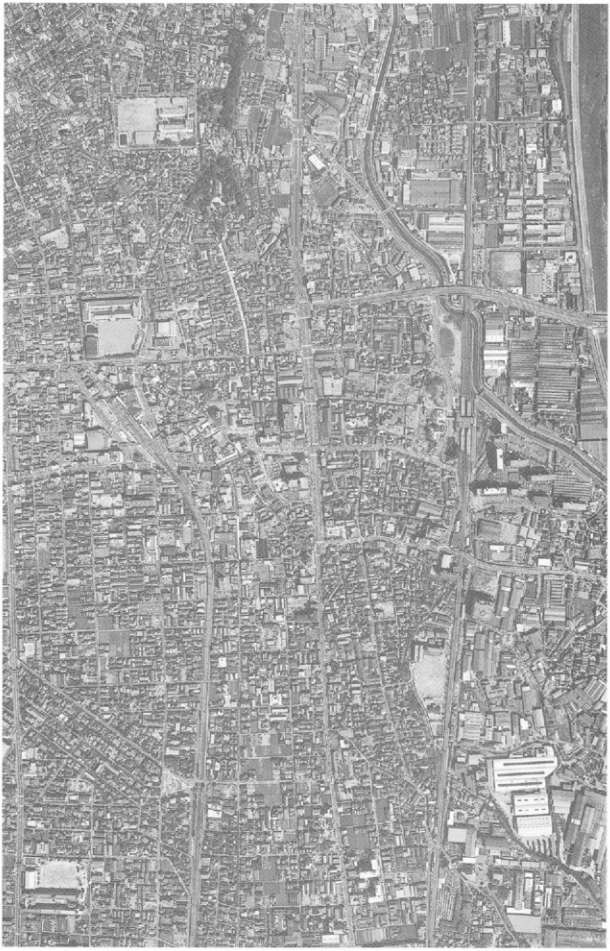
6



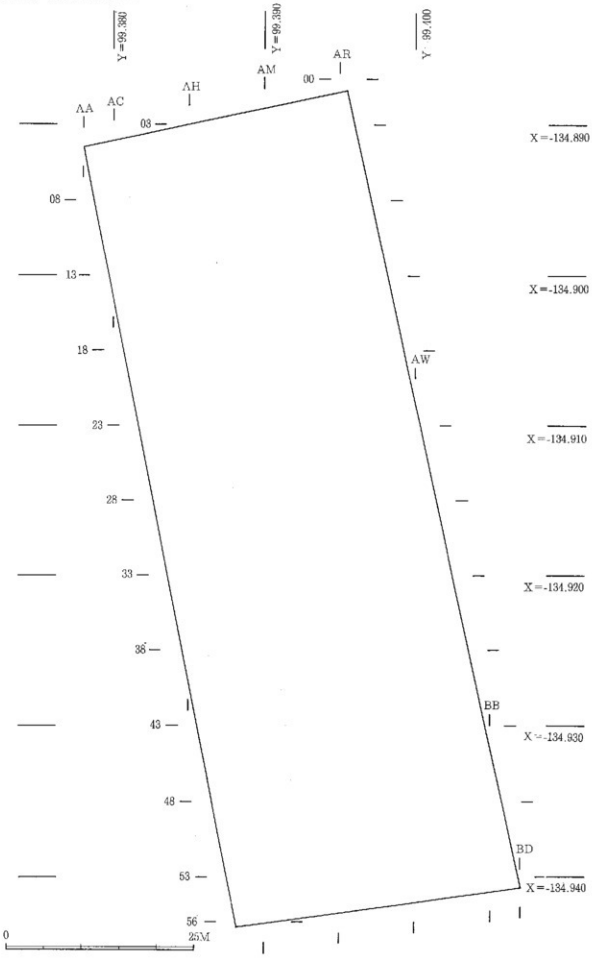
7

PL. 7　調査区設定図

PL. 8　空中写真



PL. 9 グリッド配置図


Y=99.380
Y=99.390
Y=99.400
AR
AM
00
AH
AA
AC
03
X=-134.890
08
13
X=-134.900
18
AW
23
X=-134.910
28
33
X=-134.920
38
BB
43
X=-134.930
48
BD
53
X=-134.940
56
0
25M

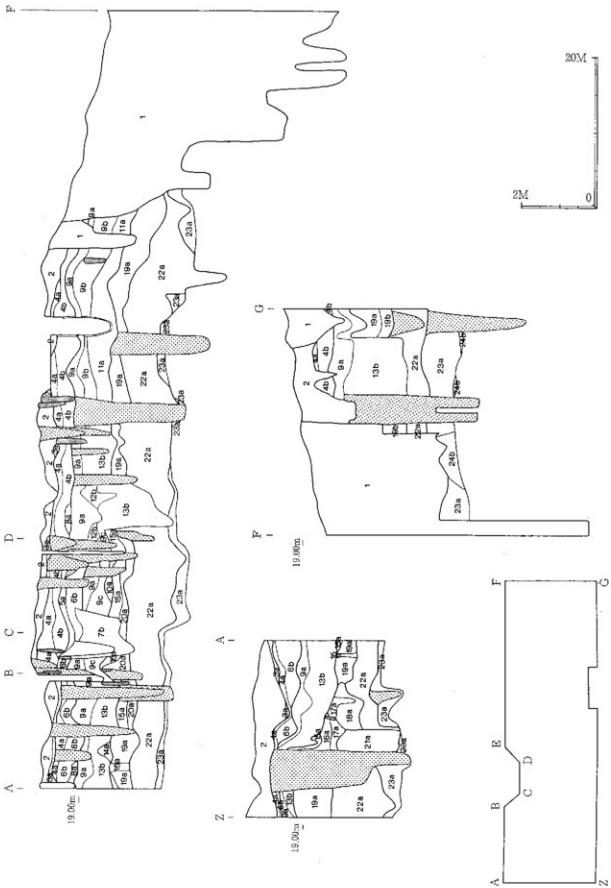
PL. 10　調査前風景写真

1

2

1・2：調査前風景

PL. 11　地層断面図



PL. 12　地層断面写真・調査風景写真

1：地層断面

2：調査状況

3：空中写真撮影

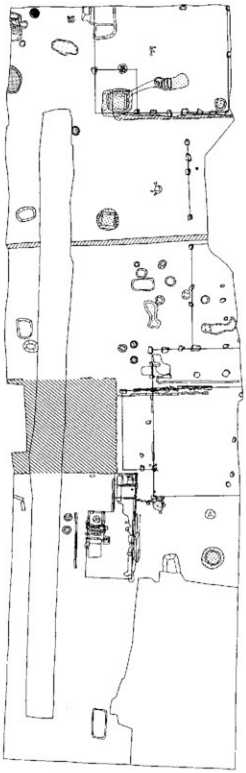
1

2

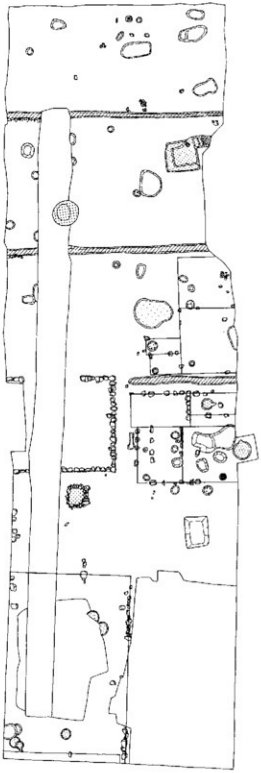
3

PL. 13　遺構配置図

第１遺構検出面

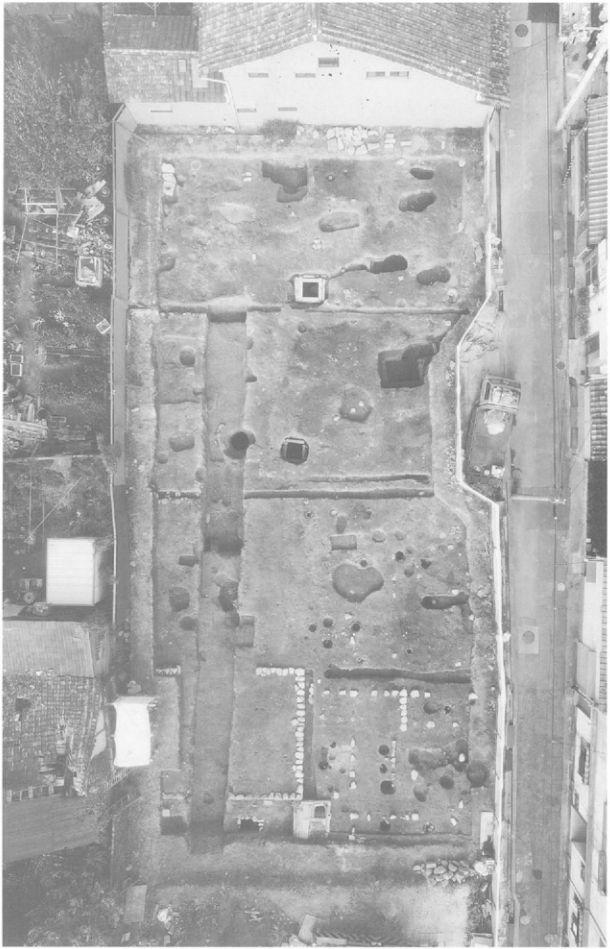


第２遺構検出面



0　25M

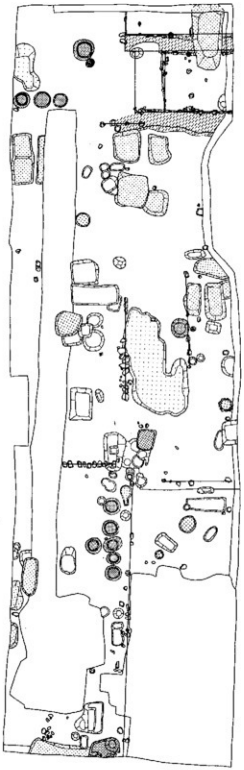
PL. 14　全体写真



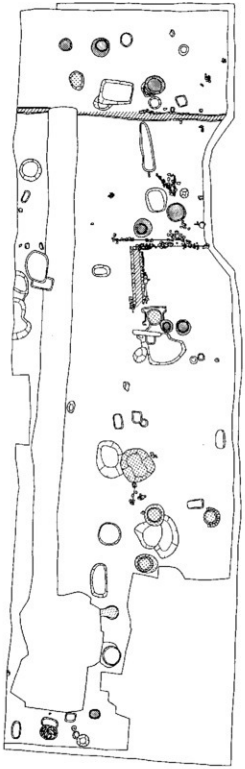
第２遺構検出面

PL. 15 遺構配置図

第3遺構検出面

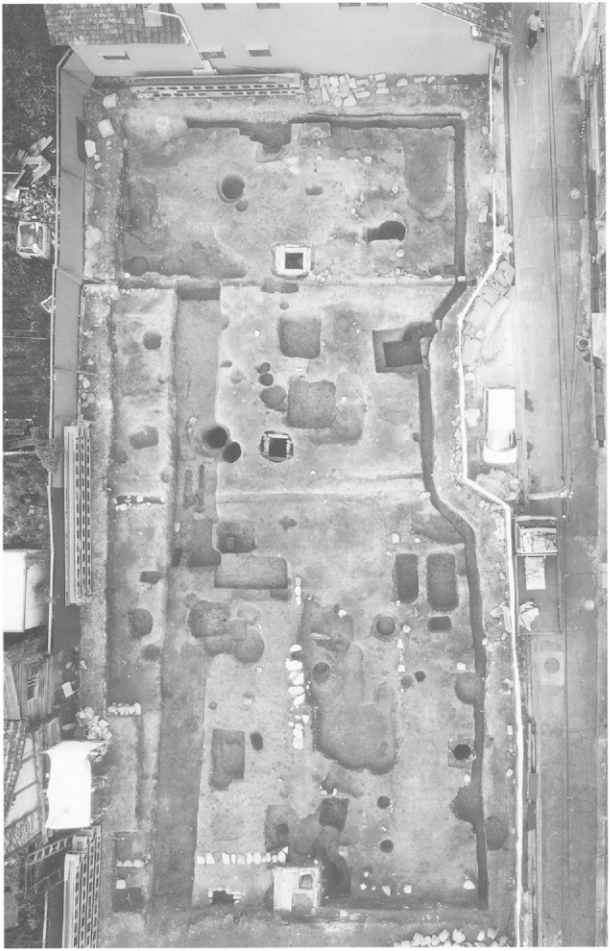


第4遺構検出面



0 25M

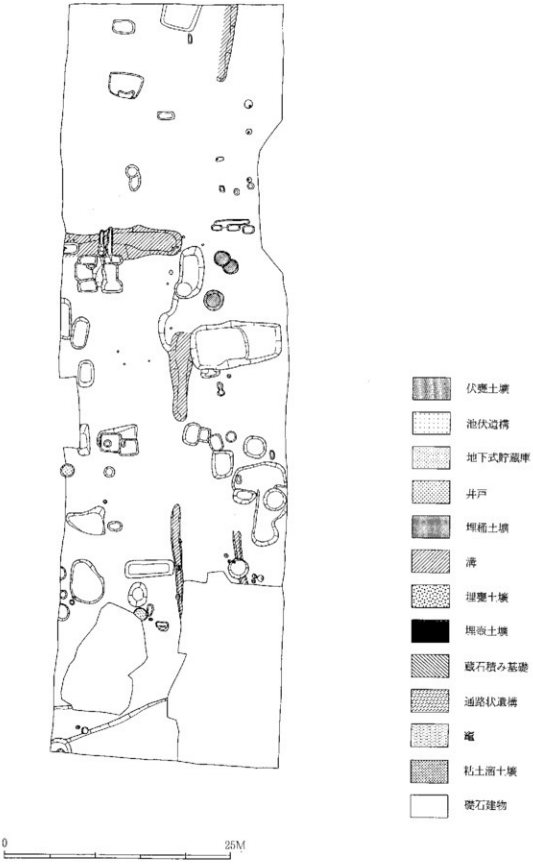
PL. 16　全体写真



第3遺構検出面

PL. 17　遺構配置図

第５遺構検出面



PL. 18　全体写真

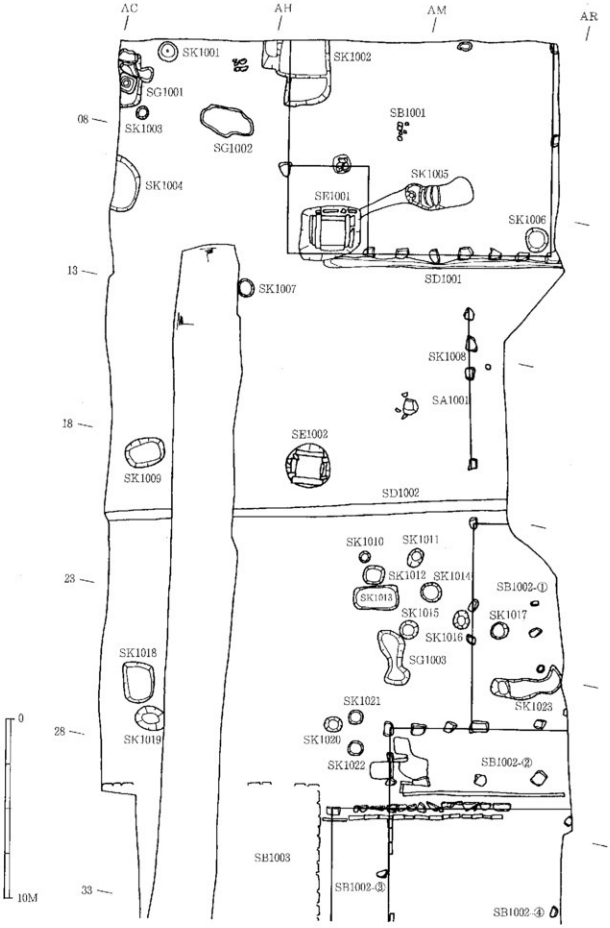
1

2

1：第５遺構検出面北半　2：第５遺構検出面南半

PL. 19　遺構実測図

第1遺構検出面



PL. 20　遺構写真

1：伏焼土壙SK1001

2：井戸SE1001

3：井戸SE1002

4：第1遺構検出面北半

1

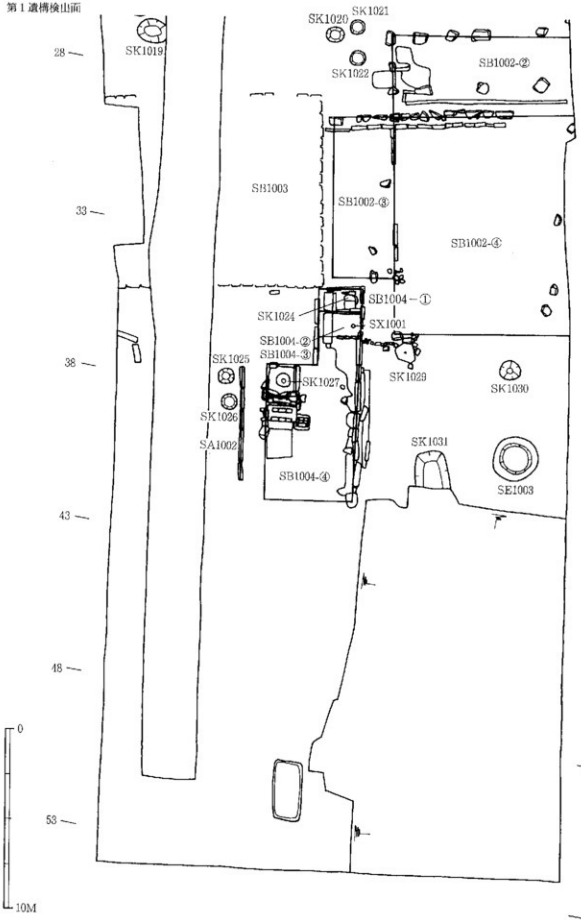
2

3

4

PL. 21　遺構実測図

第1遺構検出面



PL. 22　遺構写真

1：井戸SE1003

2：埋甕土壙SK1027

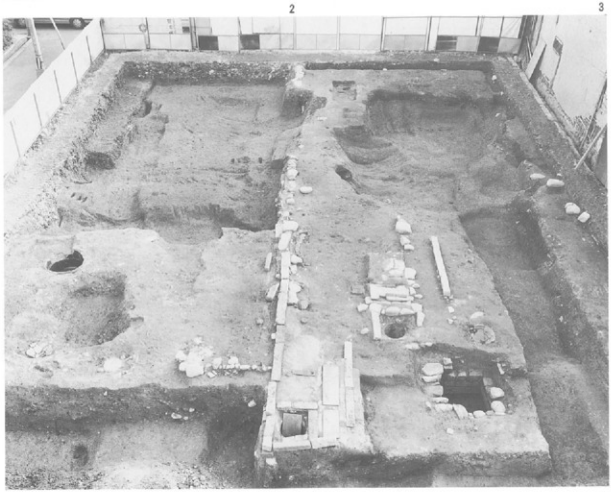
3：埋稲土壙SK1024

4：第1遺構検出面南半

1

2

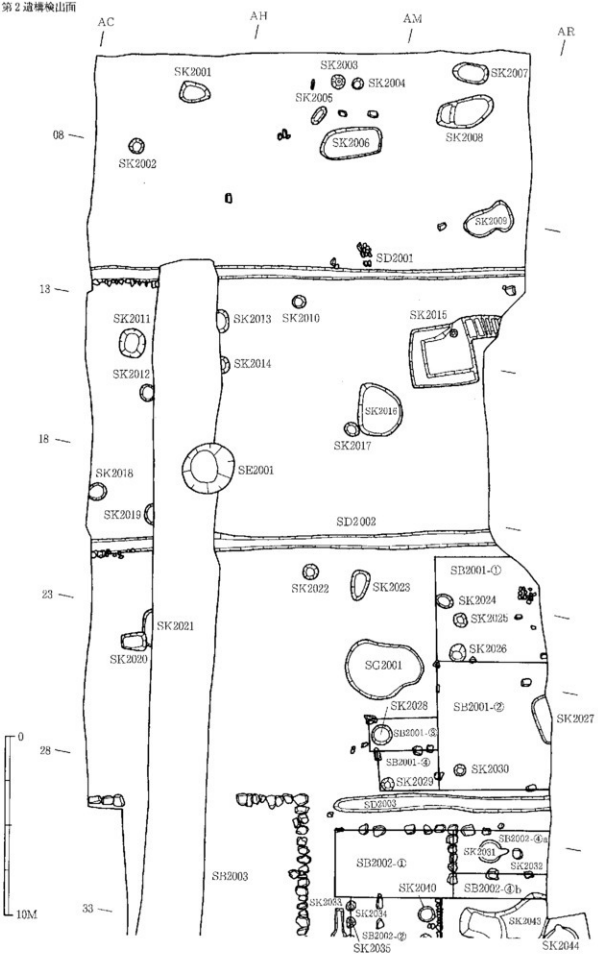
3



4

PL. 23 遺構実測図

第2遺構検出面



PL. 24　遺構写真

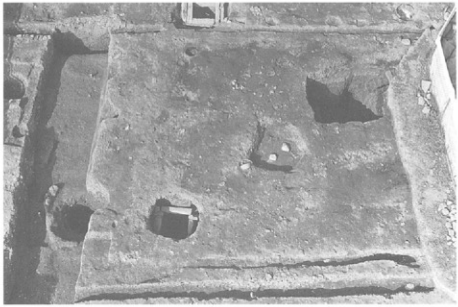
第２遺構検出面

１：宅地Ⅰ

２：宅地Ⅱ

３：宅地Ⅲ

1

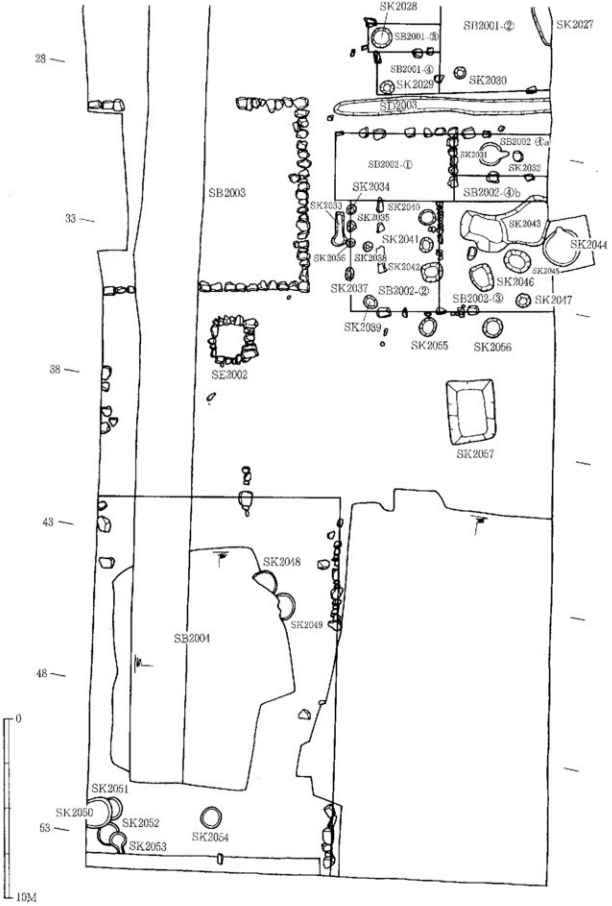


2

3

PL. 25　遺構実測図

第２遺構検出面



PL. 26　遺構写真

第2遺構検出面

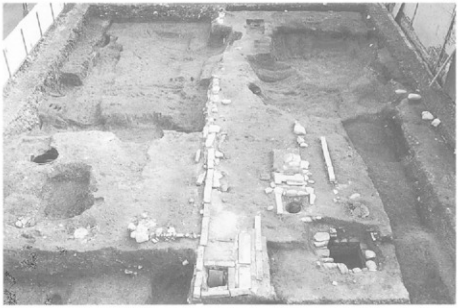
1：宅地Ⅲ

2：宅地Ⅲ－北

3：宅地Ⅳ・Ⅴ

1

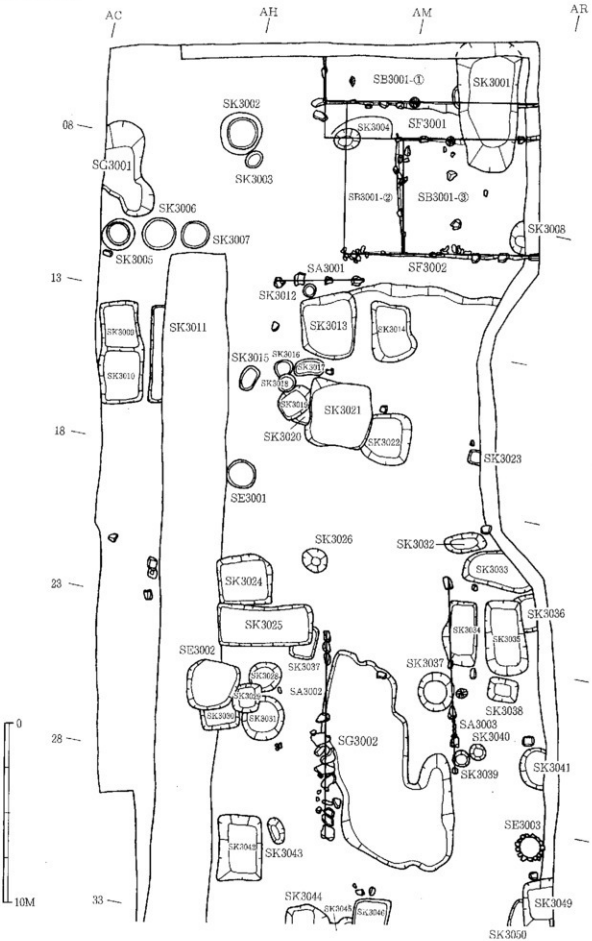
2



3

PL. 27　遺構実測図

第3遺構検出面



PL. 28　遺構写真

1・3：焼土溜土壙SK3013・3014・3021・3022

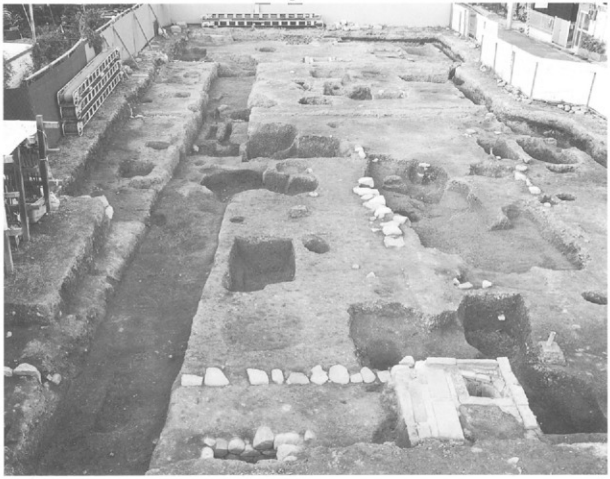
2：焼土溜土壙SK3033～3036

4：第3遺構検出面北半

1

2

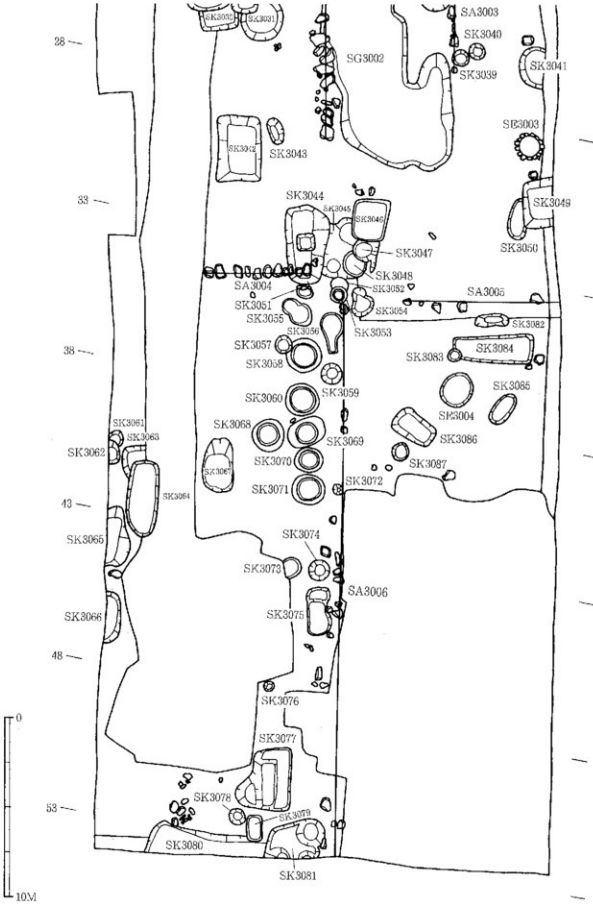
3



4

PL. 29　遺構実測図

第3遺構検出面



PL. 30　遺構写真

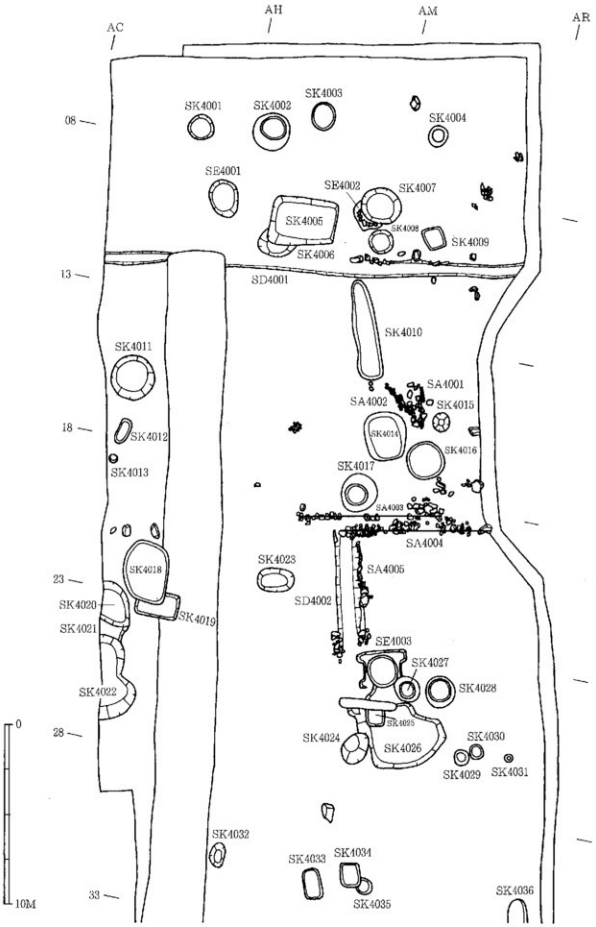
1

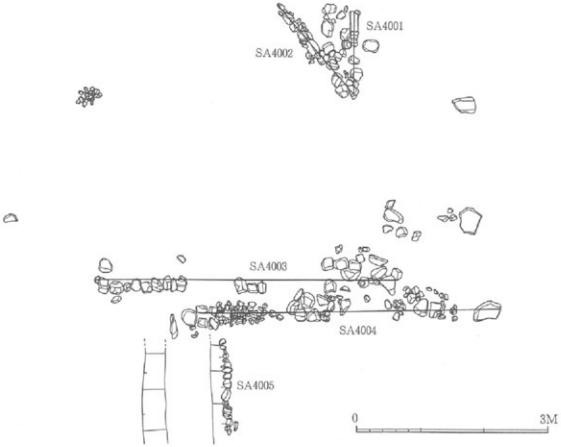
2

1：第３遺構検出面北半　2：第３遺構検出面南半

PL. 31　遺構実測図

第4遺構検出面

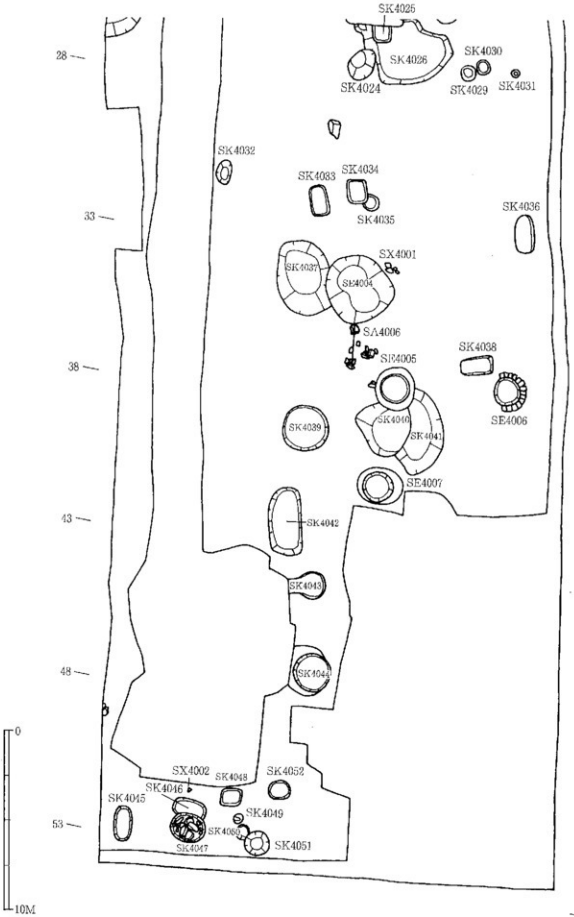




第４遺構検出面北半

PL. 33　遺構実測図

第4溝構検出面



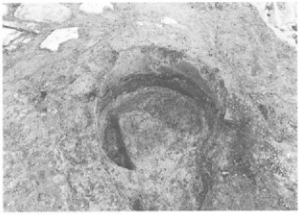
PL. 34　遺構写真

1：竈SK4043

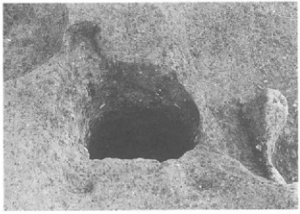
2：井戸SE4003

3：井戸SE4006

4：第4遺構検出面南半



1



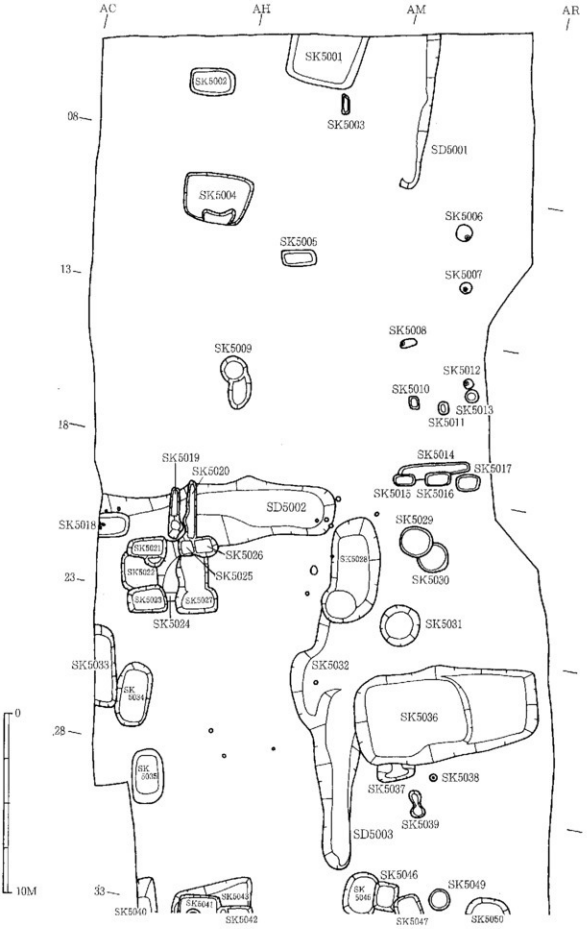
2

3

4

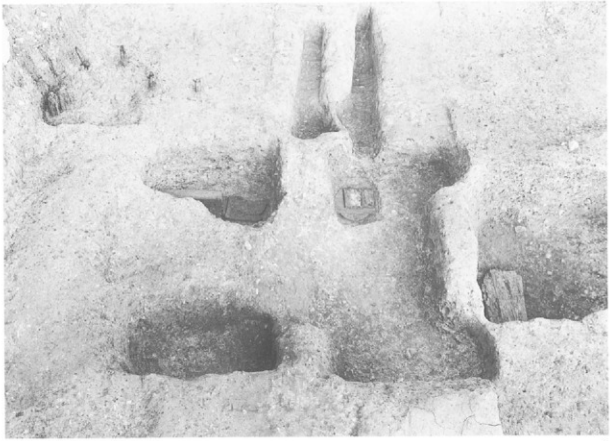
PL. 35　遺構実測図

第5遺構検出面



PL. 36　遺構写真

1

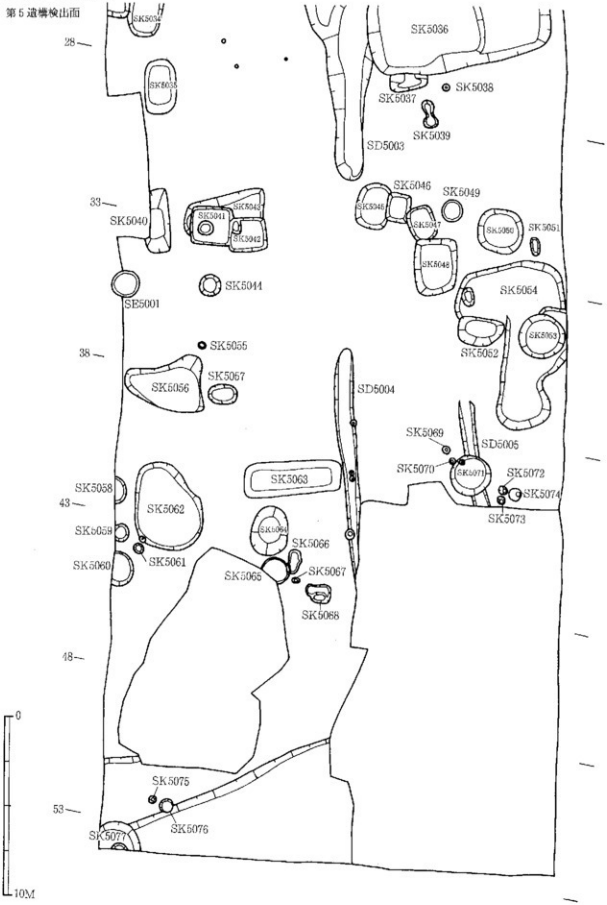


2

1：土壙SK5036　2：土壙SK5019～5027

PL. 37　遺構実測図

第5遺構検出面



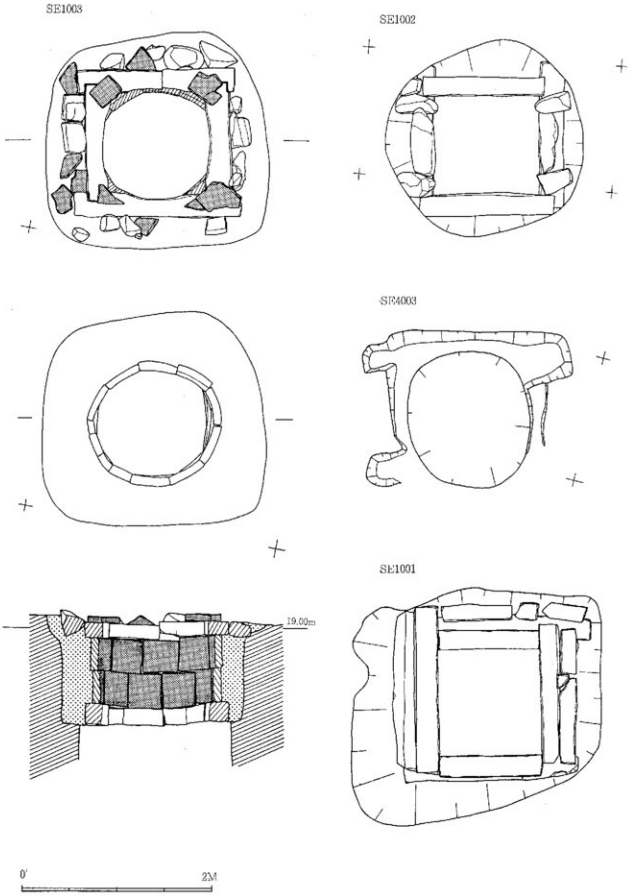
PL. 38　遺構写真

1

2

1：竈SK5065　2：第5遺構検出面南西部分

PL. 39 遺構図



PL. 40　遺構写真

1～3：井戸 SE1003

4：井戸 SE1001

5：井戸 SE1002

6：井戸 SE4003

7：井戸 SE4001

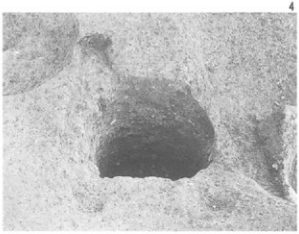
1

2

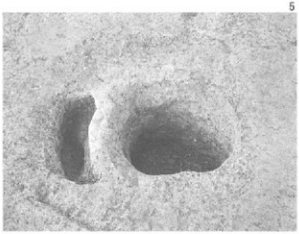
3

4

5

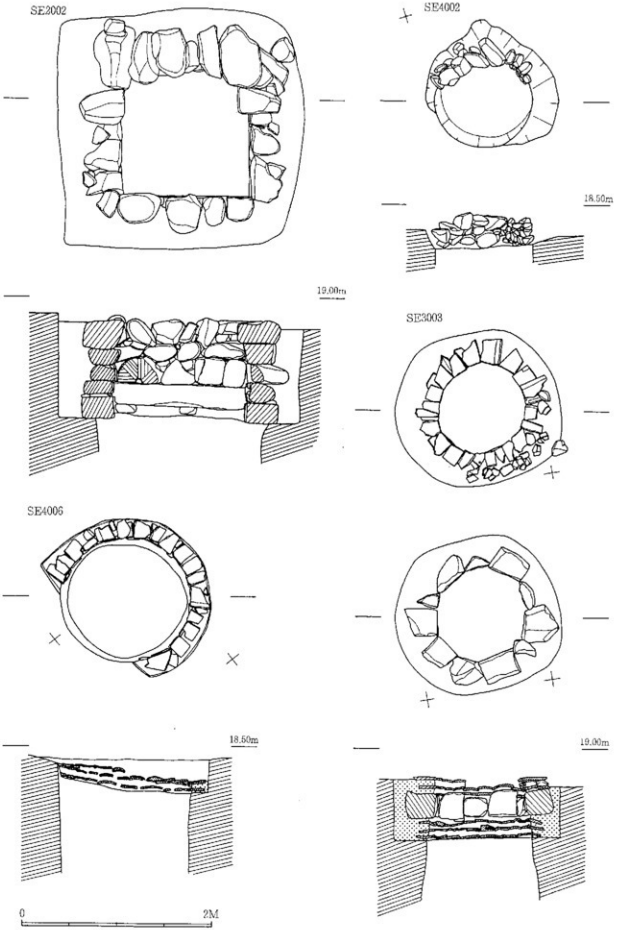


6



7

PL. 41 遺構図



PL. 42　遺構写真

1・2：井戸 SE2002

3：井戸 SE4002

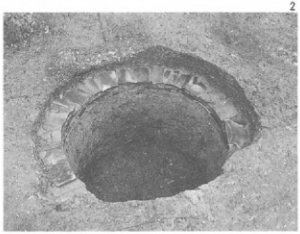
4：井戸 SE4006

5～7：井戸 SE3003

1

2

3



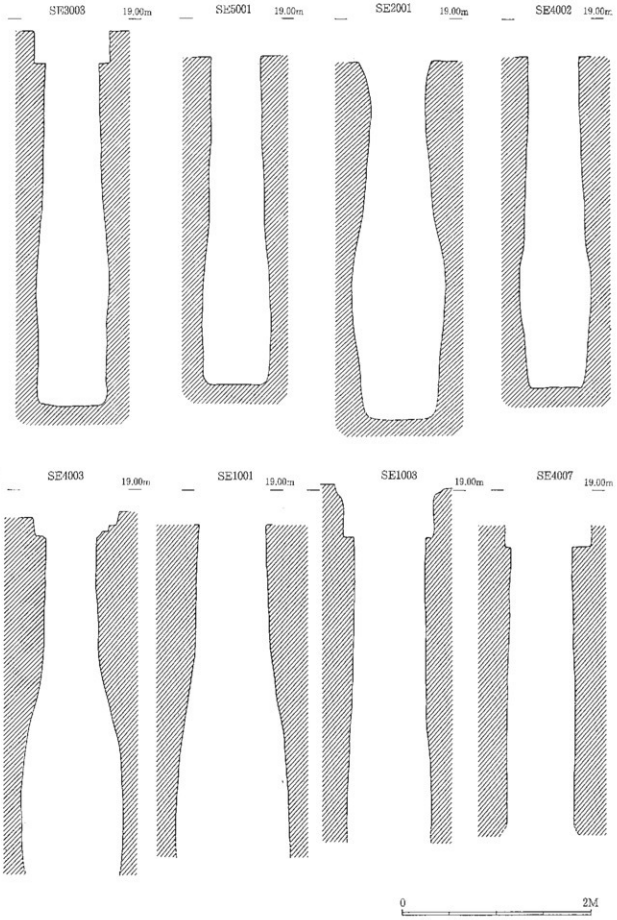
4

5

6

7

PL. 43 遺構図

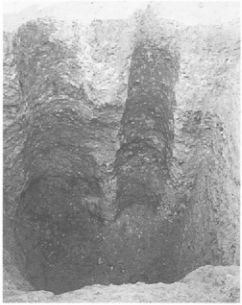

SE3003
19.00m
SE5001
19.00m
SE2001
19.00m
SE4002
19.00m
SE4003
19.00m
SE1001
19.00m
SE1003
19.00m
SE4007
19.00m
0
2M

PL. 44　遺構写真

1：井戸 SE3003
2：井戸 SE5001
3：左　井戸 SE1001
　　右　井戸 SE4002
4：井戸 SE4003
5：井戸 SE1003
6：井戸 SE4007

1

2



3

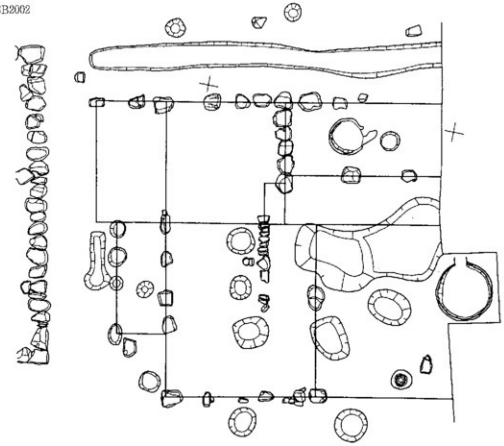
4

5

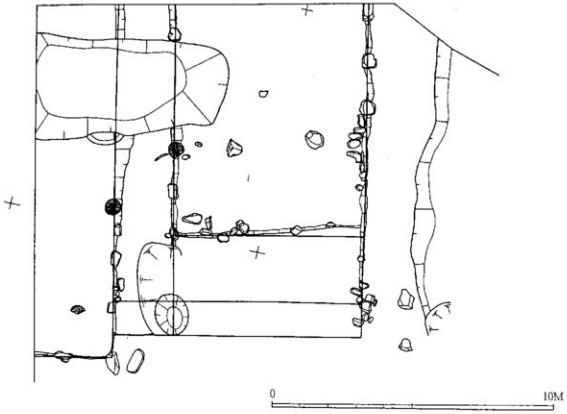
6

PL. 45　遺構図

礎石建物SB2002



礎石建物SB3001

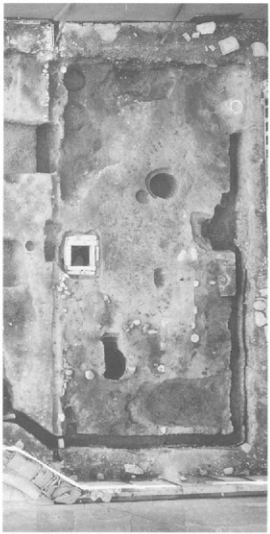


PL. 46　遺構写真

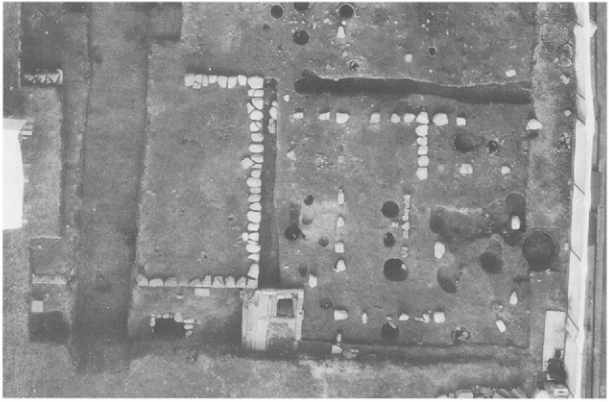
1・2：礎石建物SB3001

3：礎石建物SB2002・瓦石積み基礎SB2003

1



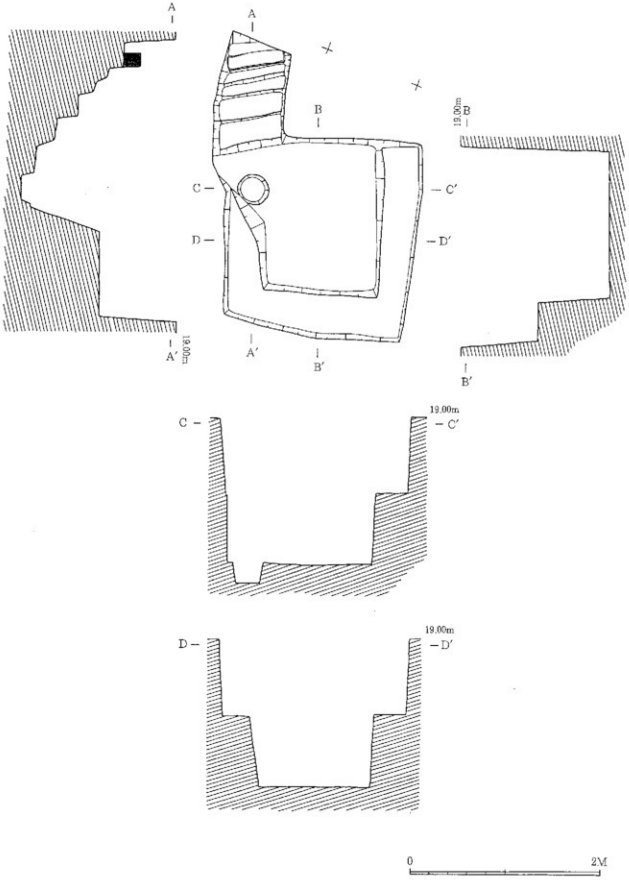
2



3

PL. 47 遺構図

SK2015



PL. 48　遺構写真

1：池状遺構SG3001

2・3：地下式貯蔵庫SK2015

4・5：粘土溜土壙SK3046

1

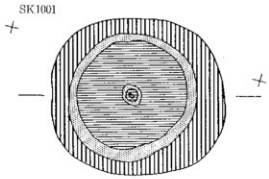
2

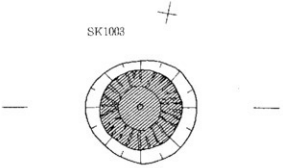
3

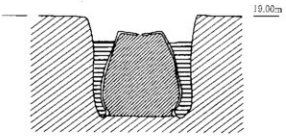
4

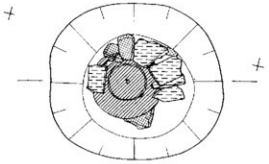
5

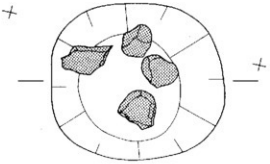
PL. 49 遺構図

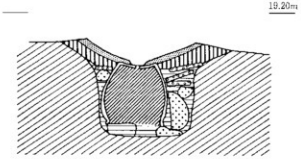

SK1001

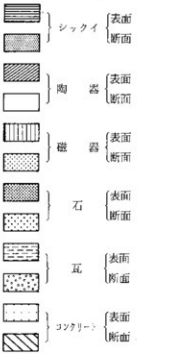

SK1003


19.00m






19.20m

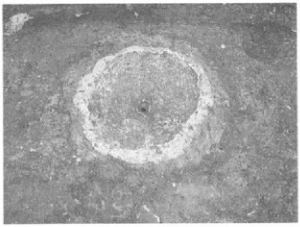

シックイ
表面
断面
陶器
表面
断面
磁器
表面
断面
石
表面
断面
瓦
表面
断面
コンクリート
表面
断面
粘土 2.5GY 6/1
オリーブ灰
砂混泥じり極細質 シルト
5Y 4/2 灰オリーブ

0
2M

PL. 50　遺構写真

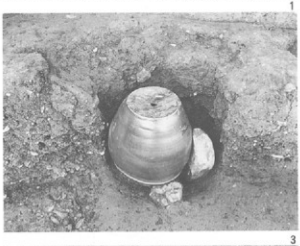
1～5：伏甕土壙SK1001

6・7：伏甕土壙SK2003

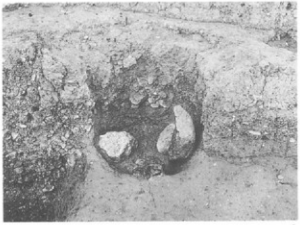


1

2



3



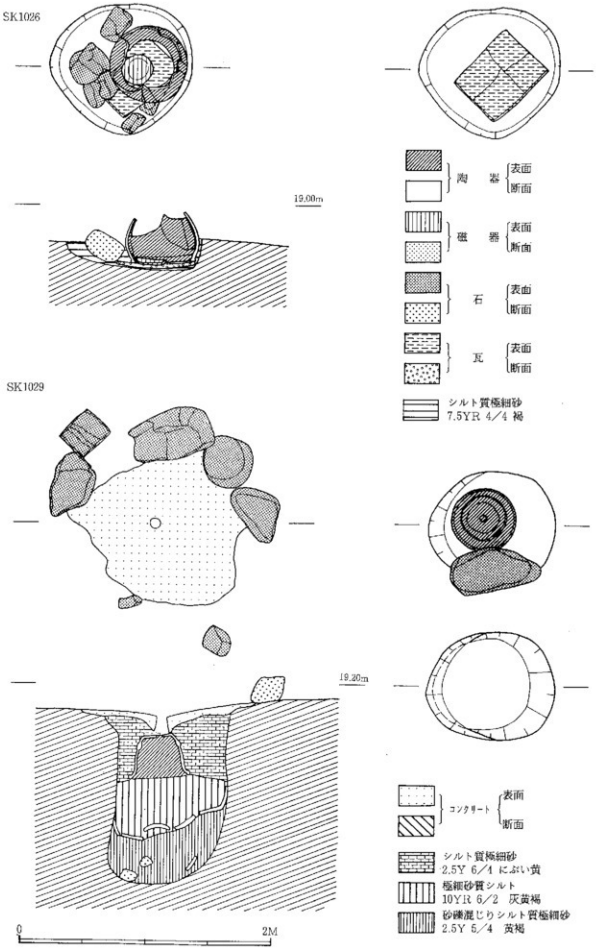
4

5

6

7

PL. 51 遺構図


SK1026
19.00m
陶器 表面 断面
磁器 表面 断面
石 表面 断面
瓦 表面 断面
シルト質極細砂
7.5YR 4/4 褐
SK1029
19.20m
コンクリート 表面 断面
シルト質極細砂
2.5Y 6/4 にぶい黄
極細砂質シルト
10YR 6/2 灰黄褐
砂礫混じりシルト質極細砂
2.5Y 5/4 黄褐
0
2M

PL. 52　遺構写真

1～4：伏甕土壙SK1026

5・6：伏甕土壙SK1029

1

2

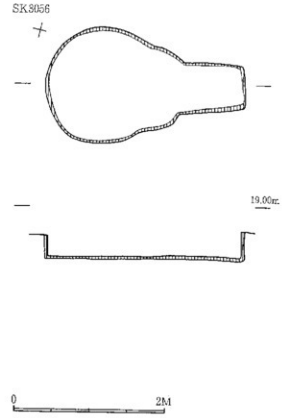
3

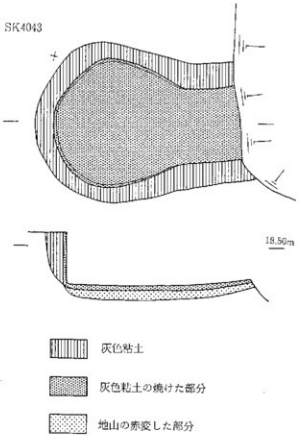
4

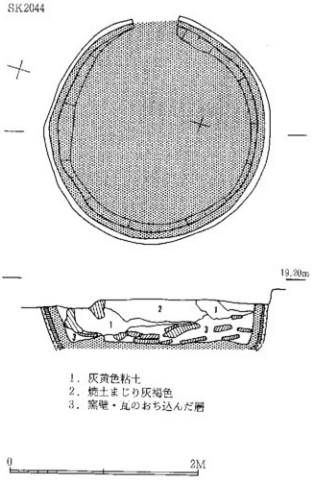
5

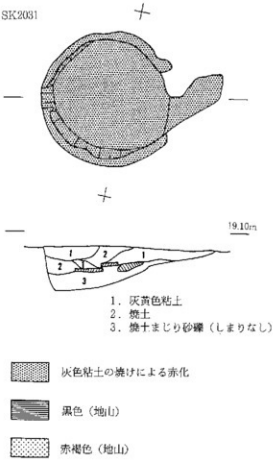
6

PL. 53 遺構図


SK3056
19.00m
0
2M


SK4043
18.50m
灰色粘土
灰色粘土の焼けた部分
地山の赤変した部分


SK2044
19.20m
1
2
3
1. 灰黄色粘土
2. 焼土まじり灰褐色
3. 窯壁・瓦のおち込んだ層
0
2M


SK2031
19.10m
1
2
3
1. 灰黄色粘土
2. 焼土
3. 焼土まじり砂礫（しまりなし）
灰色粘土の焼けによる赤化
黒色（地山）
赤褐色（地山）

PL. 54　遺構写真

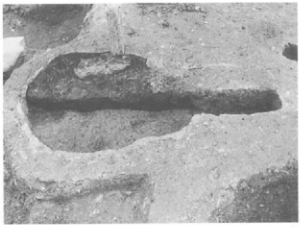
1：竈SK3056

2・3：竈SK2044

4：竈SK4043

5：竈SK2052・SK2053

6・7：竈SK2048・SK2049・SK5065

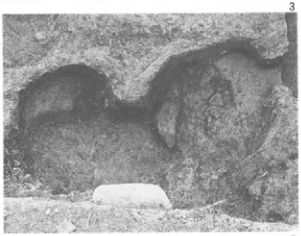


1

2

3

4

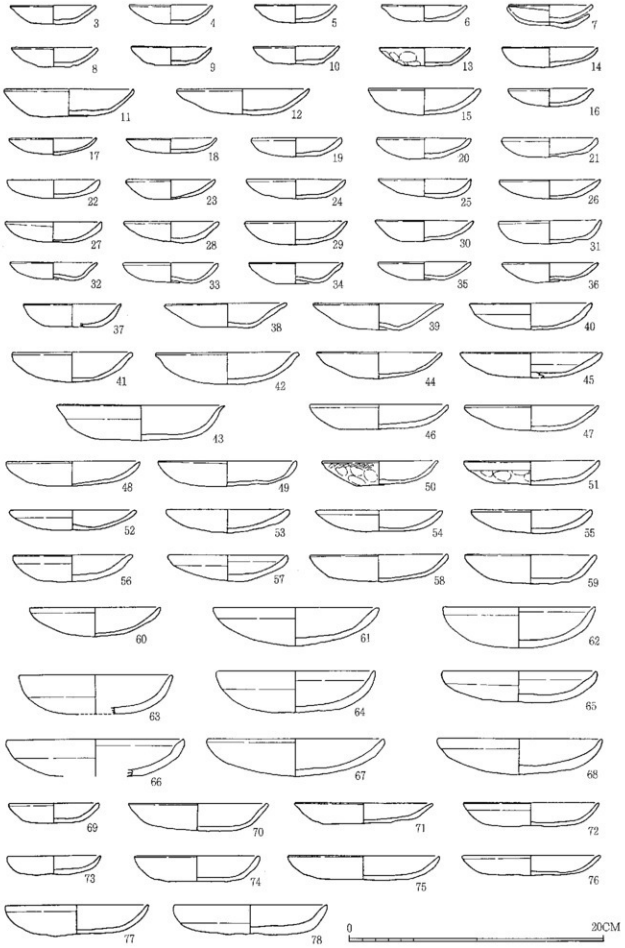


5

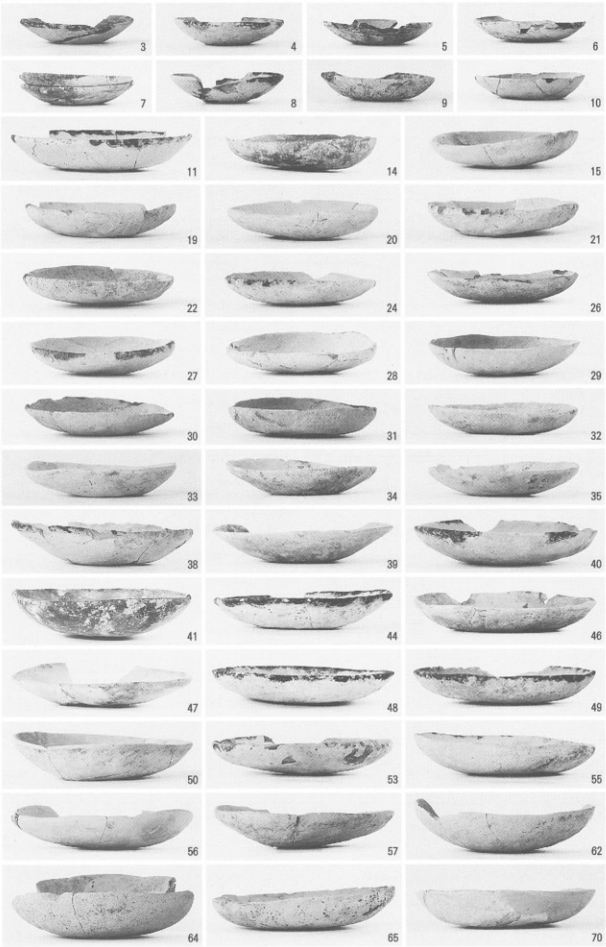
6

7

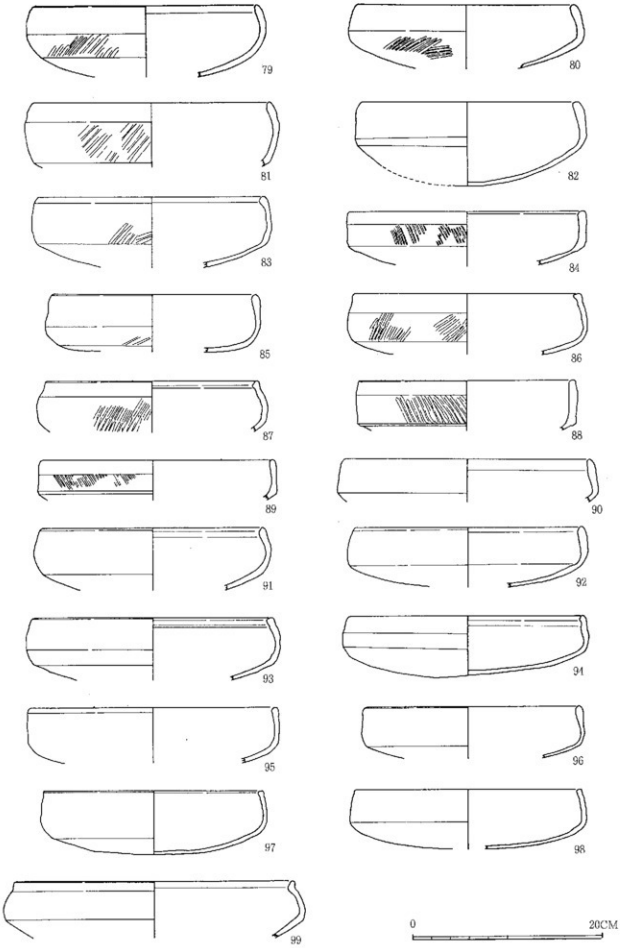
PL. 55　遺物実測図


3
4
5
6
7
8
9
10
13
14
11
12
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
44
45
43
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
0
20CM

PL. 56 遺物写真


3
4
5
6
7
8
9
10
11
14
15
19
20
21
22
24
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
38
39
40
41
44
46
47
48
49
50
53
55
56
57
62
64
65
70

PL. 57　遺物実測図



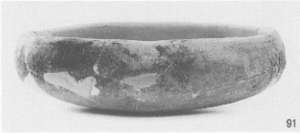
PL. 58　遺物写真

79

82

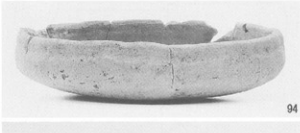
85

86


91

92

97


94

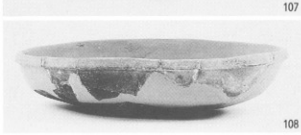
98

101

103

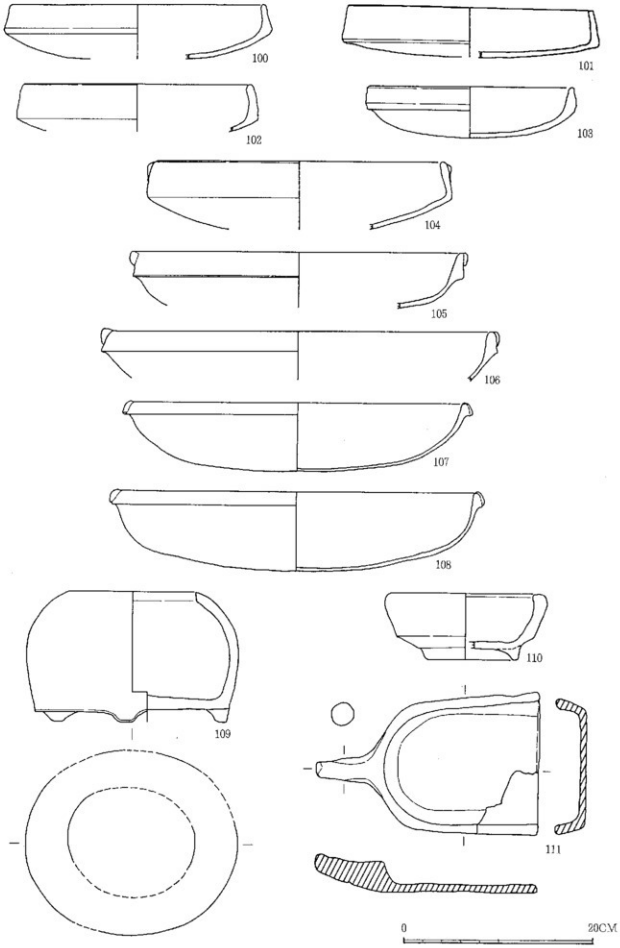
105

106

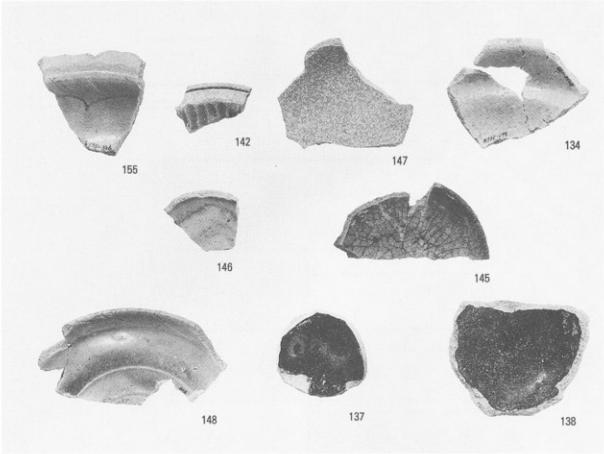

107

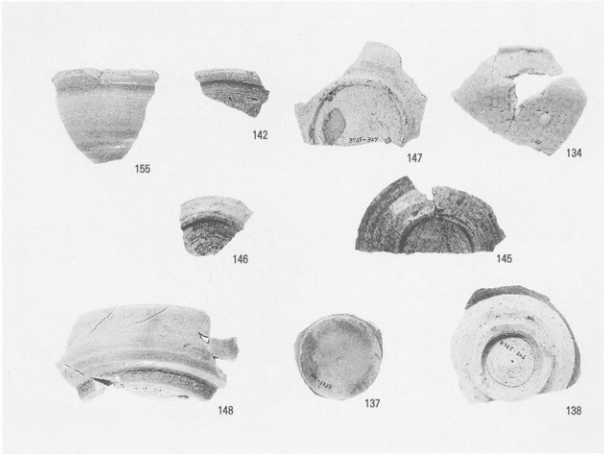
108

PL. 59　遺物実測図

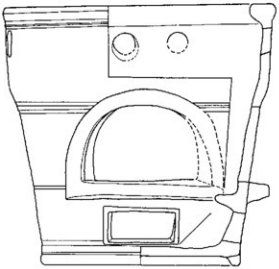


PL. 60　遺物写真

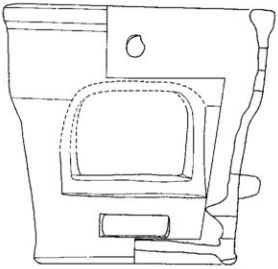

155
142
147
134
146
145
148
137
138


155
142
147
134
146
145
148
137
138

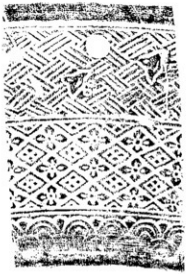
PL. 61 遺物実測図

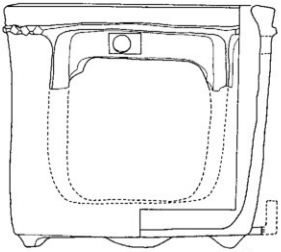


112



113





114

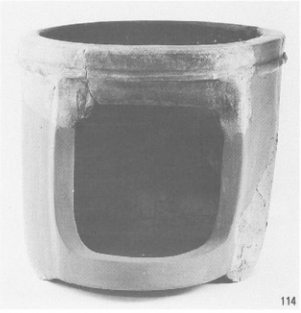
0 20CM

112

112

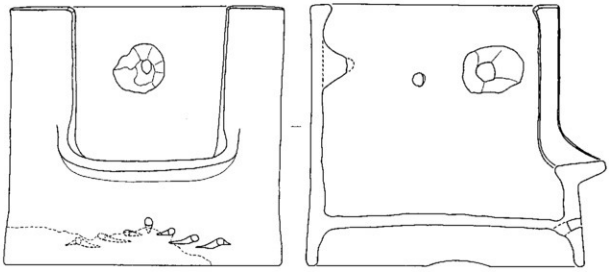
113

113

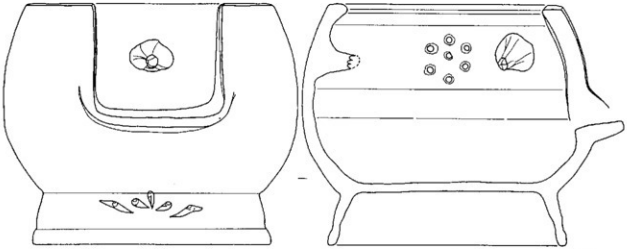

114

114

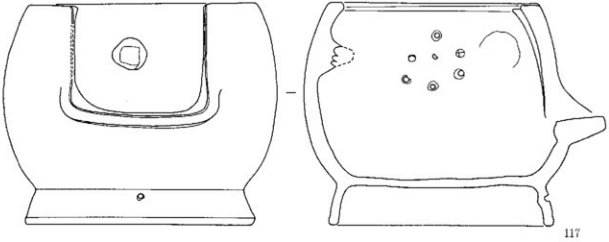
PL. 63 遺物実測図



115

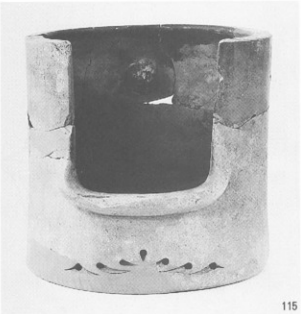


116



117

0 20CM


115

115

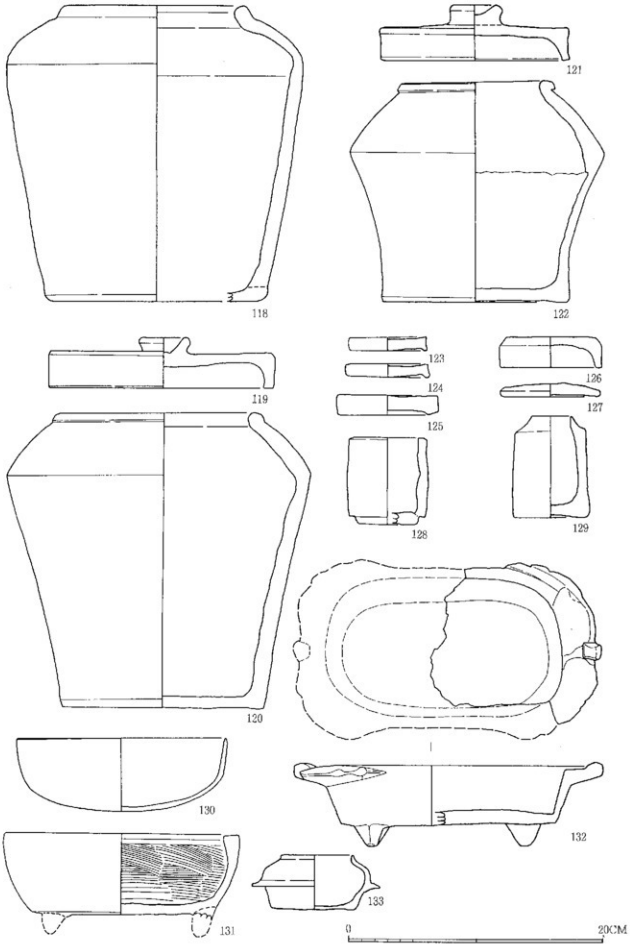
116

116

117

117

PL. 65 遺物写真

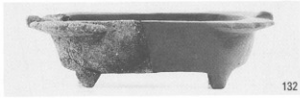

118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
0
20CM

PL. 66 遺物写真

110

109

131


132

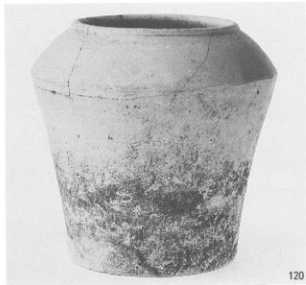
133

129

118

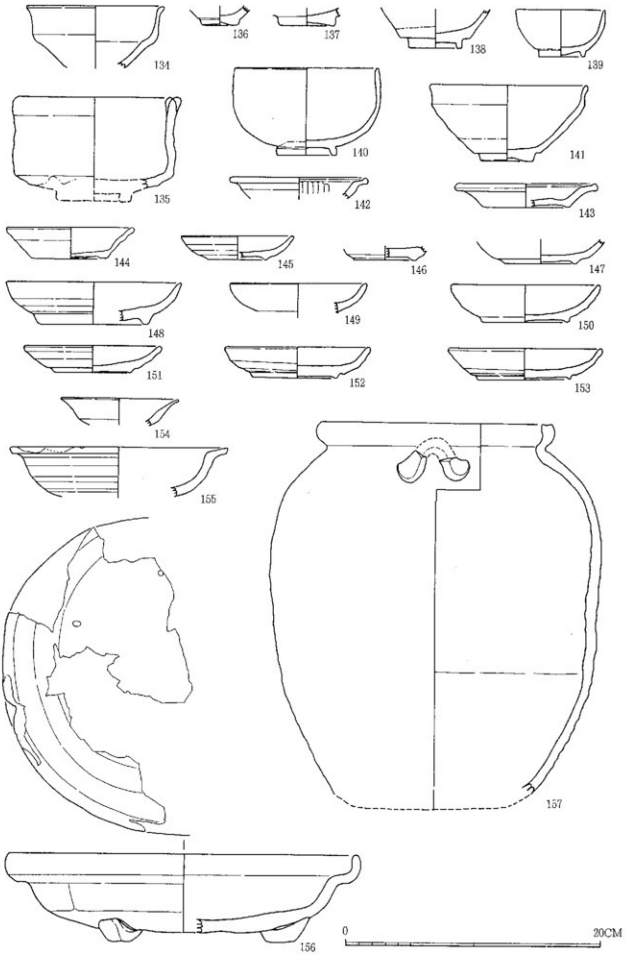
130

121


120

122

PL. 67　遺物実測図

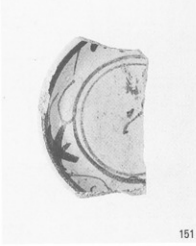

134
136
137
138
139
135
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
157
156
0
20CM

139

141

135

144


151

150

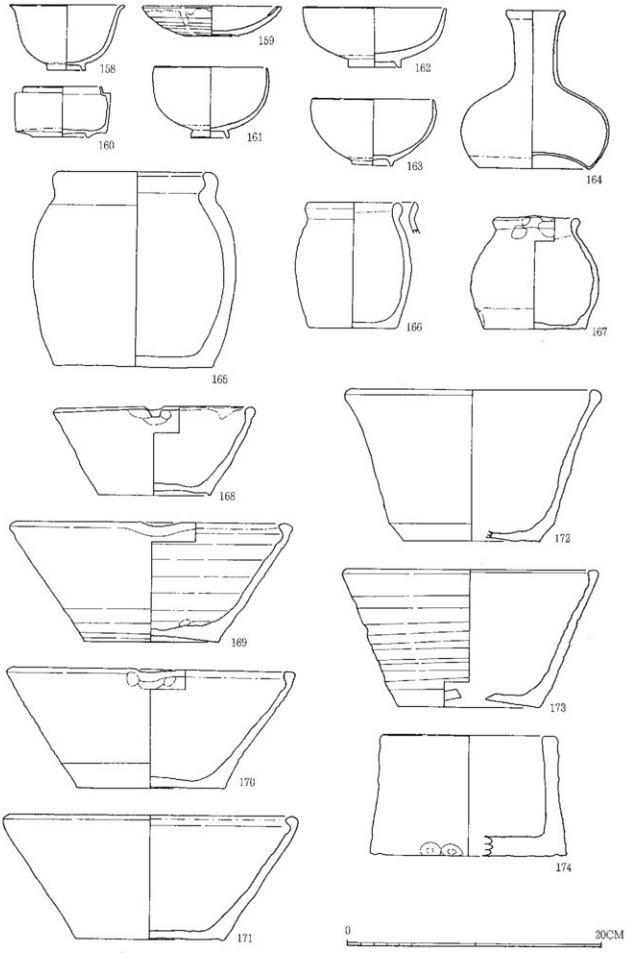
152

153

156

157

PL. 69 遺物実測図


158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
0
20CM

PL. 70 遺物写真

159

160

164

161

163

165

166

167

168

169

170

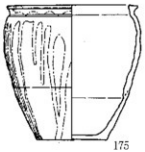
171

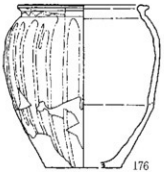
172

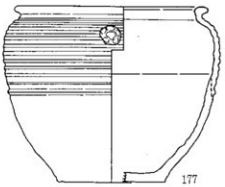
173

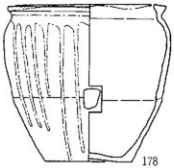
174

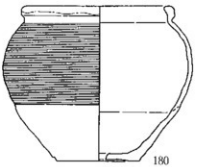
PL. 71　遺物実測図

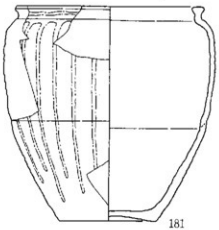


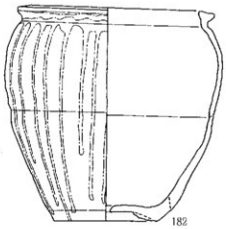


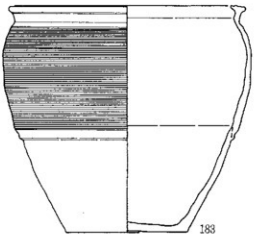


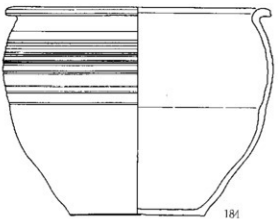






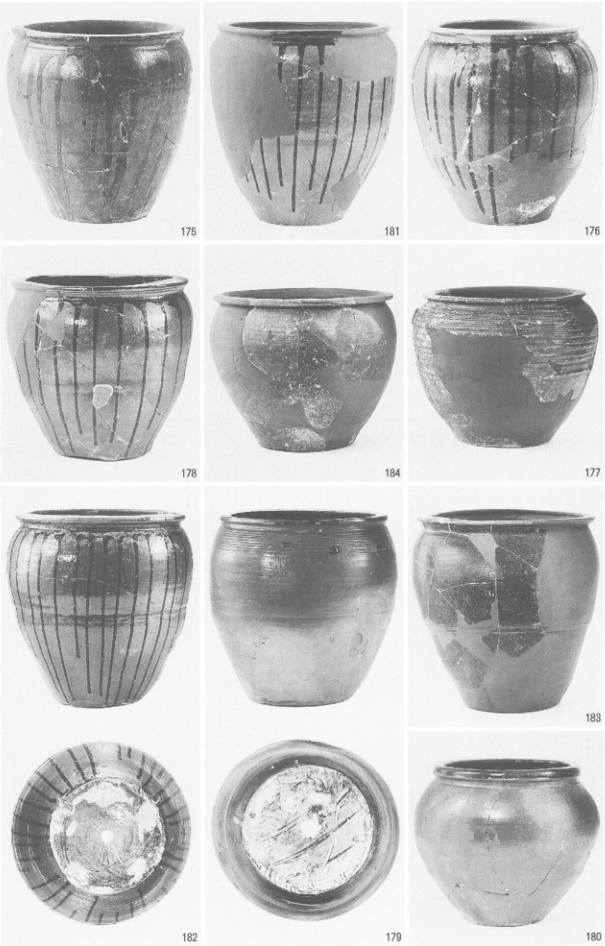




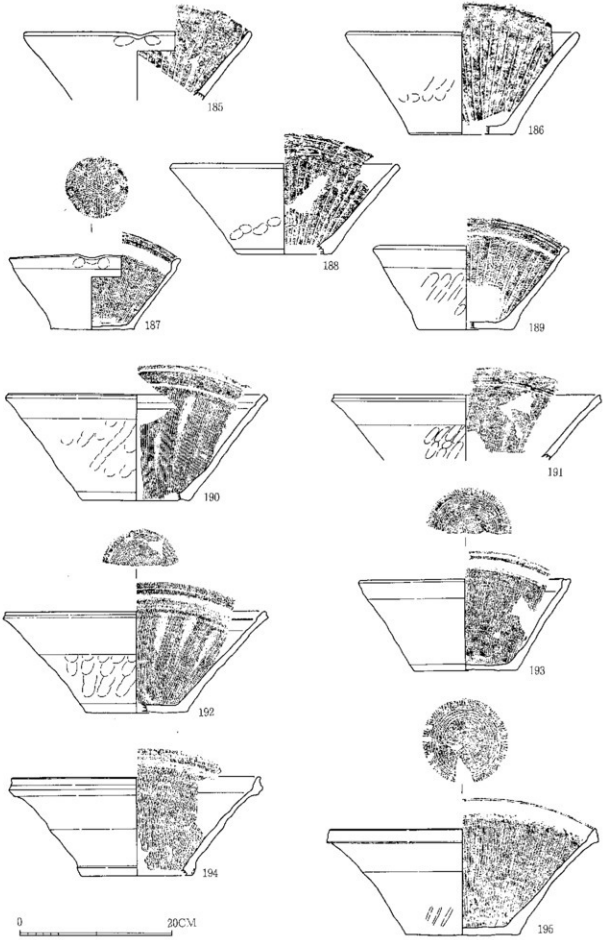


0　20CM

PL. 72　遺物写真



PL. 73 遺物実測図



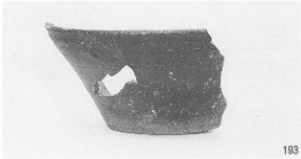
187

195

197

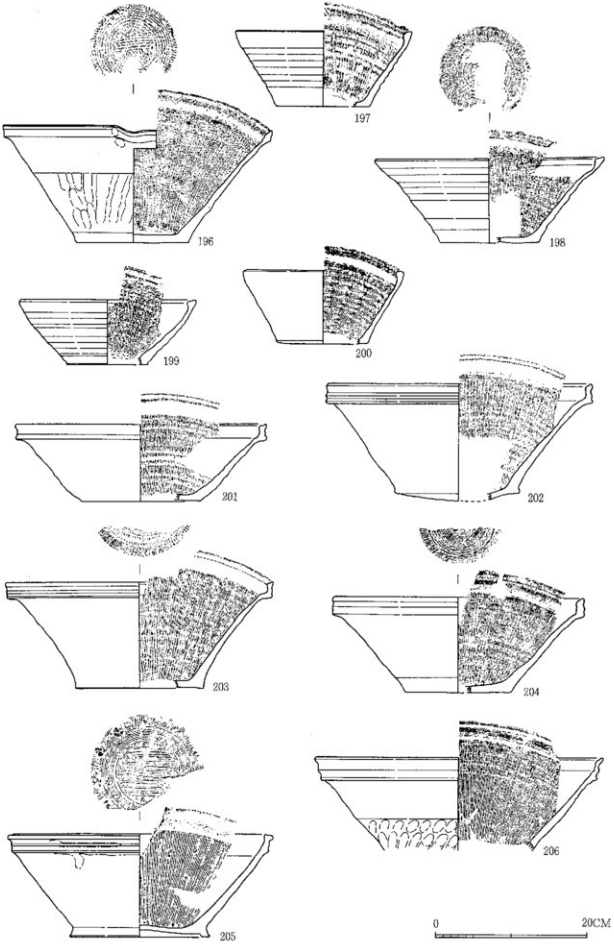
189

192


193

196

PL. 75 遺物実測図



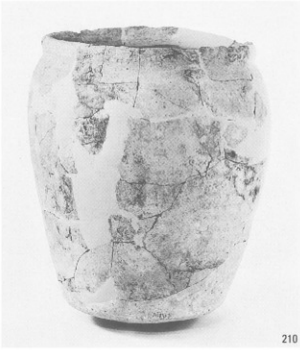
202

205

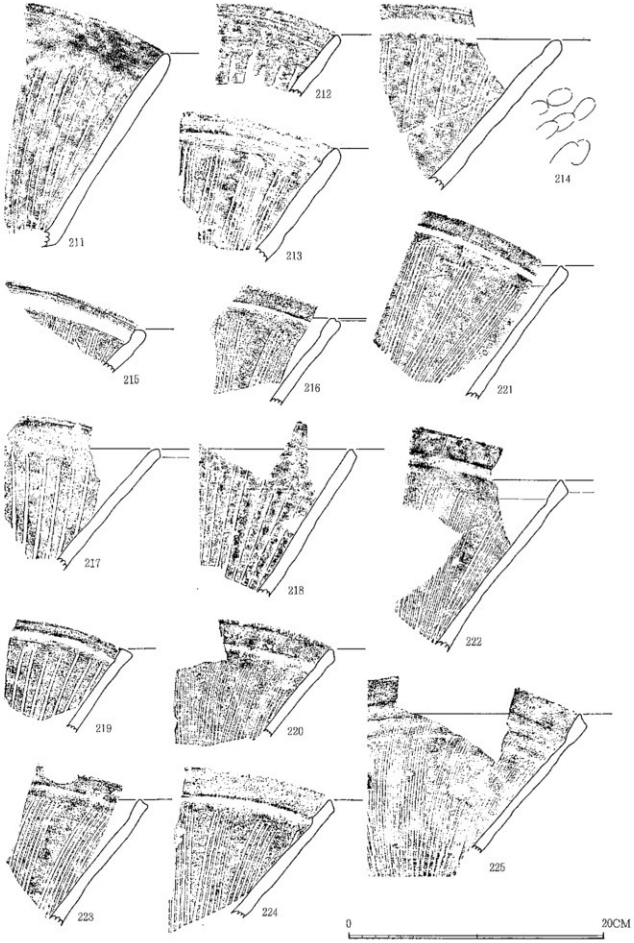
207

208

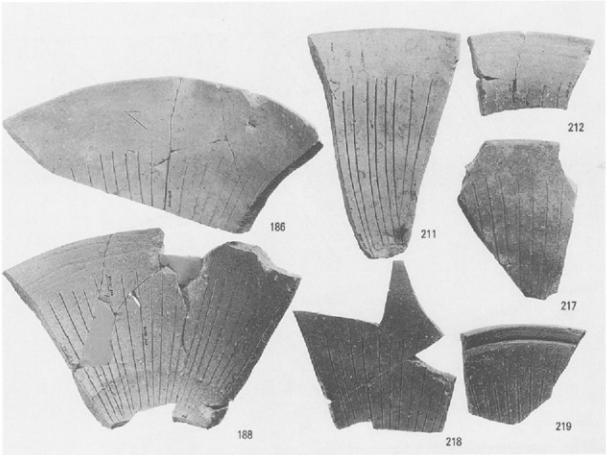
209

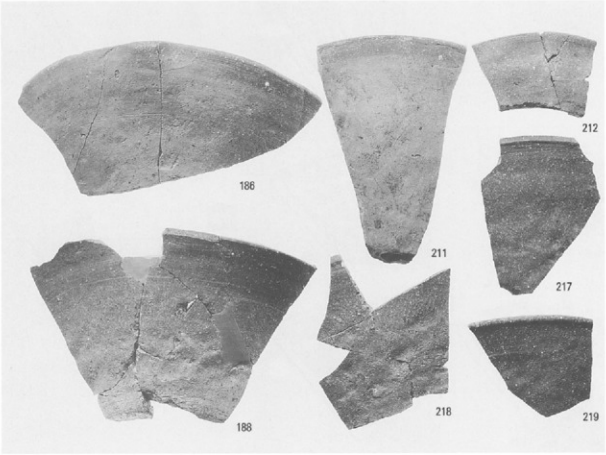

210

PL. 77　遺物実測図

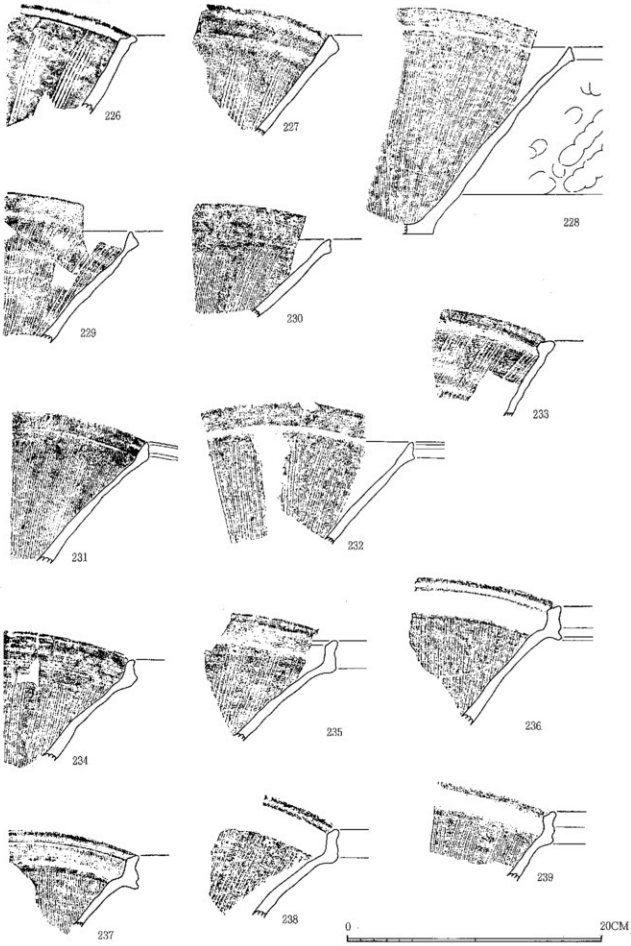

211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
0
20CM

PL. 78　遺物写真

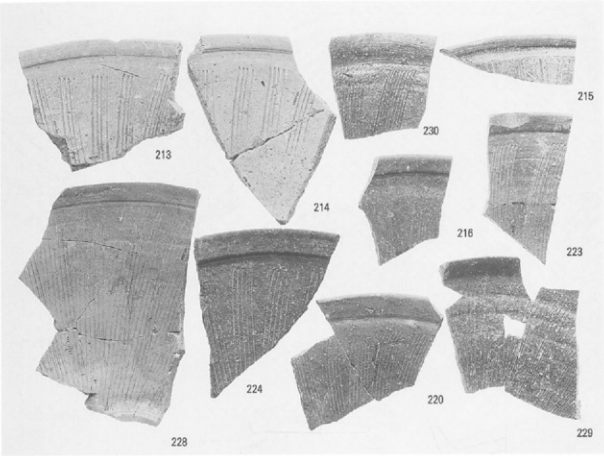


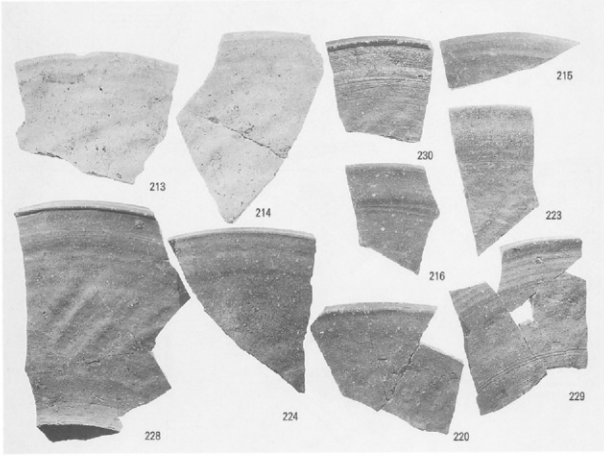


PL. 79 遺物実測図

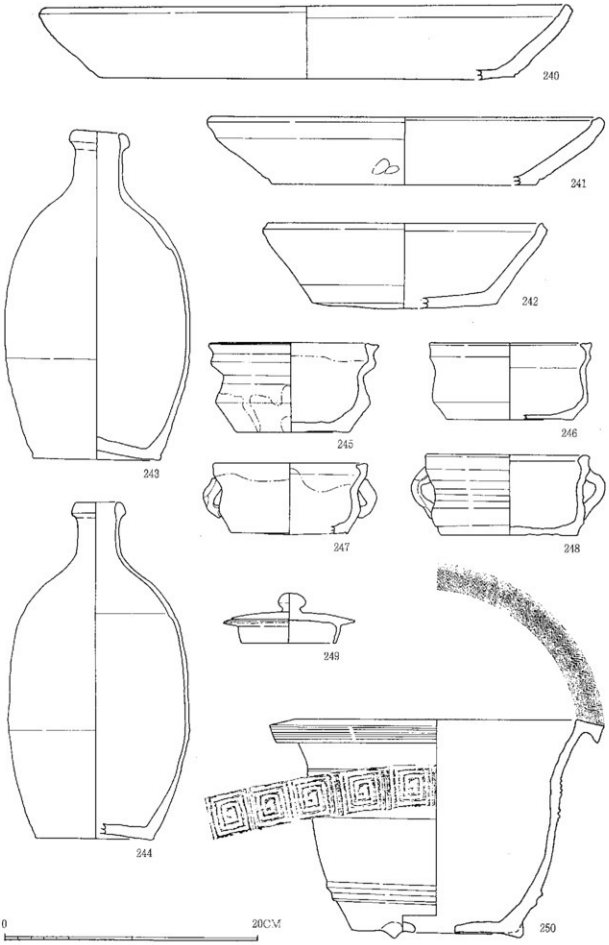


PL. 80　遺物写真


213
214
230
215
216
223
228
224
220
229


213
214
230
215
223
216
228
224
220
229

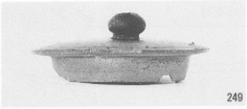
PL. 81　遺物実測図



245

247

248

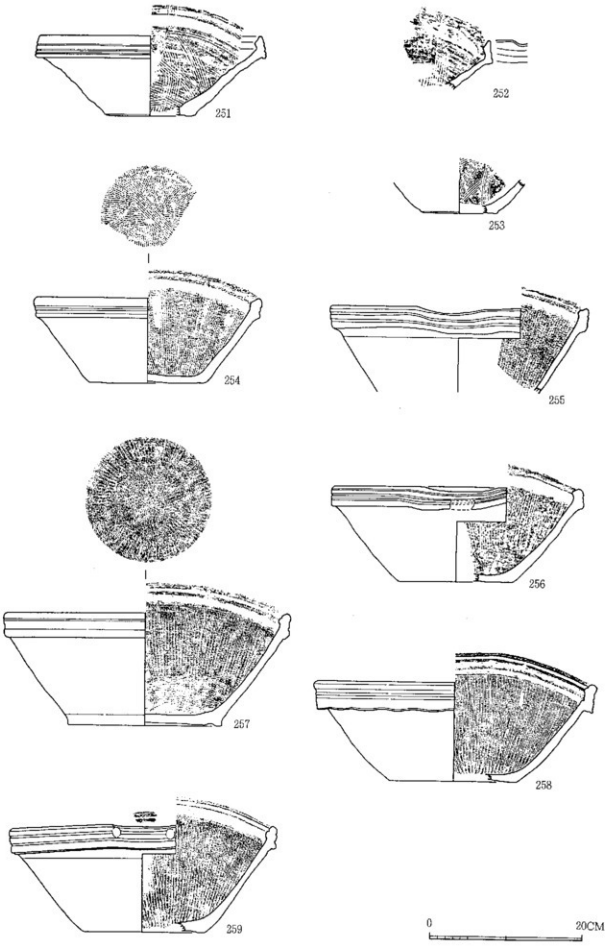

249

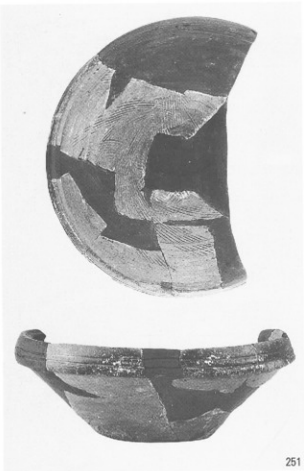
243

244

250

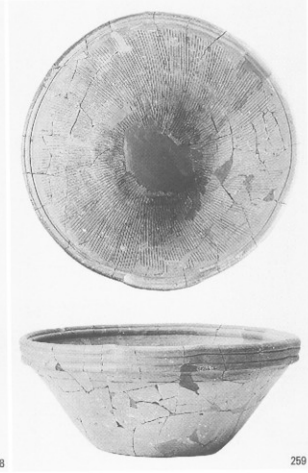
PL. 83　遺物実測図



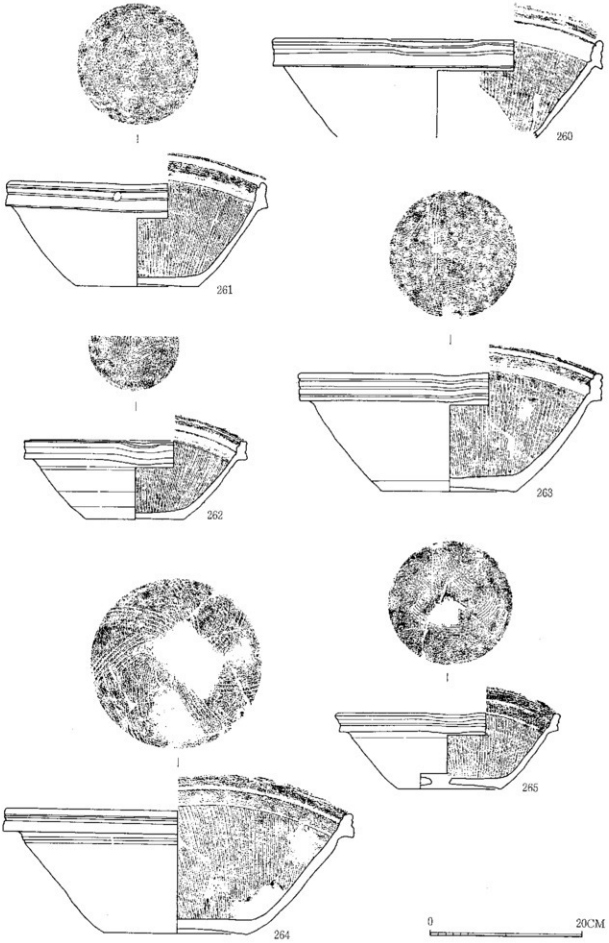

251

257

258


259

PL. 85　遺物実測図



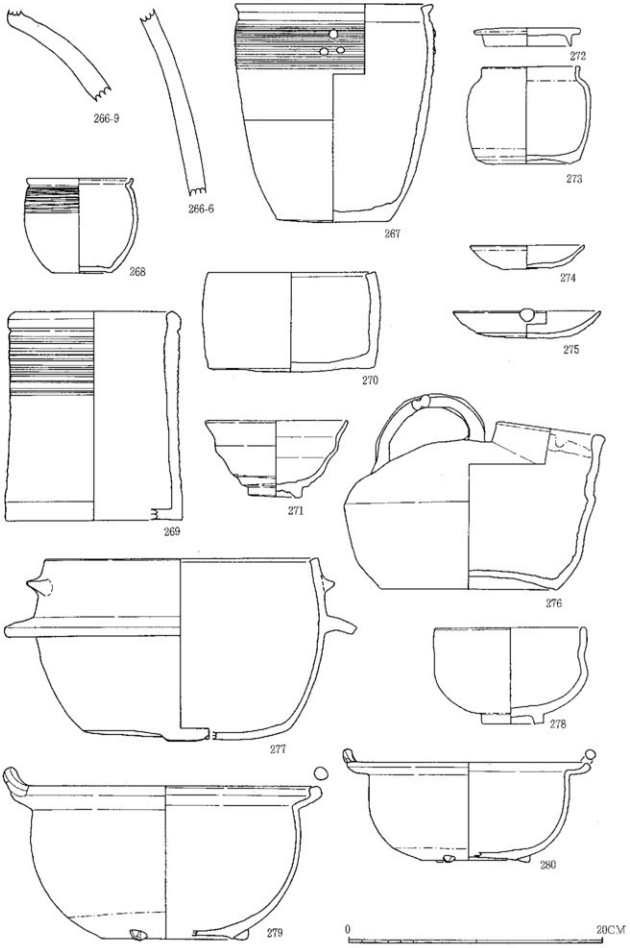
261

263

264

265

PL. 87　遺物実測図


266-9
266-6
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
0
20CM

PL. 88　遺物写真

268

272

273

278

267

271

269

270

274

275

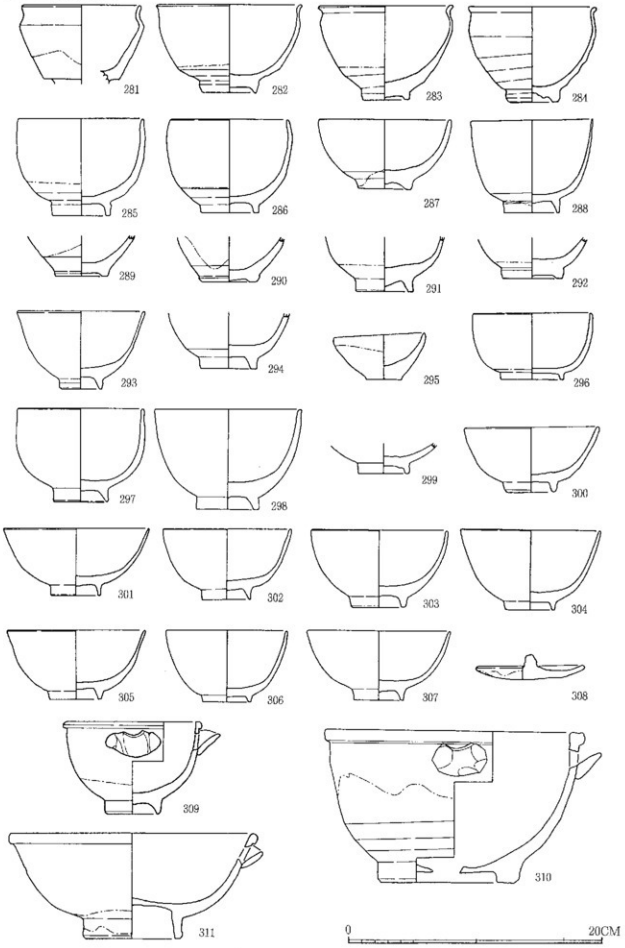
277

279

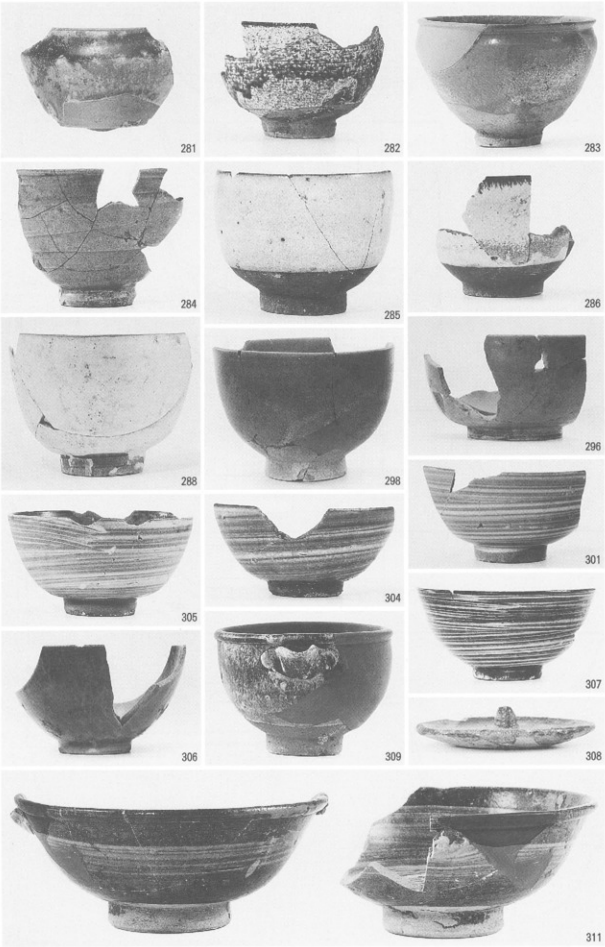
276

280

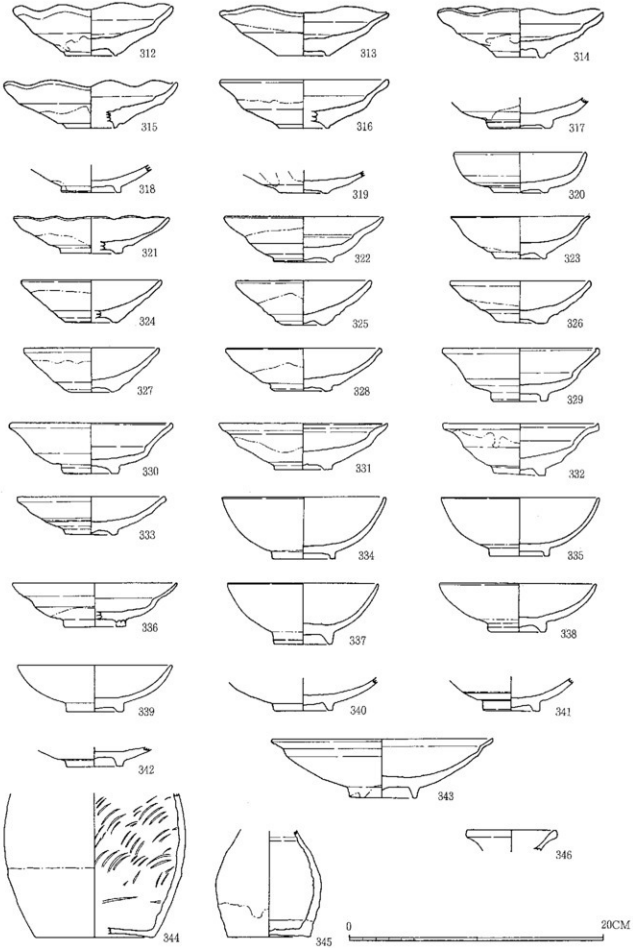
PL. 89　遺物実測図


281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
0
20CM

PL. 90　遺物写真

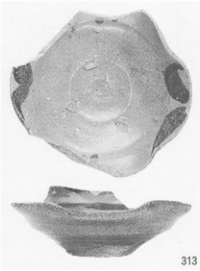

281
282
283
284
285
286
288
298
296
301
305
304
307
306
309
308
311

PL. 91　遺物実測図


312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
0
20CM

PL. 92　遺物写真

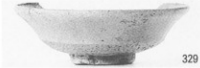
312


313

314

318

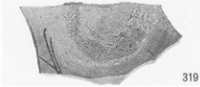
326

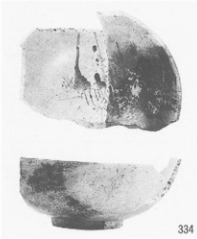

329

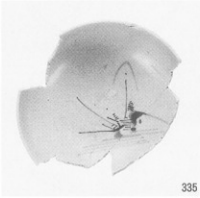
328

330

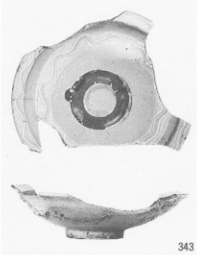
332


319


334


335

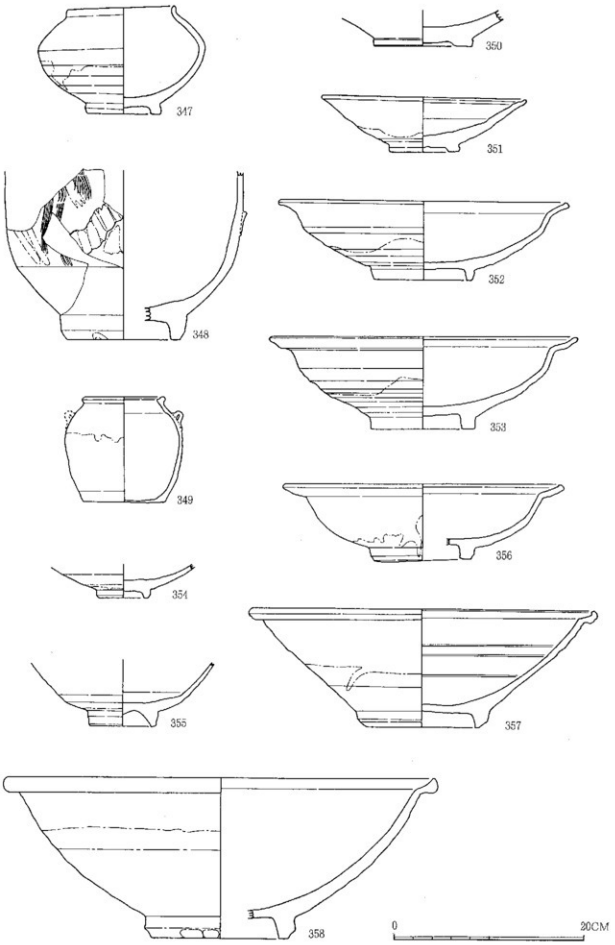
339

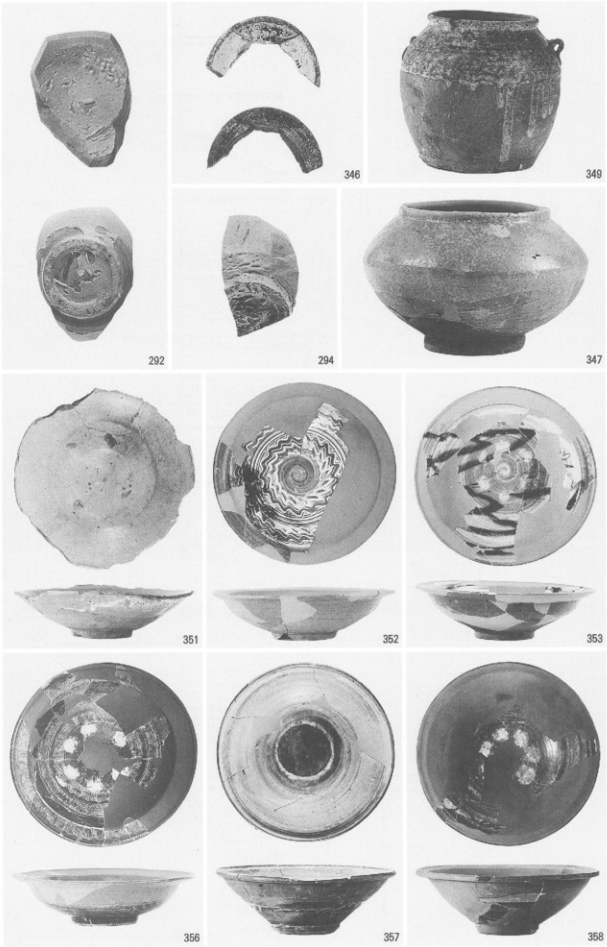

343

345

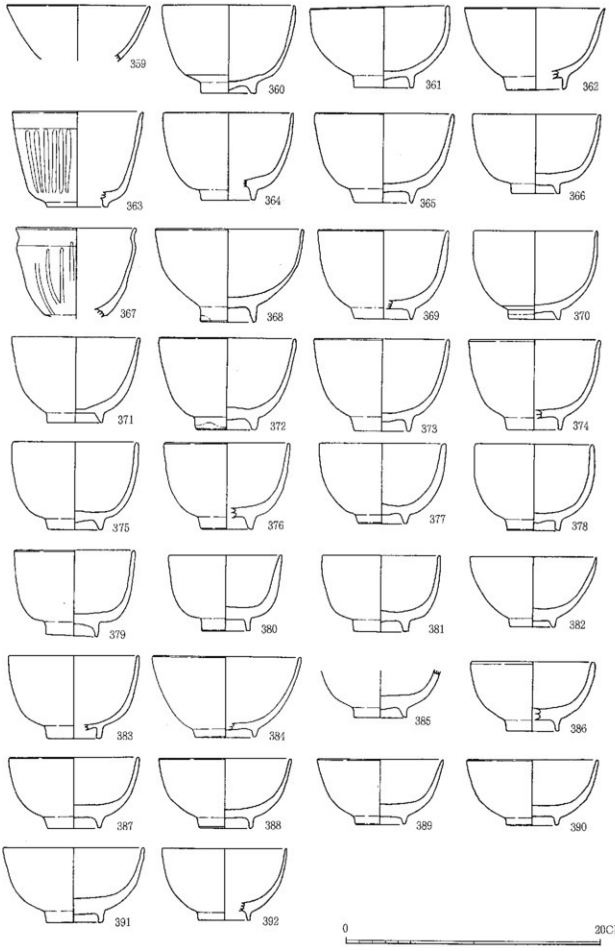
344

PL. 93　遺物実測図

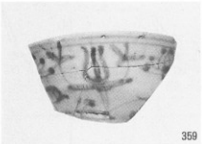



292
346
349
294
347
351
352
353
356
357
358

PL. 95 遺物実測図


359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
0
20CM

PL. 96　遺物写真


359

361

362

363

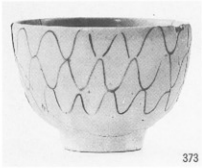
364

365

368

370

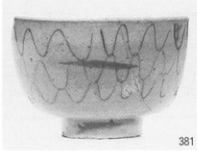
371


373

378

379

380


381

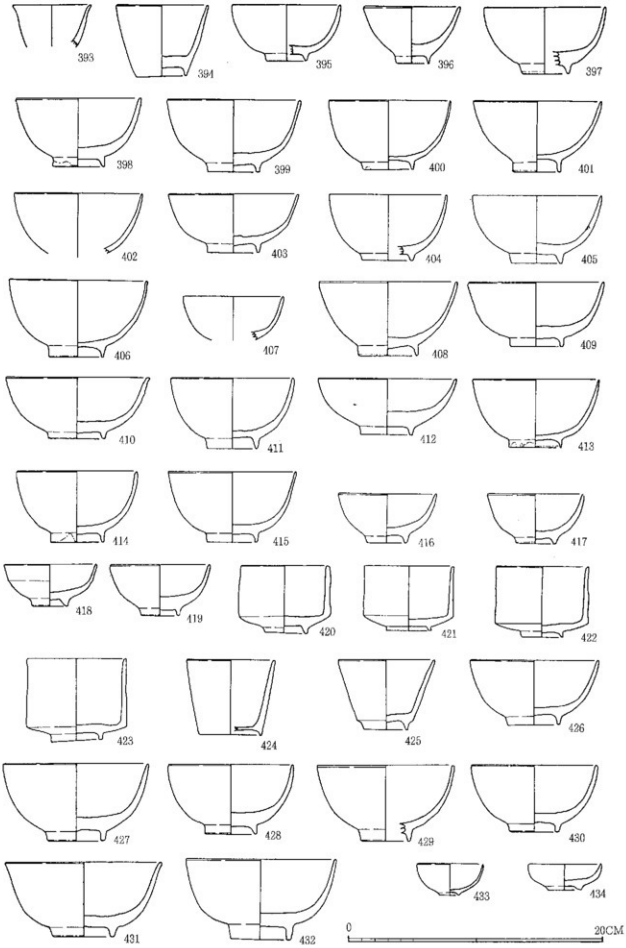
383

384

387

389

PL. 97　遺物実測図


393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
430
431
432
433
434
0
20CM

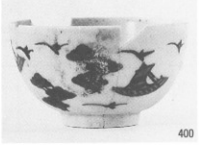
PL. 98 遺物写真

391

396

403

398


400

394

401

406

408

409

410

413

414

415

420

422

423

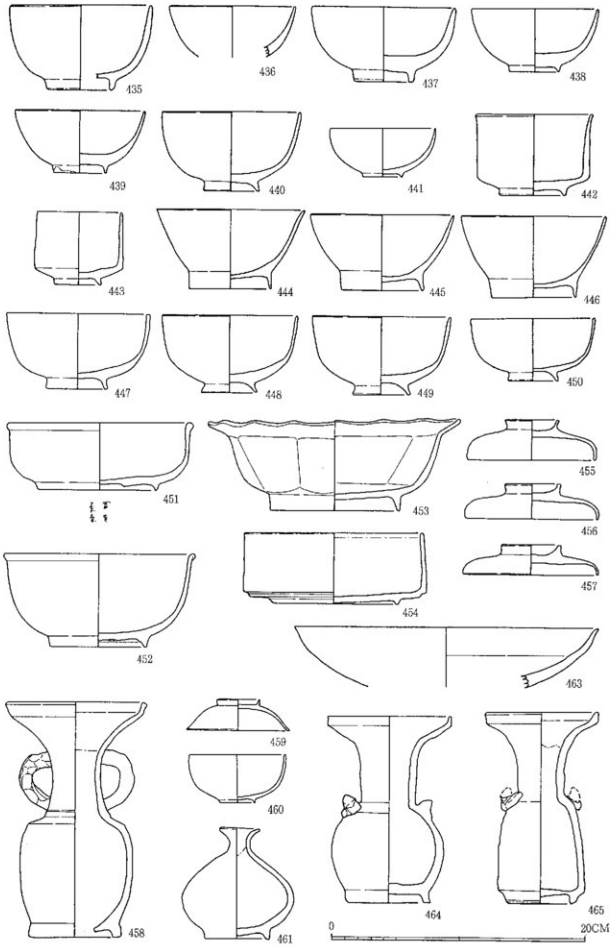
425

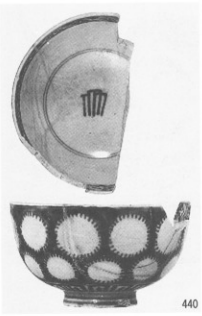
426

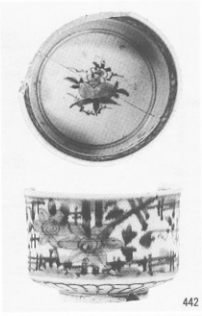
428

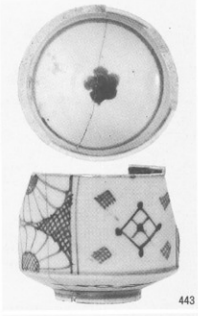
430

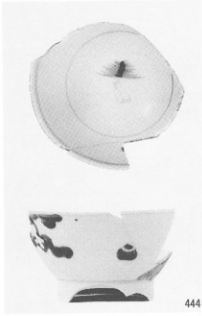
PL. 99 遺物実測図

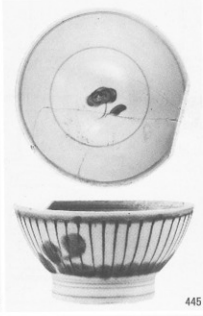

435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458
459
460
461
463
464
465
0
20CM

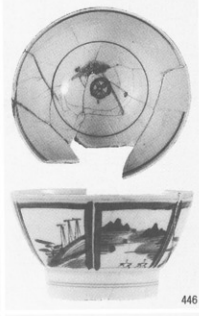

440


442

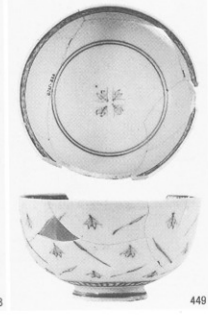

443


444


445


446

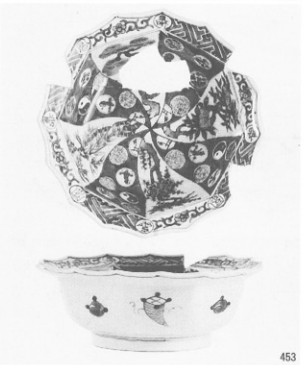
448


449

450

461

451


453

452

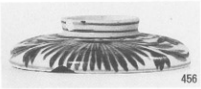
458

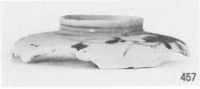
464

465

PL. 102　遺物写真

455


456

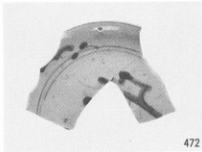

457

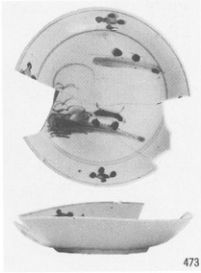
466

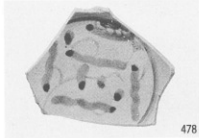
471

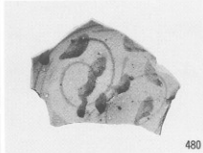
460

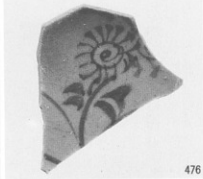
459

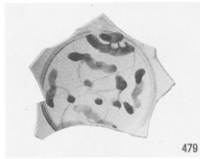

472


473

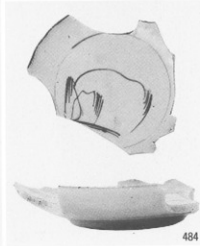

478


480


476

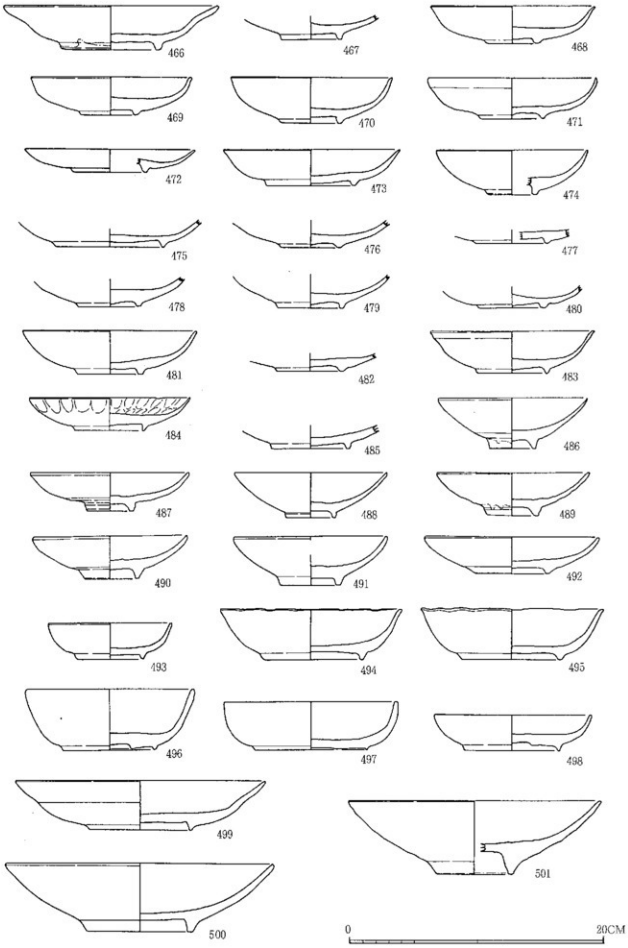

479

483

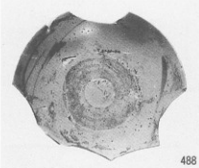

484

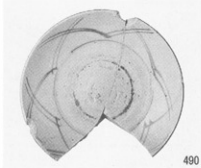
482

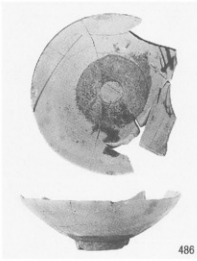
PL. 103 遺物実測図

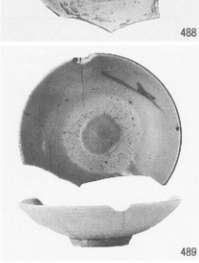

466
467
468
469
470
471
472
473
474
475
476
477
478
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
500
501
0
20CM

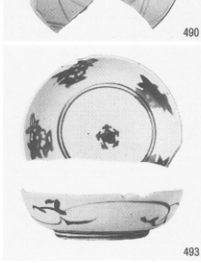
499


488


490


486

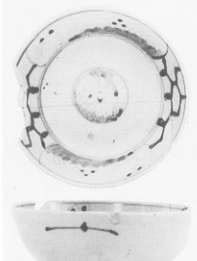

489


493

494

495

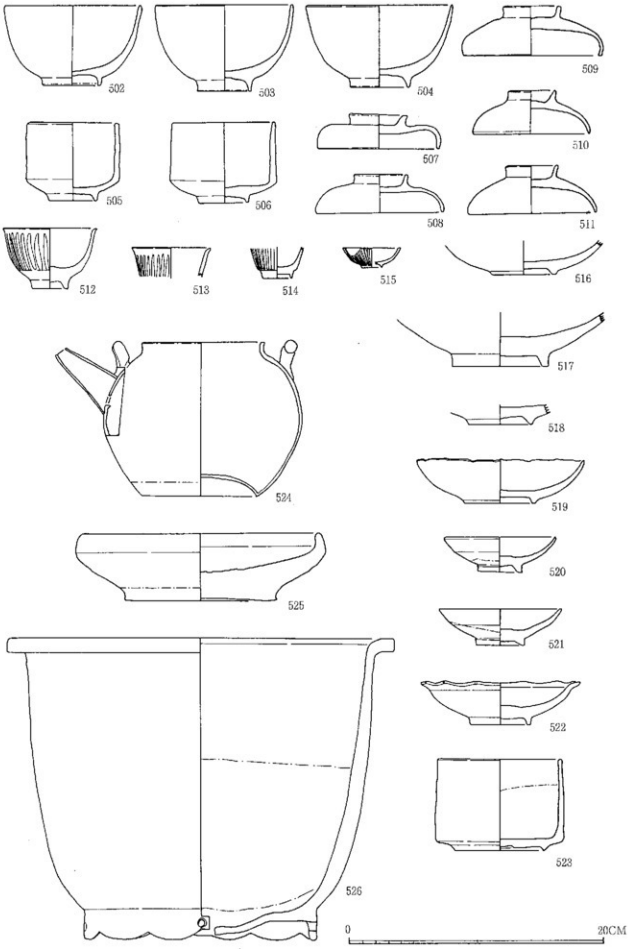
501


496

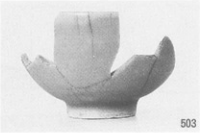
497

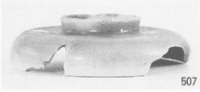
498

PL. 105　遺物実測図


502
503
504
509
507
510
505
506
508
511
512
513
514
515
516
517
518
524
519
520
525
521
522
523
526
0
20CM

502


503


507

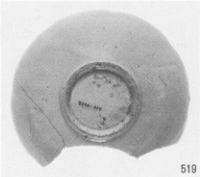
509

505

506

510

512


519

522

525

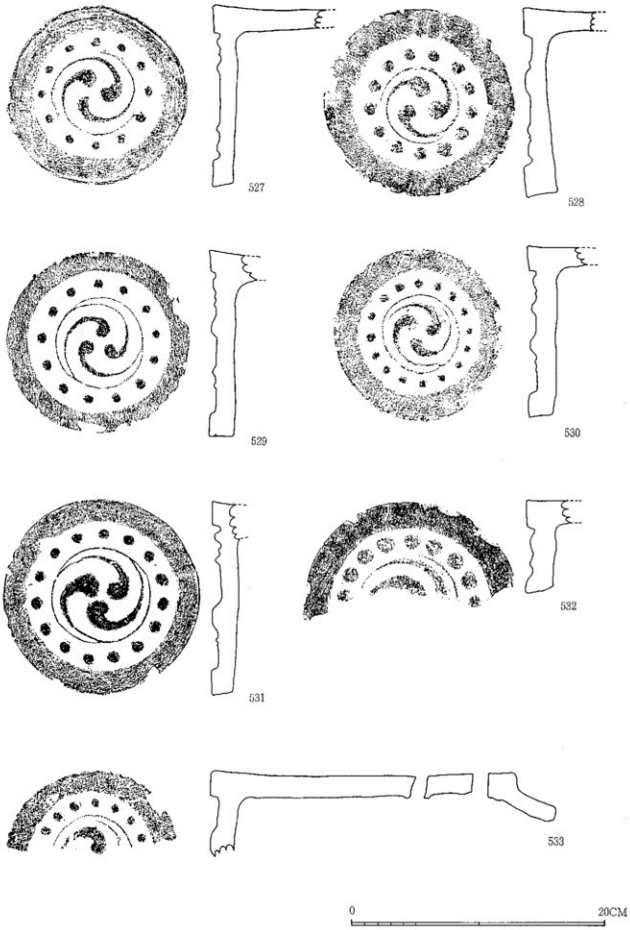
520

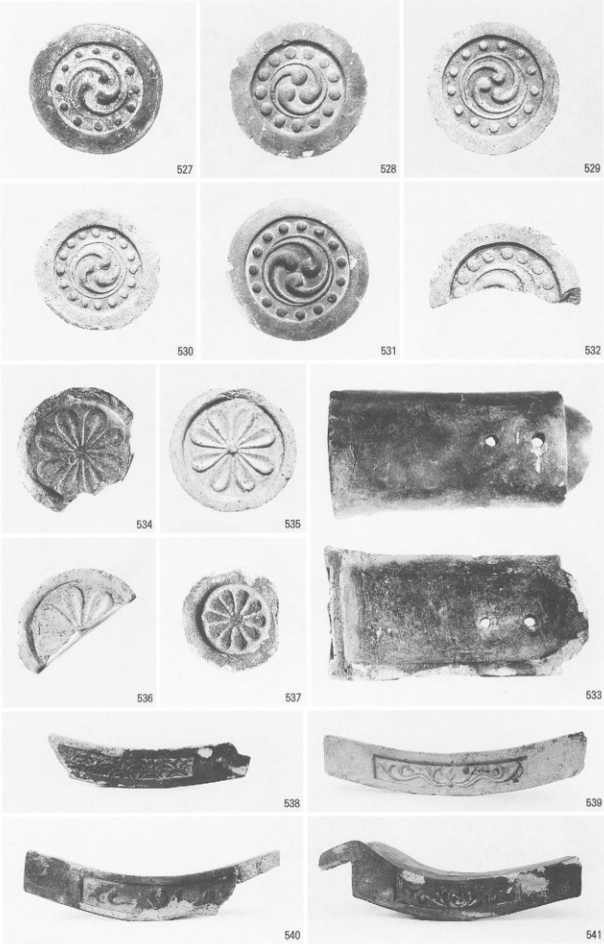
523

526

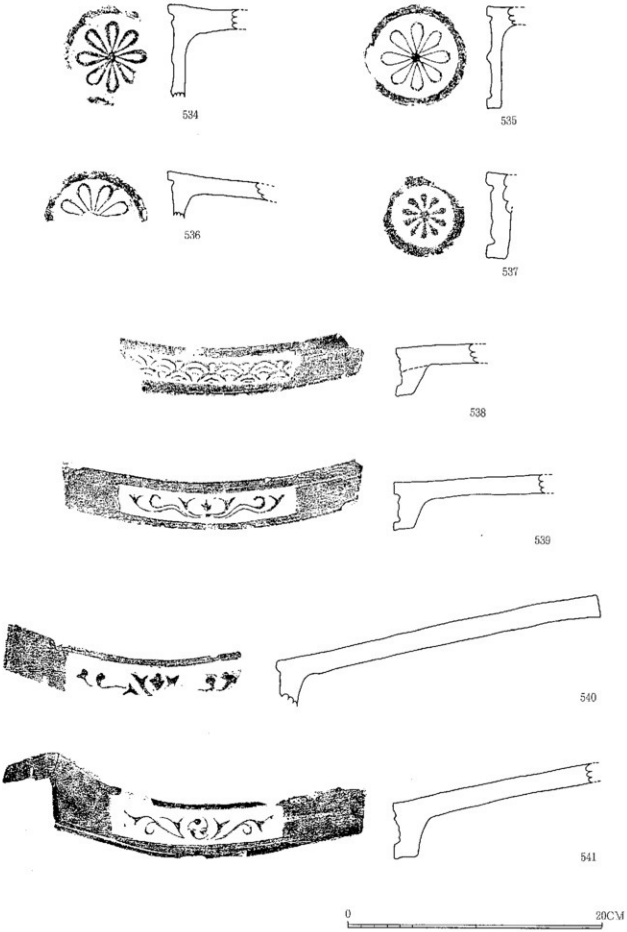
524

PL. 107　遺物実測図

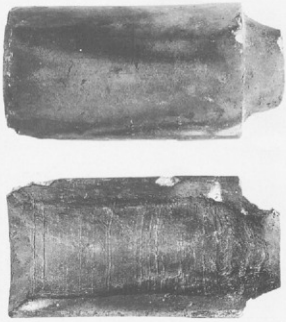



527
528
529
530
531
532
534
535
536
537
533
538
539
540
541

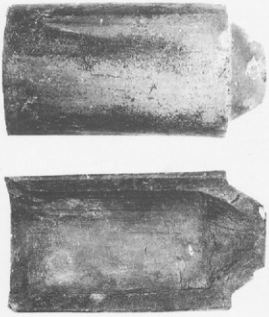
PL. 109 遺物実測図



PL. 110　遺物写真



542

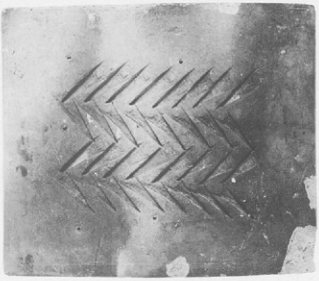


543

544

545

546

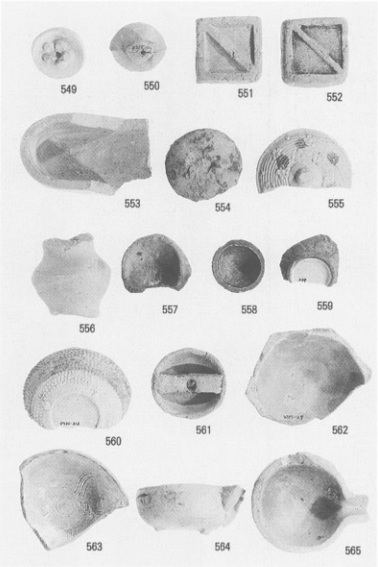


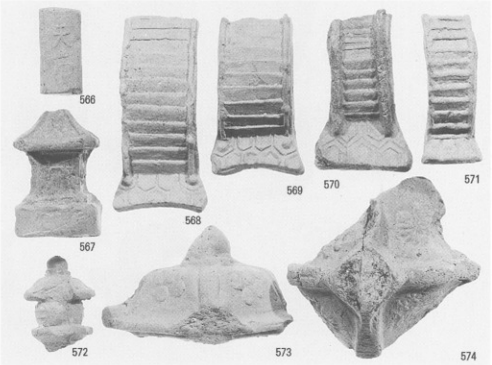
548

547

PL. 111　遺物写真

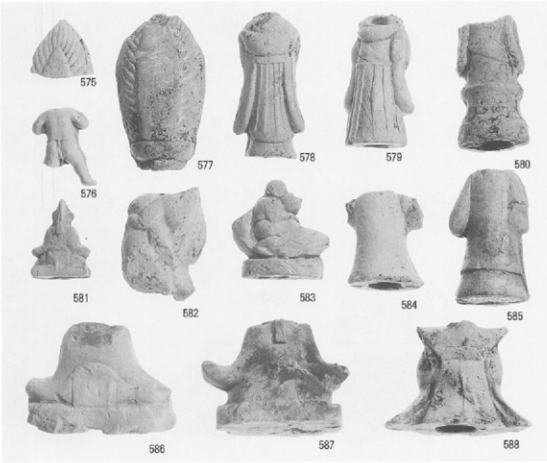
2


549
550
551
552
553
554
555
556
557
558
559
560
561
562
563
564
565

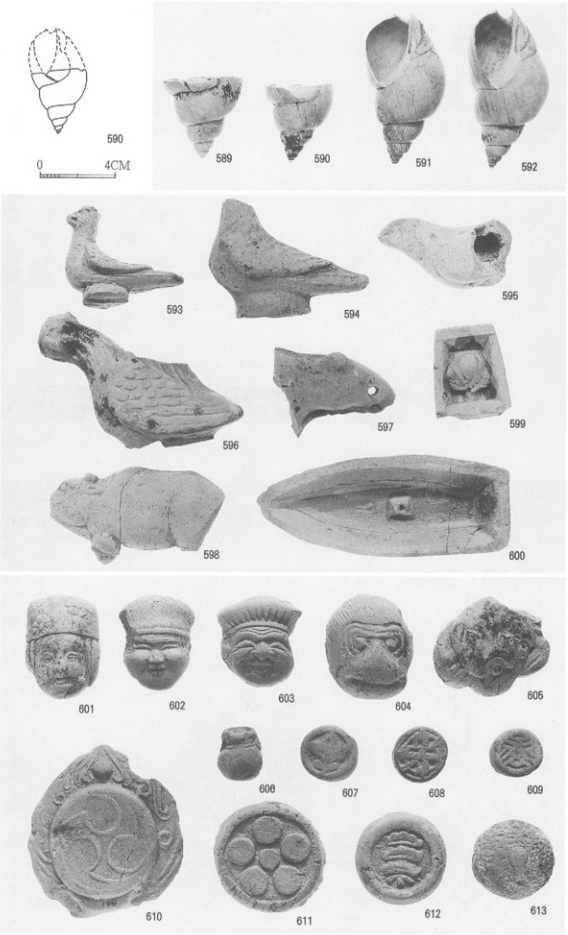

566
567
568
569
570
571
572
573
574

PL. 112 遺物写真

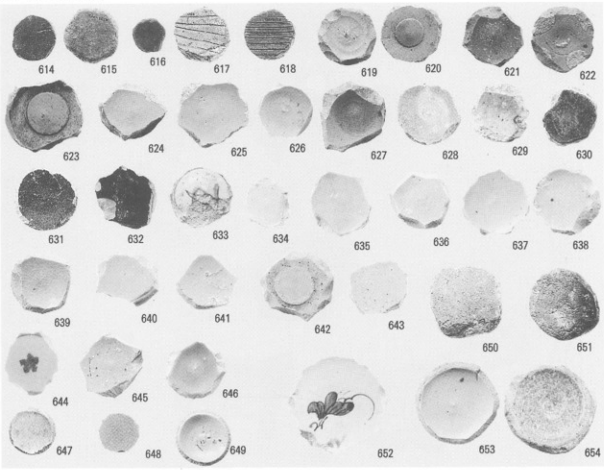
575
576
577
578
579
580
581
582
583
584
585
586
587
588

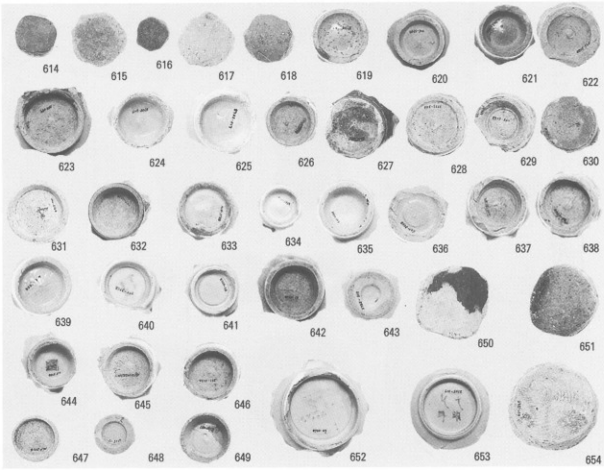

575
576
577
578
579
580
581
582
583
584
585
586
587
588

PL. 113　遺物実測図・遺物写真

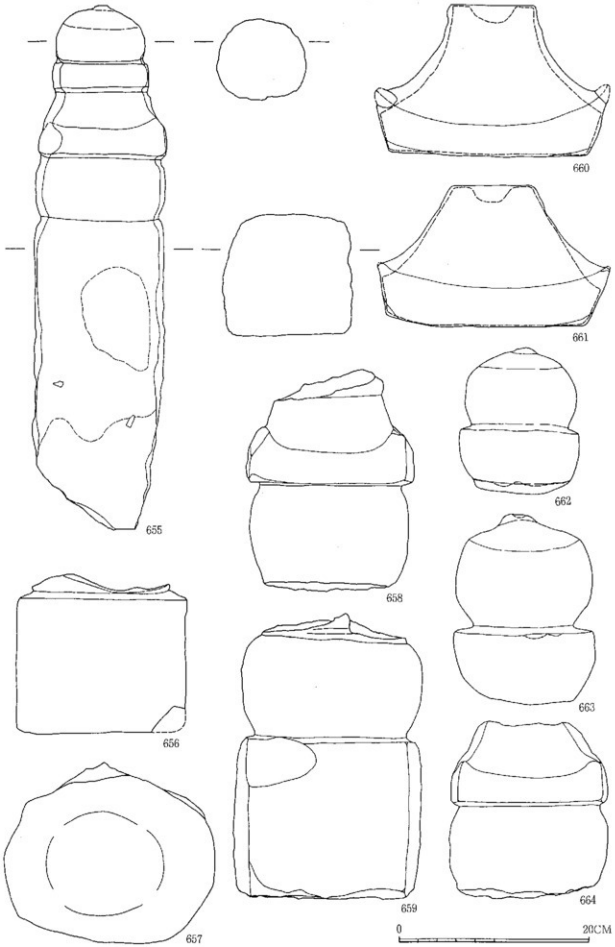


PL. 114　遺物写真


614
615
616
617
618
619
620
621
622
623
624
625
626
627
628
629
630
631
632
633
634
635
636
637
638
639
640
641
642
643
650
651
644
645
646
647
648
649
652
653
654


614
615
616
617
618
619
620
621
622
623
624
625
626
627
628
629
630
631
632
633
634
635
636
637
638
639
640
641
642
643
650
651
644
645
646
647
648
649
652
653
654

PL. 115 遺物実測図



PL. 116　遺物写真

660

661

655

662

663

658

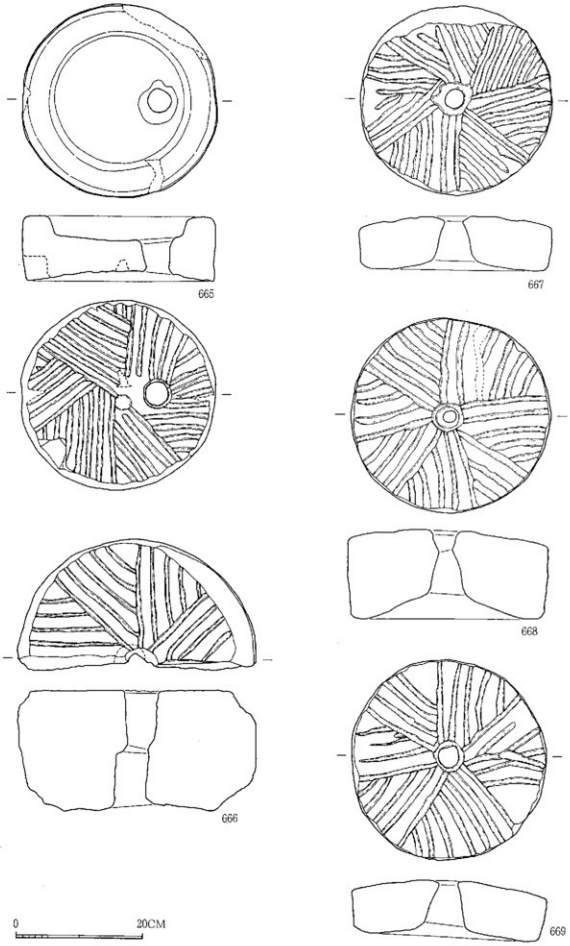
664

659

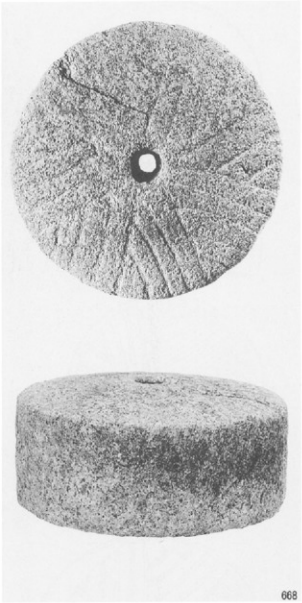
657

656

PL. 117　遺物実測図

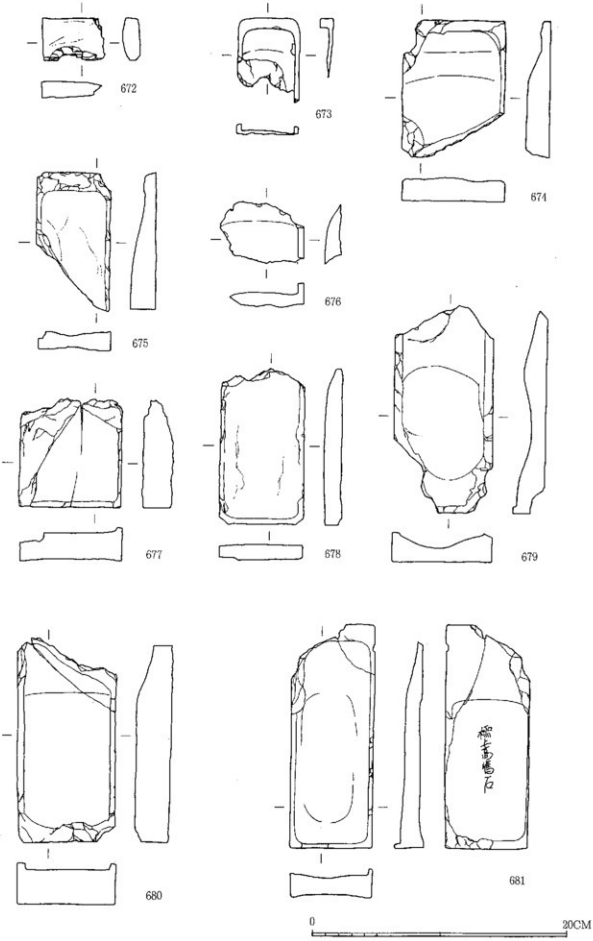


665


668

667

PL. 119　遺物実測図

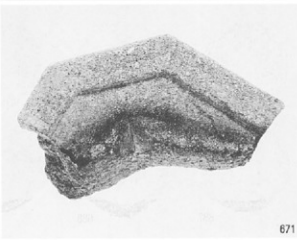


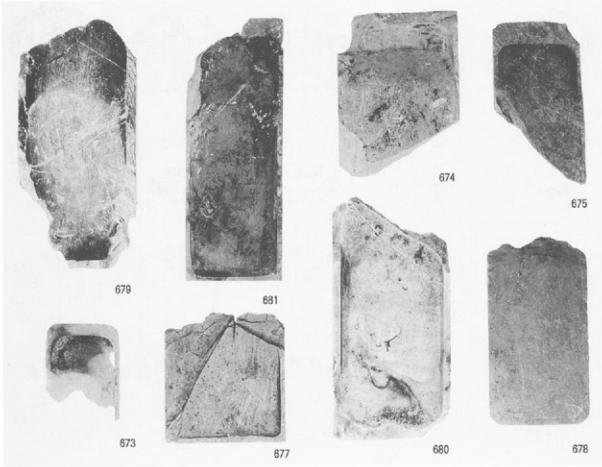
PL. 120　遺物写真

669

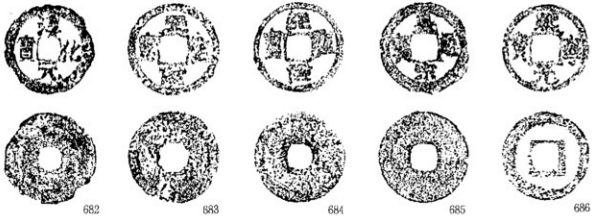
666

670

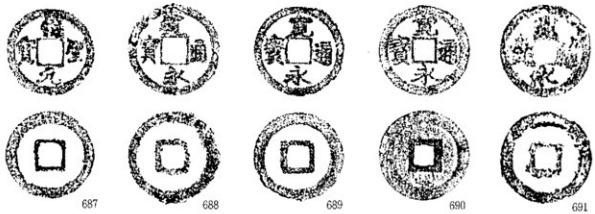

671



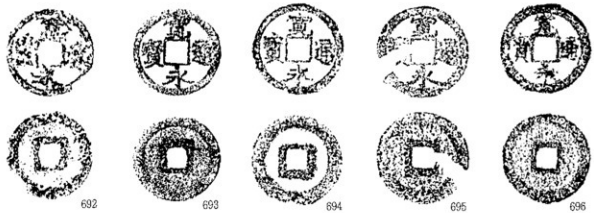
PL. 121　遺物実測図



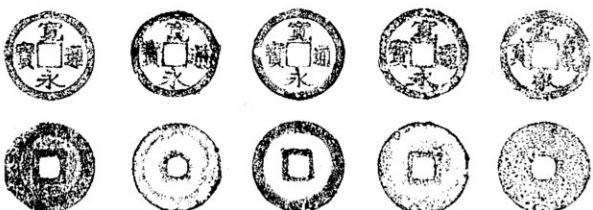
682　683　684　685　686



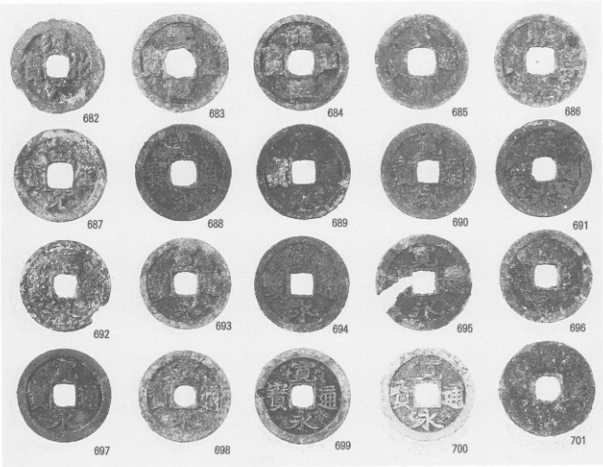
687　688　689　690　691

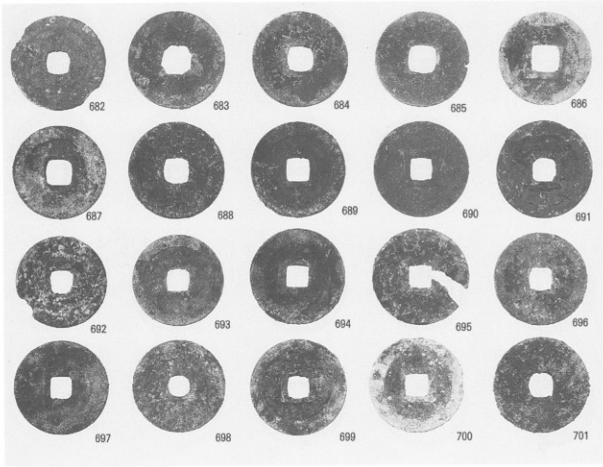


692　693　694　695　696

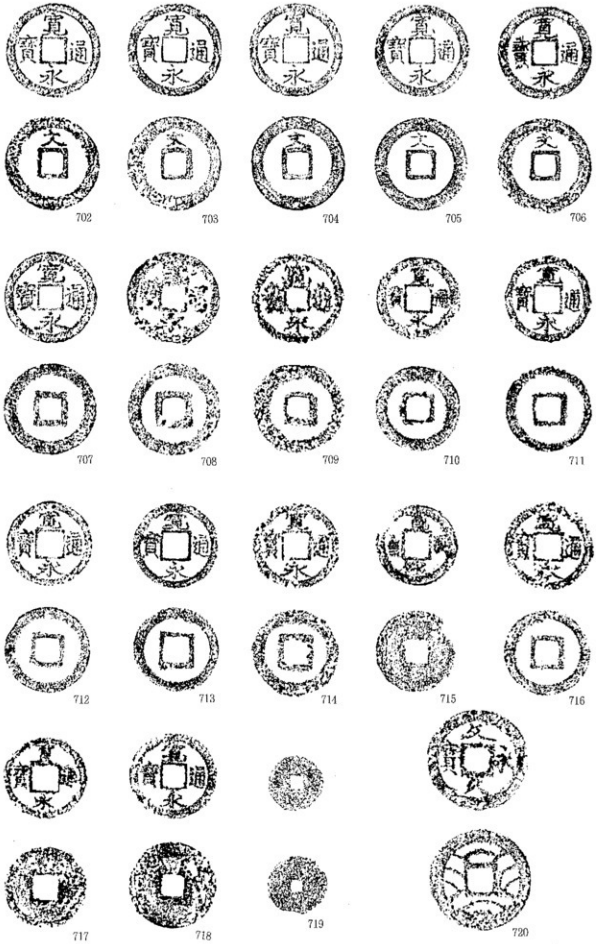


697　698　699　700　701

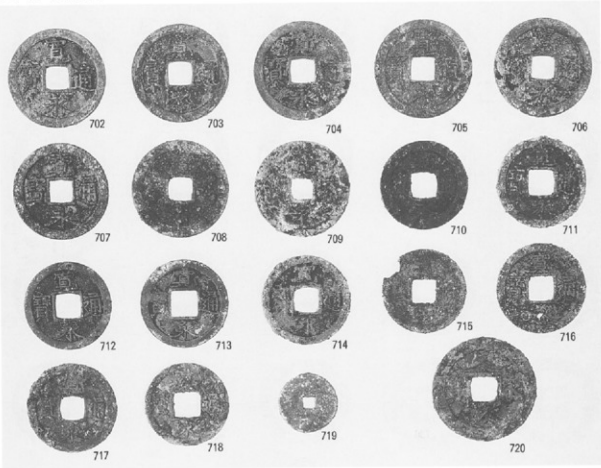

682
683
684
685
686
687
688
689
690
691
692
693
694
695
696
697
698
699
700
701

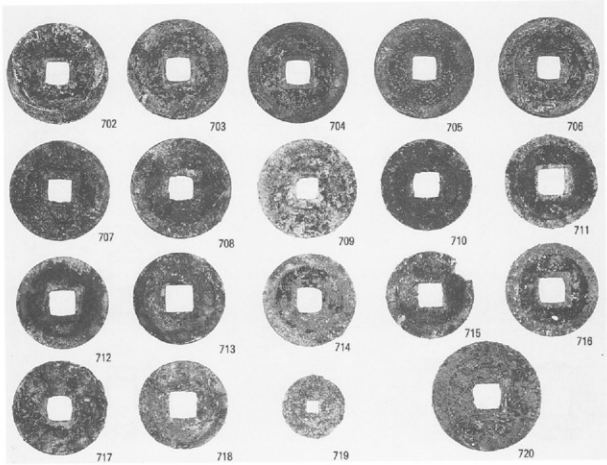

682
683
684
685
686
687
688
689
690
691
692
693
694
695
696
697
698
699
700
701

PL. 123　遺物実測図

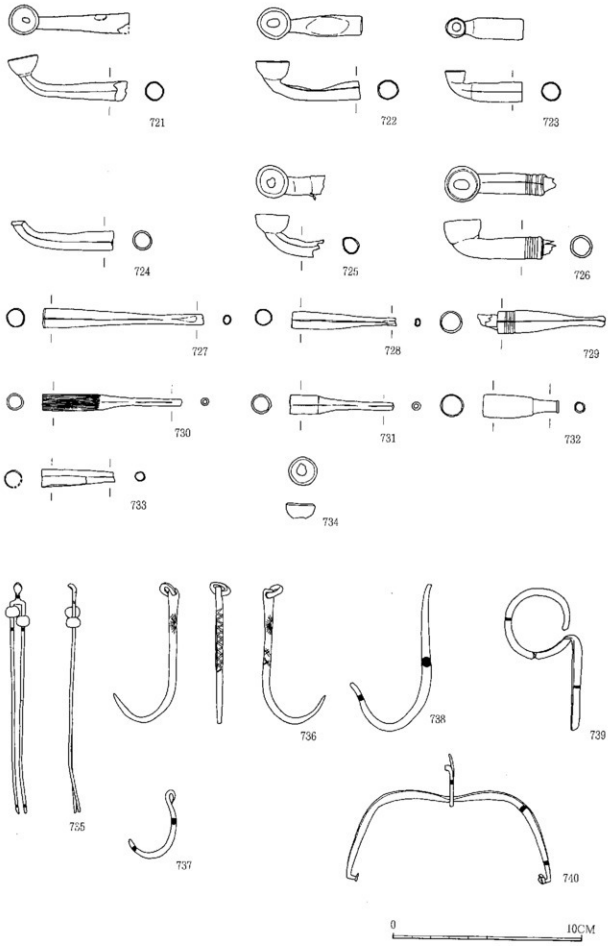

702
703
704
705
706
707
708
709
710
711
712
713
714
715
716
717
718
719
720

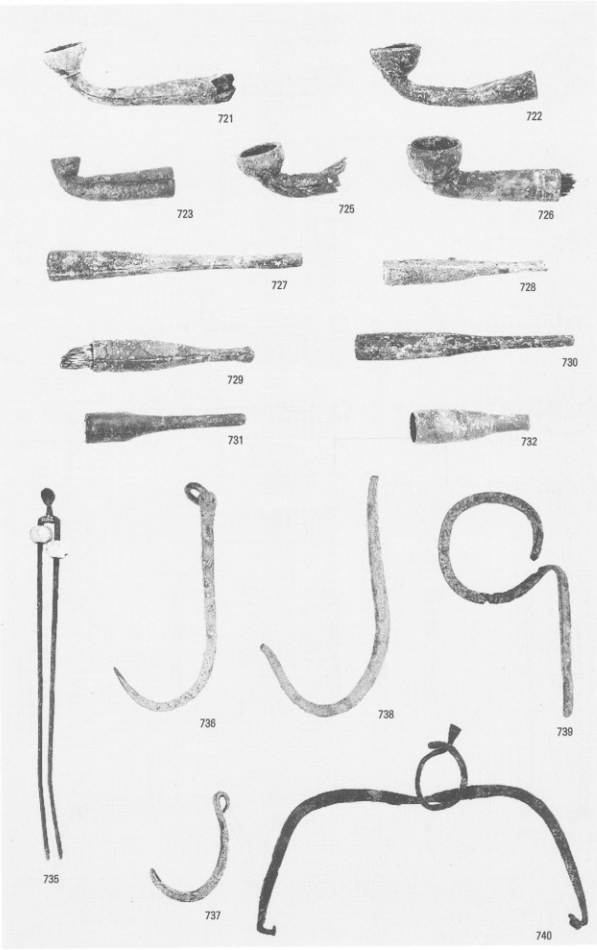
PL. 124　遺物写真


702
703
704
705
706
707
708
709
710
711
712
713
714
715
716
717
718
719
720

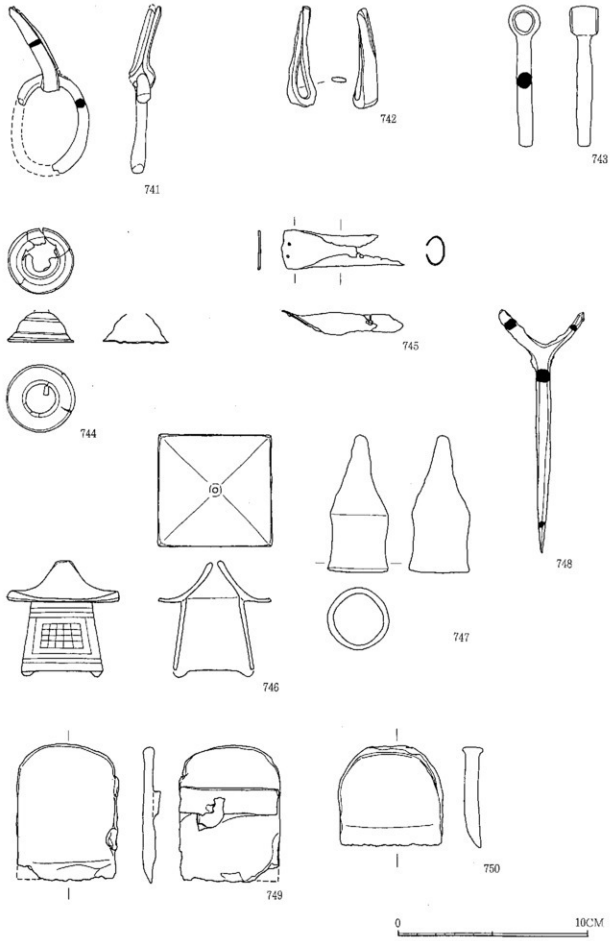

702
703
704
705
706
707
708
709
710
711
712
713
714
715
716
717
718
719
720

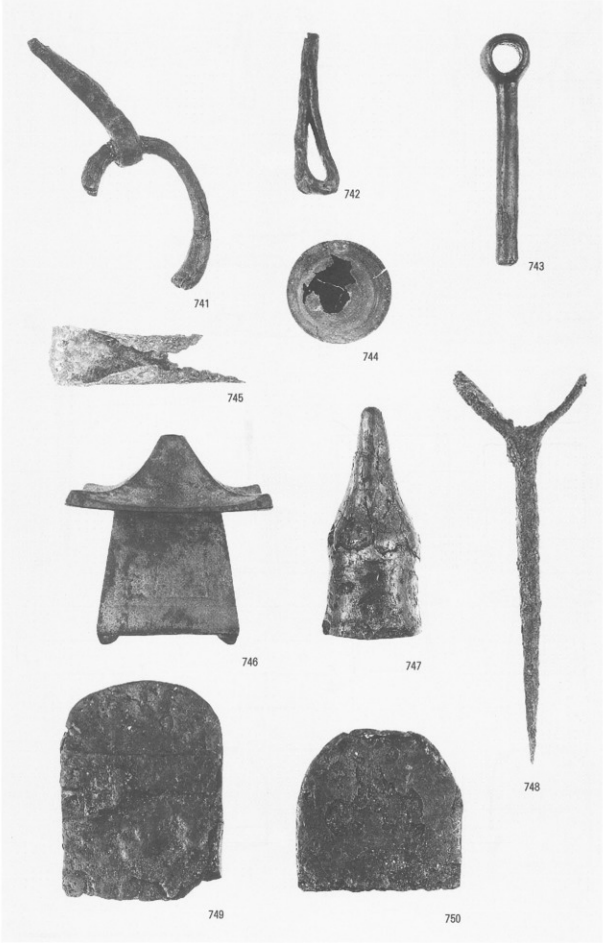
PL. 125 遺物実測図


721
722
723
724
725
726
727
728
729
730
731
732
733
734
735
736
737
738
739
740
0
10CM

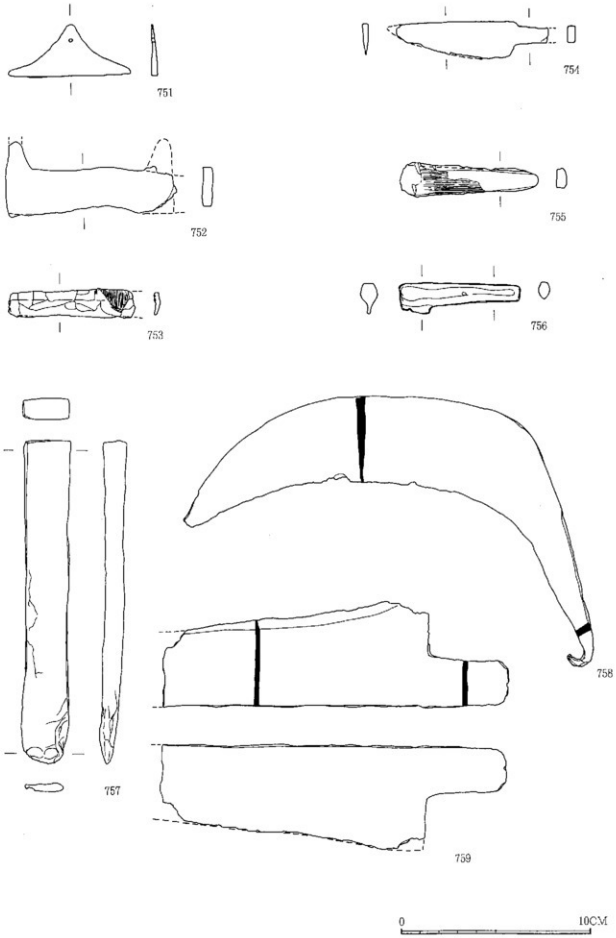

721
722
723
725
726
727
728
729
730
731
732
735
736
737
738
739
740

PL. 127 遺物実測図




741
742
743
744
745
746
747
748
749
750

PL. 129　遺物実測図



PL. 130　遺物写真

751

754

752

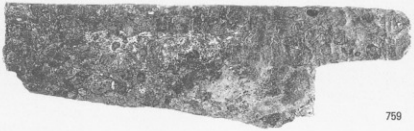
755

753

756

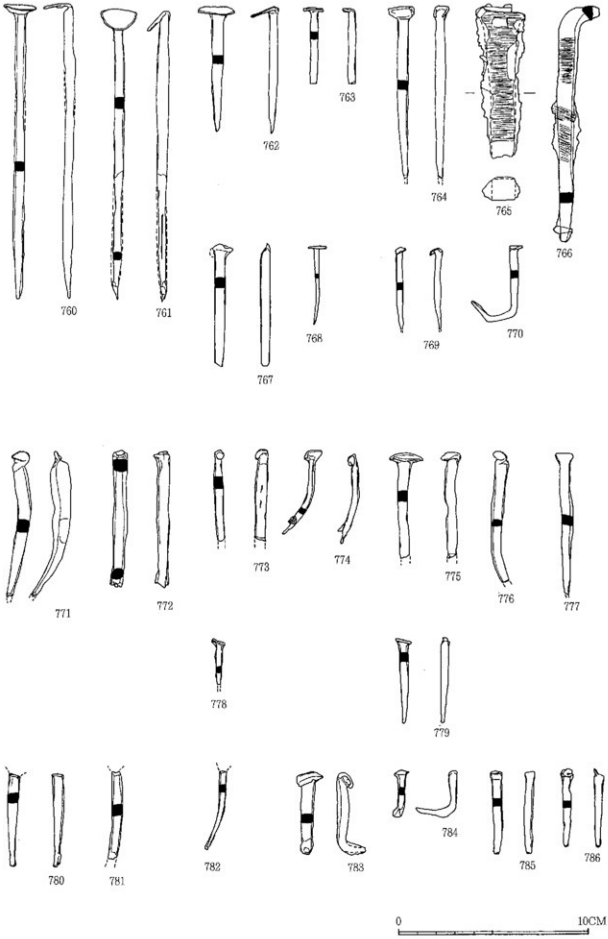
757

758



759

PL. 131 遺物実測図


760
761
762
763
764
765
766
767
768
769
770
771
772
773
774
775
776
777
778
779
780
781
782
783
784
785
786
0
10CM

PL. 132　遺物写真

760
761
762
763
764
765
766
767
768
769
770
771
772
773
774
775
776
777
778
779
780
781
782
783
784
785
786

兵庫県文化財調査報告書第123冊

——宮の前地区市街地再開発事業に
伴う埋蔵文化財発掘調査——

伊丹郷町発掘調査報告書

発　行　兵庫県教育委員会
編　集　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
印　刷　株式会社リョーイン

平成5年3月31日